リリカルなのはStrikerS　～黒炎竜を従える者～

夢月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～黒炎竜を従える者～

【Ｎコード】
Ｎ９４５８Ｏ

【作者名】
夢月

【あらすじ】
非日常への転換、発覚する力。
将来に悩む主人公墨谷広暁（すみたにひろあき）。
そんな彼がミッドチルダで見つけたものとは？
そして、彼が見つけた将来の在り方とは？
広暁のミッドチルダでの生活が、今始まる。

※この小説ではオリジナル設定が出て来ます。また、オリジナル主人公です。

プロローグ（前書き）

今までは読むだけだったのですが、皆様の作品に感化されて私も書き始めることにしました。若輩者ではありますが、何卒よろしくお願いします。

プロローグ

その日、彼に一体何が起きたのだろうか？

大学の後期が始まる日。
彼はオリエンテーションへと向かい話を聞き終わると、いつもつるんでいる学友と共に早々に帰宅した。

講義は何をとるか、どの研究室を希望するか、就職活動はどうするか。
大学3年生の後期に相応しい会話をしながら。

そして、家に着いた後、いつものように車でアルバイトに向かう。
就業中はきっちり働いた。
その後着替え終わると、バイト仲間と別れて駐車場へと向かった。

「家に帰ったらどうするかな～。
機械族デッキが作りかけだから完成させようかな？
あ～、講義の履修登録もしないといけないよな～。
帰りにコンビニに寄って、菓子買うのもいいな～。」

彼はそんなことを考えながら車の鍵を開け、助手席に着替えの入ったカバンを放り投げた。
そして自身も運転席に座った瞬間……

真昼間の公園のベンチに座っていた。

先に述べておくが、彼はこのような不可思議な現象には慣れていない。

超能力者でなければ、幽霊や妖怪を見たことがあるわけでも、ましてや時空間をとぶことが出来るわけでもない。

ちょっと探せばいそうな大学生である。

そんな彼が開口一番言ったことは…

「どういうことなの…」

まあ、当然の反応だろう。

車に乗ろうとしたら、公園のベンチに座っていた。

驚かない方がおかしい。

そんな状況でも、彼は持ち前の冷静さと俯瞰的な思考で今の状況を考察する。

今日は大学に行った。

帰った後、家で少しゲームをやり、車でアルバイトに向かった。

そして、アルバイトが終わり駐車場へと向かっていた。

ここまではいい、問題はここからだ。
車に乗り込み、運転席に座った瞬間…公園のベンチに座っていた。
どう考えてもここがおかしい。

なぜ車の運転席からいきなりベンチに移動するのだ？
これは夢か？幻か？
そんなことは分からないが、考えて分かるものでもないのでこれらの思考は放置。

現状に至るまでの過程に対する考察はここで終了。
現状況での考察を始めよう。
まずは自身の状態だ。
体は別段変ったところはないようだ。

服装は白いノースリーブの上から、赤地に白や青の線が入った上着を2回ほど腕捲りして着ており、七分丈風。
ズボンはカーゴパンツであり、ベルトは白で穴が上下に2つあるタイプ。
靴は防水加工が施してある黒いスポーツシューズ。
右腕には黒のリストバンド、左には銀色のアナログ式の腕時計。
問題ない。

カバンの中身も見てみよう。
着替えであるカッターシャツと汗拭き用のタオル。
主にアルバイトの予定が書き綴ってあるポケットサイズの手帳と、
手帳サイズの小さいボールペン。
たいして使っていないリップクリームと8×4。
緊急用の折り畳み傘。

問題ない。

ポケットの中身も確認する。
カーゴパンツ特有の大腿部にあるポケットには、ハンカチ・ティッシュと携帯電話（ちなみに携帯電話は圏外だった）。
そして後ろポケットには財布（中身は１５６４０円）。
ズボンの前部分のベルトを通す穴には、１００均で買った銀の笛が飾りとして付いている。
問題ない。

自身と持ち物に変わったところはなかった。
ここで彼は「自分は車に乗った時の状態からこの状況になった」と考える。
もしも服装が変わっていたり、カバンの中に１ｋｇ未端価格で数千万円するような粉が入っていたら、更に色々と考える羽目になっただろう。

そして、これからどうするかについての考察が始まる。

今いる場所はどうやら海浜公園のようであり、眼前には海が広がっている。
彼の左斜め前方には時計台が建っており、その針は１３時５０分を指している。
彼が車に乗ろうとしたのはアルバイトが終わった時間から考えて２１時２０分ぐらいであるから、７時間半程戻っている。
携帯電話と腕時計の時刻表示を直すことにする。

行動するための準備は終わった。
現状をより正確に把握するために情報を集めるとしよう。

昼過ぎの公園は人がいないようで、さっきから誰も通らない。
通る人を見てここがどこなのか、どのような情勢か、文化レベルはどの程度か。
ある程度のことは推測出来るのだが、通らないのなら仕方ない。

今。彼はこの世界で第1歩を踏みしめようとしている。

波乱万丈とはいえないが、ある程度は劇的で、ある程度は平凡な人生を歩んできた彼。
そんな彼がこの世界でどのように過ごし、影響を受けるのか？

それを知るのは彼だけである。

プロローグ（後書き）

文章の固さがいなめませんね…徐々に直していきたいと思いますので、長い目で見守っていただけると嬉しいです。

第1話「偶然と必然」（前書き）

第1話です。主に三人称で話を進めていきますが、＜～ｓｉｄｅ＞となった時は一人称になります。また、ｓｉｄｅの切り替え、時間が空く時などは「――――――――」を使いますのでそれを目安にして下さい。

第1話「偶然と必然」

ここはミッドチルダ。数多の次元世界の中心地であり、時空管理局の地上本部が置かれている世界。
そこにある古代遺物管理部機動六課、通称機動六課に、次元震の調査の任務が舞いこんだ。

「次元震だって？はやてちゃん」

「せや。ミッドチルダの郊外にある海浜公園で、小さな次元震が観測されたんや。
規模は小さいし、放っといても何の問題も無いんやろうけど…。
こんな事でも調べて報告せんとあかんからなあ。
スターズ分隊を連れて調査に行ってくれへん？」

「了解しました。高町なのは一等空尉、以下スターズ分隊3名、出撃します」

こうして、スターズ分隊のメンバーである高町なのは一等空尉、ヴィータ三等空尉、
スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士の出撃が決定した。

この海浜公園はとても広いようで、街中まで行くのにはまだ時間がかかりそうである。
しかし、それでもいくつか分かったことがある。

1つ目は、ここはもといた惑星、もしくは世界とは違うということ。
少なくとも彼がいた国…つまり日本なのだが。
空間にディスプレイが浮いていることは無かった。
ましてや、そのようなことを実現させる技術も存在しなかった。

2つ目。これは1つ目と関連してくるのだが、使われている言語の違い。
公園内にある注意書きや自動販売機の文字を読む限りでは日本語ではないし、
英語でもない。
文の構造を見る限りでは英語と同じようなので、彼は文を携帯電話で撮っておくことにした。
別の文章を読む際に少しでも助けになればと思ってのことである。

3つ目。この世界には魔法があるということ。
彼がディスプレイでニュース番組を見た時、魔法に関する特集をやっていたのだ。
日本語で聞こえたのは魔法の所為だろうか？
しかし彼の想像したような魔法とは違い、この世界の魔法は科学の

発展したものであるようだ。
この時、彼のいた国も数十年経ったらこうなるのかなあと考えたのは内緒だ。

今までに分かったことを手帳に書き込み、彼は公園の芝生に座っていた。
既に２０分ほど歩いたのだが、まだ公園を抜けるには至らない。
最初にいた場所から考えて、あと１０分ほど歩けば公園を抜ける見込みだ。
彼はそう結論付けると、再び立って歩き出した。

歩き始めて数分。公園にある林の横を歩いていると、何か気配を感じた。
まるで誰かに見られているような、そんな気配。

やっているスポーツ柄、彼は気配を察知するのが得意である。
しかし、今感じる気配は何かが違う。

人間の気配ではなく、ましてや犬や猫のような動物の気配でもない。
何とも気持ち悪い無機質な感じのする気配なのだ。
そんなことを考えていると、気配の正体が姿を現した。

「なぁにこれぇ」

彼の目の前に現れたのは、細長いカプセルの形をした
中央に黄色い目があるロボットであった（一瞬ワイズ・コアを思い浮かべた）。

一体このロボットは何なのだろうか？
こんなに文明が発達しているなら、警備用のロボットがいてもおかしくはない。
そんなことを考えていると、中央にある黄色い目が光りだした。
何が起こるのかと思い見ていると…

彼は感覚的に危機を感じ、右に避けた。
すると、彼の後ろ数ｍ、地面に直径１ｍ程のクレーターが出来ているではないか。
目の前のロボットは彼に向ってレーザーの様なものを発射したのだ。

「何すんだこいつ！？」

当然の反応である。いきなりレーザーを発射されたら誰だって驚く。
しかし、彼は逃げることが出来ない。というより、逃げても無駄なのだ。

発射されたレーザーのスピードは目算で凡そ時速２００ｋｍ。
彼とロボットの距離はおよそ５ｍ。
つまり、秒速にして約５６ｍ／秒。

避けるには、反応速度が０．０９ｍ／秒以上でなければならない。
彼の反射神経では避けることは不可能だ。
ましてや、背中を向けて走って逃げれば格好の的だろう。

レーザーが発射される時は中央の黄色い目が光るので、

その動きとロボットの向きにさえ気を付けていれば避けることが出来る。
…連射されたら終わりであるが。

彼が思考を巡らせていると、林の奥が少しうるさくなってきた。
嫌な予感がするが、確認せずにはいられない。
すると、さらに数十体ものロボットがでてくるではないか。

「これはさすがに…まずいな」

一体ならいざ知らず、数十体ものロボットのレーザーを避け切る。
そんなことは、可能・不可能を通り越して議論の余地すら無い。

「俺の人生…ここで終わるのかな…」

そんな悲観的なことを考えていた時、彼は違和感を感じた。

「レーザーを…打ってこない？」

ロボットがレーザーを打ってこないのだ。
敵だと認識したならもっとレーザーを打つであろうし、間を置く意味はない。
不審者を追い詰めるにしては陣計が取れていないし、数が多すぎる。

それとも、レーザーを打てない理由があるのか？
元々連射出来ない構造になっていたり、チャージに時間がかかるのか？
いや、これほどのロボットだ、そんなちんけな構造をしているわけがない。

いくら考えても彼は答を見出すことが出来ない。
しかし…その理由は時機に分かることになる。

彼女達は今、ヘリで海浜公園に向かっている。

「次元震が起きたと思われるポイントまでもうすぐなんで、降下準備頼みますね」

ヘリのパイロットであるヴァイスが確認する。

「分かりました。皆、準備出来てる?」

茶髪にツインテールの少女が確認をとると、

「おう！ばっちりだぜ！！」

と、赤髪にゴスロリ服の少女。

「大丈夫です！！」

と、青髪にどこか格闘士を連想させる服装の少女。

「問題ありません」

と、そっけなく事務的に答えたオレンジ髪にツインテールの少女。

「皆、今回は次元震の調査だけど気を抜かないようにね。何か起きてからじゃ遅いんだから」

「なのはは心配性だなあ。次元震っていっても、結構小さかったんだろう？
そんなに心配する必要はないんじゃないか？」

「私は早く帰ってお昼を食べたいなあ。訓練が終わったと思ったらいきなり出動要請がくるんだもん」

「馬鹿スバル！気が抜けるようなことを言ってんじゃないの！仕事なのよ！？」

ほとんど談笑になっているが、これは気遣いによるもの。
なのはとヴィータが気を利かせてこうゆう雰囲気になるように仕向けたのだ。

彼女達スターズ分隊にとって今回が3回目の出撃である。

1回目や2回目ほど固くはなっていない。

しかし、それでもこの新人2人はまだ自分の緊張を隠し切れていない。

それを考えての言動なのである。

はたから見ている分には可愛らしい。

もっとも、当の本人達はそんな気遣いに全く気付いていないのだが。

「あれは!?」

「どうしましたヴァイスさん?」

「ガジェットだな…?型が約30機、一般人を襲ってやがる」

「「「何ですって（だって）（だと）!?」」」

第1話「偶然と必然」（後書き）

1話目です。次話ではあのモンスターが出現します。

第2話「黒炎竜飛翔」（前書き）

第2話です。タイトルで分かる方もいると思いますが、あの竜が登場します。

第2話「黒炎竜飛翔」

ロボットが襲ってこないことに疑問を感じていると、
突然後ろ…というか上から声をかけられた。

「大丈夫ですか！？」

驚いて振り向くと、そこには杖を持ち、白い服を着た女性がいた。
飛んでいるのには一瞬驚いたが、ロボットも浮いているのですぐに
その動揺は消えた。

「早くここから離れてください！ガジェットの相手は私達がします
！」

「ガジェット！？このロボットのことですか！？」

「そうだ！早く逃げろ！」

質問に答えたのは別の女性であった。
手に柄の長いハンマーのような物を持ち、赤いゴスロリのような服
を着た小柄…というか幼い女性である。
例によって飛んでいる。

色々と聞きたいことはあるが、彼女達はこの地域の警察、
もしくは軍隊の様なものに属しているのは何となく分かる。
服装が色々とおかしいのは、魔法という文明があるからだろうか。

「ありがとうございます（あざーす）！」

言うが早いか、彼は一目散に逃げ出した。
どちらかというと短距離ランナーだが、伊達に筋力トレーニングとしてジョギングはしていない。
ガジェットが見えなくなるまで全力疾走した。

―――――――

しばらく長考した後、今後の行動を決めた。

「とりあえず時間を見て、彼女達の所に戻るか。色々と聞きたいこともあるし」

それが妥当であろう。彼女達は警察や軍隊の様な組織に属しているのは先ほど考えた。
そういった所に勤めている人なら、一般の人よりこの国…いや世界と言った方が正しいか。
この世界の事を分かりやすく説明してくれるはずだ。

「それまでは…ここら辺でじっとしてた方がいいよな。下手に動いて道が分からなくなっても困るし」

彼は今からの行動を決めると、公園に備え付けられている水飲み場へと向かった。
いきなりのワープ、久しぶりにフルに使った頭、そして先ほどの６００m全力疾走。
喉がカラカラである。
必要以上に蛇口をひねり、垂直に立ち上る水を飲み続ける。

「はあ…美味い！水ってこんなに美味かったか？」

その時の本人の状態で、味なんていくらでも変わるものだ。
ある程度飲んだ後、彼は芝生に寝っ転がった。
しばらく休もうと考え、目を閉じようとしたが、そうは問屋が卸さない。

気配を感じて起き上がると、先ほど見たのと同じ形のガジェットが５機、
彼の前方１０ｍぐらいのところにいた。
彼女達が倒し損ねたのか、それともさっきのとは別の集団か。
考えても分からないが、今の状況は最悪だということが分かる。

「逃げ切る…ってのは無理だよなぁ」

本能的にそう感じたが、その考えは間違っていなさそうだ。
ガジェットが五機、一斉に黄色い目を光らせ始める。
距離的に反射神経だけで避け切れないこともない。
しかし、一機だけならともかく五機全部のレーザーを避けるのはまず不可能だろう。

「俺の人生…ここで終わりかな…ってさっきも似たようなこと言ったな俺」

自分に対して突っ込んでる時間が勿体ないような気がするが、気にしないでおこう。
もう彼の人生は終わるのだから。
そう悟った彼に向ってレーザーが一斉に撃たれた瞬間。

彼の尻、正確にはズボンの尻ポケットに入れた財布が光り始めた。
そして彼の目の前に現れたのは…

「ホル…ス…？」

赤みがかった銀色の体躯に雄々しい翼。燃えるような真紅の瞳。額

には青い鉱石。
全長１０ｍは優に超える“ホルスの黒炎竜　ＬＶ８”であった。

第2話「黒炎竜飛翔」（後書き）

ホルスの黒炎竜　ＬＶ８。かっこいいですよね～。

第3話「それぞれの戦い」（前書き）

そろそろストックが少なくなってきました…。

第3話「それぞれの戦い」

『ウイングロード』によって空に作られた道を、スバルが速度を上げながらガジェットに突っ込む。

「これで…ラストォ！！」

右手に装着されている『リボルバーナックル』が回転数を上げ、ガジェットのレーザー発射部分を打ち抜く。
衝撃は放射状に広がり、ガジェットはバラバラに砕け散った。

「思ったよりも早く片付いたな」

「それだけスバルとティアナが成長してるってことじゃないかな？」

ガジェットとの戦闘を終え、飛んでいたヴィータとなのはが地上に戻ってきた。

「えへへ…。ティア～、なのはさんに褒められたよ～！」

スバルはティアナに抱きつこうとする。
しかし、ティアナはそれを半歩左に移動することで抱きつき攻撃を避けた。
ちゃっかり右足を出してスバルをこけさせたのはさすがである。

「浮かれてるんじゃないの！さっき私の射程線上に入ったの忘れたの！？
危く打つところだったでしょ！」

「あれはガジェットが急にフォーメンションをとったせいで気が動転しちゃって…」

立ち上がりながら弁明しようとするが、ティアナの口撃は止まらない。

「あんたこれで6回目よ、6回目！
1回目の出撃で3回、2回目の出撃で2回。そして、今回の出撃で1回。
全部私が気付いたから良かったものの、もし私が気付かなかったらどうするのよ！」

「それはティアが悪いんじゃ…」

「何ですって！？」

2人の口論がただの口喧嘩になってきたところで、

「ほらほら2人共、喧嘩しないの。今回の調査の反省会は戻ってからやればいいでしょ？」

「は～い…」

「はい…」

なのはが仲裁に入った。最早お手の物といった感じである。
貫禄が滲み出ているようで恐い。

「さーて、この後どうする？

ガジェットは破壊したしたけど、次元震の調査がまだだよな？」

最初に今後の行動を提案したのはヴィータである。
元々それが目的で来たのだし、適切な提案であろう。

「さっきガジェットに襲われてた人に話を聞いた方がいいんじゃないかな？
何か知ってるかもしれないし」

なのはがヴィータの提案に答える。
次元震の調査も大事だが、ここは彼に話を聞くのが先決であると判断したのだ。

「そうですね。
レリックが無いのにあんなにたくさんのガジェットが出てくるのはおかしいですし。
そのガジェットに襲われるというのも気になります」

ティアナもなのはの意見に同意する。

「じゃあ、早く探しに行きましょう！方向は…」

スバルが彼の逃げて行った方向を指さそうとしたその時。

彼女らが行動を示すのを見計らっていたかのように、地鳴りのようなものが響き渡る。
始めは地震かと思ったが、次第に強さを増す揺れは地震で無い事を示している。

「「「「!?」」」」

4人は、一斉に何かを感じ取った。

「何だ今のは!?」

ヴィータが驚きながら言う。

いきなりのことで飛ぶことも出来ずに地面に倒れている。

「地震!?」

一人だけ見当違いのことを考えているスバルが叫ぶ。

「違う!これは…召喚魔法!?でも何か違うような…!!」

スバルの意見に反対するようになのはが答える。

「ちょっと待って下さい!この揺れの方角って…!!」

「あいつが逃げて行った方角だ!」

ティアナの言わんとしていることに続けるように、ヴィータが叫んだ。

「皆、行くよ!」

「おう!」

「「はい!」」

―――――――

……と、現実逃避をしている場合じゃない。
目の前にいるのは紛れもなく『ホルスの黒炎竜　ＬＶ８』。
俺の財布に入っていたものだ。
そのカードがどういうわけか実体化して俺の目の前にいる。

理由は分からないが、カードが実体化してガジェットのレーザーから俺を守ってくれたのだ。
アスファルトの地面を陥没させるレーザーだが、身に堪えている様子は微塵も感じられない。

アニメの世界でならしょっちゅうカードの精霊は出てくるが、まさか現実のものになるとは思わなかった。

そんなことを考えていると、ホルスがこちらを振り返る。
鋭い眼光に、俺は一瞬たじろいだ。

『アレか？見せかけで超ビビってるな？』

そんなことを言っているような眼である。

「ふざけんじゃねーよ」

そんな意思を込めながら、俺はホルスを軽く睨み返した。
色々と考えたいところだが、それはまた後。
今は目の前の敵を倒すことが先だ。

……ってどうやって戦ったらいいんだ？

このままじゃホルスに任せきりってことになるけど。
とりあえず…話しかけてみるか。

「一緒に戦ってくれるか？」

「……」

……沈黙が痛い。何か話してくんねーかな。

「グォォォォ…」

「え！？ちょ！？何する気！？」

いきなり手で捕まえられた。さすがにこれには驚いた。
まさか投げ飛ばれたり…しないよな？

そんなことはなかった。ホルスは俺を自身の肩に乗せたのだ。
これは……一緒に戦ってくれるということか？
そうなのか、ホルス？

「グォォォ…」

俺の考えに答えるかのように、ホルスは短く唸る。
そーか。戦ってくれるか。だったら戦うぞ、ホルス。
生きるためにも、このガジェット共を粉砕する。

「ホルス、飛べ！！」

「グォォォォォォォォォ！！」

俺の掛け声と共にホルスは飛び立った。
あまりの加速度に吹き飛ばされそうになるのを、首にしがみついて必死に耐える。

こいつらを倒すプランは決まっているが。
そのためにはまずこいつらを一か所に集めなければならない。
地上でやってもよかったんだけど、さすがに公園を燃やすのはまずい。
となると、この広い空中で奴らを一か所に集めなければならない。

……と思っていたのだが。
ガジェットは五機まとまって俺を追いかけて来た。
さすがにこれには驚いた。

攻撃が効かない相手にまとまって突っ込むなど愚の骨頂。
もしかしたらガジェットには戦略といったものがプログラムされていないのだろうか？

だったら予定変更だ。
プランの最終段階、もといガジェットを殲滅する。

そーいえば…ホルスの技名って何だったかな？
アニメでやってたけど思い出せない……。
確か、何とかフレイムだったような気がするんだけど……。

ダークネス・フレイム。違う。
グラヴィティ・フレイム。違う。
ブラック・フレイム。近い。

ブラック…メガ・ギガ・テラ・ペタ。どれだったかな？

……っておい！？

そんなこと考えてる間にガジェットがすぐそこまで追って来てるし！

こうなれば一か八か、俺の感性に懸ける！！

「ブラック…メガフレイム！！」

「ボォォォ

「グォォォ……」

どういたしまして、と言ったのだろうか？気にすんなよ、と言ったのだろうか？
この状況で真っ先に感謝の言葉を言えるのは自分の性格故だろう。
何かと損する性格だが、こういう時にはこんな性格でよかったなーと思う。

その後、向かい合って話し合うことにした（俺がかなり見上げる感じで）。
……したのだが……。

「何で実体化出来たんだ？」

「グォォォ」

「レーザーくらったけど大丈夫か？」

「グォォォ」

「技名合ってた？」

「グォォォ」

「何で炎黒いんだ？」

「グォォォ」

「ぶっちゃけＬＶ６のが強いよな？」

「グォォ…ォォォォォ！？」

ちょっと怒った。でも話は聞いてたみたいで良かった。

いくつか質問したけど、何を言っているのか分からない。
というか、全部同じに聞こえる。
ホルスは俺の言葉が分かるみたいだけど、俺はホルスの言葉が分からない。
これじゃ会話とは言えんよなぁ。

さっきは何となくホルスが何を言いたいのか分かったんだけど。
あれは気持ちが昂ぶってたせいだろうか？
俺はどうしても自分の感情、特に驚き・怒り・高揚感といった感情を抑え込もうとしてしまう。
だからこそ、それらの感情は出すところで出しているのだが。

と、いけない。自分の性格について考察している時ではない。
ホルスが俺の言葉を分かるだけまだよしとするか。
そんなことを考えていると……

「機動六課です。話を聞かせてもらえますか？」

先程会った白い服の女性に話しかけられた。

第3話「それぞれの戦い」（後書き）

なんだかんだで第3話。
これからも続けられるように頑張ります。

第４話「非日常への序章」（前書き）

第４話です。
リアルの生活がこれから忙しくなりそうです…。
更新速度が落ちるかもしれませんが、よろしくお願いします。

第４話「非日常への序章」

＜なのはｓｉｄｅ＞

私達は今、さっき感じた魔力震源の方向へと向かっている。
あんなに大きな魔力、リミッターをかけているとはいえ私の魔力以上かもしれない。
最初は召喚魔法と思ったが、どこか違うような気がする。
あの魔力は一体…？

「関係あると思うか？なのは」

「何のこと？ヴィータちゃん」

考えていると隣を飛んでいるヴィータちゃんに話しかけられた。

「さっき逃げたあの民間人のことだよ。
次元震があった場所に行ったらガジェットに襲われている民間人。
んで、そいつの逃げた方向からでかい魔力反応。どう考えても無関係じゃないだろ」

ヴィータちゃんの言う通り、無関係とは思えない。
本来ガジェットは、レリックがあるところに現れるはず。
だけど今回はただの次元震だから、ガジェットが現れるはずは無い。
次元震があったことを考えると彼が次元漂流者の可能性もある。
だけど、次元漂流者はまだ数えるぐらいしかいないし断言出来ない。

「無関係とは思えないけど、まだはっきりとは言えないよ。
それに、彼が召喚獣に襲われてるかもしれないし」

「そうだな。今は最悪の事態を想定して動くとするか」

「そうだね」

あれこれと考えても仕方ない。
ヴィータちゃんの言う通り、今は最悪の事態を想定して動くことにしよう。

そんなことを考えながら飛んでいると、それは突然来た。

「グォォォォォォォォォ！！」

「「「「！？」」」」

空気を震わすほどの大音声。
それが前方で空に飛び上がった竜だと認識するのに時間はかからなかった。

「何ですかあの竜は！？」

「あれがさっき感じた魔力の正体！？」

スバルとティアが動揺した声で叫ぶ。
私も思わず叫びそうになったけど、私は彼女達の教導官。

私が取り乱しては彼女達を混乱させることになる。
取り乱してはいけない。

「どういうことだ、なのは!?竜の肩にさっき逃げたあの民間人が乗ってるぞ!!」

「私にも分からない。
でも竜の肩に乗っているということは、恐らくあの竜は彼が呼び出したもの。
もしかしたら、彼は魔導師かもしれない」

「だとしたらあいつはさっき何で逃げたんだ?
あんなに強力な魔力を持つ竜だ、ガジェット程度なら簡単に倒せるだろ?」

ヴィータちゃんの言う通り、あの竜は今の私を超える魔力を持っている。
ガジェット数十機とはいえ倒すのに時間はかからないはず。
それなのに彼はなぜさっきは召喚しなかったのだろうか?

そんなことを考えていると竜に向かってガジェットが五機、下から追跡を始めた。

「いけない!皆、行くよ!!」

私がそう言おうとした正にその瞬間。

「ボォォォ

竜が黒い炎を吐き、ガジェットを燃やし尽くした。
いや、溶かし尽くした。
あれ程の炎、キャロのフリードですら吐けない。

「…私達が出るまでもなかったな」

ヴィータちゃんが半ば諦めるように呟いてるけど、私も同じ気持ちだ。
フリードのブラストレイは炎を吐いて攻撃する技。
だけどあの技は高密度に圧縮された炎をぶつけることによる破壊に意味があり、燃焼は二の次だ。

あの竜は直線的かつ断続的に炎を吐いた。
それでいて炎の密度もさることながら、ガジェットを完全に溶かし尽くした。

一体あの竜は何？
そしてその竜を従えている彼は一体…？

「なのは、どうする？あいつら下に降りて何か話し始めたぞ」

「とりあえず、ヴィータちゃんと私で話を聞いてみよう。
スバルとティアはここで待機していて。
まだ彼らが安全だと決まったわけじゃないから念のために…ね」

「「はい！」」

「行くよ、ヴィータちゃん」

「おう！」

～接触～

「機動六課です。話を聞かせてもらえますか？」

「ん？」

彼とホルスが向かい合って話していると、突然声をかけられた。
彼にしてみたら完全に面を食らった状態なのだが、驚きを顔に出さずに答える。

「単刀直入に聞きます。あなたは何者ですか？」

「何者ですかって聞かれても…話すと結構長くなるんですけど…」

「んだとてめえ!?自分の状況分かってんのか!?」

彼の至極当然な返答にヴィータが切れる。
彼の言ったことに怒るのももっともだ。
何せ彼は次元震が起きたところでガジェットに襲われていた。
そして今、彼が召喚した竜（？）によってガジェットを溶かし尽くしたのだ。
どう考えても彼は怪しい。

ヴィータが思わずアイゼンを振りかぶろうとすると、なのはがそれを手で軽く制しつつ丁寧な屈調で答えた。

「失礼しました、では私から名乗らせてもらいます。
私は時空管理局機動六課所属、高町なのは一等空尉です。
こちらはヴィータ三等空尉です」

「俺の名前は墨谷広暁。職業は…大学生です」

「「大学生!?」」

大学生というフレーズに2人が驚く。
それはそうだろう。
何せガジェットをまとめて溶解させる炎を吐く竜を従えている人間がただの大学生なのだ。
2人はてっきり時空管理局所属の魔導師だと思っていたので思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「驚いているみたいなんで、結論から先に言ってもいいですか？」

「「えぇ、どうぞ…」」

「俺は…この世界の人間じゃありません」

「「……なるほど」」

「あまり驚きませんね？」

「いえ、納得したんです」

「ん？どういうことですか？」

「あなたは…次元漂流者の可能性があります」

「次元漂流者？」

そして、なのはかが次元漂流者について説明し始めた。
彼女の言ったことをあまり理解出来ていかいようだが、自分が別の世界から来た迷子だということは分かったようだ。

しかし、それでも彼はまだ納得出来ないところがある。

「次元震の影響が主な原因なんですよね？」

「実例が少ないのではっきりとは言えませんが、それが一番多いのは確かです」

「俺、車に乗ろうとしたらこっちの世界に飛ばされたんですけど…？」

「私にもそれは分かりかねます。もしかしたら車そのものが次元震の影響を受けた可能性もありますし」

そんな感じで広暁となのはが話していると、突然ヴィータが会話を遮った。

「なあ、広暁…だったか？」

「そうですけど？」

「さっきからお前の竜が凄い視線でこっちを睨んでるんだけど…」

言われて広暁が振り返ると、広暁を睨んだ時の比じゃないレベルでなのはとヴィータを睨んでいるホルスに気付いた。

なのはは無視していたようだが、ヴィータはその眼光に耐え切れなくなったようだ。

「すみません…ホルス、この人達は敵じゃない。警戒しなくてもいい」

広暁が言うと、ホルスは眼光を緩めた。まだ警戒はするようだ。

「話すと長くなりそうですから、一度機動六課まで来てもらえますか？
私達はあなたを保護します」

「保護、ですか？」

「次元漂流者を保護するのも私達の仕事ですから」

「そうですね…どうせ行く当てもないですからね。よろしくお願いします」

こうして、広暁と機動六課の2回目の接触は幕を閉じた。
この後、なのはと広暁は意外な共通点を知ることになるが、それを今の彼らが知る由もない。

第４話「非日常への序章」（後書き）

第４話終了です。
何分未熟なところがありますので、提案・感想・注意点など、どしどしお願いします。

第5話「パラレルワールド」（前書き）

今回からオリジナル設定が出て来ます。
そういうのが苦手な方、原作準拠がいい方は、申し訳ありませんが読まないことをお勧めします。

第5話「パラレルワールド」

「まさかこんなことになるとはなぁ～」

ここは時空管理局機動六課部隊長室。

帰還したなのはの報告を受けたはやてがぼやいた。

「ただの次元震の調査が…まさか竜を召喚する人間を保護することになるとは」

その理由が、先ほど保護された次元漂流者、墨谷広暁である。

今までにも次元漂流者を保護した実例はいくつかある。

しかし、今までの次元漂流者はただの民間人だったのだ。

それでも、彼ら全員が管理世界の出身だったからまだいい。

もっとも、広暁も管理世界の出身なのだが。

そう。彼女達と同じ…地球の。

「にしても…愛知県に伯氷市（はくひょう）なんてあったかいな？」

「私の知る限りではないと思うんだけど…」

はやての問いになのはが答える。

そう、広暁の出身である伯氷市は彼女達のいた世界。

つまり地球。もっと詳しく言えば日本。

そこに伯氷市が無い可能性が高い。

「まあ、今から調べてみるからちょっと待っといてや」

「うん、分かった」

…数分後…

「なのはちゃん、やっぱり愛知県に伯氷市は存在せーへん」

「じゃあやっぱり…」

「せや。彼は平行世界（パラレルワールド）の地球出身の可能性が高い」

広暁は平行世界の地球出身の可能性が高い。
これにははやても頭を抱えざるを得ない。
今までの次元漂流者の場合、保護することになっても長くて1月程度だった。

しかし、今回の場合は平行世界である。
時空管理局では、平行世界への干渉はご法度なのだ。

「仮に平行世界の地球出身だとしても、何で竜なんて召喚出来るんや、彼は?
私達のいた地球でもそんなこと出来る奴おらへんかったやろ?」

「そのことも含めて彼に色々と聞いたんだけど…」

―――――――

ないな」

ヴィータも同様に答える。
もっとも、こちらは驚いているというよりは信じられないといった感じだが。

「俺にも分かりません。ただ、これは信じるしかないでしょう？目の前にいるんですから」

「はぁ…それもそうですね。目の前にいるのに信じないというわけにもいきませんね」

なのはが渋々といった感じで了承する。
そして会話は、これからの予定についてのことになる。

「それでその…機動六課でしたっけ？どうやって行くんですか？」

「ヘリで行きます。もう少しで来るので」

機動六課に行くことが決定した広暁は考え事をしていた。
といっても、元の世界に帰れるのかな～などといった現実的な話ではない。

（なんでこの二人の服装はこんなにコスプレっぽいんだ？）

そう…目の前にいる二人の服装である。
バリアジャケットという戦闘服らしいが、どう見てもおかしい。
魔力による障壁で守られている云々の話ではない。

（何でミニスカートにニーソックス？ヴィータさんに至ってはもう

ゴスロリじゃん）

彼とてこれらに対する知識がないわけではない。
男である以上、ある程度の興奮も覚える。
もっとも、それを表に出すほど子供ではないが。

しかし、それが戦闘服というのは如何なものだろうか？
もう少し地味な色にして回りに溶け込みやすくするとか、機能性を考えて下はズボンにするとか、色々あるだろうに。
そんなことを考えていると…

「なのは。スバルとティアナ待機させっぱなしだろ」

「あ…忘れてた」

「おいおい…」

「……」

なのはが念話を送ると、今まで蚊帳の外だった2人が合流した。
2人共ホルスに驚いているようだ。
が、さっきほど睨んではいないので気圧されてはいない。

「なのはさん。一体これは…？」

現状を把握できていないようで、ティアナがなのはに質問する。

「彼は墨谷広暁（すみたにひろあき）君。次元漂流者みたいだから、保護することにしたの」

「え!?次元漂流者だったんですか!?」

スバルが驚きを含んだ声で聞き返す。
ガジェット数機を一瞬にして退ける竜を召喚した人間が、魔導師じゃなく次元漂流者だったことに驚きを隠せないようだ。

「でも…いいんですか、なのはさん?竜を召喚出来る次元漂流者を保護するとなると…」

「そこはまだ私達じゃ決められないよ。戻ってはやて部隊長と話し合わないと」

「…そうですね。私が軽率でした」

「いいんだよ。ティアはティアなりに考えて結論をだしたんでしょ?それは間違ってないから」

「はい!」

「……あの…高町さん?こちらの2人は?」

何だか青春ものの学園ドラマみたいな雰囲気だが、その空気に耐え切れず広暁が質問した。

「あ…ごめんなさい。こっちの青い髪の子がスバル・ナカジマ二等陸士で、オレンジの髪の子がティアナ・ランスター・二等陸士。私が隊長を務めるスターズ分隊のメンバーです」

「スバルです・ナカジマ二等陸士です!!」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「墨谷広暁です。よろしく」

2人との軽い挨拶を終えたところで、ヘリがやって来た。ところがここで一つ問題が発生した。

「俺はホルスに乗って行けばいいんですかね？」

「それは難しいですね。緊急時を除いては街中での魔法の使用は禁止されているので」

「まぁ、そうですよね…」

そう、ホルスの移動方法である。体長１０ｍを優に超える竜がヘリに収まるはずがないのだ。

「なあ、ホルス。カードには戻れないのか？」

「グォォ…」

「…無理みたいです」

「キャロのフリードみたいに小さけりゃ問題ないんだがなあ。小さくはなれないのか？」

ヴィータが提案する。まず無理だとは思うが、万が一の可能性もある。

広暁は駄目元で聞いてみた。

「小さくなれないか？ホルス」

「グォォォ…」

広暁が尋ねた瞬間。黒い炎が発生したかと思うと、それがホルスの身体を包み始めた。
そして炎が収まるとそこには…

「…小さくなりましたね」

「…そうだな」

小さくなったホルスがいた。大きさは大型の猛禽類と同じぐらいである。

「ちょっと可愛いかも…」

「スバル、あんたは空気を読みなさいよ…」

他の４人が驚いているにもかかわらず、スバルは小さくなったホルスを見てそんな一言を漏らす。
ティアナも突っ込む気力が段々と失せてきているようだ。

「まあ、これで移動方法の問題も解決出来たわけですから…」

「そうですね。それでは改めて。機動六課まで同行願えますか？」

「分かりました」

～ヘリの中～

「そういえば、広暁さんはどこから来たんですか？」

ヘリが飛び立って十分ほど経った頃。スバルがふと思い出したように尋ねた。

「どこ、ですか？うーん…どこ出身と言えばいいんですかね？」

「そうですね。でしたら、あなたがいた国の名前を教えていただけますか？」

広暁の問いになのはが答える。

「分かりました。出身は日本です」

「「「日本！？」」」

3人が驚いたように叫んだ。

「え!?どうしたんですか!?」

「星の名前は地球ですか!?」

「そうですけど?」

「私も日本出身なんですよ!!」

なのはが嬉しそうに言う。

「日本のどこ出身なんですか!?私は神奈川県の海鳴(うみなり)市です!!」

「海鳴市…?俺は愛知県の伯氷市です」

「あれ?愛知県に伯氷市なんてあったかな?」

「神奈川県に海鳴市なんてありましたっけ?」

「「???」」

2人は同時に頭をかしげた。

「まあ、伯氷市は県庁所在地の名古屋市と違ってマイナーかもしれないし…」

「そうですね。海鳴市もそこまで全国的に有名な都市ではないですから…」

2人とも釈然としないが、空気が納得しなければならない感じだっ

たので納得することにした。

「それにしても、どうしてカードが実体化したんだ？」

今まで会話に参加していなかったヴィータが割り込んできた。

「俺にも分かりません。ガジェットに襲われると思ったら、財布に入れてたホルスのカードが出て来たんです」

「財布にどうしてカードを入れてるんだよ…」

ヴィータが多少呆れながら答える。

「昔、こいつを主軸にしてデッキを組んでて…。
あ、ちなみにこれは遊戯王５Ｄ'ｓＯＣＧっていうカードゲームなんですけど。
時代の流れと共に段々とこいつで戦うのが難しくなってきましてね…。
それでホルスで組むのはやめたんです。
それでもホルスは忘れられなくて財布に入れていつも持ち歩いてたんですけど」

「思い出の品……ってことですか？」

「まあ、そんなところです」

ティアナが感慨深げに言った。

その雰囲気に広暁は多少の疑問を感じたが、突っ込むのも野暮だと思いスルーした。

そして話題は、遊戯王へと移行する。

「遊戯王を題材にしたアニメがあるんです。
その中では、カードが実体化したりカードに精霊が宿っていてそれが出現したりってことはあったんですけど…。
まさか現実のものになるとは」

「私にもそれは分かりませんね。
ミッドチルダは魔法の世界ですけどそのようなことは聞いたことがありません」

広暁となのははは頭に『？マーク』を浮かべたまま悩んでいた。
どうしてホルスが実体化したのか？
いくら考えても彼らには分からない。

ホルスもちょっと頭をかしげている。結構可愛い。

その時、ヘリのパイロットであるヴァイスが呼びかけて来た。

「もうすぐ着くんで、降りる準備をして下さい」

「あ、は～い。広暁さん、後でまた部隊長の前で話していただけますか？」

「分かりました」

こうしてヘリは機動六課のヘリポートに着陸した。

「……ってことを話したよ」

「…結局分かったのは彼の素性だけやないか？」

確かにそうなのだが、広暁本人にさえ分からないことを聞き出せという方が無理な話である。

「私にも分からないよ…。後は直接はやてちゃんが聞いた方がいいんじゃないかな？
今は空いてる会議室で待ってもらってるから」

「せやな。ここであーだこーだ言ってもしゃーない。私が直々に問い詰めたる…！！」

「はやてちゃん…程々にね？」

その頃会議室では……

「何だ？今の寒気は？」

得体の知れない寒気を感じた広暁であった。

第5話「パラレルワールド」（後書き）

やってしましました……。

広暁の出身地である愛知県伯氷市は完全にオリジナル設定です。なのはの出身地である海鳴市は、なんとなく街の雰囲気が合っているという理由で神奈川県にしました。

これからもこの様なオリジナル設定が出て来ますが、よろしくお願いします。

第6話「暗闇に差す一筋の光明」（前書き）

リアルの生活が色々と忙しくて間が空いてしまいました…。
主に卒研とか卒研とか卒研とか。
この時期はやること多すぎる――――――――――!!

第6話「暗闇に差す一筋の光明」

「失礼します」

「どうぞ」

常套句と共に広暁が部隊長室に入る。
ホルスも一緒のようで、広暁の後ろをちょこちょこと歩いて付いて来る。
飛ばないところを見ると、場をわきまえているようだ。

正面最奥部に重厚な作りの机があり、そこにこの部屋の主であろう女性が鎮座している。
年は広暁と同じぐらいか。
その程度の年齢で部隊の隊長を務めるのは常識的にはあり得ないことだが、広暁は事前に聞いておいたおかげで動揺せずに済んだ。

～会議室～

（部隊長か…どうして１９歳でなれるんだ？）

会議室で一人、広暁は考えていた。

この後、自分が挨拶に行く部隊長のことだ。

無論、彼にとってこのようなことは初めてである。

大学教授の前でプレゼンをするのとは訳が違う緊張感が彼を襲っているのだ。

襲っているのだ…。

……。

襲っているはずなのだが…。

（機動六課の部隊の一つであるスターズ分隊。

さっき聞いた話では、もう１つ『ライトニング分隊』というのがある。

そして『ロングアーチ』と呼ばれる後方支援部隊。この３つで機動六課か）

（ライトニング分隊を統括するのが高町さんの親友の『フェイト・テスタロッサ・ハラオウン』さん。

そして機動六課の部隊長が、もう一人の親友の『八神はやて』さん。

この３人は１０年来の親友か…）

全然緊張している節がみられない。

いや、多少は緊張しているか。

胸元で組んでいる両腕。

右手の人差し指が不定期なリズムで左腕をたたいている。

もしも今の状況が、自動車事故を起こしてその取り調べに行く前だと仮定する。
そうだとしたら、彼はもっと緊張しているだろう。

しかし、今は言うなれば『大規模な迷子』。
その迷子を保護する立場が時空管理局であり、今いる機動六課なのだ。
彼にとって緊張する理由は特にない。
もっとも、迷惑をかけているという自覚はあるようだが。

（俺だけならともかく、こいつも一緒だもんなあ）

「キュイ？」

そう…広暁の傍らで羽の手入れをしている『ホルスの黒炎竜　ＬＶ８』である。
ホルスの存在がイレギュラーであることは彼女達の会話や反応である程度は分かっている。
…この可愛い鳴き声のことは、ここでは置いておくことにしよう。

（慣れってのは怖いね～。こっちの世界…ミッドチルダに来ていきなりあんなことがあったら大抵のことじゃ驚かなくなるぞ…）

いきなり別世界に飛ばされて、そこで大量の自立型攻撃機械に襲われる。
それだけでも十分だが、それらを実体化したホルスが『粉砕！玉砕！大喝采！』したのだ。

当分、広暁が驚くことは無いのかもしれない。

（しかし…自分が所属する部隊の概略を俺みたいな奴に話していいのか？）

ヘリポートから今いる会議室に来るまでの間。
広暁は、なのはからある程度のことを聞いていた。
いや、なのはが勝手に話してきたと言った方が正しいか。
その時に上記に述べたようなことを聞いたのだ。

（機動六課のエース２人と部隊長が１０年来の幼馴染で全員１９歳…。どこのゲームの世界だよ……。
つーか、何で１９歳で部隊長？エースならまだ分かるけど、部隊長はさすがに無理だろ）

エースならともかく、部隊長というのは若さでなれるものではない。人脈は言わずもがな、経験・包容力・英断力。他にも必要な力を挙げれば切りがない。
どうして彼女は１９歳という若さで部隊長になれたのか。今の彼には全く分からない。

（考えても分からんな…考えるの止めよ）

広暁は、一度考え込むと深く考え込む性格である。
ただし、考えても分からない場合や無駄だと判断した場合はすぐに思考を止めてしまうのだ。

ある意味潔いが、どっちつかずとも言える性格である。

ちなみに、広暁は『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』に関する知識がない。
アニメは見るし、マンガも読む。もちろん、ネットの動画投稿サイトも見る。

しかし、それら全てが遊戯王や週刊少年ジャンプ系ばかりなのだ。
もし広暁の友人がこのことを知ったら、「俺と代われ！！」と言って飛んでくるかもしれない。

なお、彼はこの会議室に来てから一言も話していない。
ホルスに話しかけてもいないし、独り言も言っていない。
椅子にすわり、腕を組んでじっとしている。

何故かと言うと…

（ドラマとかじゃ部屋に録音機や監視カメラがあって、変なことを言ったり不審な行動をとると後々証拠になるからな。今はじっとしていよう……無駄かもしれないけど）

テレビの刑事ドラマで得た知識をフル活用して今の状態を保っている。
彼が考えるようなことは無いのだが、如何せん用心深い性格なため行動に移してしまう。
無駄と分かってるだけまだマシなのだろうか？

～十分後～

コンコン。

「失礼します。広暁さん、部隊長室まで来ていただけますか？」

「はい。分かりました」

なのはが来て広暁を部隊長室まで案内する。
廊下も広いし、天井も高い。
清潔でゴミも見受けられない。

金かかってるんだな～と考えていると、隣を歩いているなのはが広暁に話しかけてきた。

「広暁さん？」

「何ですか？」

「あまり緊張しているようには見えませんね？」

「まぁ…取り柄みたいなものですから」

「羨ましい取り柄ですね…」

「慣れみたいなものですよ。…すいません。これを高町さんに言ったら失礼ですね」

「いえいえそんなことは。あ、ここが部隊長室です。頑張ってくださいね？」

「はい（何を頑張るんだ…？）」

一度深呼吸をし、胸の前で両方の掌を上に向け、音をたてて合わせる。

パン！

広暁のプリショット・ルーティンであり、決意する時に行うものだ。

コンコン。

「失礼します」

「どうぞ」

「あなたが保護された次元漂流者ですか？」

「そうです」

「私は機動六課部隊長、八神はやてです。
あなたにいくつか質問します。
ヘリの中で高町一等空尉に聞かれたことと被るかもしれませんが、
答えてください」

「はい」

「名前と出身を教えてください」

「墨谷広暁。地球の日本出身です」

「どうしてミッドチルダに？」

「車に乗ろうとしたら、海浜公園にいました」

「その召喚獣について、何か知っていることは？」

「カードが実体化したということぐらいしか分かりません」

…

……

……

……

……

――――――

「なるほど…」

はやては悩んでいた。

広暁と話した限りでは、彼は召喚獣のことについてほとんど知らない。

しかし、その召喚獣の魔力量は、なのはの話を聞いた限りではＡＡＡランク。

リミッターをかけているなのはとほぼ同じ魔力量を有するのだ。

手放すには惜しい存在だ。

しかしそれ以上に気にかけているのは……

（結構ええ男やないの～）

……広暁本人のことである。

（顔はまあまあやけど、背は高いなあ。１８０ｃｍ以上あるんやろか？

身体もしっかりしてるし…長年スポーツか武術をやってる身体やな。

この身体なら訓練にもついていける。制服のサイズはＬよりＬＬのがええかな？）

（大学生ってこともあるけど、受け答えがしっかり出来てる。

言葉の教育は不要やし、まずはミッド文字やな。

デスクワークも出来るようにせんといかんし。ほんでその後は…）

公的なことも考えているだけまだマシなのだろうが。

この空気の中この思考は如何なものだろうか？

「あの…八神部隊長？」

「！？どうしましたか！？」

広暁の問いかけに、はやては一瞬たじろぎながらも仕事用の口調で瞬時に答えた。

さすがは部隊長である。

（ま、まさか…今の考え口に出してた！？だとしたらこれはやばい！！）

はやての暴走…もとい妄想が加速する。

実際はそんなこと無いのだが、はやての思考はどんどん加速する。

（どう言い訳したらええんや！？いや、ここで言い訳したら私の尊厳に関わる！！

ここは何としても別方向に逸らさな…！！）

そんなことは露知らず、広暁は

「俺は日本に帰れるのですか？」

と質問した。

（た…助かった……。口には出してなかったみたいや）

「そのことなのですが…広暁さん、私の口調に聞き覚えある？」

「!?そのイントネーションは…関西弁ですか?」

「せや。けど、同じ日本やないんや」

「どういうことですか?」

「平行世界(パラレルワールド)…って知ってるか?」

＝＝＝

……」

「そう…ですか……」

「「……」」

沈黙が部隊長室を支配する。

帰れる可能性は皆無。
そう判断した彼は様々なことを考えていた。

家族の事。友達の事。そして……なにより自分の事。

一生懸命に生きてきたつもりだが、何か生きる道が見つからない。
そして、岐路である大学3年生の後期にミッドチルダに飛ばされた。

（俺…どうすればいいんだろ？）

見つかるはずの無いはずの答えを必死に探し続ける。
しかし、どんなに考えても答えを見つけることは出来ない。
いや…今の段階では存在しないのだ、答えが。

「なあ、広暁さん…？私の提案、聞いてくれるか？」

「……何でしょうか？」

「うち…つまり機動六課で働いてみーへんか？」

「…はい？えーと、それはどういうことでしょうか？」

「そのまんまの意味や。機動六課で職員として働くということ。まあ、立場的には民間協力者っちゅう立場にはなるけどな」

「何故俺を勧誘するんですか？デスクワークぐらいしか出来ないと思いますが」

「あんたがただの次元漂流者なら、な…。でも、あんたは違う。あんたは召喚獣を従えている。それも、ガジェットを簡単に破壊できるほどの…な。
それほどの召喚獣を従えているあんたが魔力を持たないはずもないしな」

そう、広暁はホルスを従えている（実際は従えているわけではないのだが）。
ＡＡＡクラスの魔力量を持つホルスを従えている広暁が魔力を持たないはずがない。
至極当然の推察だ。

「少し…考えさせてもらえますか？」

「ええよ。好きなだけ悩んだらええ」

（別世界に魔法か…。何か見つけられるかな？）

広暁は考えている。この申し出を受け入れるかどうか。
確かにはやての申し出は魅力的である。

見知らぬ土地で一人で生きていくとなると、それは元いた世界より厳しい。

だが申し出を受け入れるとなると、否が応でも魔法を用いた戦闘をすることになる。

彼にはそのような経験は無い。他の職員と自分では明らかに経験が違う。

そのような自分が果たしてこの申し出を受け入れてよいのだろうか？

（でも…この世界でなら何か見つけられるかもしれない）

やりたいことを見つけられず、趣味やスポーツに打ち込んできた自分。

将来有利そうという理由だけでやってきた勉強と、選んだ大学。

この世界でなら、自分のやりたいことを見つけられるかもしれない。

ならば、彼の言うことは唯一つ。

「その申し出…受けさせて下さい」

「お！？決まりやな！！」

はやてが両手を叩いて立ち上がる。そして、広暁に右手を出してきた。

「今日からあんたは機動六課の仲間や。よろしゅーな！」

「こちらこそ、よろしくお願いします！」

ガシッ！！

2人の握手が交わされる。背景が夕焼けならさぞ映える光景だろう。

「さてと！ほんなら、今から書類を作成せんとな。
上の方に次元漂流者の滞在ってことで許可をとらんといかんし」

「俺は何をすればいいですか？」

「個人情報を教えてくれるだけでえーよ。さっき聞いたこと、覚えてる？」

「大丈夫ですよ」

「ほな始めよか！」

「はい！」

―――――――

～機動六課オフィス～

一方その頃…

「次元漂流者を保護したんだって？なのは」

「あ、フェイトちゃん。そうだよ、今は部隊長室ではやてちゃんと話してるよ」

ここは機動六課のオフィス。
なのはがデスクワークをしていると、模擬戦を終えたフェイトが入って来た。
スバルとティアナは自主連で、エリオとキャロはシャワールームに向かっている。
つまり、オフィスには2人しかいない。

「スバル達に聞いたの？」

「うん。召喚魔法を扱える次元漂流者なんて聞いたことがないけど…。しかも竜を召喚したんでしょ？」

「私も聞いたことがないけど、あれを見たら信じるしかないよ」

「その竜、ガジェットを破壊したんだよね？」

「うん。あの炎は、竜魂召喚で本来の姿を取り戻したフリードより強いと思う」

「確かにキャロはまだまだ未熟な部分があるけど…。
それでも、『白銀の飛竜』とまでいわれるフリードの炎を超えるなんて…」

「しかも、彼はあれが初めてだったみたいだし」

「一体何者なの？」

「話した感じでは、真面目な好青年って感じだったよ」

「そう…」

フェイトは考える。スバル達に聞いた限りでは、彼は地球出身の可能性が高い。
それなのになぜ、召喚魔法を扱えるのか？
もしかすると、キャロと同じ第６管理世界の『ル・ルシエ』一族なのだろうか？
仮にそうだとしても、別世界である地球にいる説明がつかない。

フェイトが熟考していると…

（２人共、聞こえるか？）

（はやてちゃん？）

（はやて、どうしたの？）

２人に同時に念話が来た。どうやらはやてからのようだ。

（例の次元漂流者の彼、機動六課で保護することが決まったさかい。今すぐ部隊長室まで来てや）

（うん、分かった）

（すぐ行くね）

どうやら、広暁を保護することが決まったらしい。
なのはは嬉しそうにしているが、フェイトは少し複雑そうだ。

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「う、ううん。何でもない。早く行こ？」

「？うん、分かった」

2人はオフィスを出て、部隊長室へと歩き出した。

（竜を召喚する者…か。キャロと仲良く出来ればいいけど…。友達にはなれるかな？
でも大学生って言ってたから、結構年上になっちゃうよね……）

親バカ的思考をしているフェイトであった。

―――――――――

その頃部隊長室では…

「ファ～……。っと、すいません」

「おいおい眠いんか？まだ夕方の４時やで？」

「むこうの世界で飛ばされたのが午後９時半前だったので。
体内時計は午後１１時半ぐらいなんですよ」

「健全な大学生が１１時半で眠いって可笑しな話やな」

「夏休み明けでしたからね。
夏休み中は早めに寝てましたし、何よりミッドチルダに飛ばされて
あんなことがあったわけですから」

「ならしゃーないか。早くこの書類終わらせるで」

「はい…あの八神さん？」

「どうしたん？」

「さっきからずっと関西弁ですけど？」

「あ、もうええんや。仕事用の口調は疲れるしな。こっちの方が楽でええ」

「はあ…（随分とフランクな人だな）」

「そうゆうあんたもずっと敬語やないか」

「これからお世話になる部隊のトップの人に砕けた話し方は出来ませんよ」

「同じ職場で働く仲間になるんやで？真面目な時はともかく、今は別に構へんて。
それにあんた、私より年上らしいやないか」

「確かにそうですけど…」

こうゆうのが好かれる上司というのだろうか？そんなことを広暁が考えていると…

「「失礼します」」

「来たな。どうぞ～」

入って来たのは2人の女性。
1人は高町なのはだ。
そしてもう1人、長い金髪を腰より下で一つに結わえた女性。
こちらが恐らくフェイト・テスタロッサ・ハラオウンだろう。

「八神部隊長。彼が次元漂流者ですか？」

「せや。彼が次元漂流者の墨谷広暁君。あ、それと、敬語やなくてもええで」

どこか値踏みするような視線に気づいたのか、フェイトに言うはやて。

もっとも、フェイトの思考とはやての考えるフェイトの思考はずれているのだが。

「はやて…分かった。初めまして、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。

ライトニング分隊の隊長をやっています。よろしくね？」

フェイトが挨拶と共に右手を差し出した。

この世界の人はやけにフランクだな～と考えながら、広暁も右手を差し出した。

「墨谷広暁です。よろしくお願いします」

さっきの握手ほどではないが、固い握手を交わした2人。

その握手の固さとフェイトの視線に気づいたのか、広暁は聞き返した。

「ホルスがどうかしましたか？」

「えっ！？いや、その…」

「なんやフェイトちゃん、この子が気になるんか？まぁ、フリード以外で竜を見るなんて初めてやからな」

フェイトの視線は飛んでいるホルスへと向けられていた。
さっきまでじっとしていた鬱憤を晴らすかのように部屋の中を飛んでいる。
よくはやても許したものだ。

「赤みを帯びた銀色の竜…スバル達の言ってた通りね……」

「フェイトちゃん……まだ信じてなかったの？」

フェイトの呟きになのはが答える。
親友の用心深さというか真面目さというか、そういったものに少し呆れているようだ。

「本当は今日中に軽く検査をしてリンカーコアとか調べたかったんやけどな。
広暁さんがもう眠そうやから、早めに休んでもらって明日の午前中に検査をすることにしたんや」

「そういえばミッドに飛ばされたのって、元いた世界で午後９時２０分だっけ？」

ヘリの中で聞いた話をなのはが思い出しながら答える。

「さて、広暁さん。空いてる部屋に案内させるさかい、今日は休んでもらえるか？
詳しい事はこちらで決めとくから」

「分かりました。よろしくお願いしますね」

「２人共、案内頼めるか？宿舎にまだ空いてる部屋があったやろ？

そこが今日から彼の部屋になるから」

「うん、分かった」

「では行きましょうか」

「はい。それじゃ八神さん、失礼します」

「……ちょい待ちや」

部隊長室から出ようとする広暁を、はやてが呼び止めた。

「？どうかしましたか、八神さん？」

何か伝え忘れたことがあったのだろうかと思いながら広暁が振り返る。

「……敬語。さっきも言ったけど、敬語使うのやめてくれへんか？それと私の呼び方。八神さんなんて呼ばれたらむず痒くてしゃーないわ。はやてでええで」

「さっきも言いましたけど、部隊長に対して敬語を使うなと言われても。しかも名前を呼び捨てなんて出来ませんよ」

「そんな固くならんでええねん、ここでは。そりゃー、公の場ではちゃんと呼んでくれなあかんけど」

「そういうものなのですか？」

「そういうもんなの！」

語気を強くしていうはやてに、広暁は驚いた。
機動六課についてはある程度聞いた。
しかし、聞いた限りでは警察・軍隊・裁判所がまとまった司法機関だと考えていた。

そのような職場で上司に対してフランクに話すなどあり得ない。

（八神さんなんて呼ばれたら距離が開く一方や！
なのはちゃんやフェイトちゃんと比べて出遅れとった私に神様がくれたチャンスなんや、これは！
絶対に名前で呼ばせたる！）

……広暁の思考も知らず、公私混同というか自分勝手なことを考えているはやて。

（でも…郷に入っては郷に従えともいうし。向こうがいいっていうならいいんだろうな）

はやての思考も知らず、自分の中で結論付ける広暁。
広暁の中で、リミッターが一つ外れた瞬間であった。

「分かった。じゃあ、はやてって呼ばせてもらうわ」

「よし！それでええねん！上司の言葉は聞かなあかんで～」

「……」

「あ、それと。私もあんたのこと広暁って呼ばせてもらうからな」

さっきからはやてに押されっ放しの広暁に、更に追い打ちがかかる。

「だったら私もなのはでいいよ。高町さんて呼ばれるのは慣れてないし」

「私もフェイトで構わないよ」

「はぁ…」

どうにもペースを掴めない広暁。

こっちの世界の女性はどうしてこう、フランクというか子供っぽいというか。

異性に対して境界線を引かないのだろうか。

あまりミッドチルダの人に会っていないが、これから会う女性が恐くなった広暁であった。

～宿舎、広暁の部屋の前～

「それじゃあ、今日はここで。明日の朝、迎えに行くからね」

「フォワードの皆には食堂で紹介するから」

なのはとフェイトが言うには、フェイトの所属するライトニング分隊にも新人がいるらしく、よく皆で朝食を食べるらしい。

「分かった。何時に迎えに来る？」

「う～んと…朝の訓練が終わってからだから8時ぐらいかな？」

「オッケー。それまでには起きとくよ」

「ええ。それじゃあまた明日」

「お休み～」

夕方に言う言葉ではないような気もするが、今の彼にそんなことを考える余裕もない。

2人が部屋から去った後、彼はベットに座りぼーっとしていた。

「これから頑張らないとな、ホルス」

「キュイ」

広暁の呼び声に答えるかのように、ホルスが鳴く。

大きい時には荘厳だった鳴き声が、この可愛い鳴き声になった時に

は驚いたものだ。
だが、これからはもっと驚くことが待っているだろう。

上着を脱いで机の上に放り投げ、靴を脱ぐ。寝る準備をした広暁はベットに入った。

「お休み～」

これから起こることに期待と不安を抱きながら、広暁は眠りについた。

「……おまえはどこで寝るんだ、ホルス？」

「キュイキュイ」

自分が脱いだ上着の中に潜り込むホルス。
外見のわりに結構可愛いところあるんだな～と思った広暁であった。

第6話「暗闇に差す一筋の光明」（後書き）

第6話終了です。
ここで区切りとなり、次のステップ、機動六課での生活が始まります。

ご意見や感想、提案などよろしくお願いします。

主人公設定（１０月１５日更新）（前書き）

主人公設定です。なぜこんな設定にしたかって？
それは後書きをご覧じろ！

主人公設定（10月15日更新）

プロフィール：

名前：墨谷広暁（すみたにひろあき）
身長：１８４ｃｍ
体重：７８ｋｇ
年齢：２０歳
職業：国立大学に在学する大学3年生
趣味：遊戯王５Ｄ’ｓＯＣＧ、ソフトテニス、読書

一言で言うならば冷静な性格。
外見は物静かで大人しそうに見えるが、芯が強く、妥協が苦手な頑固者。
融通の効かない人間と思われることも多いが、人に的確なアドバイスをしたり、親身になって助ける誠実さを持っているため、嫌われることは少ない。

物事を大局的・俯瞰的に捉えることを得意とする。
テレビ等で見るスポーツ中継の勝敗を高確率で当ててしまうため、家族や友達からは「分かっても絶対に言うなよ！」と言われることもしばしば。

遊戯王ＯＣＧは、小学６年生から続けている。
その実力は西日本代表選考会決勝まで勝ち上るほど。

中学校からソフトテニスを始め、ポジションは前衛。

個人戦で全国大会ベスト8まで勝ち上るほどの実力者。
大学ではソフトテニスサークルに所属。市や県の大会に参加している。

身体能力は同年代の中では優れている方で、中でも瞬発力・反射神経が優れている。
筋力トレーニング及びジョギングを中学生の頃から行っており、基礎体力も高い。

国立大学に合格するぐらいの頭脳を持ち、観察力・洞察力に長けている。
計画実行力（オーガナイズ）は群を抜いており、大学の講義で演習・実験を行う時、彼のいるグループは常に時間以内に終わっている。

主人公設定（１０月１５日更新）（後書き）

現実味のある主人公を作ろうと思ったらこうなりました。

なぜソフトテニス部っていう、やってる人は多いのに主人公設定にはまずならない部活にしたかって？

それは……

作者がソフトテニス部出身であり、遊戯王をやってる人間が、ソフトテニス部出身者が最も多かったからです！

次に多いのが弓道部、その次に多いのがサッカー部かな？

そういえば、弓道部ってやけに頭のいいというか、テスト成績の上位者が多くないですか？作者の周りだけなんでしょうか…？

おっと。もう１つの理由を忘れるところでした。この小説では言わずもがな広暁とホルスがメインです。そうなると、コンビでやるスポーツの方が何かと表現しやすいので。

そうなると卓球やバトミントンやテニスも候補に挙がるわけですが、これらはシングルスが主体です。

そのため、ダブルスが主体であるソフトテニスにしました。

感想、よろしくお願いします！

使用魔法（１０月２４日更新）（前書き）

広暁の使用魔法をまとめたものです。
オリジナルの魔法は、魔法名の前に『〇』がつきます。
随時更新するので、よろしくお願いします。

使用魔法（１０月２４日更新）

・攻撃魔法

○天創塵（テンソウジン）：

広暁が独自に考えた最初の魔法。

魔力を集束した矢をサジタリウスから放つことにより、音速を超えた速度で飛ぶ。

その威力は、真っ平らな土地を巨大なすり鉢状にする程。

ただし音速以上の速度で真っ直ぐ飛ぶので、近くにいる相手には放てない。

相手が小さい場合も同様で、狙いがつけにくい。

外れた場合はすぐに爆発するようになっているが、直撃するより威力は若干落ちる。

通常時の威力は、シャッハに「ＡＡＡランクの魔法」と言われるほど集束密度が高い。

○篠雹霰・壱式（ジョウハクセン・イッシキ）：

？？？？？？？

○篠雹霰・弐式（ジョウハクセン・ニシキ）：

対集団戦射撃魔法『篠雹霰』の第弐式。

探索魔法で周囲の敵を把握するのと同時に数多の矢を生成。

標的をロックオンし、弦を弾くことで一気に発射、標的を狙い撃つ。

数が多いと同時制御が難しいので、何本か一纏めにして放つことが多い。

○篠雹霰・参式（ジョウハクセン・サンシキ）

対集団戦射撃魔法『篠雹霰』の第参式。
放たれた1本の魔法矢が上空に移動し、力を蓄えて綺麗な球状の魔力球ができたら準備完了。
広暁の合図と共に広範囲（一転集中も可能）に怒号の如く矢が放たれる。
蓄えた魔力の量に比例して放たれる矢は増える。
制圧力で言ったら天創塵を上回るが、天創塵以上に発動までに時間がかかるのが難点。
魔力貯蔵の時間を狙われないようにするために、迷彩魔法とセットで使うことが多い。

○朧月（オボロヅキ）：
魔法の中でも珍しい、音を使用する魔法。
弦を弾く音と起点とし、自身を中心に音を伝達。
聞いた生物が不快になる音と三半規管を揺らす高周波音を同時に出し、戦闘力を下げる。
音の強さ・範囲・指向性等は調節が可能。

・防御魔法

プロテクション：
触れたものに反応し、対象を弾き飛ばす性質を持った防御バリアを発生させる。
特に物理攻撃に対する防御性能が高い。
広暁が使用することもあるが、サジタリウスにオートガードとして設定されているので、サジタリウスが自動発動することが多い。

ラウンドシールド：

魔法陣を使用した円形の盾を作り出す魔法。
一方向しか防御できないが、その分防御力は高く、特に魔力弾への防御に優れる。
戦闘スタイル柄、広暁は『防ぐ』より『躱す』ほうが得意であるため、この魔法も攻撃を『流す』目的で使用する回数のほうが多い。

・移動魔法

ブリッツアクション：
体全体の振りを加速する魔法。
弓矢を使用する広暁が使うことは少ないが、近接戦を想定したシグナムとの訓練では使うことが多い。

ソニックムーブ：
フェイト考案の瞬間高速移動魔法。
単純な速度なら現在のエリオと同等の広暁だが、まだ直線軌道でしか移動することが出来ない。

・捕獲魔法

リングバインド：
バインド系の基本魔法で、発生したリングで目標をその場に固定する捕獲魔法。
基本だけに単体での威力はそれほどでもないが、複数同時・遅延発生・強度向上等の応用が利きやすい。
広暁は複数同時と強度向上を行うことにより、ホテル・アグスタに

現れた人間昆虫を捕えた。

ディレイドバインド：
指定した空間に侵入した者に対して発動する設置型捕縛魔法。
広暁の性格と戦闘柄使うことが増えるであろう捕縛魔法で、現在最も力を入れている捕縛魔法。

・結界魔法

○ＥＴＰ（エクスクルージョン・トライアングラー・ピラミッド）：
魔力素が結界内に存在しない空間に相手を閉じ込める結界魔法。
ユーノお薦めの無限書庫所有の本に載っていた魔法で、初めて使用したのは第４０話。
術式は全魔法の中でもトップクラスの難易度であり、ユーノが「広暁なら使えるかもしれない」と考えて広暁に教えた。
魔力結合を阻害するＡＭＦとは違い、魔力を作る素である魔力素を完全に排除した結界内に対象を閉じ込める魔法であるため、魔法を結界内で使うことは不可能。
本来はＳＳランククラスの魔法だが、それは『遠距離から』『対象に気づかれないように』『素早く』発動する場合であり、広暁は『近距離から』『対象に接触して場所を指定して』『時間をかけて』発動することで使用を可能とした。
現在は上記の条件下でしか使えないため滅多に使うことはないが、味方の援護と時間があれば強力無比な結界魔法と化す。

・回復魔法

フィジカルヒール：
肉体的な負傷の治癒のための魔法で、即効性。
フォワードメンバーでは広暁とキャロしか使えないが、効果範囲・治癒速度共にキャロのほうが上。

○マインドリターン：
意識を失っている生物の意識を回復させる魔法。
広暁が初めて使ったのは第２９話で、それまでは気絶した昆虫や魚等で練習していた。

・探索魔法

○フィールドサーチ：
長距離探索魔法。
自身を中心に発動、範囲を広げることで、発動範囲内の生物や建造物の状態を知ることができる。
なのはが使用する『エリアサーチ』より範囲が広く、視覚情報以外も確認することができる。
現在の広暁はさほど範囲を広げられないが、将来的にかなり伸びるというのはシャマル談。

・幻術魔法

フェイク・シルエット：
単体・複数の幻影を発生させる高位幻術魔法。

肉眼や簡易センサー類では見抜けない精度を誇るが、幻影に攻撃が直撃すると消えてしまう。
初使用は第４０話。
この魔法の弱点を逆手にとり、攻撃してきたシャッハをディレイドバインドで捕えた。
本編中に記載はないが、ティアナに教わった魔法である。
ティアナは複数体同時に出現させられるが、広暁は1体が限度であり、発動時間もティアナより短い。

第7話「機動六課での朝　変」（前書き）

第7話です。
タイトルからも分かる通り、これから数話、機動六課での朝の出来事を書いていきます。
ちなみに、タイトルの字は「変」ですからね？「恋」じゃないですよ！

第7話「機動六課での朝　変」

～機動六課隊舎～

ジリリリリリリ！！！！

ガチャン！

「…もう朝か」

目覚ましを止めて起きる広暁。
現在の時刻は午前7時。
なのはとフェイトは午前8時に迎えに来ると言っていたので、1時間ほど早い。

「あ～…俺、ミッドミルダに飛ばされたんだっけ」

軽く伸びをし、いつもと違う朝の風景を見てぼやく。
そして、今の彼が思い出すのは昨日起こった出来事。

車に乗ろうとしたら海浜公園に飛ばされ、変な機械に襲われたと思ったらそれを退治する変な服の人達。
絶体絶命のピンチに何故か実体化して窮地を救ってくれたホルス。

元いた世界ではあり得ないようなことが広暁の頭を埋め尽くす。
変な夢だと思いたい。

しかし、広暁の服に包まって寝ている一匹の生物がその幻想を打ち

砕く。

「夢じゃ…ないんだよな」

そこには広暁の温もり（？）に包まれて眠る1匹の竜がいる。
昨日、広暁を助けてくれた竜、『ホルスの黒炎竜　Ｌｖ８』。

これを信じるなという方が無理な話であるし、今も実は夢の中だと言うのも無理な話である。

「事実は受け止めないとね」

そう呟く広暁の瞳は、先程まで物思いにふけったいた時の顔とは違う。
何かを決意し、自分でそれを切り開いていこう。
そのような意志を感じさせる目だ。

「さてと！まだ1時間あるし、筋トレでもしようかな」

そういって彼は部屋の片隅まで移動する。
何をするのかと思えば腕立て伏せだ。
日課として毎日続けていること。
これに腹筋やスクワットといった世間一般でよく知られるようなものが続く。

本来は寝起きでやるようなものではないのだが、自分を奮い立たせるために広暁は行う。

といっても、それこそどこぞのレスラーがやるような回数をやるわ

けではない。
彼が行う筋トレはあくまで技のため。
自身の技を正確に繰り出すために必要な筋肉を鍛え、維持している。
筋肉質ではないが、俗に言う細マッチョでもない。
競技者としての体型であり、機能美とでも言うような肉体である。

（でも…こっちでこれから生活するなら、もっと筋肉つけた方がいいのかな～？）

腕立て伏せを終え、腹筋をしながら考える広暁。
機動六課での仕事内容は分からないが、戦闘要員は昨日の話からして確定事項だ。
筋肉をつけておいて損は無いだろう。しかし…

（魔法の世界だしな…筋肉って意味あるのか？）

昨日のことを思い出しながら考える。
直に戦闘するところは見てないが、なのはが持っていたのは杖、ヴィータが持っていたのは細長いハンマーだ。
なのはが杖で杖術を使うとは思えないし、ヴィータがハンマーであのガジェットを簡単に粉砕するとは思えない。
恐らくではあるが。
杖を媒体として色んな魔法を使ったり、ハンマーを巨大化、もしくは肉体を強化して戦うのだろうと考える。
…元の世界で見たアニメやマンガの知識ではあるが。

（今考えても分からんな。あとで八神さ…はやてに聞いてみるか）

今は思考を放棄することで落ち着いたようだ。

思考中に『八神さん』と言いそうになったが、『はやて』と脳内変換した広暁。

真面目な性格というのも困りものである。

そんなことを考えているうちにスクワットも終え、部屋に備え付けのシャワーを浴びようと服を脱ぎ始めると、

「キュ…キュイー……」

ホルスが起きた。

広暁の上着からモゾモゾと出て来て、思いっきり羽を伸ばす。

人間でいう所の腕を思いっきり上に伸ばして伸びをするようなものだろうか？

「おはよう、ホルス」

「キュイキュイ」

広暁がホルスに挨拶をすると、ホルスも挨拶を返してきた。

やはりというか何というか、知能の高い竜である。

「なぁ、ホルス…その鳴き声、どうにかならんか？もうちょっとこう、ごつい感じで」

「キュイ？」

困惑する広暁。昨日聞いたが、未だにこの可愛い鳴き声には慣れていないようだ。

「……慣れろと？」

「キュイ！」

そんな広暁の思いもむなしく、可愛らしく返事をするホルス。
交渉決裂、慣れるしかないようである。

「はぁ…とっととシャワー浴びるか」

服を脱いでシャワー室へと入っていく広暁。

―――――――

コツコツコツコツ。

朝の隊舎を2人の女性が歩く。
一人は高町なのは一等空尉。
スターズ分隊の隊長であり、『エース・オブ・エース』の称号を持つ空戦のエキスパート。
もう1人はフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。
ライトニング分隊の隊長であり、『金の閃光』の異名を持つ音速の魔導師。

この2人が並んで歩くと、道行く管理局員（ほとんど男性）が振り向く振り向く。
それほどの美貌の持ち主であり、優秀な魔導師なのだ。

そんな2人が今から一人の若い男を迎えに行くと知ったら、彼らは一体どのような反応を起こすのだろうか？
知らない方がお互いの身のためである。

「なのはは緊張しないの？」

「えっ？何が？」

フェイトの突然の問いを、なのはが聞き返す。

「広暁さんのことだよ。次元漂流者とはいえ、今から彼を起こしに行くんだよ？」

「何言ってるの、フェイトちゃん？時間までには起きておくって、広暁さんは言ってたじゃない」

「あれ！？そうだっけ！？」

「も～。しっかりしてよフェイトちゃん」

フェイトの勘違いに気付いたなのはは呆れ顔だ。
フェイトにとって、今まで出会った年上の男性というのは数えるぐらいしかいない。
その内、義兄であるクロノや幼馴染であるユーノを除くと、ほとんどが仕事上の関係者だ。
つまり、隊舎内とはいえこのような経験は初めてになる。

「私は別に緊張しないよ。昔はよくお兄ちゃんを起こしてたし」

「あの真面目な恭也さんが？」

「お兄ちゃん、朝は弱くてね。鍛錬がある日は問題ないんだけど、休日とかよく寝過ごすんだ」

「へぇ」

そんなことを話しながら歩いていると、２人は広暁の部屋の前に着いた。

広暁の部屋の前に着いた２人。
現在の時刻は午前７時５０分。昨日約束した時間より１０分早い。

「ちょっと早いけど…大丈夫かな？」

「時間ぎりぎりに起きるような人じゃなさそうだし、大丈夫じゃな

い？」

「それもそうだね」

声をかけるかどうか迷っているようだが、広暁の印象からして問題ないと判断したのだろう。

コンコン。

「おはようございます、広暁さん。起きてますか～？」

「……」

「返事がないね、なのは」

「そうだね、もしかしてまだ寝てるのかな？」

部屋の中から返事がない。

部屋から出るとは考えにくいし、もしかしてまだ寝ているのだろうか？

「「失礼しま～す」」

部屋の扉を開け、中へと入って行く2人。

隊舎の部屋の鍵はそれぞれ個人認証機能があり、その鍵がないと部屋に入れない。

しかし、何分急なことだったため、広暁は部屋の鍵を作っていないのだ。

「あれ、いないね？」

「もしかして、部屋から出た？」

「まだ時間じゃないし…それに広暁さんはまだ六課の中がどうなってるか知らないんじゃ？」

「う～ん…となると、一体どこに？」

部屋を物色…じゃなかった、散策しながら考え込む2人。すると…

「キュイ！」

2人に向かってホルスが話しかけて（鳴きかけて？）きた。

「確かあなたは…」

「『ホルス』だよ、なのは」

「そうそう。ホルスちゃん、広暁さんがどこに行ったか知らない？」

「ちゃんは付けなくていいと思うけど…」

ホルスに広暁の行き先を聞くなのは。

この時、2人は失念していた。

隊舎ではトイレや風呂は共用である。

しかし、各部屋にシャワー室があることを。

「キュキュイ！」

ホルスが首をシャワー室へと向けた瞬間。

ガチャッ。

「誰かいます？」

広暁がシャワー室から顔を出した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

＜広暁ｓｉｄｅ＞

シャー。

朝のシャワーってどうしてこんなに気持ちいいんだろうね。
夜浴びると疲れが抜ける感じがするけど、朝浴びると力が湧いてくる。
不思議だね～。

「ふぅ…すっきりした」

シャワーを浴び終えて、備え付けのタオルで体を拭く。
外して入れておいた腕時計を見ると、時間は午前7時５０分。
なのはとフェイトは８時に来るって言ってたから、まだ余裕があるな。

それに、こういった軍事機関の人なら時間にも厳しいだろうし、時間ぴったりに来るだろ。

そんなことを考えていると、脱衣所の外に人の気配を感じた。
人数までは分からないが、誰かいるのは分かる。

もしかして２人がもう来たのか？
いや、さすがに１０分前には来ないだろ。
来たとしても、ここは男である俺が寝ていた部屋。
ずかずかと若い女性が入って来るとは考えにくい。

う～ん…分からん。
とりあえず、声だけでもかけてみるか。
下を見せないように顔だけ出せば問題無いだろ。

ガチャッ。

「誰かいます？」

「「……」」

「あ。何だ、2人だったんすか。服着るんで、ちょっと待っててもらえます？」

「「……」」

「？どうかし…」

スゥーッ。

「「キャ――――――――ッ！！！！！！！！！」」

2人の声に驚いた広暁だが、そんなことは問題ではない。

広暁は急いで服を着た。

今の大声は確実に隊舎内に響いている。人が来るのも時間の問題だ。

シャワーを浴びた後とはいえ、裸に近い恰好でいるのはまずい。

そして事は動き出す。

騒ぎを聞きつけたヴォルケンリッター４人とはやて、局員や食堂のおばちゃんまで集まり、現場は騒然とした。

まず部屋に入って来たのはピンク髪にポニーテールの女性。
入って来るなり広暁の襟元を掴み、

「貴様！高町とテスタロッサに何をした！！」

とてつもない剣幕で詰め寄った。
理由を言おうとするが、そこで更にヴィータの追い打ちがかかる。

「お前！まさかなのはとフェイトを朝から…！？」

誰がどう聞いても変なことしか考えつかないことを言う。

「あらあら。朝からお熱いわね～」

白衣を着た金髪の女性がそれを囃し立てる。

「……」

静観する青い犬。

とりあえず、こういう場合は結論から言った方がいい。
しかし、それは相手が聞く耳を持っていればの話。
ここまで熱くなった人間を静めるのは難しい。

となると、大声を出した当人に話してもらった方が早い。
そう思い、広暁は２人がいるであろうベットの方向へと視線を傾けたのだが…

2人は気絶していた。
それほど衝撃的なものでも見たのだろうか？脱衣所にはちゃんとドアがあるのに。

援軍は望めない。
こうなったら、これを使うしかない。
広暁がズボンのベルト穴に手を伸ばそうとすると…

「はいは～い！皆注も～く！！」

手を叩きながら前へと出たのははやて。

「ここでこの事件を見ていたい気持ちも分かるけど、皆戻ってくれへんか？
このままじゃ今日の仕事に差し支えるからなー！」

さすが部隊長。まとめ上げるのはお手の物である。
ヴォルケンリッター４人を除いた人達は多少渋りながらも解散した。

「さてと…ほんなら広暁。話を聞かせてくれへんか？ことによっては……ただじゃ済まさへんで～？」

両手をワキワキとさせながら笑顔で言うはやて。
訂正。ただこの状況を楽しみたいがために解散させたようだ。

「……という訳です」

「何やそりゃ。なのはちゃんとフェイトちゃんは一体何してんの？」

話を聞いたはやては呆れ顔でそう言った。

状況だけを簡潔に言うと、

？なのはとフェイト、勝手に部屋に入る

？部屋を物色

？シャワー室から広暁出現（顔しか出していない）

？キャー

少々乱暴だがこうなる。

シャワー室から顔を出した広暁にも非はあるが、それであれほどの大声を出す2人も2人だ。

「だとしても、顔出すから驚くんだよ。脱衣所の中から声かえけりゃ済む話じゃねえか」

それでもまだつっかかるヴィータ。

過ぎたことを穿り返しても仕方ないのだが、女の性というやつだろうか？

「自分の目で見ないと確信持てないしね。時間より早く来るとも思わなかったし」

「確かにうちは軍事機関やけど…そこまで硬く考えんでもええから。早く着いたり遅刻したりなんてしょっちゅうやし」

「それでいいのか…？」

ますます機動六課に対する考えが揺らぐ広暁。
あれか、やる時やればいいのか？
やる時やれば普段はおちゃらけてもいいのか？

「すまん。私としたことが早急だった」

そんなことを考えていると、ポニーテールの女性が広暁に頭を下げた。

「分かっていただければいいですよ。ですけど、もうちょっと考えてから行動してもらえます？」

「そこは…まあ、あれだ。私の個性というやつだ」

「いや、そういう問題じゃないですから」

このポニーテールの女性はシグナム。
フェイトが隊長を務めるライトニング分隊の副隊長である。

はやてから敬語でなくていいとまた言われたのだが、シグナムと話していると何故か自然と敬語になるようだ。

そして、さっきから気絶した2人の身体を弄くり回している金髪の女性。
名前をシャマルといい、ロングアーチに所属する医務官である。

「よし、ここね」

弄くり回すのは終わったらしい。何をするのかと見ていると…

「てい！」

「「ぐふっ！？」」

2人の鳩尾に中高一本拳が突き刺さる。
気絶から復活させるためにやったようだが、かなり痛そうだ。
2人とも腹を押さえている。

「シャマル…そこまでやらなくてもええんやないか？」

「これが一番手っ取り早いのよ♪」

女性は恐い。

「ほんなら2人とも…広暁に何か言うことがあるんやないか？」

「…やっぱり……そうなる？」

「なのは…」

「うん」

「「せーの…」」

「「ごめんなさい！！」」

広暁の部屋にて、なのはとフェイトが大声で謝る。
腰は９０度以上曲がっており、下手したら１３５度を超えているのではないだろうか？
よく曲がるものだ。

「分かってもらえたならいいよ。それより、聞きたいことがあるんだけど」

「「何？」」

「何で気絶したの？」

「「それは……」」

「？どうした？」

途端に黙り込む２人。広暁も何事かと思い、問い質す。

「その…何というか…」

「裸を見たと思って…」

広暁はこれを聞いて少し呆れた。
自分は顔しか出してないし、そもそも脱衣所にはちゃんとドアがある。

仮に裸で出たとしても、大声を出すのは分かる。
しかし、気絶するのはいき過ぎだ。

「仮に裸を見たと勘違いしても気絶するか、普通？」

「そら多分しゃーないことなんや」

「どういうこと、はやて？」

広暁の疑問にはやてが答える。

「うちは元々女のが多いからな。
ロングアーチを含めれば男もそれなりにいるけど…スターズもライトニングもほとんどが女や。
男は１人しかおらへんで」

「マジ！？」

「マジやで。しかもその男も、１０歳の子供やからな。広暁みたいな年頃の男の裸なんて見たことなかったんやろ」

顔を出しただけだとさっき言ったのだが。

「一体機動六課はどうなってるんだ…？」

「そこら辺は、朝食の後でまた説明するわ。ほな皆、朝ご飯食べに行くで～」

はやての掛け声で動き出すヴォルケンリッター・なのは・フェイト・

広暁。

「何か…朝から疲れたな…」

「キュイキュイ」

ぼやく広暁。そして、広暁を慰めるかのように肩に止まるホルス。

「ホルス…ありがと。そうだな、気を取り直して朝飯を食べに行くか！」

「キュイ！」

元気よく返事をするホルス。

理由は分からないが、ホルスも腹が減るんだな～と思った広暁。

その足取りは軽くったようだ。

「それで2人とも。どやった？」

「何が？」

「どうしたの、はやて？」

食堂へと向かう道中。
一番前を歩いている女性3人のうち、はやてが唐突に切り出した。
その顔はまるで訪問販売のセールスマンのような笑顔だ。

「2人とも見たんやろ？広暁の裸」

「は、はやてちゃん！？」

「だから見てないって言ったでしょ！？そもそも顔しか出してなかったよ！！」

とてつもない剣幕で怒る2人。
2人としては早く忘れたいのだが、このようにからかう親友がいるため難しそうだ。

「ええな～。私もついてけばよかったわ。そしたら…」

「はやてちゃん、まさか……」

「なのは。それ以上は言っちゃ駄目」

もしはやてが付いて来ていたとしたら。
あの後はやてが起こす行動を考え、呆れる2人であった。

ブルッ。

「また寒気？」

「どうかしたか？」

「いや、何でも…って男の声？」

「私だ」

「犬が喋った！？」

「犬ではない、狼だ」

狼、もといザフィーラが話せることに驚く広暁。
どうやら広暁は、これからも驚くことが多々あるかもしれない。

第7話「機動六課での朝　変」（後書き）

ちょっとシャマルをキャラ崩壊させました。
医務官→西川先生→大人の女性→色々とアレな発言
みたいな図式が何故か頭に浮かんだためです。

なお、この話以降のシャマルのキャラはずっとこんな感じです。
原作通りでもいいんですけど…せっさくの二次創作、キャラ崩壊ぐらいやってみたい！
そんな思いの元書きました。もう少し崩壊させてもよかったですかね？

ご意見・感想・訂正等、お待ちしております。

第8話「機動六課での朝　流」（前書き）

「流」と書いて「ながれ」と読みます。

今回の話は私の趣味が多分に交じっています。
不快感を感じられるようでしたら、ブラウザの戻るボタンを押すことを推奨します。

勝手なお願いで申し訳ありませんが、何卒…。

第8話「機動六課での朝　流」

～機動六課、食堂～

「…というわけで、今日から民間協力者として働くことになった墨谷広暁さんです」

「墨谷広暁です。よろしくお願いします」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

食べる朝食のメニューを選び、窓際に陣取ったフォワード陣。
朝食の前に挨拶をすませるということらしい。

といっても、スターズ分隊の４人は昨日の戦闘。
他のヴォルケンリッター、そして部隊長であるはやてには今朝のゴタゴタで会っている。

つまり、実際に合っていないのはエリオとキャロの２人だけである。

「それじゃ…エリオとキャロ、自己紹介よろしくね？」

「「はい！！」」

フェイトがエリオとキャロに自己紹介を促す。
その様は、子供をママ友達に紹介する母親のようだ。

「エリオ・モンディアル三等陸士です。よろしくお願いします！」

「同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

元気一杯な声で挨拶する2人。見ていて微笑ましい光景だ。

「この竜は？」

「私の使役竜でフリードって言います。あの、そちらの竜は…？」

「こいつは…俺の相棒でホルスって言うんだ」

「広暁さんも召喚士なんですか？」

「う～ん…」

どうやって言ったらいいものか？広暁が悩んでいると…

「フリード、どうしたの！？」

キャロの声に広暁が視線を上げると、ホルスとフリードがお互いに睨みあっている。

戦う雰囲気は感じられないが、お互いを品定めするような雰囲気が漂っている。

「同じ竜同士、何か譲れないものでもあるのかな？」

「なのは、そんな冷静に分析しなくても…」

睨みあうフリードとホルス。

１０秒…２０秒…。
３０秒を超えたところで。

「キュクル！」

「キュイ！」

鳴き声と共にお互いのパートナーの所へと戻った。
今の３０秒の間で一体何があったのだろうか？
それは竜のみぞ知るところである。

「……さて、朝ごはんを食べよか！」

目の前で起きた事をまるで無視するかのように言うはやて。見事なスルースキルだ。

～食事中～

「フォワードで唯一の男ってエリオのことだったのか」

「そうなんです！男の人が増えて、本当に嬉しいです！」

エリオが嬉しそうに言うのには訳がる。
フォワード陣は全て女性であり、しかもキャロを除いたら全て年上

の女性なのだ。
男が増えて喜ぶのも無理はない。

そんなエリオを不思議そう…というか、あり得ないものを見るような眼で見る広暁。
エリオの目の前には、トーストが乗った皿がある。
いや、あるだけならばまだいい。
その横には、同じような皿が5枚以上積まれている。
トーストを5皿。1皿2枚だから10枚は食べた計算になる。

「…エリオは大食いなのか?」

「…はい!?えぇと…そう、朝の訓練でお腹が凄く減るんですよ!僕のポジションはガードウィングなので、よく動き回りますから!」

いや、それでもさすがにその量は無いだろうと言いそうになったが、隣で食べているスバルを見て言葉を失った。

その数何と10皿。エリオの倍はある。

「えーっと…スバルも大食いなのか?」

「!?あたしはその…そう!フロントアタッカーっていって、私のポジションは全線で激しく打ち合うので、体力の消費が激しいんですよ!」

スバルもエリオと同様、どこか不自然さを感じる受け答えだ。

といっても、魔法の事をほとんど知らない広暁にポジションの事は分からない。

もしかしたら、それだけ訓練が厳しいのだろうか？
それとも、魔法を発動すること自体が体力を消費するのだろうか？
だからただ運動するだけよりも体力を消費するのだろうか？

広暁が思考の渦の深みにはまっていると…

「広暁？広暁！？さっきからどないしたんや！？」

「！？どうした！？」

はやてが話しかけて来たことに全く気付いていなかったようで、驚いたように返事をする広暁。

「いや、何か急に手が止まってぼーっとしてたからな。どないしたんやと思って」

「あ～、ごめん。ちょっと考え事をね。訓練についていけるのかな～って」

「そういえばはやてちゃん。広暁さんはスターズとライトニング、どっちに入るの？」

「私もそれ気になってた。どっちなの、はやて？」

話は逸らせたが、どうやら別の話に移行してしまったようだ。

「私もそれは考えてたんやけど…まだ決めてないんや。
この後色々と検査してから考えようと思ってたから」

「にゃはは～…はやてちゃんらしいというか……」

「でも、仕方ないよね。分からないことには決めようがないし」

はやての言うことに案の定というか、渋々納得するなのはとフェイト。

2人としては早く決めておきたかった多様だが、仕方ないものは仕方ない。

「それで、広暁。訓練についていけるかってことやけど、あんたなら問題ないと思うで」

「どうして？」

「体つきを見れば分かるわ。何かスポーツか武術をやってたんやろ？まあ、こうやって改めて見るとスポーツの方が濃厚やけど」

「確かにそうだけど…」

体つきを見ただけでスポーツをやっていたと見抜くはやてに驚く広暁。

武術家というのは雰囲気や体の傷等で何となく分かることが多い。

しかし、スポーツ選手というのは服の上から見ただけでは分かる人は少ない。

それを看過したはやてに驚いているようだ。

「部隊長をなめたらあかんで～？」

心も読めるのか？

「それで、何をやってたんや？」

「ソフトテニスを9年ぐらい」

「「「「ソフトテニス？」」」」

フォワードの新人4人が声を揃えて言った。

「ソフトテニスを知らないの？」

「テニスなら知ってますけど…」

「ソフトテニスは聞いたことがないです」

スバルの意見にティアナが被せるように言った。
話を聞く限りでは、ミッドチルダにソフトテニスというスポーツは無いようで、その事実に少し落ち込む広暁。
もしかしたら、ミッドチルダでもやるつもりだったのだろうか？

「ソフトテニスってのは、日本で始まったスポーツでね。
ルールはほとんどテニスと同じだけど、ボールがゴムボールなんだよ。
それと、ソフトテニスだとダブルスが主流でシングルスはほとんど無い」

「大会で優勝したこととかあるんですか？」

スバルが多少興味を持ったようで、広暁に聞いてきた。勝負事となると気になるようだ。

「全国大会でベスト8までいったな」

「ベスト8!?」

「高校の時だけどね」

「ベスト8って凄いんですか!?」

「高校生のソフトテニス人口は9万人。
ダブルスだから大体4万5千ペア。
つまり4万5千ペアの内、上位8ペアってことになるな」

「ふぇ～…」

広暁の戦績に驚いているようで、スバルはトーストを持つ手が止まっている。

「やっぱり私の睨んだ通りやな。トレーニングとかもちゃんとしてるんやろ?」

「ジョギングとか、筋トレとか、基本的なものはやってるけど…そんなトレーニングで大丈夫か?」

「大丈夫や、問題あらへん。なんやかんや言っても基礎体力は大事やからな。
体力ないと魔法もそう打てへんし」

「ふ～ん…」

やっぱり基礎は大事である。

「ごちそうさん！さてと、広暁。私は先に部隊長室に戻って色々と準備するから、食事が終わったらシャマルと一緒に医務室に行ってくれへんか？そこで検査するから」

「了か～い」

「は～い」

何故か2人揃って間延びした返事をする広暁とシャマル。
もしかしたら馬が合うのかもしれない。

「隅から隅までた～っぷりと調べてあげるわ♪」

「…お手柔らかにお願いします…」

……訂正。馬が合うことはないかもしれない。

「シャマルっていつもこんななのか…？」

「…済まんな」

「こういう奴なんだ…」

諦めたような声で返事をするシグナムとヴィータ。
彼女達も色々と振り回されているのだろう。

そんなシャマルのする検査について、つい考えてしまう。

一体どんな検査をするのだろうか？
いきなり脱がされて全身に変なチューブを刺されるとか。
耐久力を測るとか言って、両腕を固定されて筋肉質の人に腹を何発も殴られるとか。

広暁がシャマルの検診について色々と妄想していると、

「そういえば、ソフトテニスでしたっけ？それってゴムボールを使うんですよね？」

「そうだけど？」

ティアナが思い出したように質問をした。

「ゴムボールでやるんですか。テニスより簡単そうですね」

「確かにそうだけど、ソフトテニスの方が競技としては難しいと思う」

「どういうことですか？」

ティアナの問いに答える広暁。そこは譲れないものがあるらしい。

「ゴムボールだからこそ、だよ。
テニスで使うボールと違って回転をかけやすいから、色んな変化球を打てる。
テニスでもドライブ、スライス、バックスピンが有名だけど、弾んだ時の変化がテニスの比じゃ無い」

「どれぐらいですか？」

「球種にもよるけど…バックスピンだと全く跳ねずに止まることもある」

「そんなのありですか!?」

驚いたように言うティアナ。全く跳ねない球をどうやって打ち返せというのだろうか?

「インドア…室内だとそれもやりやすいんだけど、普通の芝のコートでやると難しい。
それでもそんな球を打てる人間がいるからね」

「結構凄いスポーツなんですね…」

エリオが感慨深げに言った。
スポーツをやった経験は少ないようだが、凄いということは分かるようだ。

「それと…ソフトテニスが唯一他のスポーツと一線を画すところがある」

「まだあるんですか!?」

また驚くティアナ。

「スポーツをやる時に必要なものとして、『心・技・体』がよく挙げられるのは知ってるか?」

「それなら私も知ってるぞ。スポーツだけでなく、武術の道を歩む

ものなら誰もが心得ているものだ」

自らも剣士として、騎士として生きているシグナムが賛同する。

「心は精神の状態。技は技術。体は身体、及び体力。
だけど、ソフトテニスだとそれらにもう一つ加わる」

「もう一つ？一体何だ？」

「智。智恵の智だ」

「智恵だと！？」

広暁が言ったことにシグナムが驚いているようだ。

「そう。ソフトテニスだと心・技・体・智の４つになる」

「確かに智恵は大切だが…加えるようなものなのか？」

「ソフトテニスっていうのはな。
パワーやスピードももちろん大事なんだけど、一番必要なのはテクニック…もとい智恵なんだ。
ゴムボールだから回転や風の影響を受けやすい。
どんな回転をかけて打つか？
相手が打つボールはどれぐらい回転がかかってて、自分がそれに反応できるか？
風の影響を考慮に入れてボールを打ち、相手が打ったボールの軌跡を予測出来るか？
挙げればきりがないぐらい。
そういうのが理由か分からないけど、年配の人ほど強いのもソフト

テニスプレイヤーの特徴だと思う」

「加える形になるけど、それらに必要なのは洞察力。
相手の些細な癖や目線の動き。身体の移動や試合の流れ。
それらを掴む者こそが、真のソフトテニスプレイヤーと言えると俺は考えてる」

「なるほど…一理あるな」

「広暁さんてお喋りというか…好きなことになると話が止まらないタイプですか？」

「それがどうかした？」

「最初の印象だと口数の少ない人というか…必要なこと以外話さない人っていうイメージがあったので」

「…よく言われるんだよ、それ」

ティアナが言ったことに、広暁はうんざりと言った口調で話す。
人に言われることが多いらしく、それを訂正するのも面倒臭いといった感じで。

「元がこんな性格だから大人しくしといた方が良いっていうのは分かってるんだけどね…。
好きなことの話になると止まらなくなるのだけは中々直せないんだよ…」

「あ、それあたしも分かります！あたしもこの性格直せなくて、いっつもティアに怒られるんですよ！」

「あんたは直す気が無いだけでしょ…もうちょっと周りに気を使えればいいんだけど…はぁ……」

ティアナもティアナでスバルに苦労しているようである。
そんなことを話していると、

「ごちそうさま。広暁さん、医務室に行くわよ?」

「了解っと。ホルス、行くぞ」

「キュイ」

シャマルが食事を終えたようだ。広暁も食器の乗ったトレーを持ち、席を立つ。
ちなみに、今朝のホルスのご飯は厚切りハムのステーキ。
肉が好みのようだ。

「どんな結果が出るか楽しみね~」

「俺はちょっと怖いですけどね。自分に魔法が使えると思うと」

「ミッドチルダでは一般的よ?」

「俺のいた世界では一般的じゃないんだよ…」

「ここはミッドチルダだけど?」

「まだ慣れてないってことで」

軽口を交わしながら食堂を後にする2人。
何だかんだで機動六課での生活、もとい昨日感じた女性に対する恐怖心は薄れてきているようである。

～食堂、まだ食事中の人達～

「どうだった？広暁さんの印象は」

「真面目なお兄さんって感じです」

「優しい男の人、かな？」

フェイトの問いに対し、答えるエリオとキャロ。
その反応を見て、どこか嬉しそうなフェイト。

（エリオにとっては頼れるお兄さん。キャロにとっては、同じ竜を操る者。
結構いい人かもしれないな、広暁さんは）

やっぱり親バカである。

その後、話は広暁のポジション談義へと移行する。

「話を聞いた限りでは、広暁のポジションはセンターガードが良いかもしれないな」

「そうだね。広く見ることが出来る目を持ってるみたいだし、ホルスちゃんもいるから遠距離砲撃にも困らないしね」

「じゃあライトニングかな？」

「ライトニングにセンターガードはいないけど…キャロとフリードがいますよ？」

「だったらスターズ？」

「センターガードが３人に増えますよ…」

「スターズでフルバックは？」

「それもありだな」

「そもそも、いきなり訓練出来るのか？」

「ガジェットとの初めての戦闘であそこまで出来れば大丈夫だと思うよ？
ヴィータちゃんも見てたじゃない」

「戦う者というよりは競う者といった感じだがな」

「そこは今後の訓練次第だよ」

この後議論は白熱し、午前の訓練ぎりぎりまで食堂で議論を交わしたフォワードメンバー（＋ザフィーラ）。

そもそも広暁に魔力の資質があるかどうかすらまだ分かっていないのだが。

獲らぬ狸の皮算用、知らぬ広暁の今後談義である。

「！？」

「どうしたんですか？はやてちゃん」

「誰かが私の噂をしてたような…」

「へ？」

「すまん。何でもあらへんで、リィン」

「はぁ…」

部隊長室で何かを感じ取った狸（はやて）。

ちなみに、広暁の昔のあだ名もある動物の名前なのだが、それはまた別の話。

第8話「機動六課での朝　流」（後書き）

ソフトテニス談義で話の半分が終わってしまいました…。

ソフトテニスって、何かと馬鹿にされやすいんですよね。

「あんなの、俺にも出来る」とか言う他の部活の奴とか。

そういう奴らとランダー（軽い打ち合い）をして、左右前後に走らせたり色々と回転をかけて空振りさせるのが楽しかった中学生時代。

さすがに今はそんなことはしませんけど、やってて楽しかったと思ってしまう。

……救いようがないですね、私。

意見・感想・訂正等、よろしくお願いします。

第9話「機動六課での朝　観」（前書き）

久しぶりに「リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ」のアニメを見ました。
1、2話を見たんですけど、全体的に声が幼いように感じましたね…。
シグナムとエリオ以外は。

エリオはしっかりしてるし、いい声だし。
シグナムはやり手のキャリアウーマンて感じの声だし。

明日から休日なんでもうちょい見たいと思います。

それでは第9話、始まるよー！

第9話「機動六課での朝　観」

～機動六課医務室（シャマルの城）～

「ほな始めるか」

食堂を出た広暁とシャマルは、検査のため医務室に来ていた。

広暁も病院には行ったことがあるし、診察を受けたこともある。
しかし、こんなに凄そうな機材が置かれているのを見るのは初めてだ。

パソコンの周りのはいくつものディスプレイが浮かんでいる。
また、ベットの上にはアーチ状の光の帯があり、帯の中ではミッド文字が動いている。
ここに寝転がって検査をするのだろうか？

「すっげぇ…」

「驚いた？」

「そりゃあもう。こんな凄い設備、初めて見たよ」

「ほとんどが本局からのお下がりなのよ？」

「これで！？…って、俺が知るわけないわな」

「ふふ。それでも、別の課の医務室に比べたら良い機材であることに間違いはないわ」

「すっげぇ」

「それさっきも言わんかったか？」

「驚いてますから」

トリオの漫才じゃあるまいし、何をやってるのだろうかこの３人は。
医務室で漫才というのも乙なものだが。

「じゃあ、始めましょうか。広暁さん、上着を…」

「失礼しま～す！」

シャマルが広暁に何かを言いかけると、医務室の扉を開けて誰かが入って来たようだ。

「なんやリィン。来れないって言ってなかったか？」

「こんな面白そうな人、私が見逃すわけがないじゃないですか～」

そう言って入って来たのは青いロングの髪を持つ女性…なのだが。
浮いている点は置いておこう。もう見慣れたことだし。
しかし、彼女の身長がその…低い。
というか、体が小さい。

身長は大体３０ｃｍぐらいで、そんな人が制服を着て飛んでいる。
ファンタジーゲームに出てくる妖精のようだ。

「あなたが次元漂流者の墨谷広暁さんですか？」

「あ、はい」

「はやてちゃんのデバイスで、リインフォース？曹長です。よろしくお願いしますね？」

「ええ、こちらこそ」

「それと、私のことはリィンて呼んで下さい」

リィンが握手を求めて右手を差し出してきた。
ミッドチルダに来てから何度目の握手だろうか？
そう思いながら広暁も右手を出したのだが。
体の小ささ故どうやって握手しようかと悩んでしまう。
すると…

ギュッ。

指を握られた。
握手というか何というか。
実に奇妙な光景だろう、傍目から見たら。

「キュイ！」

今まで黙っていたホルスがリィンに鳴きかけてきた。
その後、リィンと同じところまで飛び、ホルスも右手（右前足？）を差し出した。

「あなたがホルスですか～。よろしくです！」

「キュキュイ！」

握手するリィンとホルス。もとい、デバイスと竜。
さっきよりシュールな光景だ。

「はやてちゃん、リンカーコアの検査は終わったんですか？」

「それを今から始めるとこやったんだけど？」

「間に合ってよかったです～」

2人の関係は主人とデバイス、もしくは上司と部下の関係だろう。
しかし、今の広暁の目の前のやりとりを見る限りではそうは見えない。
母娘（おやこ）、いや、どちらかというと姉妹（しまい）の様な関係に見える。
実に微笑ましい。

「そのリンカーコアってのは？」

「魔法を発動するのに必要な器官、魔力の源や。魔力量が多ければそれだけで有利やし、レアスキル（固有技能）を持ってるならレアモンやで？」

「ほ～」

聞いた限りでは生まれ持って決まるもののようだ。
一種の才能とでも言えばいいのだろう。

「役者も揃ったことだし、いいかしら？」

「おっと、すまんなシャマル。始めてかまへんで」

「分かったわ。じゃあ、広暁さん。上着を脱いでくれる？」

「上着を？分かった」

上着を脱ぐことに少し疑問を感じたが、広暁は上着を脱ぎ始めた。医者の触診のようなことをするのだと思ったのだろう。

（何で服脱がせるんや、シャマル？服の上からでもシャマルなら検査できるやろ？）

（せっかく若い男の子が来てるのよ？見なきゃ損じゃない）

（確かにそうやけど…）

（こういうのには慣れてないのよね～、はやてちゃんは。普段はセクハラ発言が多いのに。そんなんじゃ他の女の子とくっついちゃうわよ、彼）

（な、なにを言うとるんや！？）

（思春期の女の子は敏感ってことよ。今は誰もそんな気は無いみたいだけど、いつ彼が他の女の子とくっついてもおかしくはないわよ？彼みたいに中も外も真面目な男の子はそうそういないから）

（それはあかん！！）

（だったら、今の内に彼の裸を見てアドバンテージをとっておいた方がいいんじゃない？）

（それもそうやな…ってあれ？何でシャマルがそのこと知ってるん？）

（そのこと？）

（え～っと、その…私の気持ちをや）

（そんなの、見てれば分かるわよ）

（そんなに分かりやすかったかな？）

（多分気づいてるのは私だけよ？）

（よかった～。ほな、じっくり拝ませてもらおうかな）

（……はわわ～。はやてちゃんにも遂に春が！？）

（……リィン、頭冷やしたいんか？）

（ご、ごめんなさい！）

広暁の知らぬところ（念話）で実に乙女らしいというか、女の子らしいというか。

そんな会話をする女性３人。

そして、さっきから何か考え事をしているようなシャマルを不思議

に思ったのか。

「どうかしたの？」

「大丈夫よ。始めるわね」

広暁は聞いたが問題は無いようだ。
もっとも、知らない方が幸せだろう、今の会話は。

（にしてもええ体しとるな～。
全体的に無駄がない。でも、ムキムキっちゅーわけでもない。
正にアスリートの体系や）

（これが大人の男の人の裸ですか～。エリオ君と違って色気がありますね～）

ゾクッ。

「あら？大丈夫？」

「何か寒気が…」

機動六課に来てから何回目かの寒気。

「もう少しだから、それまで頑張ってちょうだい（もっと裸を見たいけど♪）」

「は～いっと」

「次はベットに横になってもらえる？」

「オッケー」

「どうやった、シャマル？」

「魔力量はＡＡ＋、魔力変換物質は無し。飛行も可能ね」

「お～結構ええやないか」

「そうなの？」

「地球の人間で魔力量ＡＡ＋ってのは中々無いで。ミッドチルダでも上の下ぐらいやな」

「飛行も可能だし、ホルスとの相性もよさそうですね～」

「キュイ～」

結構良いものを持ってたらしく、驚く広暁。

「魔力変換資質って？」

「魔力を意識せずに別の物質に変換させる資質のことや。
シグナムが炎熱、フェイトちゃんとエリオが電気やな」

「俺には無いのか」

チャクラの性質変化みたいだなと思いつつ、それが無かったことに落胆する。
そこまではさすがに欲張りだろう、ミッドチルダの常識的に考えて。

「だけど…」

「？どないしたんや、シャマル？」

「リンカーコアが何か違うような気がするのよね。
何て言うか、広暁さんのはちょっと複雑というか…何かが違うのよ」

「シャマルでも分からへんのか？」

「本局の機材を使えばまだ分からないけど…確証は無いわね」

「う～ん…。しゃ～ない、今は放置やな」

「もう１つあるのよ」

「もう１つ？」

「レアスキルがあるみたいなんだけど…」

「レアスキルやて！？」

「それが分からないの。あることは分かるんだけど…」

「どーいうことや？」

「まだ覚醒していない…使える状態になっていないと言えばいいのかしら？」

「そらまた面倒くさいなぁ」

「使えない状態って珍しいのか？」

「レアスキルってのはな。
持ち合わせていても本人がそれを持ってることに気づいてないことがほとんどなんや。
だから何かさえ分かればすぐに使えるんやけど…」

「使えるようになるためには？」

「分からん。何かきっかけがあって使えるようになる人が多いんやけど…。
何年も経ってから使えるようになるなんてのもざらやしな。ぶっちゃけ運次第や」

「本気（マジ）ですか」

「本気（マジ）やで」

レアスキルを使えるようになるのが運次第。
さすがに広暁も驚きを隠せない。
だが、地球の人間としては恵まれているようだし、そこまで望むのも野暮というものだ。
使えるようになるまで気長に待つことにしよう。
広暁はそう結論付けた。

「ホルスの方はどうだった？」

ちなみに。広暁の検査の後、ホルスも検査をした。
もっとも、ホルスはベットの上でただ立っていただけなのだが。

「魔力量はＡＡＡ＋。能力としては炎の生成・操作・探知といったところかしら」

「ＡＡＡ＋か。今のなのはちゃんより多いなぁ」

「今の？」

「私とフェイトちゃんとなのはちゃん。
それにシグナムとヴィータにはリミッターっていて、魔力量に制限がかかっとるんや。
制限をかければそれだけ沢山の魔導師を雇えるしな」

緊急時には制限は外せるけどな、と補足するはやて。
つまるところ、軍でいうところの戦闘機や戦車の保有台数の様なものか。
リミッターは無いが。

「でも、ホルスはもっとすごいわよ？」

「すごい？どういうことや？」

「調べた結果と、海浜公園でのガジェットとの戦闘データを基に考察した結果だけど。
ホルスは魔力の収束に無駄が無いのよ」

「無駄が無い？」

「魔法っていうのはね。大気中に満ちてる魔力素をリンカーコアによって吸収、エネルギーとして加工、魔法発動により魔力を消費するの。でも、消費した魔力全てが消滅する訳じゃなくて、余りが周囲に霧散したり、魔導師やデバイスに残ることもあるのよ。」

「なるほど」

「ホルスはそれが数十万分の一％ぐらい。それこそ限りなく０に近いの。
なのはちゃんやフェイトちゃんですら２～３％は霧散するのにね」

「確かにそれはすごいけど…何でや？」

「私にも分からないわ。もとからそういう才能を持っているのか。
それとも、長きにわたる戦いの中で身についたものなのか」

「分からんな～…ホルスは一体どういう存在なんや？」

「それに加える形になるかもしれないけど。もう一つ、面白い事が分かったわ」

「「面白い事？」」

「広暁さんとホルスに精神リンクがあることが確認されたわ」

「精神リンク？」

「主と使い魔の精神は精神的に繋がっとるんや。だけど、使い魔は魔導師が作成し使役する魔道生命体。ホルスはそれとは違うやろ？」

「そもそも、こいつがどういう存在かすらまだ分からないんだけどな」

「キュイ？」

指を指されて首をかしげるホルス。
相変わらず可愛い。

「私の調べた感じでは、フリードと同じ感じだったわよ？」

「アルザス出身てことか？」

「ううん。体の構造とか、リンカーコアとか。でも、ホルスの方が幾分か優れてるみたい」

「優れてる？」

「聞いた話だと、ホルスは自分の意思で小さくなれるそうじゃない」

「確かに。なぁ、ホルス。大きくもなれるのか？」

「キュイ！」

「…なれるみたいです」

勿論と言わんばかりに大きな鳴き声で鳴くホルス。
どこか誇らしげに胸を張っている様にも見えるが、ここでは置いておくことにしよう。

「自分の意思で大きさを変えれるのは稀少よ？召喚獣は普通大きさは変わらない。
フリードだって、キャロの竜魂召喚の魔法を受けないと本来の姿にはなれないから」

「ほ～。お前すごいんだな」

「キュイ！！」

さっきより大きな鳴き声で鳴くホルス。
少しは自重してほしいものだ。

「あれ？精神リンクがあるとどうなるんだ？」

「主人の方の感情や記憶が使い魔に流れるんや。まあ、使い魔が主の感情を察知するためのもんやな」

「ってことは、俺の感情はホルスにダダ漏れってことか？」

「そういうことやな。まあ、感情が荒れん限りは普段の生活に支障はないと思うで、広暁もホルスも。それに、リンクを切ることも可能やしな」

「ふ～ん…」

「キュイ?」

自分の感情がホルスにダダ漏れ。
さすがにそれは恥ずかしいと思ったのだが、まあ、ホルスだけなら問題ないか。
そう結論付けた広暁。
…ホルスは今の感情にも反応したのだろうか?

「にしても、ホルスは凄いな。お前、一体何なんだ?」

「キュキュイ?」

また首をかしげる。
自分にも分からないと言っているのだろうか?

「まあ、分からんもんはしゃーない。今は先にやることをやろうや」

「それもそうだな」

「それじゃあ、次はデバイスとバリアジャケットやな」

「デバイスって武器のこと?」

「せや。まあ、それはデバイスルームに行きながら説明するさかい。行くで〜」

「は〜い」

「じゃ〜ね〜」

何とも間延びした会話をする3人（広暁以外）。
そして深く息を吐く広暁。
広暁もたまにそんな話し方をするのだが、他人が話すのを聞くと気が抜けるようだ。
人の振り見て我が振り直せとは正にこういった状況を言うのだろう。

そして、舞台はデバイスルームへと移行する。
広暁のデバイスはどのようなデザインになるのだろうか？
そもそも、まともなデザインになるのだろうか（主に狸の影響で）？
3人と1匹は医務室を出た。

第9話「機動六課での朝　観」（後書き）

添削してて思ったんですけど、今回はやけに倒置法が多かったです。
そのときの気分次第で作風が変わるんですかね、申し訳ありません。

こんな私ですが、生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

意見・感想・訂正等、お待ちしております。

第１０話「機動六課での朝　悟」（前書き）

第１０話です。

ここまで読んで下さった方なら分かっていると思いますが、私の小説は話の進みが遅いです。

もっと早くしてもいいんですけど…実際にあったとしたらこのぐらいは時間がかかると思います。

自分勝手で申し訳ありませんが、何卒…。

第１０話「機動六課での朝　悟」

～デバイスルーム～

「…てなわけでや。彼に合ったディバイスを作ってもらえんか？」

「まーっかせて下さい！」

彼女の名前はシャリオ・フィリーノ。通称シャーリー。
機動六課の通信主任であり、（自称）メカニックデザイナーである。

「何か言いました？」

気のせいです。

「どうしたんやシャーリー？」

「（今悪口を言われたような…）あ、ごめんなさい。
それで、彼に合ったデバイスを作ればいいんですよね？」

「せや。これからは現場でバリバリ働いてもらうんやからな。一番いいのを頼む」

「了解です！どういったのにします？」

広暁がここに来る途中はやてから聞いた限りでは、デバイスというのは５つに分かれている。

＝＝＝

＝＝＝

だろ？」

「ポジションや戦闘スタイルによって分かれるのが普通ですね。八神部隊長、広暁さんのポジションはどこですか？」

「私はスターズでフルバックになってもらおうと考えてたんやけど…広暁はどっか希望ある？」

「いや、ポジションとか自分が使える魔法とか全然知らんし」

「ポジションはな、大きく分けて４つや。前線を崩すフロントアタッカー、指揮と砲撃のセンターガード、遊撃のガードウイング、後方支援のフルバック。広暁にはホルスがいるから、フロントアタッカーとガードウイングは向いてない。センターガードも考えたんやけど、そうなると必然的にライトニングになる。スターズにはセンターガードが２人いるからな。でも、ライトニングにはキャロとフリードがいるから、バリエーションを増やすためにもスターズでフルバックが一番良いと思ったんや」

食堂でのメンバーの会話を簡潔にまとめたはやて。

はやてはその場にいなかったのだが、やはり考えることは同じということだろう。

「キャロは召喚師やから、手袋型のブーストデバイスを使っとる。だから広暁もブーストデバイスが良いと思うんやけど…向き不向きがあるからな、一概には言えん」

「なるほど…となると、インテリジェンスデバイスか、ブーストデバイスが妥当か」

「アームドデバイスはどうですか？」

「武器を使ったことが無いんで」

「鉄パイプとかビール瓶とか、色々あるやろ？」

「どこの不良の喧嘩ですか…。まぁ、大学の空手部とか合気道部とか拳法部の友達に付き合わされて、トンファーとか釵（さい）とか六尺棒とかヌンチャクとか木刀とか流星錘（りゅうせいすい）とか多節棍は使ったことあるけど」

「そっちの方がよっぽど恐ろしいわ…」

「いやいや。部活の練習とか趣味の範囲ですから。実際に喧嘩で使ったことは無いし、そもそも持ち歩いたら軽犯罪法に引っかかるから。っていうか、木刀しか持ってないし」

「木刀は持ってるんですね」

「修学旅行で京都に行った時に買って…って話逸れてない？」

「広暁が突っ込みどころ満載なことを言うからやろ。しかし、そうなるとほんまにどないするん？」

「そうだな…」

しばし考え込む。

一般的なのは杖の形をしたストレージデバイスだ。

しかし、自分のポジションを考慮に入れると、武器の形をしたデバイスではなく身につけるタイプのデバイスの方が安全だろう。

デバイスが壊れると魔法も発動出来ないのだから。
だが、ブーストデバイスは補助特化。
味方の補助はもちろん必要だし、攻撃はホルスがいるから問題ない。
しかし、ホルスがやられたときや1人の時のことを考えると、ブーストデバイスでは汎用性に欠ける。
そして、フルバックというポジションのことも考えると…

「……でお願いします」

「その心は？」

「……です」

「お美事にござりまする」

「2人共何を言ってるんですか？」

「「…気にしないで…」」

平行世界といえどネタは通じるようだ。
しかし、そのネタが分からないシャーリーに素で反応されて落ち込む2人。
言うはやてもはやてだが、乗る広暁も広暁だ。
真面目な性格と言っても、ある程度のユーモアは有るのだろう。

……というか、何故はやてはあの剣術漫画のネタを知っているのだろうか？
若い女性が読むような漫画ではないのだが。

「……といったところですかね？」

「そんなところです」

「分かりました。デザインはどうします？」

「デザイン？そこまで考えてなかったな」

「そんなに難しく考えなくてもいいですよ、皆さん自分の好きなデザインですから。
もちろん、実用性も兼ねてますけど」

「好きなデザインを兼ねた実用性重視じゃないの？」

「そうとも言います」

つまり、デザインと実用性を両立させるだけの技術をシャーリーは持っているということだろう。

「そうだなぁ…」

「…みたいな感じでお願いします」

「分かりました。完成まではそれなりに時間がかかるので、このストレージデバイスを使ってください」

「了解」

「機動すればバリアジャケットが展開されますから。
バリアジャケットは一般局員が使用する物と同じになってます」

広暁に支給された杖型になるストレージデバイス。
これが広暁オリジナルのデバイスが出来るまでの代用品ということになる。

「にしても、よくあんなスラスラとデザインや機能を言えたなぁ」

「元があるからな。俺はそこに色々と加えただけだし」

「それでもや。カードリッジシステムや状況に応じた複数の形態変化の考案。あんた本当に大学生か？」

「大学生です。デバイスの形態変化は昨日チラッとなのはから聞いたし、形態変化の種類はポジションの事を考えた結果だ。プラス、本からのの知識だな」

「恐ろしいやっちゃな～。研究者に向いてるとか言われへん？」

「研究者は無いな。何でそこまで観(み)えるとか、考えすぎにも程があるとかならよく言われるけど」

「ますます恐ろしいやっちゃな。まあ、今はデバイスの製作が決まったことを喜ぶとするか」

「だな。ん？」

「どうしたんや？」

「いや、作ってもらえるのはいいんだけど…お金とかはどうなるの？」

「それなら問題あらへんで。民間協力者ってことになっとるから、経費は機動六課持(うち)ちや」

「いいの？」

「それ相応の経費が降りてきとるからな。ちゃんと給料も出るで」

「何か申し訳ないな」

「何や？不満なら、給料から引いとくか？」

「申し訳ありませんでした」

「素直でよろしい」

夫婦漫才ですか。

「っちゅーわけでや。デバイスの製作も問題無さそうやし、やることは終わったな」

「そうだな」

「じゃあこの後は…どないしよ？」

「…決めてなかったの？」

「冗談やて。ミッド文字を教えるから、誰か手の空いてる子を呼んどくわ」

「語学か…」

「苦手なん？」

「英語とかなら問題無いんだけど…知らない言語を一から学ぶってのがね」

「話せるんやし問題無いやろ。後は覚えて書けるようになるだけや」

「それもそうだな」

「そういうことや。ほなシャーリー、よろしくな」

「お任せ下さい！」

そう言ったシャーリーに会釈をし、２人と１匹はデバイスルームを出た。

「あ、はやてちゃ～ん！私を置いて行かないで下さ～い！！」

ずっと空気だったリィン。
出る時まで忘れられていたようだ。

～ｂａｃｋ　ｔｏ　ｔｈｅ　部隊長室～

「そういえばまだ聞いてなかった」

「何を？」

「今朝言ったこと。機動六課のことだよ」

「あ～…そう言えば」

「気になってたんだよ。時空管理局のことはよく知らないから何とも言えないんだけど…機動六課は知り合い同士が多いというか関係者が多いというか。身内の集まり見たいな感じがする」

「…せやな。そこら辺はちゃんと説明しとかなあかんな」

その後、広暁は機動六課設立の経緯を聞いた。

過去に空港で大規模火災があり、その行動の遅さに嘆いたはやて。
それを解決するために、４年の歳月をかけて自分の部隊を作ったこと。
設立理由はロストギアの捜査と保守管理を主な任務とする少数精鋭部隊の設立。
ロストロギアは危険な代物で、しかしそれを担当する課が十分ではなかったこと。
自分にはあまりコネやキャリアが無いため、どうしても課の人間は身内が多くなることなど。

それらを聞いた広暁は、驚きながらもその意思に感服していた。
はやては、広暁が部活や遊びに明け暮れている時も、目指すもののために戦っていたのだ。
それも生死をかけるような。

はやてははやて、自分は自分。
例えそう割り切ったとしても、心の中で比べてしまう。

「……俺なんかとは違うんだな」

「何のことや？」

「機動六課（ここ）の人はさ、多かれ少なかれ自分の将来のことを考え、それに向かって突き進んでる。自分の意思でね。だけど……」

「……」

「俺にはそういうのがない。はやてが夢に向かって突き進んでる時も、俺は部活に明け暮れたりカードで遊んだりしてたんだ。勉強もそれなりにしたし、大学もある程度はいいところに行ってる。だけど、将来便利そうとか知識が増えるのが楽しいとか。そんな理由なんだよ。なりたいものになりたくてやってきたわけじゃないんだ。そう思うと…ね」

「……」

「ごめん、つまらんことを話したな」

「気にせんでええ…。それに、広暁が思った通りっちゅーわけでもないやろ？」

「どういうことだ？」

「広暁が機動六課に入ることを決めたってことはや。
少なくとも、自分の生きる道を考えたってことやろ？
機動六課に入っても、将来の肥やしになるとか楽しそうなことはないからな」

「……」

「それに。
自分が一生懸命何かに打ち込んできた時間は決して無駄にはならん。
それが趣味やスポーツでもな。
私はただそれが機動六課の設立だったっちゅーだけや」

「……」

「どうしたんや？」

さっきから黙ったままの広暁を疑問に思ったのか、はやてが聞く。

「…いや。やっぱ部隊長だなーと」

「なんやすごい馬鹿にされてる様な気がするんだけど？」

「ごめん。でも、おかげで少し楽になった」

「そらよかった。部下の悩みを聞くのも部隊長の仕事だからな」

「ありがと。また愚痴をたれることがあるかもしれないけど、いいかな？」

「構へん構へん。どーんと来い！」

「助かるよ。それじゃ、今日は失礼するね」

「オフィスにルキノを呼んであるから、彼女に教えてもらってな～」

「了解」

今の会話で心に引っかかっていたものがとれたのか、広暁の足取りは軽くなった。

心なしか、その背中も大きく見える。

「若者よ、大いに悩め。そして私を頼れ」

良い事を言っているようだが、どこか違うような気がする。

そもそも、はやてより広暁の方が年上なのだが。

「しっかりしてる人やと思ってたけど、結構可愛いところもあんねんな～。
悩んでる時の顔なんて良かったわ～」

はやての毒牙が広暁に迫る。
広暁は逃げ切ることが出来るのか？
それとも、逆に毒牙を持つ獣を捕えるのか？
この先を語るには、今はまだ早過ぎる。

第１０話「機動六課での朝　悟」（後書き）

今更ですが、私の小説の主人公はリアルにいそうな人間をモデルとしています。
何故こういった主人公にするかというと…単純にそういった小説が少なかったからです。
現実にいそうな人間がモデルの小説があってもいいんじゃないかなぁ、と考えて書いています。

なお、これで機動六課での朝編は終了です。
次からは別の流れになりますので、よろしくお願いします。

ちなみに。広暁のデバイスの詳細が分かるのはもうちょっと先になります。

意見・感想・訂正ｅｔｃ、よろしくお願いします。

第１１話「初訓練」（前書き）

明けましておめでとうございます！
第１１話です。
大切なお知らせがありますので、後書きを必ず見てください。
よろしくお願いします。

必ずですよ！？

第11話「初訓練」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

ズルズル～。

ハムハム。

ゴクゴク……。

パン！！

「ごちそうさま」

いや～、まさかミッドチルダできつねうどんを食えるなんて思ってもなかったな。

今朝は促されるままモーニングセットを選んだから、他のメニューを選ぶ余地なんてなかったし。

食堂のおばちゃんの話では、地球の料理はミッドチルダに来た地球人が広めたらしい。

それこそ、次元漂流者や自分の意思で引っ越した人まで。

その人達の努力の甲斐あって俺はこうしてうどんを食えるわけだ、ありがたい。

っと、そんなことより。

さっきのはやてからの連絡では、

「空いてる子に頼んで基本的な訓練をするから、昼ご飯食べたら空間シミュレーターに行ってな～」

とのことだったので、昼飯を食ったら俺は空間シミュレーターというところに行かなければならない。

午前は魔法の勉強、午後は実技。
これから1週間、このスケジュールで俺の育成をするそうだ。

空間シミュレーターというのは機動六課の訓練スペースで、任意の空間を作れる海上訓練施設。
主にガジェットとの戦闘訓練を行う場所で、早い話しが凄いバーチャル空間を生み出す施設だ。
建物の上にも立てるらしいし。

そこで俺はマンツーマンの訓練を受けるらしい。
なんか贅沢な気もするが、時間が空いてるから大丈夫とのこと。

そういや、誰に訓練受けるんだろ？
俺はスターズ所属だから、なのはかヴィータかな？
でも2人は忙しい身の上らしいし…。

となると、ティアナかスバルか？
基本的な訓練ならあの2人が出る幕でもないからな。

年下に教わるというのも不思議な気分だが、俺は初心者、向こうは玄人。
至極当然のことだ、問題ない。

「キュイ！」

ホルスも食い終わったみたいだな。
ちなみに、ホルスの昼飯はハンバーグ。

肉ばっか食ってて大丈夫かと聞いたら、

「キュキュイ！！」

と言われた。
問題ないと言っているのだろう。
もう何言ってるか分かるようになってきた、慣れって怖いね。

そういや、ライオンとか肉食動物も肉だけ食っててても問題ないらしいな。

…ってあれ？ライオンって、動物の血からビタミンを取るから問題ないんだよな？
生で食うわけだし。
ハンバーグって思いっきり熱通ってるけど（焼き加減は多分ウェルダン）。

……まぁ、本人（竜）が大丈夫って言ってるなら大丈夫だろ。
体壊したらシャマルに診てもらえば多分大丈夫だし。

さてと。食器を片づけて空間シミュレーターに行きますか！

―――――――

ってた」

広暁が空間シミュレーターに着くと、いたのは腰まである金髪を黒いリボンで一括りにした女性。
ライトニング分隊の隊長であるフェイトだった。

「それはまたフォーメーションとかの訓練をするようになってからだよ。
魔法の基礎訓練なら誰が教えても大差ないからね。
だからこの時間空いてる私が担当することになったの」

「ってことは、明日以降の訓練も人が変わる可能性があると？」

「そういうことになるね。でも、引き継ぎはちゃんとやるから問題ないよ」

「分かった」

とりあえずは訓練の予定について広暁も納得したようだ。

「それじゃ訓練を始めるね。
今日やることは魔力弾の生成。
魔法の基本的なことは今日習ったんだよね？」

「リンカーコアで大気中の魔力素を吸収、エネルギーとして魔力に加工、んで魔法発動だっけ？」

「そう。今日やるのはその中でも基礎中の基礎、魔力弾の生成。
これは加工した魔力をそのまま出す訓練だよ」

「了解…今から訓練を始めるんだよな？」

「そうだよ？」

「ちょっと走ってきていい？軽く準備運動もしたいし」

「それぐらいなら構わないよ……クスッ」

「？何か変なこと言ったか？」

「ごめんなさい。訓練始める前には軽いジョギングと体操。フォワードが行ってる訓練と同じだったから」

「まあ、スポーツやってる人なら大抵そうするとは思うけど…」

「今からやるのは戦闘訓練だからね？気を引き締めてよ？」

「ＯＫ。んじゃ、ちょっと走ってきま～す」

「キュ～イ」

そう言って広暁は空間シミュレーターの外へと走り出した。
機動六課は海辺に立っているので、海沿いを走るようだ。
ホルスも飛んで行ったが、やはり広暁と一緒が良いということだろう。

～15分後～

「ただいま～」

「結構長かったね？」

「ゆっくり走ってきたからな。多分3kmぐらいしか走ってないぞ？」

もっとも、これが普段の広暁のジョギングのペースなのだが。
ランニングとなるともう少しペースを上げるのが普通だ。

「んじゃ、ちょっと体操するんで」

「分かった。しっかりね？」

「了解」

そう言って広暁は体操を始めた。
屈伸、伸脚、アキレス腱伸ばし。
肩回しや柔軟など。

一通り終わると広暁は深い深呼吸の後、フェイトに話しかけた。

「終わりました」

「じゃあ、始めましょう。まずは私のを見て」

そう言ってフェイトが右手を前に突き出した。
すると、そこに金色の光が集まりだしたのだ。

「これが魔力弾。人によって色は違うけど、主に攻撃に使うの。
自分の意思でコントロールすることも出来るよ」

フェイトが右手を上空にかざすと、弾は空に向かって上昇した。
そして、その弾が空を縦横無尽に駆け巡ったのだ。

空軍基地で戦闘機が行うショーに似ているが、こちらは人が操っている。
迫力では劣るが、鮮烈さや美しさという点ではこちらの方が上だろう。

「魔力弾って、デバイスの補助が無くても作れるの？」

「そうだよ。あと、バリアとか肉体強化とか、プログラムが必要ないものとか、ある程度簡単なものはデバイスが無くても発動出来る。
それ以外の魔法は、デバイスにプログラムしておくのが基本かな」

デバイス無しでも魔法は発動出来るらしい。
しかしそういった人達は、自分達とは頭の構造が違いすぎるとのこと。

広暁には到底無理だろう。

「それで、俺は何をすれば？」

「真似して」

「…はい？」

「真似して」

「いや、それは聞きとれたんだけど…。
魔法を発動したことが無い俺にいきなり魔力弾を生成しろと？」

「大丈夫。最初はデバイスを起動させて、デバイスの補助下でやればいいから。
今日の目標はデバイスの補助下で魔力弾を生成すること。
簡単に言えば、魔力を作ることかな」

「分かった…ってあれ？ホルスはどうするんだ？」

「はやてちゃんの話だと、ホルスは広暁さんの訓練が終わるまでは特にやることは無いらしいんだ」

「じゃあ、しばらくは俺と一緒にいるだけでいいのか？」

「そういうことになるね。あ、でも…」

「でも？」

「……」

「もしも～し？」

「その…大きくなってもらっていいかな？」

「へ？」

「だから、その…。ホルスの大きくなった姿を見せてほしいんだ。海浜公園での戦闘映像は見たんだけど、生で見ておきたいから」

「ＯＫ。んじゃ、ホルス。頼む」

「キュキュイ！」

ホルスが広暁の呼び声に答える。

ホルス自身が黒炎に包まれ、それが段々と大きくなる。
黒炎が段々とホルスの形を作り出し、黒炎が収まるとそこには…

「グォォォォォォ！！！！」

大きく立派になったホルスがいた。
体長は１０ｍ以上あり、やはりでかい。
そして何故か無駄に吼えてる。

「この姿…これがホルスの本当の姿？」

「らしいです。小さい姿は魔力の消費を抑えられるんで、普段は小さい姿でいるって」

「えっ！？ホルスの言葉が分かるの！？」

「感情的なことなら何となく分かるんだけど…会話は無理。ホルスは俺の言葉が分かるみたいだから、俺が聞くことに『はい』か『いいえ』で答えてもらった」

「はいかいいえ？どうやって？」

「はいなら右の翼を、いいえなら左の翼を上げる」

こんな風にねと言いながら広暁がホルスに簡単な質問をする。

「炎を吐けるか？」

バサッ。

ホルスの右の翼、２人から見たら左側の翼が上がる。

「今日の昼飯は野菜炒め？」

バサッ。

今度は左の翼、２人から見たら右側の翼が上がる。

ちなみに今日のホルスの昼飯はハンバーグね、と広暁が補足。

「本当に人の言葉が分かるんだ…」

フリードも人の言葉が分かるのだが、そこまで気が回らないようだ。

「俺もびっくりしてますけど…もう慣れました」

慣れって怖いね、パ～ト2。

「ありがとう。それじゃ、訓練を始めようか。ホルスは、もう小さくなってもらってもいいよ？」

「分かった。ホルス」

広暁の掛け声と共にホルスを黒炎が包み、それが段々と小さくなる。黒炎が晴れると小さくなったホルスがいた。

「キュイ！」

どんなもんだいと言わんばかりに鳴いているが、ここはスルー。

「じゃあ、まずはデバイスを起動させて。セットアップって言えばいいから」

「分かった。セットアップ」

広暁が手に持つ杖の形をした小さいキーホルダーが、淡い光と共にその姿を変化させる。

光が収まると、そこには約四尺（１２０ｃｍ）の杖が合った。

本に出てくる魔法使いが持つような木の杖ではなく、金属の様な材質をした白い機械的な杖だ。

「まずはデバイスの力でリンカーコアに魔力素を吸収してもらうから。その感触を覚えて」

「OK」

広暁に確認をとると、フェイトはデバイスに向けて右手をかざした。
フェイトの手が金色に光り、そこから放たれる光を杖が受ける。
すると…

「!?」

広暁が何かを感じ取った。
自分の中に何かが入って来るような感覚。
入ってきたものが体の中心に集まり、凝縮される感覚。
この様な感覚は初めてであり、何より感じてて気分のいいものではない。

「何だこの感覚…!?」

「今、広暁君の体内では、リンカーコアが魔力素を基に魔力を作っているの。
体が光を帯びてきたら魔力の生成が終わった合図だよ」

フェイトの言った通り、広暁の身体が段々と発光する。その色は…

「黒…?」

広暁から出る光、つまり広暁の魔力光は黒であった。

「俺の魔力光は黒ってこと…?」

「そういうことになるね。でも、黒…か」

「ん？黒って珍しいのか？」

「私は金色、なのはちゃんは桜色、はやてちゃんは白色。ミッドチルダ式・近代ベルカ式・古代ベルカ式に関わらず色はばらけるんだけど、古代ベルカ式のはやてちゃんは白色なの。でも、黒色は私の記憶にある限り見たことがない」

「ふーん…」

「……」

（一体どういうことなの…？）

見たことのない魔力光『黒』。
フリードを超えた力を持つ竜『ホルス』。
そして、それを従える次元漂流者にして民間協力者『墨谷広暁』。

保護は快諾したが、ここまで前例のない事が続けば一抹の懸念を覚えるのも当然のことだ。
もっとも、考えてもフェイトの知識では正解はおろかその過程すら導き出せないのだが。

「フェイト？」

「ごめんね、考え事をしちゃって。どうしたの？」

「いやさ。魔力光の色ってどういう風に決まるの？」

「う～ん…本人の性質を表すとか、逆に本人の望む性質を表すとか

言われてるんだけど、まだはっきりとしたことは分かってないんだよね」

「その通りだとしたら、俺は悪い人間か、そうなりたい人間ってことになるよな…」

「だ、大丈夫だよ！まだはっきりしたことは分かってないんだから！！」

「そうであることを望みますよ…」

「ほ、ほら！訓練訓練！！集中して！！！」

「は～い」

どことなくナイーブになってきた広暁をフェイトが鼓舞する。

広暁もまだ少し引きづってはいるものの、訓練に対する意欲は失せていないようだ。

～1時間後～

ヒュンヒュンヒュヒュヒュン！！

「お～」

「大分慣れてきたね」

広暁の上空には、八の字を描いて飛ぶ黒いエネルギー弾が2つ。
最初こそエネルギー弾の形に圧縮することも難しかったが、今では広暁の意思通りに魔力弾を操ることが出来る。
魔力を作ることにこそデバイスの補助は必要だが、操作するという点ではもう問題は無いだろう。

「思ったより魔力弾の生成に時間がかからなかったから、バリアの方もやってみようか。
本当は明日やる予定だったけど」

「バリアってーと、防御用に張る壁みたいなやつ？」

「そうだよ。受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。
まずは、一番簡単なバリア系からいってみようか」

「ＯＫ」

～さらに1時間後～

「えい！」

ピュゥン！！

「は！」

ブゥン！！

ピシャン！！

「まさか1時間でバリアを張れるようになるなんて…」

「フェイトの教え方が上手いからじゃない？」

「ふふ、ありがと」

フェイトの放った金色の魔力弾を、広暁の張った黒色のバリアが防ぐ。

防がれた魔力弾は、金の鱗粉を散らすが如く飛び散った。

フェイトの教え方が上手いのか、はたまた広暁の飲み込みが早いの

か。
2日分の訓練を1日でこなしてしまった。

「じゃあ、今日の訓練はここまで。
明日は今日の復習と、デバイスの補助無しで魔力弾の生成とバリアを張る訓練ね」

「ありがとうございました！…っと、そうだ」

「どうかした？」

「ここって何時(いつ)まで使っていい？」

「確か…フォワードの訓練が4時からあるから、それまでなら問題無いよ」

「サンキュー」

「残って自主連でもするの？」

「まあ、そんなところ」

「あまりやりすぎて、明日の訓練でばてないようにね？」

「了か～い」

教導を終えたフェイトが空間シミュレーターから去る。
この後は、執務官としての仕事が待っているのだろう。

広暁が腕時計を確認する。

現在の時刻は午後3時１０分。
フォワードの４人が来ることを考えると、１０分前にはここを出た方が良い。
つまり、自主連に使える時間は４０分。

「さてと…ホルス」

「キュイ」

「始めるぞ」

「キュキュイ！」

～部隊長室～

「おおきにな、フェイトちゃん。訓練はどやった？」

「思ったより飲み込みが早い感じかな。
残って自主連もするみたいだし、フォワードの４人との訓練に混ざ

っても遜色は無いかも」

「ほ～。それはそれは。1週間後が楽しみや」

「そうだね。じゃあ、私は本局に行ってくるから」

「ほなな～」

……。

……？

「自主練…？まだ自分だけで魔力の生成は出来ないはずやし、一体何してるんやろ？」

ピピッピッピッ。

ヴォーン。

はやてが空間ディスプレイを起動し、空間シミュレーターを映す。

そこに映っていたものとは…

「ほーっ、これはこれは…。ますますもって楽しみやな」

映像を見てほくそ笑む―はやて（狸）。

広暁が残ってしていた自主練の内容とは？

そして、1週間後までに広暁は予定通りの訓練をこなすことが出来るのか？

それは広暁の努力次第。

第１１話「初訓練」（後書き）

大切なお知らせです。
次回からタイトルを

「リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　～黒炎竜を従える者～」

に変更します。
理由としては、

・デュエル的要素が皆無
・ホルスと言ったら”竜”ではなく”黒炎竜”

といったことが挙げられます。
ネタばれも含んでいますが申し訳ございません。
このままだとタイトル詐欺になってしまうので、思い切って変えさせていただきます。

何卒よろしくお願いします。
ではまた次回…。

第１２話「信じる者は」（前書き）

第１２話です。
今回はちょっと話を飛躍させました（話は長いけど…）！
それと、今回は今までより話がちょい長めです。
では。「リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～黒炎竜を従える者～」をよろしくお願いします。

第１２話「信じる者は」

広暁の初訓練から１週間。
この１週間で広暁は様々なことを学んだ。
言語は勿論、魔法の運用や体系。
それだけでなく、時空管理局やミッドチルダでの一般常識等など。

魔力も自分で作れるようになり、魔力弾の生成や制御、バリアも張ることが出来るようになった。
それだけでなく、まだ有効範囲は狭いが念話も使用可能になった。

元々努力家で集中力はあるので、ある程度の所にいくまでは時間がかからなかった。

広暁曰く、

「『地獄の２年後期』に比べたら……」

とのこと。
理系の大学生なら経験したことがあるかもしれないが、ここでは割愛。

だが、『飛行』の魔法の習得には広暁も苦労した。
『浮く』ことは出来るのだが、素早く移動出来ない。
なのはやフェイトは一発で飛べたらしいが、それは彼女達の魔力量と資質が有ってこそ。
広暁の魔力量も多い方だが、それでも難しいし資質も無い。

ならばどうすればいいか？簡単なことである。

それは『慣れ』だ。
広暁は飛行の訓練を始めた3日目以降、ほとんどの時間を飛んで過ごした。
それこそ、食事中や風呂、用をたす時まで。
飛んでない時間は、訓練中と寝る時ぐらいだ。

その甲斐あってか、飛行訓練を初めて5日目で時速６０ｋｍぐらいは出せるようになった。
フェイトの音速には遠く及ばないが、訓練を続ければその身に合った飛行速度を得られるだろう。

もっとも、

「疲れるし落ち着かない」

と本人も言っているので、四六時中飛んでいるこの訓練を続ける気は無いようだが。

なお、短距離の移動なら、飛ぶイメージよりも地面を蹴るというイメージの方が広暁本人はやりやすかったということを補足しておく（月の上を跳ぶイメージ）。

～食堂～

現在の時刻は午前7時半。場所は食堂。
いつものように隊長副隊長陣とフォワードメンバー、はやてにリィンにヴォルケンリッターのメンバーで朝食を食べていた時のことだ。

「広暁はライトニングでセンターガードになってもらうから」

はやてがそう切り出した。
フォワードメンバーは頭をかしげ、隊長副隊長陣・リィン・ヴォルケンリッターは納得している。

「え？いや、俺ってスターズでフルバックじゃなかったの？」

広暁がそう言ってしまうのも当然のことだ。
自分のポジションは1週間前から決まっていたのだし、それを考慮に入れてデバイスを考えたのだ。

「問題あらへんよ。それに、穴があかないようにもう1つデバイスのモードを増やしといたから」

「…さいですか」

広暁も、もう突っ込むのが面倒臭くなってきてしまっているようで、黙々と箸を動かす。
人に振り回されるのはもう慣れているという雰囲気を振りまきながら。

「大体なぁ。こんな結果出しといて、センターガード以外のどこがむいてるっちゅーねん」

ピラッ。

そういってはやてが取り出したのは1枚の紙。
それは、訓練初日の夜、性格診断だと言われて受けたテストの結果を記した用紙だった。
それによると…

＝＝＝

思考能力が高く、合理的で繊細・緻密・冷静に観察を行い、客観的・俯瞰的に状況分析が出来る。
プロジェクトの進行管理能力・戦闘中の作戦立案能力に秀でており、組織に1人は欲しい存在』

・適性ポジション

S、A、B、C、D、E、Fの7段階評価

フロントアタッカー：E
ガードウイング：C
センターガード：S
フルバック：A

＝＝＝

『冷酷無比な作戦を悪魔の様な頭脳で完璧にこなし、敵を完膚無きまでに叩きのめすことが出来る人』
っちゅー意味や」

「「「いや、それは言い過ぎだ（だよ）」」」

なのは・フェイト・広暁が同時に突っ込む。
はやてのボケはともかくとして、広暁はこの結果を見て頭を抱えた。
性格診断だと言われて受けたら、それがポジションの適性判断のテストだったとは。

はやての一存で決めるわけにはいかず、テストを受けさせてその結果を議論した上での結果だろうが、それでも一言は言ってほしかった。

「まったく…一言ぐらい言ってくれてもよかっただろ？」

「こういうのはサプライズの方が面白いやろ？」

「…まぁ、結果を見て驚くことはないから別にいいけどさ」

「どういうことだ？」

広暁の一言にシグナムが反応する。
学校や本などでこういったテストを受ける機会があるが、毎回毎回同じ結果が出ること。
しかも、『観察・客観・冷静』の３つの単語は必ず含むとも。

「…とまあ、そんな訳でさ。結果を見る度に『俺はどこぞの軍師か』って自分に突っ込んでた」

「まぁ、こんな結果じゃなぁ…」

ヴィータが同情するように答える。
彼女を見てそれら3つの単語が浮かぶ人はいないだろうが、別の単語がヴィータの中では渦巻いているのだろう（豪胆とか単純とか無鉄砲とか）。

「けどまぁ、それだけが理由やないんやで？」

「ん？」

「キャロも同じ竜召喚士やからな。同じ部隊の方が何かとやりやすいやろ？」

「あ～…」

広暁もはやての言い分にちょっと納得したようだ。
今はポジション云々より、同じ境遇の者同士を一緒にした方がいいということだろう。

「でもさ、俺とホルスには精神リンクがあったんだろ？」

「そこやねん。調べても詳しい事は分からへんし」

「私としてはもっと調べたいんだけどね～」

「キュイ？」

そう、ホルスと広暁には精神リンクがある。

だが、フリードは使役竜であり使い魔ではない。
当然精神リンクも無い。
そもそも、ホルスは使い魔ではないので精神リンクがあること自体おかしいのだ。
最初の検査を含めて3回検査をしたのだが、未だにはっきりとしたことが分からない。
そんなことを話していると、

「広暁さんとホルスってどういう関係なんですか？」

キャロが広暁に聞いてきた。
カードが実体化したことは話したが、やはりもっと深いところが気になるようだ。

「そうだな…一番付き合いが長くて頼れる相棒ってところかな」

「キュイ！」

ホルスもそれに肯定するように鳴く。

その一言を聞いて何か思うところがあったのか、

「あの…広暁さん？」

「うん？」

「えーっと、その…私に教えてくれませんか！？」

キャロが意を決したかのように、少々大きめの声で広暁に言った。

隣に座っていたエリオはその気迫に驚いているようだが、広暁は平然と言葉を返す。

「教える？何を？」

「その…竜との関わり方というか…在り方というか…」

「俺が？俺はホルスと会ってまだ1週間しか経ってないし、魔法の事もよく知らない。
そんな俺がキャロに教えられることなんて、ほとんど無いと思うけど？」

「それでもです。広暁さんとホルスは、出会ってまだ1週間しか経ってないそうですけど、いつもお2人（1人と1匹）は一緒にいますし、何ていうかその…とても息が合っていると言うか、それが当然というか…自然な感じなんです」

最後の方は少々か細い声になってしまったが、キャロの言う通りである。
この1週間、広暁は常にホルスと共に行動している。
午前の勉強の時間では、ミッド語を勉強している広暁の傍らに常にいる。
昼ご飯を食べる時も一緒だ。
午後の訓練中も一緒だ。
ついでに言うと、夜の入浴も一緒だ（さすがに浴槽には入れられないが）。

「そう言われればそうですね。
広暁さんに翼を洗ってもらってるホルス、すごく気持ちよさそうでしたよ」

昨日の事を思い出すかのようにエリオが応える。
あれから出会ってから1週間しか経ってないが、広暁とエリオはもう友人の関係になっていた。

（頭洗ってもらうの気持ちよかったな…）

もっとも、気持ちいいのはエリオにも言えることのようだが（ホモじゃないよ!?）。

（『お兄さん』って…呼びたいな……）

女性ばかりの機動六課で、突然現れた広暁はエリオにとって救世主だったのだろう。
年上の女性にからかわれることが多いエリオにとって、広暁は頼れる兄の様な存在になっていた。
最初は広暁も１０歳も年下の男の子に対する接し方がぎこちなかったが、今では普通に接している。
以前の広暁ではありえないことだが、ミッドチルダに来てからリミッターが外れたのだろう、色々と。

エリオがそんなことを考えている中、広暁は思考が終わったのかキャロに言った。

「いいよ。俺に教えられることがあるなら」

「やった！ありがとうございます、お兄ちゃん!!」

……。

一瞬の静寂。
のち、

「「「「「「「「「「え――――――

「あ、あの！！だったら僕も、『お兄さん』って呼んでいいですか！？」

「はい！？」

止まることのない追撃。

「僕も、その…広暁さんのこと頼れる男の人って思ってて……」

「もう…好きに呼んで下さい……」

「ありがとうございます、お兄さん！」

これはあれだ。
巻き込まれ体質の発展系だ。
ただそれが年下限定なだけだ。
色々と犯罪の臭いがするが気のせいだ。

（１０歳で働いてる２人に頼れる男の人って言われる俺って一体……。
俺この間まで２０歳の大学生だったんだけど）

口に出さないあたりさすがだが、それでも考えるものは考える。

（まぁ…悪い気はしないか。
これがあいつなら『ふざけんなぁ！！』とか言って殴りかかってくるだろうけど）

大学に入ってから知り合った友人を思い浮かべながら、広暁は考えをまとめた。

「ほぅ…お兄ちゃんか……」

「おい。何考えてる」

はやてが言ったことに不穏な空気を感じたのか、広暁が突っ込む。

「いやいや気にせんでええよ？」

「……」

もう突っ込む気力すら消えてしまったようだ。

朝からこの調子では、午後にある広暁も交えた訓練はどうなるのだろうか？

一抹どころか多大な不安が広暁の脳裏をよぎった。

～空間シミュレーター～

現在の時刻は午後2時。

広暁も交えたフォワード陣の初の訓練だ。

「じゃあ、今日からは広暁君を含めた５人で訓練を始めるよ」

「「「「「はい！！」」」」」

「広暁君はどこまで出来るようになった？」

「魔力弾の同時制御は最高５つ。簡易的なバリア。飛行速度は最高時速６０ｋｍ。
マルチタスクは３つってところ。念話は、集中すればなんとか」

「１週間で大抵のことはやったって感じだね。
でも、マルチタスク３つはどうやって？２つでも難しいのに」

「う～ん…慣れですかね？」

大学で講義を受けながらゲーム・マンガ・音楽が日常の広暁にとっては造作もないことだったらしい。
真面目な大学生としては問題かもしれないが、健全な大学生としては何ら問題は無いだろう、うん。

「じゃあ、始めようか。あ、ホルスはまだ訓練には加わらないで。
まずは広暁君の実力を見たいから」

「了解。ホルス」

「キュイ！」

広暁が呼びかけると、広暁はなのはの傍らに移動した。

「いい子にしてるんだぞ？」

「キュキュイ！」

任されたと言わんばかりに鳴くホルス。サムズアップしたように見えたが気のせいだろう。

「じゃあ、まずはガジェット相手の戦闘訓練。今回は逃げるガジェットを1機残らず倒すこと。数は１０機、時間は5分。皆、気を抜かないようにね？」

「「「「「はい！！」」」」」

「じゃあ…始め！」

合図と共になのはは飛び、空間シミュレーターの外へと移動する。その先にはシャーリーがおり、彼女の手元には幾つものディスプレイが浮かんでいる。

「広暁さんを交えた初めての訓練。面白くなりそうですね」

「そうだね。お手並み拝見、ってところかな」

「そういえば、広暁さんはガジェットの事を知ってるんですか？」

「勉強の時間に皆が教えていたから大丈夫。勿論、私も教えたけど」

「なるほど。なら、心配はいりませんね」

「キュッキュ～」

結果から言うと、訓練は成功だった。

ＡＭＦやガジェット、フォワード４人の特徴を知っていた広暁は、ティアナと共に指揮を務めた。

また５人の中で唯一空を飛べるため、上空からの地形を基にガジェットを追い詰める策を立てたのだ。

この計が功を奏し、路地に追い詰められたガジェットをキャロの『アルケミックチェーン』が補足。

ティアナの『ヴァリアブルシュート』がガジェットを貫通し、スバルのリボルバーナックルとエリオのストラーダがガジェットを粉砕した。

だが…

「広暁君…最後のあれは一体何？」

「すいません！理論上は可能だって分かってたんですけど、自分で試したみたかったんです！！」

なのはが呆れるように広暁に問い詰めているのは、広暁が破壊したガジェットの破壊方法だ。

広暁は、

「ガジェットにはＡＭＦがあるから、魔法攻撃は効きにくい。だったら、魔力で肉体を強化してぶっ叩けばいいんじゃね？」

と考えていた。

そのため、ガジェットが残り２機になると

「試したいことがあるんだけどいい？」

といって今まで指揮のためいたビルの屋上から路地裏に移動。

捕縛された２機の内１機を、杖型のデバイスで中央の黄色い目に牙突。

もう１機をソフトテニスのスマッシュの要領で地面に叩きつけたのだ。上空１０ｍぐらいから。

「いや、まさか魔力であそこまで肉体を強化できるなんて思わなくて…。

つい調子に乗ってしまいました、すいません！！」

真面目な人間だが、どこか抜けているというかずれているというか。

今日の訓練で、広暁への認識を改めることになったようだ。

「は～…さすがにあれには驚いたね……。でも、あれもありなのかな？」

「いえ、さすがにあれは…」

「でも、凄かったです！」

「さすがお兄さん！」

「お兄ちゃんすごーい！」

元気娘＋最近弟と妹になった2人は喜んでいるが、ガンナーは少し複雑そうだ。

（いくら自分の力を試したかったからって…センターガードが前線で暴れてどうするのよ？
それはスバルやエリオみたいにフロントアタッカーやガードウイングの仕事でしょ？
作戦の立て方とか指示の仕方とか、確かに素人とは思えないほど的確だったけど…はぁ……）

中長距離を制し司令塔的なポジションに立つ。それがセンターガード。
そんなポジションである広暁が前線で暴れてたら誰だって驚く。

「魔法っていう力に興奮してしまったというか…」

「私も最初は魔法の凄さに驚いたし、色々と無茶もしたからね。今

の広暁君も気持ちも分かるよ……。
だけど！センターガードが前線で暴れてどうするの！？
締めにシュートイベーションやるけど、広暁君は前線に出ないこと！！分かった！？」

「はい…」

広暁反省。
子供っぽさを出したことを反省。

「分かればよろしい。レイジングハート」

≪アクセルシューター≫

なのはの周りに桜色の誘導操作追尾弾『アクセルシューター』が出現する。

「私の攻撃を5分間被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを撃てればクリア。
誰か1人でも被弾したら最初からやり直しだよ。がんばっていこー！」

「「「「「はい！」」」」」

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を5分間、捌き切る自身ある？」

「ない！！」

「同じくです！」

「右に同じ」

「じゃ、なんとか一発入れよう！」

「はい！」

「広暁さん。エリオとキャロ、頼んだわよ？」

「はいな」

「準備はオッケーだね。それじゃあ、レディー…ゴー！」

なのはの合図と共に5人に向かってアクセルシューターが放たれる。
着弾点には小規模な爆発が起こるが、そこに5人の姿は無い。

（スターズとライトニングに分かれたみたいだね。さて、どうくるかな？）

なのはが空中で思考をまとめていると、彼女の後ろにウイングロードが出現。
更に右斜め前方からは、ティアナが狙っていた。

「アクセル！」

反応したなのはが2人に向けて魔力弾を撃つが、それらは2人を貫通した。

「シルエット。やるね、ティアナ…！？」

ティアナの戦術を褒めるなのは。そこに迫る黒色の魔力弾。
だがその数は…

「8発!?」

なのはに迫る黒色の魔力弾の数は計8発。

（さっきは魔力弾の同時制御は5発って…『同時制御』？
ただ打つだけならそれ以上もいけるってこと!?やってくれるね…
！）

なのはの推測通り、同時制御ではなく打つだけなら広暁は5発以上打てる。
そのため今なのはに迫る魔力弾のうち、3発は正面から真っ直ぐ。
5発は彼女を囲むように迫っている。

「仕方ない…レイジングハート！」

≪オーバルプロテクション≫

オーバルプロテクション。完全球形で全方位対応のバリア魔法。
魔力弾とオーバルプロテクションが衝突し、そこに小さな爆発が生まれ、煙がなのはの視界を遮る。
広暁の魔力弾ではなのはのオーバルプロテクションを貫くことが出来ないのは自明の理。
だが…

「でぃやあああぁぁぁぁ！！！！」

煙の中から大声と共にスバルがなのはに斜め下からなのはに突っ込

む。
その足元にはウイングロード。
先程までは展開されていなかったそれは、今の爆発の直後に展開されたことが容易に推測出来る。

「爆発を利用しての目くらまし攻撃。作戦はいいけど…甘いよ！」

スバルのリボルバーナックルを受けとめようとなのはが左手にシールドを展開。
だがそのシールドがスバルを受け止めることは…

「これもシルエット！？」

なかった。
スバルがなのはに攻撃する瞬間、スバルが霞のように消えたのだ。

「！？上！！」

なのはの第六感、もとい戦場で鍛えた感が彼女に迫る危機を感知。
その方向にシールドを張ると、そこにはなのはに迫るスバルの姿があった。
ドリルが回転するような音を立てながらリボルバーナックルが迫る。
それをなのはがシールドで受け止めた。
だが、

「うわ！？」

それも外部からの介入で終わりを告げた。
なのはの放った魔力弾がスバルに向かって戻って来たのだ。

「うん、良い反応」

とっさに避けたが、避ける向きが悪かったのか。
ローラーシューズには最悪の横滑りで避けてしまった。
負担がかかったのか、いつもより多く火花が散る。

（スバル！危ないでしょ！）

（あぅ…。ごめーん！）

（待ってなさい、今撃ち落とすから！）

（了解！）

ガチャッ、キュィィイイイインン。
カチッ！……プスン。

「イイッ！？」

「うわー！ティア、援護――――！！」

「この肝心な時に…！！」

カチッカチッ、ガチャッ。
ギュィィイイイイン。
バンバンバンバン！！

「来た！てぇあ！」

スバルが飛ぶと、スバルを追っていた魔力弾を追うように2発が追

従。
のこり2発はなのはの方へ向かっていく。

一方その頃…

～なのは達から１００ｍほど離れた廃ビル付近～

「駄目だったか～」

そこにはビルの陰から覗くライトニングの3人がいた。
先程の作戦は念話でティアナと広暁が考えたもの。

煙という目隠しを利用しての攻撃ならシルエットと考える可能性は低い。
そこを突き、先程の作戦を展開。
煙の中からシルエットを突っ込ませ、それがなのはに追突する瞬間に消去。
シルエットが攻撃した方向とは真逆の方向からスバルを突っ込ませる。

この時、ウイングロードを使うとばれる可能性があるため、スバルはビルの屋上から飛ばせた。
勿論、攻撃する時は声を出さないように念を押して。

「上手くいかんもんだな…」

「で、でも！今の作戦は良かったと思います！なのはさん、反射神経だけで防いだみたいですから！」

「そうですよ！今までの訓練でも、私達の攻撃は全部読まれた上で防がれてましたから！」

「…ありがとよ、２人共」

（今のを反射神経だけで防ぐのはさすが…って言うのもおこがましいか、歴戦の魔導師相手に。
だとすると、今までのティアナの作戦に問題があるのか？）

広暁が考えていたのはティアナの事。
彼女の立てる作戦はこういったことをあまり知らない広暁でも良いと思う。
だが…

（甘い…んだよなぁ）

彼女の作戦は甘い。
シルエットを利用した撹乱や優れた指揮。
それだけならいいのだが、彼女の策は甘い。
というか、単純・シンプルなのだ。
シルエットを使うにしてもそうだ。

シルエットの影に本体を忍ばせ、相手がシルエットだと思って安心した隙に攻撃。

多方面から同時にシルエットを展開し、撹乱。
同時攻撃により対応の的を絞らせず、それでいて本体はその中におらず別の場所から機を窺う。

広暁が考えただけでもそれらの用途があるのだ。
実際、先程の策をティアナに進言した時は驚かれていた。

だが、話を聞いた限りでは、彼女はシルエットを一重にしか使っていない。

（罠ってのは二重三重に張ってこそ意味があるんだがなぁ。
一重で仕留められるほど楽な相手ならいいけど、なのは相手にそれは無理。
本来なら常に二重三重に考えるのがいいんだけど…。
陸士訓練校で習わないはずがないし、そういうのが嫌いなのかな？
若い頃から働いてると視野が狭くなるのか？
それとも、俺が今まで遊び過ぎて雑学が多いだけなのか？
俺の考えが間違ってるのか？
それとも……）

「「お兄さん（お兄ちゃん）？」」

また悪い癖が出てしまった広暁。
考え込むとついついのめり込んでしまう。

「悪い、ちょっと作戦の事で考えてた。キャロ」

「はい！」

「次、頼んだぞ」

「はい！…でも……」

「どうかしたか？」

「私に出来るんでしょうか…？」

キャロが不安に思うのは今から行う作戦の事。
その作戦上『竜魂召喚』を行う必要があるのだが、キャロは成功させる自信が無いようだ。

キャロに聞いた話では、今までも竜魂召喚を行ったことはあるらしい。
しかし、制御出来ずにフリードが暴走してしまうことが多く、それ以来竜魂召喚を拒んでいたのだ。

「…じゃあ、キャロ。今から俺が言うことをよく聞いて」

「？」

「信じろ、自分を。そして、フリードを」

「自分と…フリードを？」

「キュクル～？」

「そう。まずは自分自身を信じて行動を起こす。
なにがあっても自分は自分。それ以外の何者でもない。
自分を信じ、1人の人間として自覚する。
例え自分がどんなものを抱えていようと…な」

「!?」

最後の一言に思うところがあったのか、キャロが『ビクッ!』と震える。
隣ではエリオも思うところがあるのか、少し俯いた。
広暁はそれに気付いたが、構わず話を進める。

「いいか?まずは自分を信じる。
自分を信じられなければ、相手を信じることは出来ないし、信じられることも出来ない。
1人の人間として自覚し、相手を信じること。キャロ、出来るか?」

「……」

しゃがみ、キャロの目線に立って広暁が言う。
すると、キャロは俯いてしまった。
広暁もそんなキャロに言及することなく、ただ顔を上げるのを待つ。

「あの…お兄ちゃん?」

「何だ?」

「私…やってみます!」

「そうか。頼んだぞ?」

「はい！…あと、お願いがあるんですけど…」

「ん？」

「訓練が終わった後、聞いてほしいことがあるんです」

「オッケー」

「あの、お兄さん？」

「どうした？エリオ」

「僕も聞いてほしい事があるんですけど…」

「分かった。訓練が終わったら2人まとめて聞くよ」

「「ありがとうございます、お兄ちゃん（お兄さん）！！」」

「さーてと、話はここまで。キャロ」

「分かりました！」

「キュクルー！」

広暁に押し出され、キャロとフリードが前に出る。

（お兄ちゃんは、自分を信じることが一番大切だって言った…。
今まで私は、何で力を持ってるのとか、何で生まれてきたのとか、
そんなことばかり考えてた…。

だけど、お兄ちゃんは違う。
自分に自信を持って生きてる。
まだ会って1週間しか経ってないけど、私にも分かる。
だからホルスともあんなに自然に接することが出来るんだ。
だったら私も…！！）

（お？いい顔になったじゃん）

（キャロ…何か振っ切れた？）

「ごめんね、フリード。今まで私、自分の事もフリードのことも信じ切れてなかったのかもしれない」

「キュクルー！！」

そんなことはない、と言ったのだろうか？フリードが力強く鳴いた。

「うん…だけど、今なら私にも出来ると思う。…ううん、絶対出来る！
フリードを暴走させたりなんてしない！！」

「キュクルー！！！」

「いくよ、フリード！」

≪竜魂召喚≫

キャロの掛け声と共にキャロとフリードが桃色の魔力光に包まれる。

「蒼穹を奔る白き閃光、我が翼となり、天を翔けよ」

キャロの足元に魔法陣が展開され、そこから現れるは白き両翼。
ケリュケイオンの輝きが増し、なおもキャロの詠唱は続く。

「来(こ)よ、我が竜、フリードリヒ！竜魂召喚！！」

詠唱を終えると同時に魔力光が破れ、現れたのは白銀の飛竜。
白き体躯と赤き目を持ち、キャロを背中に乗せ羽ばたく様は威風堂々。

「キュオオオォォォォ！！」

大声で吠えるが、その声はどこか優しさを含み、聞く者の心を落ち着かせる。

「やった…！成功しました！！」

「よし…」

「すごい…これがフリードの本当の姿！？」

それぞれが感想を漏らす。だが、今はのんびりと感傷に浸っている時ではない。

「よくやったな、キャロ。もうちょっと喜んでたいんだけど、今は作戦が先だ」

「はい、お兄ちゃん！」

キャロも竜魂召喚の成功にいつまでもはしゃがず、広暁の指示に従

う。

「我が乞うは疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

≪ブーストアップ・アクセラレイション≫

「行くよ、エリオ君！」

「了解！」

エリオの掛け声を聞くと、キャロがエリオに向かって左手をかざす。

「ブーストアップ・アクセラレイション！」

キャロの左手から放たれた魔力の筋がエリオの持つデバイス、ストラーダへと吸収される。

すると、ストラーダに2つある噴射口から魔力が勢いよく噴出され始めた。

「かなり加速つくから気をつけてね！？」

「大丈夫！」

噴射口から魔力が勢いよく出ているが、エリオはそれを体で押し止める。

「よし。じゃあ、後は最初に言った通りだ。抜かるなよ？」

「「はい！！」」

2人は返事をすると、共に別方向へ向けて移動する。
キャロは上空へ、エリオは廃ビルを利用してなのはの死角に回り込むように。

「さて、俺も行くか……」

作戦は最終段階へと移行する…

第１２話「信じる者は」（後書き）

題名変えての初めての話、第１２話。
今後とも「リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～黒炎竜を従える者～」をよろしくお願いします。

ご意見・感想・訂正等、お待ちしています。

第１３話「新デバイス」（前書き）

第１３話です。
最近１話毎の文字数が多くなってきました…。
最初の方の話が短いというのもありますが、それでも比べたら長いです。
今では１話１万文字がデフォになっているという現状…。

ですが話数を増やすわけにもいきませんので、このまま続けたいと思います。
ご理解のほど、よろしくお願いします。

第１３話「新デバイス」

＜なのはｓｉｄｅ＞

「あれは…フリードの真の姿！？」

咆哮を聞いて振り返ってみると、そこには話にしか聞いたことがない真の姿のフリードがいた。

竜魂召喚はまだ制御出来ずにいるってフェイトちゃんは言ってたけど……。

ううん、過去の憶測にとらわれちゃ駄目だ。

今私の目には真の姿のフリードが映っている、それだけで十分だ。

「スバル！」

「分かった！！」

声がした方向を見てみると、そこには私から離れるスバルとティアナの姿が。

態々（わざわざ）声に出すということは、これは何かの罠？

さっきの攻撃もあるし油断は出来ないね。

「フリード！ブラストレイ！！」

フリードから高熱の火炎砲が私に向かって放たれる。

初めて見る魔法に今の制限状態。

そう考えると、あの炎を受けるのは選択肢の中から排除。

ならばここは…

「シュート！！」

「！？」

ティアナの声に思わず振り向くと、そこには私に向かって来る４つの魔力弾。
前からはブラストレイ、後ろからはティアナの魔力弾。
今の位置では避け切るのも防ぐのも難しい。
ならば…攻撃が届かない位置まで引く！！

「まさか上に行く気！？」

ティアナの声が下から聞こえるが、今は後回しだ。
このビル群を抜けて、フリードの攻撃が届かない位置まで上昇する！！

≪スピーアアングリフ≫

「はあああぁぁぁぁ！！！！」

「え！？」

上に向かって飛行していると、横のビルの中から私に向かって飛んでくるエリオの姿が！
…なるほど、ブラストレイと魔力弾で逃げる方向を限定、その移動中を狙うって作戦だね。
だけど……

「それじゃあ…ばればれだよ！」

私もエリオに向かって突撃する。
このまま上に逃げてもいいが、追われる形では迎撃しにくい。
今ぶつかってエリオを落とす…！！

ドガアアアァァァン！！

壮絶な衝突音と共に私達は激突。
私が飛ばされることなないけど、エリオがビルの中に向かって飛んでいく。
私もそのままビルの中に着地。
結構派手に飛ばされたけど大丈夫かな？
気絶してないといいけど。

「狙いはよかったんだけどね。
ビルの中からだと攻撃方向が限定されるから、迎撃もしやすい、もっと考えないと。
これで終わりかな？」

諭すようにエリオに言うが…

「……」

反応が無い。
もしかして、本当に気絶しちゃった？
ちょっとやりすぎちゃったかな～。
私が自分の教導に対して考え直していると…

「いぇ…」

今のはエリオの声？
気絶してなかったの？

「まだ終わりじゃありませんよ…」

エリオが起き上がりながら私に言った言葉。
それはまるで、まだ作戦が終わってない事を告げている。

「というより…」

更に言葉を告げるエリオ。一体何が…？

「チェックメイトです」

「！？」

背後から聞こえる声に、私は思わず振り向く。
そこにいたのが広暁君だと気がつき、一瞬更に考えてしまったせいで…

ガラガラガラ！！！！

「デエェヤアアアァァァ！！！！」

ビルの床を崩して私に向かってリボルバーナックルを向けてくるスバルの反応に遅れてしまった。

―――――――

「よかった…」

「よし！」

「ふー…」

「疲れた…」

ミッションコンプリートの言葉にそれぞれ思い思いの言葉を告げるフォワード５人。
だが、なのはの表情は複雑そうだ。

「さすがにあそこまでやられるとは思わなかったな～」

「ご、ごめんなさい！なのはさん！！」

大声で謝るスバル。

あの後、スバルとなのはが衝突。
さすがは歴戦の魔導師というべきか、なのははあの状況でもバリアを張った。
しかし、あまりにとっさだったため、十分な魔力をバリアにまわすことが出来なかった。
また、『自身の力＋重力』という２つの力でスバルは攻撃したため、受け切ることが出来なかった。

結果、スバルの力を受け切ることが出来なかったなのははそのままスバルに押され、床を貫通。
なのはのバリアジャケットにはスバルの拳の形をした跡が残った。

床を1枚抜けたところで止まったのはバリアジャケットの頑丈さ故といったところだろう。

「いいよ、気にしなくて。でも今回の作戦はよかったね」

「ティアナと俺で頑張って考えましたから。な？」

「え？は、はい…そうです……」

「？」

ティアナのしどろもどろに返答になのはが首を傾げる。

（…私の指揮だけじゃ、あそこまで完璧になのはさんを追い詰めることは出来なかった。
いいところまでいったとしても、エリオとなのはさんをぶつけさせることぐらいしか出来なかった。
だけど、広暁さんの考えた作戦は……。
広暁さんが入る前でも、シュートイベーションでなのはさんに一撃を加えることは出来てた。
だけど、広暁さんの作戦には隙が無かったし、次の手が幾つもあった。
広暁さんは、常に何手先も考えてる……。
私は一体……）

自己嫌悪に陥るティアナ。
だが、誰もその内情に気付かない。

「最初のシルエットを利用した攻撃も良かったけど、その後のも良かったね。

エリオからスバルへの連携」

「はい！広暁さんの指示通りでした！」

「本当は僕で終わりにしたかったらしいんですけど…」

「どういうこと？」

エリオが言ったことに対し、なのはが反応する。
それに答える広暁。

「まずは真の姿になったフリードのブラストレイ。
なのはがこれを見るのは初めてのはずだし、威力も結構ある。
となると、防ぐより攻撃をくらわない位置まで逃げる方が無難。
更にティアナの魔力弾で、逃げる方向を限定」

「その後、上空へ逃げる途中での横からの突進攻撃。
確かに攻撃方向は限定されるけど、それはなのはとて同じ。
むしろ突進するエリオと違って、なのはは迎撃した後逃げるかビル内に残らないといけない。
フリードの炎をくらわないためにね。
となると、地の理はこちらにあった」

「なるほど…」

「で。エリオが一撃当てれれば良かったんだけど、それが駄目だった時のプランも考えた。
それが上の階からのスバル奇襲。
気付かれてはいけないし、反応されてもいけない。
となると、別の方向に意識を向けさせる必要があった」

「それがエリオ…？」

「そ。押し負けそうだったらわざと派手に飛ばされろってね。気絶したとなのはが思えば、なのはの性格からしてビルの中に入って来る。
そこでエリオが一芝居。
なのはの注意をエリオに向けさせる」

「でもそれだと、広暁君が出る必要は無かったような？」

「人間は1つのところに集中してて外部からの刺激に反応すると、一気に注意力が散る。
注意力が落ちてるから、当然その後くる2つ目の刺激にも反応が遅れる。
念には念をってやつです」

「そこまで考えて…。広暁君、本当に大学生だったの？」

「本を読むのが好きで、そこからの引用…かな」

「ふーん…でも、ちょっと残念だな」

「何がです？」

「私達機動六課の設立目的はロストロギアの捜査と保守管理。
そしてその目的のために戦くことになるのはガジェット。
ガジェット相手に心理戦が通用すると思う？」

「……あ」

「そういうこと。
今回の作戦は確かによかったけど、ちゃんとそういったところも考えて作戦を練らなきゃ」

「…面目次第もございません」

「分かればよろしい。
これからは今言ったことを考慮に入れて作戦を考えてね？」

「はい！」

「それと…キャロ」

「はい！！」

「竜魂召喚の成功、おめでとう」

「ありがとうございます！！」

「どうして今回は出来たの？」

「あの、それは…お兄ちゃんのおかげなんです」

「広暁君の？」

「はい！自分を信じろ。そうすれば、フリードも信じてくれるって」

「そんなことを広暁君が？」

「人からの受け売りですけどね」

「ふ～ん…広暁君が…ね……」

「どうかしました？」

「ううん。何でもない」

「はぁ…」

（広暁君をライトニングにしたのは、あまり訓練に参加出来ないフェイトちゃんや訓練が苦手なシグナムの代わりに保護者役になってほしかったからっていうのも理由だったんだけど…まさかここまで上手くいくなんて。フェイトちゃんが知ったら喜ぶだろうな）

結構打算的なこと考えてやがりましたよ、この教導官。

（『自分を信じろ。そうすればフリードも信じてくれる』か…。会ってまだ1週間しか経ってない人がキャロを変えられるなんて…。

こっちのことはフェイトちゃんが知ったら悲しむかな？）

でもちゃんと報告しないとね、教導官？

「じゃあ、今日の訓練はここで終了。

ティアナの指揮も大分筋が通って来たね、広暁君の考えた作戦もよかったし。

2人共。指揮官訓練、受けてみる？」

「い、いえ、あの…戦闘訓練だけで一杯一杯です！！」

「ご冗談を。まだミッド文字すら不自由な俺にどうしろと？」

「ふふ」

冗談とも本気ともとれないなのはの提案に2人は苦笑を浮かべる。

その時…

「キュー？キュクルー？」

「キュイ？キュキュイ？」

「え？フリード、どうしたの？」

「ん？ホルス、どうかしたか？」

「何か…焦げ臭いような」

「あ、スバル！あんたのローラー！」

バチッバチチッバチッ。

臭いの発生源はスバルが右足に履いているローラーだった。

「あちゃー…しまったー。無茶させちゃった…」

「オーバーヒートかな？後でメンテスタッフに診てもらおう」

「はい…」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「あ、はい。騙し騙しです…」

「皆訓練にも慣れてきたし、広暁君も基礎は十分。
そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかな～」

「「「「「新…デバイス？」」」」」

～シャワールーム～

「聖王教会ね～。エリオは行ったことある？」

「いえ。僕は行ったことないです」

「そっか…」

ここは宿舎のシャワールーム。
訓練を終えた5人は、シャワーを浴びた後デバイスルームに集まるように言われていた。

（聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局理事官『カリム・グラシア』。
機動六課設立の後ろ盾の中でも最高の人、か。
六課で民間協力者として働いてる俺の事を紹介する必要があるのは分かるけど…）

広暁が考えているのは、先程訓練を終えての帰り道のこと。

～回想中～

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まろっか」

「「「「「はい！！」」」」」

訓練を終えた広暁達は空間シミュレーターを後にし、隊舎へと続く道を歩いていた。

「ん？あの車って？」

広暁達の目の前に現れたのは1台の黒いスポーツカー。
その車が、6人の前で停車する。

「フェイトさん！八神部隊長！」

車に乗っていたのはフェイトとはやてだった。

車の天井部分と窓が消え、オープンカーのような外観になる。

「すご～い！これ、フェイト隊長の車だったんですか！？」

「そうだよ。地上での移動手段なんだ」

「皆。練習のほうはどないや？」

「あー。あはは…」

「頑張ってます」

「エリオ、キャロ。ごめんね？私は2人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて……」

「あ、いえ、そんな」

「大丈夫です！」

「…俺もライトニングなんですけど」

ちょっと不貞腐れたようにいう広暁。

「え！？あ、あの、その…」

それに答えるしどろもどろのフェイト。

忘れないであげてください。

「あはは～…皆良い感じに慣れてきてるよ。
広暁君も交えての今日の訓練、良い感じだったし」

「そうか、それは頼もしいな～」

はやての褒め言葉に、５人のフォワード陣は嬉しそうに微笑む。
部隊長からの褒め言葉はやはり格別ということだろう。

「それだけじゃないんだよ、フェイトちゃん」

「何かあったの？」

「キャロ」

「は、はい！！」

なのはに促されてキャロが一歩前に出る。
そして呼吸を落ち着かせ…

「フェイトさん！私…竜魂召喚に成功しました！！」

言い切った。

「え！？キャロ、ホント！？」

「はい！！」

「やったね、キャロ…！！でも、どうやって？」

「お兄ちゃんのおかげなんです！」

「お兄ちゃん…広暁君の？」

「はい！さっき……」

キャロ説明中……

「そんなことが…」

「はい！自分を信じればフリードも信じてくれるって」

「自分を信じればフリードも信じてくれる、か……」

「どうしました？フェイトさん」

「ううん、何でもない。あ、そうそう。
今から私達、６番ポートまで行く予定だったの」

「教会本部で騎士カリムと会談やで～。帰るのは夕方過ぎになるさかい」

「私は本局に行ってくるの。お昼には帰ってこれるから、皆で一緒にお昼を食べよっか？」

「「「「「「はい！」」」」」」

「それと…キャロが竜魂召喚に成功したお祝いにケーキを買ってこようかな？」

「え！？ケーキ！？」

「こら、スバル！はしゃぐんじゃないの！！」

「あはは～…」

「皆はリクエストある？」

「あたし、ショートケーキ！いちごが載ってるやつ！」

「あたしは…ティラミスをお願いします」

「僕はレアチーズで」

「私はモンブランを…」

「俺は…ザッハトルテを」

「私はシュークリームを頼むわ～」

「皆遠慮ないな～…じゃあ私はミルフィーユ」

「クスッ。そういうなのはもね」

「うぅ…フェイトちゃんのバカ～」

「こらこら2人共。部下の前やで？」

「「は～い…」」

各々にケーキを注文する六課の面々。
戯れるなのはとフェイトを戒めるはやて。
ここが機動六課の前でなくどこかの家庭の玄関前なら実に微笑ましい光景だ。

「あ、それと。広暁」

「ん？」

「教会本部に行くの、広暁も付いてきてくれへん？」

「俺が？」

「そう。聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局理事官『カリム・グラシア』。
機動六課設立の後ろ盾の中でも最高の人や。
次元漂流者で民間協力者っちゅー広暁を紹介せーへんわけにはいかへんからな」

「分かった」

「あ。でも、はやてちゃん」

「どうしたん？」

「今、訓練を終えてシャワーを浴びに行く途中だったの。その後新デバイスの説明もする予定だったから、結構時間がかかっちゃうよ？」

「時間てどれぐらい？」

「う～ん…1時間弱かな？」

「1時間か…」

「私の方は急ぎの用事じゃないから大丈夫だけど…はやては？」

「私の方も大丈夫や。カリムなら分かってくれるやろ」

「いやいや。ちゃんと確認取らないとまずいだろ」

「広暁は真面目やな～」

「当然のことを言ったまでだ」

「はいはい。今確認取るからちょー待っとって～」

そう言ってはやては車から降り、小走りで走って行く。

「もしもし、カリム？今日の会談の……1時間……紹介したい人が……」

携帯電話の様なものを取り出し、連絡をとるはやて。

どこでも空間ディスプレイが浮かぶようなミッドチルダにも、携帯電話は存在するようだ。

「うん、分かった。おおきにな」

電話を終えたのか、こちらに向かってこれまた小走りで走って来る。

「オッケーや。1時間遅れても問題あらへんて」

「よかった。じゃあ、皆。シャワーを浴びてロビーに集合ね」

「「「「「はい！！」」」」」

「エリオ、キャロ。話は帰って来てからでいいか？」

「「はい！！」」

「ほな、私達はどうする？」

「私はオフィスに戻ってさっきの訓練のデータをまとめるよ」

「私も付き合っていいかな？」

「うん、いいよ。はやてちゃんは？」

「私も見てみたいな～。さっきやったっちゅー訓練」

「じゃあ、皆。オフィスにレッツゴー！」

「「オー！！」」

回想終了。

「ま、行ってみれば分かるだろ」

「そうですね」

自己完結をした広暁に返事をするエリオ。
自分の中で思考を進めて唐突に結論を出す広暁にも慣れて来たようだ。

「んじゃ、俺は先に出てるな」

「あ、あの…お兄さん！」

「ん？」

「頭、洗ってもらえませんか？」

「頭？いいぞ」

「お願いします」

何気にシャワールームでは初めてのお願い。
夜の入浴では何回かやってもらっているが、シャワールームでは初めてだ。
どことなく恥ずかしそうなエリオ。

そんなエリオの様子に気付かず、シャンプーを手に付けてエリオの頭をワシャワシャと洗う。

「いや～。人の頭洗うなんて久しぶりだな～」

「僕、前にも洗ってもらいませんでした？」

「それを含めて、だよ。友達と温泉とか行っても、２０前後の男の頭なんて洗わなかったしな」

「あはは…」

そんなこんなで男子用シャワールームの時間は過ぎる。

一方その頃、女子用シャワールームでは…

「えっと…スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね？」

「うん、そうだよ」

「訓練校でも前の部隊でも、支給品は杖しかなかったのよ。ほら、今広暁さんが持ってる奴」

「私は魔法がベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし。ティアもカードリッジシステムを使いたいからって」

「で、そうなると。自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね」

「あぁ！もしかして！それで、スバルさんとティアさん、お友達になったんですか？」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って！！」

「えへへ～…。さて、キャロ。頭洗おっか？」

「お願いします！」

「あたし、先にあがってるからね」

「「は～い」」

こちらでも、男子用シャワールームと同じく和やかな時間が過ぎ去る。

（エリオ君、お兄ちゃんと一緒で嬉しそうだったな…。私も、今度はあっちのシャワールームに行ってみようかな？）

それはさすがにまずいのだが。

この時のキャロの願望は、また別の機会で成就することになる。

「皆…まだかなぁ……」

「女性は身嗜みに時間がかかるもんなんだよ……」

「キュクル～」

「キュイ～」

階段で2人の男と2匹の竜がぼやいた。

「そういえば、お兄さん」

「ん？」

「お兄さんのデバイスって、どんな感じなんですか？」

エリオが広暁に聞いてきた。

最近魔法の学習を始めたにも関わらず、今日の訓練を成功に導いた広暁がどのようなデバイスにするのか気になるようだ。

「見てのお楽しみってことで」

「え～。教えて下さいよ～」

ガクガクと広暁の肩を揺らす。

年相応の振る舞いに広暁も頬が緩む。

「だ～め。俺の楽しみがなくなる」

「楽しみ？」

「皆の驚く顔が見たい」

「え～」

そんな感じで、広暁達はフォワード女性陣が来るまで待っていた。

～デバイスルーム～

「うわぁ、これが…」

「あたし達の新デバイス…ですか？」

「そーでーす！設計主任あたし！
協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長！」

「はぁ…」

スバルとティアナの前にあるのは、青い宝石を模したペンダント上のデバイスと、白地に赤いXマークを円が囲み、中央に真っ直ぐ縦線が伸びているカード上のデバイス。

「ストラーダとケリュケイオンは変化無し…かな？」

「うん、そうなのかな？」

「これが俺のデバイス…」

エリオ・キャロ・広暁の前にあるのは、紫色の腕時計と桃色の宝玉を模したブレスレット。
そして、銀色の羽を左右対称に開いたデザインのペンダント。中央に炎の形をした黒い結晶がある。

「違いまーす！」

急にリインが出てきて叫んだ。
今までどこに隠れていたのだろうか？

「変化無しは外見だけですよ！」

「リインさん！」

「はいです！2人はちゃんとしたデバイスの使用経験は無かったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです！！」

「あ、あれで最低限…？」

「ほんとに…？」

自分達がさっきまで使っていたデバイスが最低限の機能しか持っていなかったことにキャロとエリオは驚いている。

「俺のデバイスのデザインて…」

「そうです！ホルスの翼を基にデザインしました！
真ん中の黒い結晶は、ホルスが吐く炎をイメージしたです！！」

「キュイ？」

ホルスがデバイスに近づいてその様を見る。
自分を基にデザインしたと言われれば気になるのも当然ということか。
というか、ホルスに人間の考えたデザインの良し悪しが分かるのだろうか？

「キュキュイ！」

翼を羽ばたかせて歓喜の声をあげる。
よく分からないが納得したようだ。

「広暁さんのデバイスは武器の形状をしたインテリジェントデバイスです。
そして、通常形態を含めた３つのフォームがあるです。
デバイス初心者の広暁さんにいきなり３つもフォームを付けるのはやりすぎかなと思ったんですが、さっきの訓練を見る限りでは大丈

夫と判断したです！」

「ふ～ん…ってあれ？俺が最初に言ったのは2つだけだったような？」

「もう！今朝のはやてちゃんの話を忘れたですか！？ポジションがセンターガードになるから、もう一つ形態を増やすって言ってたじゃないですか！」

「あ～…そういえば。そんなことを言ってたような気がしないでもない」

「まったく…しっかりして下さい！」

「ごめんなさい」

浮いているリインに謝る２０歳の男。シュールな光景だ。

「分かればいいです。では、説明を続けるです」

そう言ってリインがまた別の場所に移動する。

「皆が使うことになる5機は、六課の前線メンバーとメカニックスタッフが、技術と経験の粋を集めて作った最新型！部隊の目的合わせて、そしてエリオ・キャロ・広暁さん、スバルにティア、個性に合わせて作られた文句無しに最高の機体です！！」

説明の途中でリインが両手を広げる。

すると、５つのデバイスが彼女のもとに集まった。

「この子たちは皆まだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められてて一杯時間をかけてやっと完成したです。ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界まで思いっきり全開で使ってあげてほしいです」

リインが説明を終えると、各々のデバイスが主人（マスター）の前に集まる。

「うん、この子たちもね。きっとそれを望んでるから」

（これが俺のデバイス…よろしくな）

「キュイ！！」

「痛！？何すんだよホルス！？」

「キュキュイキュイキュイキュイキュイ！！」

何故だか知らないが、ホルスが怒っている。

広暁の頭を嘴で突いたのだ。

「もしかして…」

広暁の頭に一つの因果関係が浮かび、それを解決する案を思考する。

「お前…デバイスに嫉妬した？」

「キュイキュイ！！」

感情を隠すことなくありのまま鳴くホルス。

俺を忘れるなと言っているのだろうか？

「何言ってんだよ。ホルスもこいつも、俺の相棒だ。どっちが良いなんてことはないから」

そう言ってホルスの首元を撫でてやる。

「キュイ～♪」

解決。

「「「「「「あはは～」」」」」」

今のやりとりですっかりデバイスルームの空気が和んだようだ。

ウィーン。

「ゴメンゴメン、お待たせ～」

和んだところで、部屋になのはが入って来た。

「なのはさ～ん！！」

「ナイスタイミングです。丁度これから機能説明をしようかと」

「そう。もうすぐに使える状態なんだよね？」

「はい！！」

説明中…

「なるほど…」

シャーリーとなのはの説明は、大まかに分けて3つ。

◇デバイスには出力制限がかかっていて、現段階の出力に慣れたら次の出力に行く

◇隊長・副隊長陣には、デバイスだけでなく本人にもリミッターがかかっている。
部隊毎に保有出来る魔導師ランクの総計規模は決まっているので、それを掻い潜る裏技。
だが、滅多なことではリミッター解除の許可は通らない

◇午後の訓練でテストして微調整

「…とまぁ、こんなところかな。そういえば、広暁さん」

「ん？」

「その子の名前、どうするんですか？」

「名前？う～ん…」

考えてなかったようで、腕組みをして思案する広暁。

（やっぱり、ホルスと関係がありそうな名前がいいよな…）

そして。考え終えたのか、腕組みを解く。

「じゃあ、『サジタリウス』で」

「「「「「サジタリウス？」」」」」

「そう。サジタリウス」

「確か…射手座のことだよね？」

広暁を除いた人間で、唯一地球出身のなのはが答える。

「俺の星座でもあるんだけど、ちゃんと別の意味もあるよ」

「別の意味？何ですか、お兄ちゃん」

「それは秘密だ」

「え～。教えて下さいよ～」

エリオと同じように、広暁の手を揺らすキャロ。

「ま、追々教えるよ」

「む～」

怒ったのか、頬を膨らませる。

小動物が怒ったみたいで可愛く、何故がスバルがポ～ッとしている。

「スバル…」

すかさず突っ込むティアナ。

「…ハッ!?ゴメン、今のキャロが可愛くて」

「スバル…そっち方向に走っちゃ駄目だよ?」

「走りませんよ!そもそも、そっち方向って何ですか!なのはさん!!」

照れながら怒るという器用なことをするスバル。
その肩に手を置き、広暁は言った。

「大丈夫…お前はまだ若いんだ。間違ってもやり直せるだけの時間はある」

「広暁さんも乗らないで下さい――――!!」

最初の空気はどこへ行ったのか、デバイスルームで繰り広げられる漫才。

「あ、そうそう。広暁君」

「ん?」

「外でフェイトちゃんとはやてちゃんが待ってるから。『早く行くで～』だって」

「分かった。デバイス持っててっていい？」

「どうぞどうぞ。今の内にその子と友好を深めておいて下さい」

「オッケー。ホルス、行くぞ」

「キュイ」

そう言って広暁は自分のデバイス『サジタリウス』を持ち、部屋を出る。

「お兄さんのデバイスって、どんな感じなんですか？シャーリーさん」

広暁が部屋を出たのを確認した後、さっき広暁に聞いたことを今度はシャーリーに聞く。
やはりまだ気になるようだ。

「う～ん…私も広暁さんから口止めされてるんだよね」

「え～」

「私も。でも、ヒントぐらいならいいんじゃない？」

なのはが提案する。

「そうですね、ヒントぐらいなら」

「ヒントですか？お願いします」

「じゃあ…ヒント1つ目。ミッドチルダではあまり見ない形状のデバイス」

「あまり見ない？」

「そう。2つ目。これがラストね。彼がやっていたスポーツとは関係ない」

「スポーツ…ソフトテニスでしたっけ？」

「じゃあ、ラケットの形状じゃないのかな？」

「そうだよ。広暁君も『用途や形状が違っても、ラケットで戦闘はしたくない』って言ってたし」

「スポーツに使う道具で戦いたくないってことですね」

「うん」

「やっぱり、お兄ちゃんてスポーツマンなんですね」

「そうだね。この1週間でも、筋トレとかランニングとかよくやってたし」

「「お兄さん（お兄ちゃん）てすごいなぁ…」」

「あはは…」

なのはが苦笑する。その理由は先程のオフィスでの会話。

（『私のことはお母さんともお姉ちゃんとも呼んでくれないのに…広暁君だけずるい…』
ってフェイトちゃんが言う理由も分かるなぁ…。
広暁君て年下の子に好かれやすいのかな？）

なのはの考えもあながち間違ってはいないが、正しいとも言い難いのが実情だったりする。

「それじゃあ、皆。デバイスを持ってオフィスに行くよ。
今日の午前中はデスクワークだからね」

「「「「はい！」」」」

一方その頃、六課隊舎前では…

「む～」

「フェイトちゃん、そろそろ機嫌直さな」

「分かってるんだけど…」

「そんなに気になるなら、広暁に直接聞いてみたらええやん」

「それも…そうだね」

2人が話しているのは、先程なのはが考えていたことと同じ。

『フェイトのことをエリオとキャロがお母さんともお姉ちゃんとも呼ばない』

今までは気にしてなかったが、2人が広暁のことを兄と慕うようになってからは顕著になった。

何としても呼んでもらおうと、さっきの時間は色々と策を考えていたのだ。

一体この執務官は何を考えているのだか。

（にしても、お兄ちゃんか…これはこれで攻め手になるかもしれんな…）

部隊長、あなたもか。

「あ。広暁君、来たみたいだよ」

「お～来た来た。広暁～」

「ごめん。待たせた？」

「ううん。それほどでも」

「1時間ぴったりや」

「計ってたのかよ…」

「冗談やで？」

「はいはい…」

はやてが広暁に好意を持っているのは確かなのだが、これではあれだ。
好きなクラスメートの女子をいじめる小学生男子だ。
性別が逆だし、そもそも2人はいい大人なのだが。
これでは広暁が気付くはずもない。

「ん？俺ってどこに乗ればいいの？」

ここで広暁が気付いたのは車のどこに座るか。
フェイトの車は2人乗りであり、フェイト・はやて・広暁の3人が乗るには座席が足りない。

「それなら問題ないよ」

ポチッ。

フェイトが車に取り付けられているボタンを押すと、車の後部の方が変形する。
すると…

「座席が出来た…」

「便利やろ？」

「確かに」

2人乗りの車が5人乗りになった。魔法恐るべし（今更？）。

「ほんじゃま、失礼しま～す」

広暁がそう言って車に乗り込もうとすると…

ガン！！

「痛！？」

「だ、大丈夫！？」

「何やってんねん、広暁」

車の上部に頭をぶつけてしまった。

ボックスカーや軽自動車ならともかく、フェイトの車は見た目スポーツカー。

身長１８４ｃｍの広暁には車高が低すぎた。

「背が高いってのも不便なもんやな～」

「いった～…たまにやるんだよな」

そう言いながら広暁が改めて車に乗り込むが…

「低い…」

天上に頭がぶつかっている…というか、首を６０度ほど横に傾けてようやく高さが丁度いい。

「広暁には悪いけど、このまま行くからな～」

「ご、ごめんね？広暁君」

「気にしないでいいよ…もっと浅く座るから」

そう言って広暁は尻を前に出し、足を伸ばして浅く座る。
行儀悪いが、首を痛めないためにもこれしか方法がない。
さすがに寝転ぶわけにもいかないのだ。

「行儀悪いな～」

「仕方ないよ、はやて」

「ま、それもそうやな。ほな行くで～」

「運転するのは私だけどね」

こうして3人は六課を出た。

第１３話「新デバイス」（後書き）

第１３話終了。
広暁のデバイスは一体何でしょうか？
何気に今までの話に伏線も張っていますが、もし分かる方がいたら感想で答えていただけると嬉しいです。

…というか、サジタリウスって名前だけで分かりそうですね。

ではでは。ご意見・感想・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第１４話「芽生える心・敵対する心」（前書き）

第１４話です。
今回は少し短いです。
といっても最近の話が長かったんですけど…。

まあいいでしょう（オイ！）。
それでは。
第１４話、始まるよー！

第１４話「芽生える心・敵対する心」

～ミッドチルダ北部ベルカ自治区『聖王教会』大聖堂～

ここは聖王教会大聖堂の入り口前。
そこに佇むのは１人の管理局員と１人の民間協力者と１匹の竜。
といっても、ホルスはカバンの中に入っており、その隙間から青い目を覗かせているのだが。
最初は入るのを嫌がると思ったのだが、意外なことに乗り気で入ってきた。
案外狭いところが好きなのかもしれない。

「う～ん…」

≪どうされました？マスター≫

「サジタリウス…。いやさ、教会って苦手なんだよ」

≪教会が苦手？何故ですか？≫

「…誰にも言うなよ？」

≪私のメモリーに保存されますが≫

「じゃあ、誰にもその情報を見せるなよ？」

≪分かりました≫

「実はさ、なんつーかこう…落ち着かないんだよ」

≪落ち着かない、ですか？≫

「ここの教会のことはよく知らないんだけどな。
俺の知ってる教会だと、どこの教会でも常に誰かに見られてる感じがしてさ。
どうしてもそっちの意識が先行するんだ」

≪なるほど、私には分からない感覚ですね≫

広暁が話した内容はデバイスであるサジタリウスには理解できるものではなかったらしい。
簡潔にまとめられた感想は、冷たく広暁の心をえぐる。

「……ちょっとは同情してくれたり反論してくれてもいいんじゃないか？」

≪情報としては記録されていますが、それに対する感情は持ち合わせていません≫

「……不幸だ」

≪何故ですか？≫

「気にするな、ただの戯言だ」

≪分かりました≫

「キュイ？」

何故こんな会話をしているのかというと、

「聖堂の中に入るには巡礼用のケープが必要ですので、少々お待ち下さい」

と、出迎えに来た教会の職員が言ったためだ。
制服では巡礼者を不安にさせてしまうためらしい。

その時間を持て余して周りを見ていた広暁にサジタリウスが反応したのだ。

「『カリム・グラシア』さんだっけ？どんな感じの人なの？」

「仕事は出来るし美人なんやけど…上司って感じはせーへんな。どっちかっちゅーとお姉ちゃんって感じや」

「お姉ちゃん？」

「そ、お姉ちゃん」

ここでまた一つ、広暁の中に疑問が生まれた。

（六課設立に最も貢献した人で、六課最高の後ろ盾。んでもって、管理局本局理事官。
それなりに年がいった人を想像してたんだけど…）

そう、年齢である。
はやてにしろフォワードメンバーにしろ、皆自分より年齢が下だ。
魔法という力のおかげで、ミッドチルダでは就労年齢が低いというのは分かっていた。

しかし、今のはやての話を聞いた限りでは、カリム・グラシアの実像が上手く作れない。
また、先程から広暁の周りを歩いている職員の方を見ると、どう見ても広暁より年上だ。

（お姉ちゃんだから少なくとも２０歳よりは上だろうけど…同い年ってのもきついよな…）

広暁が思考の渦にはまりそうになっていたところ、そこにある意味救世主が現れた。

「お待たせしました。こちらをお召の上、私に付いて来て下さい」

「おおきにな」

「はい」

先程の職員である。
渡されたケープを身に纏い、２人は職員の後に付いて行く。

～カリムの部屋～

コンコン。

「どうぞ」

「「失礼します」」

ノックして部屋に入る。
部屋に入った2人はケープを取った。
ついでにホルスもカバンから出す。

「カリム、久しぶりや」

「はやて、いらっしゃい」

（若!?）

そこにいたのは妙齢の女性。
腰までとどく金髪を紫色のリボンでカチューシャ風にまとめている。
年齢は広暁より少し上、23～25といったところだろうか？
広暁と大して年は変わらないようだ。

「こちらの方が？」

「そやで」

「初めまして。聖王教会騎士団の騎士、カリム・グラシアです。カリムと呼んで下さいね？」

「機動六課で世話になっている、次元漂流者で民間協力者の墨谷広暁です。
よろしくお願いします…カリムさん」

「カリムで構いませんよ？」

「すいません。名前を呼び捨てというのはさすがに…」

「はやてのことは呼び捨てと聞いたけれど？」

チラッ。

広暁がはやての方を見る。

はやてはニヤッと笑った。

ピキッ。

広暁の額に一筋の稲妻が走る。

ちょっと怒った。

「分かりました…カリム」

「はい、よく出来ました～」

根負けしたのか、早速弄ばれている。

お姉さん属性とでも言うのだろうか？

「そちらの竜が…？」

「せや。広暁のパートナー、ホルスや」

「そうです。正式名称は長いんで、ホルスと呼んでやって下さい」

「キュイ！」

フフッとカリムが笑う。

見る人全てが虜になるような笑顔だ。

お姉さん属性も合わさって、聖母を感じさせるような人。
それがカリム・グラシアだろうか？

「分かったわ。では、こちらに。紅茶を飲みながらゆっくりと話しましょう」

「おおきにな」

「はい」

「これガジェット…新型？」

「今までの？型以外に新しいのが2種類。
戦闘性能はまだ不明だけど…これ。？型は割と大型ね」

ゴクッ。
広暁が紅茶を飲む。

「本局にはまだ正式報告はしてないわ。
監査役のクロノ提督には、障りだけお伝えしたんだけど」

「これは…！！」

「それが今日の本題。一昨日づけでミッドチルダに運び込まれた不審貨物」

「レリック、やね」

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし」

「ガジェット達がレリックを見つけるまでの予想時間は？」

「調査では、早くて今日明日」

「そやけどおかしいな？ガジェットが出てくるのがちょお早いような…」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか」

サクッ。

広暁がクッキーを食べる。

（何で俺、ここにいるんだろう…？おもいっきり場違いだよな？挨拶だけして外で待ってればよかったんじゃ…）

今更気づいても遅いのだが。

それでも2人の会話は続く。

「レリック事件もその後に起こるはずの事件も、対処を失敗するわけにはいかないもの！！」

（…ん？まるでこの先何が起こるか分かってるような言い方だな…）

カリムの言ったことに対し、広暁が反応する。

口には出さず、態度にも表れないのは広暁の地の性格故だろう。
広暁が言葉の意味を考え始め、ふとはやての方を見ると、

（はやて？）

はやては何かを決心したような目で空間ディスプレイをいじっていた。

ピッピッピ。

カーテンが開き、暗い空間に一気に光が降り注ぐ。
急に明るくなったため、広暁は眩しさのあまり目を手で隠す。

「まぁ、何があってもきっと大丈夫。
カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。
即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。
予想外の緊急事態にも、ちゃんと対応できる下地が出来てる。
そやから、大丈夫！」

「はやて…そうね、はやてが言うならきっと大丈夫よね。
優秀な新人が隣にいるみたいだしね」

「広暁も結構強いで～？」

「いやいや」

広暁が顔の前で指を揃えた右手を横に振る。
日本でいう拒否兼謙遜のポーズだ。

「そんな謙遜せんでええやん。初めてガジェットと戦った時の映像、

かっこよかったで？」

「あれはホルスのおかげだろ」

「そやったっけ？」

「１０割そうです」

「キュイ？」

「フフッ」

先程の張りつめた空気とは違い、和やかな空気が部屋を包み込む。

（ねえ、はやて？）

（どうしたん、カリム？いちいち念話せーへんでも…）

以降、念話でお送りします。

（あなた、広暁君のこと好きでしょ？）

（ブッ！！何を言うんや、カリム！？）

（違うの？）

（違う違う！そんなことあらへん！！）

（じゃあ、私が広暁君を好きになっても構わないわよね？）

（へ！？え、いや、え！？あれ！？）

（何を動揺してるのかしら～？）

（え～と、その…）

（やっぱり好きなのね？）

（……）

（沈黙は肯定と受け取るわよ？）

（あー、もう！そうです！！私は広暁のことが好きです！！！）

（やっぱり。もう、素直じゃないんだから）

（うぅ…そんなに分かりやすかった？）

（何となく気付いただけよ。分かりやすいって程のものじゃないわ）

（そーかぁ、良かった。…うん？ちょー待て）

（どうしたの？）

（さっきカリム、『私が広暁を手篭めにするわよ？』って言わんかったか？）

（そこまでは言ってないわよ？『私が広暁君を好きになっても構わ

ないわよね？』って言ったのよ）

（それ、ホンマか？）

（何が？）

（カリムが広暁のことを好きっちゅーことがや！）

（う～ん…どうなのかしら？）

（はぁ！？）

（こんな感情、初めてなのよね。
さっき初めて彼を見たら、全身に電流が走ったような感覚がしたの。
それでさっき、ちょっとボーッとしちゃったのよ）

（そうは見えへんかったけどな。さすがカリム）

（いえいえ、それほどでも）

（…ってちゃーう！カリム、それは一目惚れや！！）

（一目惚れ？これが？）

（せや！初めて会う男！全身を走る電流！正に一目惚れの代名詞やないか！
ってゆーか、今まで一目惚れを経験したことが無かったんか！？）

（そうみたいね。でも、本当に一目惚れなのかしら？）

（そうに決まってるて！）

（へぇ、でも…）

（どうしたん？）

（私が今までに会ったことのないタイプの男性なのよね、広暁君。
ヴェロッサみたいな、キザな優しさとは違う。
クロノ提督みたいな、不器用な優しさとも違う。
無限書庫司書長のユーノさんみたいな、無償の優しさとも違う。
広暁君は、親身になって心配してくれる優しさを持ってるような気がするの。
それに、彼といると何だか落ち着くのよね）

（よくこの短時間でそこまで分かるな。
ってゆーか、ヴェロッサが聞いたら泣くで、さっき言ったこと）

（伊達にあなたより長生きはしてないわ…ところで、彼の年はいくつ？）

はやての意見はスルーされた。

（確か…２０歳（はたち）ゆーてたな）

（２０歳…４こ下ね…）

カリムの年がばれたが、当然広暁は気づかない。
もし気づいたとしても「予想が当たった」ぐらいにしか感じないだろうが。

（カリム？まさか…）

（話はここまでよ、はやて。広暁君が不審に思ってる）

（ちょ、おま…）

念話終了。

ちなみに、お互いのマルタチスクをフル活用したため、僅か１０秒で済んだ。

「仕事の話ですか？」

「そんなところです。ごめんなさいね」

「いえ、お気になさらず。挨拶しただけで出てかなかった俺が悪いんですから」

「そんなことないわよ？はやてが言ってた民間協力者のことがよく分かりましたから」

「この短時間で？」

「はい♪」

「凄いですね…」

念話の内容を知らない広暁は、カリムが言ったことに感嘆のため息を漏らす。

その顔は純粋に驚いているようであり、働く人の凄さを思い知ったといった感じだ。

「そ・れ・と」

「はい？」

「敬語でなくても構わないわよ？」

「いえ、さすがにそこまでは…」

「か・ま・わ・な・い・わ・よ？」

「…分かった」

「よろしい♪」

（この人もはやてと似てるよな…人をからかって楽しむ癖でもあるのか？）

あながち間違ってはいないが。

さすがにこの段階で気付けと言うのは酷だろう。

「そういえば。広暁君のデバイスってどのような形をしているのですか？」

「俺のデバイス？」

広暁が不思議に思う。何故自分がデバイスを持っているのを知っているのかと。

（そういや…カリムと電話してたよな、はやて。その時に言ったのか？）

相変わらず思考が早い。
はやてはカリムに遅刻の連絡をした時に、新人が新しいデバイスを受け取ることを言っていたのだ。

（まぁ、見せても構わんだろ。六課の後見人だし）

そう考えた広暁は、制服の上着のポケットから一つのペンダントを取り出す。
銀色の羽を左右対称に開いたデザインの中央に黒い炎の形の結晶があるデバイス、サジタリウスだ。

「こいつが俺のデバイス、『サジタリウス』です」

「これが…なるほど、このデザインはホルスの翼を模しているのね」

≪さすがです、騎士カリム≫

「よろしくね？サジタリウス」

≪こちらこそ。マスターとホルス共々よろしくお願いします≫

「フフ。ええ、分かったわ」

勝手に広暁とホルスのことを頼んでやがりますよ、このデバイス。

「ペンダント型ですか」

「ええ。デザインは特に希望してなかったんで」

「でもこのままだと、携帯に不便じゃありません？」

「それは…まあ、確かに」

「ちょっと待って下さい」

そう言ってカリムは席を立ち、先程まで座っていた机の引き出しを開ける。
机の中に探し物があったのか、それを持つとまた席に戻って来た。

「これを使って下さい。昔使っていたリボンですけれど」

カリムが広暁に渡したのは、彼女が首元にしているのと同じ、紫色のリボン。
だが、広暁が受け取った方のリボンはかなり細く、紐と言っても差し支えない細さだ。

「昔はそちらのリボンを使っていたのですけれど。
シャッハ…私の秘書に今付けている方を進められましてね。
そちらのリボンは今、使ってないんです」

「いいの？思い入れとかあるんじゃ？」

「確かに思い入れはありますけど…使わないリボンをとっておいてもリボンが可哀想ですから。
そのリボンも使ってもらった方が嬉しいでしょうし」

「分かった。そういうことなら、もらっていい？」

「ええ、どうぞ」

そう言って広暁はリボンを受け取ると、サジタリウスの上部にある穴にリボンを通し、両端を結んで首に通し、Ｙシャツと制服の間にサジタリウスを滑り込ませる。

「あら？隠してしまうの？」

「首からペンダントをぶら下げてる管理局員はまずいと思うけど？」

「フフ。だったら仕方ないわね」

カリムとの談笑に花を咲かせる広暁。

２人共本当に楽しそうに話しているあたり、本心での会話なのだろう。

（む～……）

その様子を面白くなさそうに見つめる…というか睨みつけているはやて。

（カリム…抜け駆けは許さへんで？）

（こういうのは早い者勝ちよ？）

（小癪な真似を…！！）

（どうぞご自由に）

バチバチッ！！

２人の間で火花が散る。

というか、念話を使わずに視線だけで会話しているように見えるのは気のせいだろうか？

うん、気のせいだろう。

（何だ？もしかすると…いやまさか……う～ん……）

広暁も何かに気付いたようで、経験と考察と勘から結論を導き出すが…。

（いや、さすがにそれはないだろ。もしそうだとしたらはやては小学生だし、カリムは行き遅れだ）

出した結論に対し、それはさすがにありえないとばかりに批評する。

その内容はかなりひどい。

（でもなぁ…ありえないとも言い切れないしなぁ…）

簡単に物事を否定出来ないのは理系人間の悲しい性だろうか？

この用心深さが今後の広暁の命を救うことになるのは、今はまだ秘密にしておこう。

そんなこんなでカオスな空間が形成されつつある中…

ビービービー！！

「「「！？」」」

部屋の中にけたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

～機動六課オフィスルーム～

「終わらないよー！」

「まったく…」

「キャロ、ここは？」

「ここはこうして…」

「みんな～。時間までに終わらないと明日までの宿題ってことになるからね？」

オフィスでは報告書の作成に追われる４人の姿が。

ティアナは終わっており、エリオとキャロも８割がた終わっているが、スバルに至ってはまだ半分もいってない。

「ノーーーーー！！」

「うわ！？スバルが発狂した！？」

「「スバルさん！？」」

「まったくもう…」

ある意味平和な光景だが、これでは先が思いやられる。

すると…

ビービービー！！

スバルの声を上回る音がオフィスに鳴り響いた。

「このアラートって！？」

「一級警戒態勢！？」

「グリフィス君！」

『はい！教会本部から出動要請です！』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて！』

「うん」

『状況は？』

『教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。
場所はエイリム山岳丘陵地区。
対象は山岳リニアレールで移動中』

『移動中って!?』

「まさか!?」

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。
リニアレール車内のガジェットは最低でも３０体。
大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん。
ハードな出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか?』

『私はいつでも』

「私も」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオッケーか?』

「「「「はい!」」」」

『よし、いいお返事や。シフトはAの3。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制』

「「はい!」」

『なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮』

「うん」

『ほんなら…機動六課フォワード部隊、出動！』

「「「「はい！」」」」

『了解。皆は先行して。私もすぐに追いかける』

「うん！」

……。

……？

「あれ？お兄ちゃんは？」

キャロの呟きは泡沫の如く、オフィスの喧騒に消えた。

第１４話「芽生える心・敵対する心」（後書き）

あ、ありのままこの間起こったことを話すぜ！

「普通にカリムとの絡みを書いていたら、いつの間にかカリムルートが出来ていた」

な…何を言ってるのか分からないと思うが、俺も何が起きたか分からなかった。
頭がどうにかなりそうだった…。
気が付いたら書いていたとかつい調子に乗ったとかそんなチャチなもんじゃ断じてない。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

…はい、すみません。第３話の使い回しです。
ホント、何でカリムルートが出来たんだろう…。
私としては、他の方が書かないような相手を広暁とくっつけたかったんですけど…何故にカリム！？

まあ出来たものは仕方ないので、これからも書き続けていきます。
ちなみに、カリムの年は予想です。
クロノと同い年ぐらいに見えたので。

それでは今回はここら辺で。
ご意見・感想・訂正等、お待ちしています。

第１５話「サジタリウス」（前書き）

第１５話です。
前回の話通りだとカリムルートも…。
おっと、これ以上はネタばれになりますので言えませんね。

それでは第１５話をお楽しみください。

第15話「サジタリウス」

～再びカリムの部屋～

「さてと。広暁には初めての出動やな」

「だな…」

「何や？えらく不安そうやな？」

「そりゃな。いきなりガジェットと戦うわけだし…」

「最初にガジェットと戦った時のことを忘れたん？」

「あの時は無我夢中だったし。生きるか死ぬかって考えてたから。
でも、今回は任務。俺の失敗が六課全体に迷惑をかけると思うと…」

バシッ！！
はやての手が、広暁の背中をおもいっきり叩く。

「痛！？何すんだよ、はやて！？」

「辛気臭い顔すな！男は度胸！！黙って突き進め！！！」

「んな無茶な…」

「あんたはこの1週間で、魔法を何年も学んできた他のフォワード4人と同じ位置まできたんやで!?まだ一つも攻撃用の魔法使えないのに!!」

「え!?ちょっとはやて!?それホント!?」

「せやで!まだ出来るのは魔力弾の生成とバリア、飛行と念話ぐらいや!」

「そんな状態で広暁君を出動させる気!?」

「大丈夫!広暁ならやってくれる!広暁は、それだけの武器を持ってる!」

「俺が持ってる武器って…」

サジタリウスを見る。

≪何でしょうか?マスター≫

「キュイ!」

俺もいるぞとホルスが突っ込む。

「デバイスでもホルスでもない!あんたのその眼!そして頭脳!それこそがあんたの武器やろ!?」

「…まぁ、確かに」

今までかすり傷が限界だったシュートイベーション。

そこでなのはにあそこまでのクリーンヒットをあたえる作戦を考えたのは広暁だ。
その頭脳を力と言わずして何と言おうか？

「だったら、自分の武器に自信を持って突き進め！
フォローはなのはちゃんとフェイトちゃんがしてくれる！
だからおもいっきり行け！！」

「……」

広暁が黙り込んでしまった。
といっても、はやての言葉に気圧されたわけではない。

（俺がミッドチルダで見つけるべき新しい道…。
これがその第一歩なら…臆するわけにはいかないよな！）

どうやら覚悟が決まったようだ。
広暁自身も自分の中で一本の柱が出来たのだろう。

「ありがと、はやて。柄にもなく消極的になってたな」

「そうそう、その意気や」

（それに…練習してたあれもあるやろうしな）

「健闘を祈ります、広暁君」

「カリムもありがと」

「どういたしまして」

「さてと！広暁に闘魂を注入したところで、今後の行動を決めるで」
はやてにどこぞの元プロレスラーが乗り移ったような気がするが。
そんなことはないだろう。
「さっきも言った通り、場所はエイリム山岳丘陵地区や」
「いや、場所知らんし」
「場所のデータはサジタリウスに送っとくから、それを基に移動して。
大まかに言うと、ここから北西に約４０ｋｍや」
「分かった」
「シャッハ。はやてを送ってあげて。機動六課の隊舎まで、最速で」
『かしこまりました、騎士カリム』
「聖堂の裏に出て。シャッハが待ってる。
広暁君も。飛び立つなら、あそこは目立たないから」
「おおきにな、カリム。今日のお茶、美味しかったよ」
「ご馳走様でした」
「フフッ」
「さてと。ほな行こか？」

「おう！」

「…何でカリムがここにいるの？」

「そうです、騎士カリム。早くお部屋に戻られたほうが…」

ここは聖堂の裏。
そこには車の前で待つ修道服を着た女性シャッハと、何故か先程別れたカリムがいた。

「いいじゃない。大きいホルスの姿を見たいし、広暁君のバリアジャケットも気になるし」

「後者が本音やろ…」

「何か言ったかしら、はやて？」

「いえいえ、何も？」

先程の真面目な空気はどこへ行ったのか、２人は敵対心剥き出しだ。
そんな２人を呆れ顔で見つめる広暁とシャッハ。

（…ごめんなさい）

（いえ、お気になさらず）

そんなやり取りが聞こえてきそうだ。

「まぁ、カリムの気持ちも分からんでもないけど…私も見たいし」

「…俺は見世物ですか？」

「細かいことを気にしたら負けやで？」

「へいへい…」

広暁にとって、巻きこまれ役ポジション兼苦労人ポジションはどうやら確定事項のようだ。

「はぁ…んじゃまぁ、行きますか」

「キュイ！」

「ホルス。先に頼む」

「キュキュイ！」

ボオオォォ！！

黒い炎が小さなホルスの身体を包み込む。

その炎は段々と体積を増し、炎が晴れるとそこには…

「グオオォォ」

大きくなったホルスが。
場所をわきまえているのか空気を読んでいるのか、大声で吠えないのは大したものだ。

「これが…ホルスの本当の姿…」

「大きい…」

「うわ～…」

三者三様の声を漏らす。
言葉こそ違うものの、感嘆しているところは3人共変わらない。

「さてと。次は俺達だ」

≪了解です、マスター≫

「サジタリウス…セットアップ！！」

≪セットアップ≫

サジタリウスの声と共に、広暁が黒い球状の光に包まれる。
その光はまるで炎のように広暁を包み込む。
広暁の身体が浮かび上がり、徐々にその服が変わっていく。
光が晴れるとそこには…

≪バリアジャケット・シューティングフォルム≫

「これが…俺のバリアジャケット……」

バリアジャケットを身に纏った広暁がいた。
どうやらこのフォルムはシューティングフォルムというらしい。

黒のインナーに深緑色の長袖の上着。
同色の長ズボン。
黒いベルトをしており、手には同色のオープンフィンガーグローブ。
腕に銀色のプロテクターがついており、向う脛にもプロテクター。
銀色のメタリックな靴、折りたたまれて額に巻かれている迷彩柄のバンダナ。
だが何より目を引くのは…

「何故にマント？」

そう、マントだ。
首の下で銀色の留め具で止められているのは白いマント。
黒線で縁取りされたそれは、所々に金色の三角形が入っている。

「これ必要なのか？」

「それはシャーリーに聞かんと分からんな～。防御力上昇が目的なんやないか？」

広暁自身はバリアジャケットのことなどよく知らなかったので、武器に合ったタイプで希望したのだ。
…正直バンダナも必要ないような気がするが。

ちなみにこのフォーム、高速機動補助をベースに防御面にも考慮したフォームだったりする。

そして、広暁が左手に持つデバイス『サジタリウス』。

その形状は…

「弓…？」

「弓やな」

「弓ですね」

「天翔（あま）ける弓『サジタリウス』。それがこいつだ」

弓だった。

黒色を基調としたその弓は、持ち手の部分はおよそ拳3つほどで色は銀色。

そこから伸びる黒色の節は、弓にしては大きくて太めだ。

節の内側の持ち手側には2つのカードリッジスロットがある。

弦は銀色だ。

「反りは結構浅いけど…何かシグナムのボーゲンフォルムに似てるような……」

「シグナムのデバイスって剣だよな？ってことは…遠距離対策か？」

「さすがやな、広暁。近接主体のベルカ騎士にとって、遠距離は鬼門や。

それを克服するための対遠距離一撃必殺形態。それが『ボーゲンフォルム』や」

「へぇ」

「…ってそんなこと言ってるんやない！」

「ん？」

「あんた、弓使えるんか？」

「……まぁ、それはお楽しみってことで♪」

「はぁ！？」

「ホルス、行くぞ」

「グォォ」

シュタッ。

広暁がホルスの肩に飛び乗る。

そして…

「ライトニング０５、墨谷広暁。推して参る！」

バサッバサッ！！

ズドオオォォン！！

ピキイイイィィィィン……。

「…行ってしまいましたね」

「そやね…」

「『推して参る』ってどういう意味なんですかね？」

あっとゆう間に飛んで行ってしまった。
取り残された3人は、三者三様の声を漏らす。

「彼なら大丈夫でしょう。出来ない事を口にするような人ではないでしょうから」

シャッハの疑問は軽くスルーされた。

「まあ、確かに。広暁ならそうやろな。それと…カリム」

「はやて?」

「どやった?広暁は?」

先程までの緩慢とした空気が消え、凛とした空気になる。
空気の変化を感じたカリムも、努めて真面目に言葉を返す。

「……まだはっきりとしたことは分からないわ。だけど…彼ならやってくれそうな気がする」

「随分と曖昧な答えやな?カリムらしくないで」

「さすがに私だってハッキリとは言えないわ、彼のことはまだよく知らないのだし。
それでも…彼なら変えてくれそうな気がするの」

「…そうか。カリムがそう言うんなら、そうなんかもしれんな」

「ええ、彼なら…」

2人の呟きを聞いていたのはシャッハ1人だけだった。

「でも、広暁君を渡す気はないわよ?」

「ちょ!?今ここでそれを言う!?」

「騎士カリム、それはどういう意味…」

「シャッハ？」

「はい！？」

どこか怒気を含んだ声でシャッハの名前を呼ぶカリム。
笑顔なのが余計恐い。

「早くはやてを六課の隊舎まで送ってあげて」

「わ、分かりました！騎士はやて！！いざ参りましょう！！さあ参りましょう！！」

「ちょ、シャッハ！？そんな無理矢理車に押し込まんでも…！！」

カリムの威嚇というか醸し出す空気に気圧されたのか、はやてを車に押し込むシャッハ。
体が小さいためすんなりと入るところが広暁と違う。

「では！全速前進です！！」

グワアァン！！

おもいっきり車のアクセルを踏み込むシャッハ。
その仕草には、安全運転の欠片も感じられない。
余程カリムの笑顔が怖かったのだろう。

「言っとくけどなーカリム！広暁と一緒にいられる時間は私のが圧倒的に長いんやでー！！」

助手席の窓を開け、カリムに向かってはやてが叫ぶ。
アクセル全開で超加速の車にも関わらず。

「騎士はやて!?危ないですからお止め下さい!!」

「だからー!圧倒的に私に分があるわけやー!!絶対カリムには負けへんでー!!!」

「騎士はやて!!」

グワシッ!!

「おぅふ!?」

左腕で器用にはやての首根っこを掴み、車の中に引きずり込むシャッハ。
慣れているように見えるのは気のせいだろう。

(帰ったら詳しいことを聞かないと…!!)

そのまま車は走り去っていく……。

「フフッ、こんな気持ち初めてね。だけど、私も負ける気はないわよ?
それに、一緒にいられる時間が長ければいいというものでもないん

だから」

1人聖堂裏に佇むカリムが小悪魔のような笑顔で呟いた。

その声を聞く者はここにはいない…。

第１５話「サジタリウス」（後書き）

広暁のデバイス『サジタリウス』。
その正体は…弓でした！

サジタリウスは日本語で『射手座』。
ケンタウロスが弓を引く姿で有名ですね。

ちなみに伏線は主人公設定の後書きにありました。
『作者の周りで遊戯王やってる人間で、ソフトテニス部の次に多いのが弓道部』。

…分かりにくいですね、申し訳ありませんでした！！
次やる時はもう少し分かりやすいように頑張ります！

広暁のバリアジャケットですが、辺境自然保護隊の制服をもっと濃くした感じだと思っていただければ分かりやすいです。
弓を使うならバリアジャケットはやっぱり緑かなと。

次回からいよいよ戦闘に入ります。
広暁とホルスの活躍にご期待下さい。

感想・訂正・意見等お待ちしております。

第１６話「射手ｖｓガジェット」（前書き）

第１６話です。
広暁の初陣は果たしてどうなるのでしょうか？
では。

第１６話、始まるよ～！

ｐ．ｓ
ＰＶ１０万アクセス、ユニーク１万アクセス、お気に入り１００件突破！

第１６話「射手ｖｓガジェット」

～エイリム山岳丘陵地区上空～

広暁が狙うのは3機で編隊を組み飛行しているガジェット?型。
それらを一直線上に捉えられる位置に移動する。

「明鏡止水」

ピチャン…。

平らな水面に一滴の水滴が落ち、波紋は消えて水面は鏡のように。

キュイィィン。

右手に黒色の魔力が集まり、矢へとその形状を変化させる。

スッ。

引くのではなく下ろす。

ギイィィ……。

「遠距離狙撃用スコープ展開」

≪スコープ展開。標的までの距離９５ｍ。伏角２４度≫

狙いを定め…。

「一撃必中」

…放す。

パアアァァン！！

シュイイイィィィィィン……。

シュンシュンシュン！！！

ドガアアアアァァァン！！

放たれた矢は一直線に飛び、寸分違わずガジェットのを貫き、その機体を爆発させた。

「あと…１０機か」

≪マスター≫

「どうした？」

≪マスターの戦闘スタイルならガジェットに近づくのは得策ではないでしょう。
ですが経験を積むためにも、近中距離での乱射戦をするべきです≫

「…やっぱり？」

≪勿論です≫

「…俺が一気に作れる矢はまだ1本だけだし、大量に作るとなると一本一本連続で作る必要がある。
もしくは、魔力弾を作ってそこから矢の形に収束せんといかん。
近中距離戦でそんな時間があるか？」

≪私が補助します。今のマスターの力量なら１０本まで矢を作れますから≫

「もっと腕を磨けばお前が作れる矢の量も増えるのか？」

≪その通りです≫

「うーん…そういうことならいいか。誘導も付けてくれるか？」

≪了解です≫

現在エイリム山岳丘陵地区上空では、激しい空中線が行われている。
なのはの砲撃がガジェットを破壊し、フェイトの斬撃がガジェットを切り裂き、広暁の狙撃がガジェットを貫く。
ちなみにホルスは…

「グオオォォ！！」

グシャッ！　メシャッ！　バキッ！

ガジェット相手に空中で肉弾戦を行っている。
最初こそ炎を吐いたり、炎を矢や槍の形に収束して放ってガジェットを破壊していた。

だが。

「グオオォォォ！！」

途中で面倒臭くなったのだろう、今では手足に炎を纏って殴る蹴るの肉弾戦をやっている。
ちなみに、撃墜数はなのはについで2位。
3位はフェイト、4位は広暁であることを補足しておく。

（ホルスがいれば俺いらなくね…？）

と、広暁もつい考えてしまう程の撃墜っぷりである。
実際は広暁がいなければホルスも付いて来ないので、いるだけで役に立っているのだが。

「ホルスー！無茶するなよー！？」

「グオォ！」

分かっている、と言っているようだ。
危なくなったら戻って来るようにいってあるし、なのはやフェイトの邪魔もしていない。
ときたまフォローされたりフォローしたりしているようなので、今はまだ問題ないだろう。
一緒にいろよという突っ込みもありそうな気がするが、こちらの方が効率がいいのだ。

「それにしても」

≪どうされました？≫

「なんか…すんなり行き過ぎのような……」

≪すんなり…ですか？≫

「ああ…」

～回想中～

「しっかし速いなあ」

広暁はリニアレールに向かっている途中であり、今はホルスの肩に乗っている。
自分より速いホルスの飛行速度に最初こそ驚いたが、今ではすっかりこの飛行を楽しんでいる。
風にたなびくマントがかっこいいと思っていることは秘密だ。

≪マスター。後2分で目的地に着きます≫

「ありがとさん。そういやさ」

≪何でしょうか？≫

「お前に付いてる機能ってどんなのがある？」

≪遠距離狙撃用スコープ・弓を放つ際の反動防止・構える間の防御用バリア・張力の変化。
他にも、放つ矢に対して誘導性能を付与することが出来ます≫

「なるほど…放った矢に空気抵抗はあるのか？」

≪マスターの矢は魔力を収束したものです。
そして、魔力は空気中の魔力素をリンカーコアで生成した物。
そのため、魔力素が遍在する空気中を進んでも空気抵抗は無きに等しいでしょう。
補足しますと、私から放たれる矢は古来の武器である弓と違って段違いの威力と速さです。
また、インテリジェントデバイスといえど、武器を模している私は頑丈です。
近接戦闘になることがあっても遅れはとらないでしょう≫

「なるほど、サンキューな」

≪お気になさらず≫

さらりと自慢してのけるサジタリウス。
自分の良さを自慢したくなるのは人もデバイスも関係ないようだ。

「そういえば」

≪どうしました？≫

「俺が矢を作れることには突っ込まないんだな？」

≪マスターが矢を作れることは、既に情報として書き込まれていました≫

「ってことは…誰かに見られてたってことか？」

≪何をですか？≫

「矢を作る練習をしてたところ。時間を見つけては隠れてやってたんだけどな」

≪その可能性が非常に高いですね≫

「はぁ…」

実際、機動六課内ではプライバシーは有って無いようなものだが。そこは個人のマナーに委ねるとしよう。

「にしても…久しぶりだな、この感覚」

≪感覚、ですか？≫

「ああ。弓…弓道をやってた時期が昔あってな。つっても、もう8年以上持ってないけど。だからさ」

≪何でしょうか？≫

「向こうについて1射目に放つ矢は何も手を加えないでくれ。補助も無しだ」

≪理由を教えていただけますか？≫

「昔の感覚を取り戻せるかどうか試したい」

≪了解です≫

（ま、和弓と洋弓じゃ弓自体も構えも違うんだけどな。そこは何とかするしかないか）

広暁の考えた状況下では、和弓より洋弓型の方が戦いやすい。
そのため、サジタリウスの形状はこのようになった。

（ってゆーか、専門用語もほとんど覚えてないんだよな…。矢を射る時の心構えは覚えてるし、まぁいいだろ）

結局は出たとこ勝負、運次第ということだろうか？
常に先のことを考えて行動する広暁にはあり得ないことだ。

≪マスター≫

「どうした？」

≪全然緊張している様子が見受けられませんが？今回が初出動というのに落ち着き過ぎでは？≫

そこにサジタリウスが気づいたのか、先程から考えていたことを含めて広暁に聞いてきた。
広暁は全くと言っていいほど緊張している様子が見受けられないのだ。

「…緊張はしてるさ。ただ…」

≪ただ？≫

「俺以外のフォワード４人は俺より年下なわけだしな。
エリオとキャロにいたってはまだ１０歳だぞ？
俺のいた世界ならまだ義務教育を受けてる期間で、こんな荒事に巻き込まれることはまず無い。
そんな２人が出動するのに、２０歳の俺が緊張でガクガクブルブルしてたらかっこがつかないだろ？
魔法を学んできた年数に違いがあっても、暮らしてきた環境が違っても、だ。
それくらいの意地は見せるさ」

≪マスター…≫

広暁が落ち着いている理由。
それは最年長の自分が情けない姿をみせられないという、ある意味男の意地の様なものだった。
今はまだ姿は見えないが、４人はもう現場に到着してガジェットと戦っているのかもしれないのだ。

「どうした？俺らしくないか、意地を張るのは？」

≪いえ、そういうわけでは。ただ…≫

「ただ？」

≪マスターにもそういった一面があるのだなと思っただけです≫

「俺の全てを知るのは難しいと思うぞ？
人間なんて、自分で見ても周りから見ても完璧に理解出来るものじゃないからな」

≪これから知っていければ。私はそれでいいです≫

「…ありがとな」

≪こちらこそ≫

どうやらこの2人（1人と1機）は初陣の前にその絆を深めることが出来たようだ。
そこにホルスの突っ込みが入る。

「グオォ！」

俺もいるぞと。

「ホルス…お前もな。これからよろしく頼む。つっても、もう1週間は一緒にいるけどな」

≪我々1人と1匹と1機。揃ってから初めての出動ということならば≫

「これが初陣…だな」

「グオォ」

≪見えてきました。リニアレールです≫

「よっしゃ、俺達の初陣だ。おもいっきり行くぞ！」

「グオオォォ！！」

≪了解しました≫

「あれは！？」

「ホルスと…広暁君！？」

空中でガジェット？型と戦闘を行っていたなのはとフェイトが見たのは、こちらに向かって飛んでくる竜とその肩に乗っているバリアジャケット姿の広暁。

（すいません、遅くなりました）

（ううん、大丈夫）

（広暁君、いきなりで悪いけど…いける？）

（勿論です。んじゃ…）

（（ちょっと待って！そっちじゃない！！））

（え？いや、俺達の任務はレリックの確保じゃ…）

ここの位置と共に送られてきたデータでは、スターズとライトニングに分かれてリニアレールの前後からガジェットを破壊しながらレリックを奪取することが任務のはずだ。

（その予定だったんだけどね）

（広暁君のデバイスとホルス。その2つだと、レリック確保より空中を制する方が向いてるの）

（予定と違いますが…いいんですか？）

（臨機応変にだよ、広暁君？教導官の言うことが信じられない？）

（いえ、そんなことは）

（だったら…）

（ええ…）

（つまり…）

（（（空中を制する！！））））

3人は念話で確認すると、即座に散り散りになる。

なのはの『アクセルシューター』がガジェットを破壊し、フェイトの『ハーケンセイバー』がガジェットを切り裂く。

広暁は…

（いや、俺これが初戦闘なんだけど！？
なんで隊長２人と一緒に空中を制することになるわけ！？）

ちょっとてんぱっていた。
自他共に認める冷静な性格ではあるが、初任務が隊長との共闘なら仕方のないことだろう。

≪マスター、落ち着いて下さい。まずは１射です≫

「……ふぅ。すまん」

≪マスターでも取り乱すことがあるのですね≫

「当たり前だ。常に冷静でいられるわけじゃない」

≪記録しておきます≫

「おいおい…」

（そういや、フェイトもマントつけてるな…デザインの傾向も似てるし…。
バリアジャケットは各隊の隊長のを参考にしてるのか？）

当たりである。
ちなみに、現在広暁がいるのはなのはやフェイトから同高度で横に約５０ｍ離れたところ。

「ホルス、お前はまだ手を出すな。俺の傍で周りを見ていてくれ。
俺に近づくのがいたら撃墜だ」

「グオォ」

「サジタリウス。さすがにこの位置だと狙いづらい。もうちょっと近付く」

≪分かりました≫

広暁は空中を移動し、ガジェットが弓道における近的（２８ｍ）の位置になるように距離をとるが…

「…動く的か…」

弓道と違ってこれは実践、矢を放つ対象となるガジェットは当然動く。

相手が飛行に特化したガジェット?型なら尚更だ。

≪どうされますか?≫

「問題ない」

そう言って広暁はガジェットの動きを観察する。

なのはの砲撃を避ける機体、フェイトの斬撃をくらって爆発する機体、離れた所で旋回する機体。

今の自分が確実に狙える機体を探す。

（ガジェットは半自立型って言ってたな…。

遠距離からの狙撃なら気付かれることなく射抜くことは出来る。だけど…）

そう、第1射目は広暁の感覚を取り戻すために射る。
先程そう決めたのだ、まだデバイスに頼る時ではない。
自分に喝を入れ、なおも観察を続ける。

ボオオォォ！！

後ろでホルスが炎を吐き、ガジェットに攻撃する。
ＡＭＦを張るが、ホルスの炎の前には長続きはしない。

ピシピシピシピシピシッ！
パリイイィィン！

ＡＭＦが消え、ガジェットはその機体を黒炎に晒される。
金属であるガジェットは表面が溶け、やがて…

ドガアアァァン！

爆発。

「ホルス、それだと魔力消費が大きい。炎は収束しろ」

「グオォ」

広暁の言った通り、ホルスは生み出した炎を矢の形に収束する。
この1週間、広暁と一緒にホルスも練習していたのだ。
そして収束が終わると…

「グオオォォ！！」

ホルスの叫び声と共に、広暁を狙うガジェットに向かって矢が飛んでいく。
ガジェットもＡＭＦを張るが…

ピシイィン！

収束された炎の矢の前にＡＭＦを貫通。機体を貫かれ、爆発する。

「名付けて『フレイムアロー』…かな？」

ＡＭＦが魔力結合を解くなら、解かれないほど固く収束すればいい。
もしくは、解かれる前にＡＭＦを抜ければいい。
矢の形に収束し、吐く炎を上回るスピードで飛ばす、それが『フレイムアロー』。

（ホルスがしっかりやってるんだ。主人である俺が情けない姿を見せるわけにはいかない）

再度自分に喝を入れ、観察を続ける。

……。

（…なるほど）

広暁が何かに気付いた。場所を移動し、弓を構える。

（魔力を右手に）

広暁の右手に黒色の魔力が集まる。

（生成するは黒き矢）

魔力が矢の形を作り出す。

（筈を弦にかけ）

目標を捉え。

（引くのではなく下ろす）

矢を引き絞る。

（後は…）

タイミングを計るだけ。

（1…2…3…）

そして…放す。

パアアァァン！！

シュイイィィン……。

シュン！

ドガアアァァン！

ガジェット？型が1機、広暁の放った矢に貫かれた。

≪お見事です、マスター≫

「ふぅ…」

≪どうでしたか？８年ぶりの感触は≫

「７０点…かな。和弓より構えやすいし、狙いもつけやすかった。構えも問題ないし、放した後の残心もまぁまぁ。だけど、ガジェットを狙うのに時間をかけすぎた。もっと一瞬で集中して一瞬で開放しないと」

≪記録しておきます≫

「サンキュー。しっかし、凄い速さだったな。空気抵抗を感じさせないぐらい真っ直ぐ飛んでったし、ＡＭＦと機体を完全に貫通したぞ。弓道どころか、アーチェリーより速いんじゃないか？」

≪先程そう述べましたが≫

「百聞は一見に如かず、だよ」

広暁が射たのは、なのはの周りを旋回する２機のガジェットのうち１機。

攻撃することが無く、狙われそうになると退くといった行動を繰り返していた。

恐らくは様子見・もしくは偵察で、他のガジェットに情報を送っていたのだろう。

その周回軌道上に弓を構え、矢を放つ。
もう1機はなのはが撃墜した。

（今の広暁君！？）

（うん。今からは遠距離からの狙撃に徹しようと思う）

（分かった。気をつけてね？）

（了解）

なのはとの念話を終え、広暁は息を吐く。

「今からは遠距離からの狙撃に徹する。サジタリウス、頼んだぞ？」

≪お任せ下さい、マスター≫

「ホルスは…」

「グオオォォ！！」

今度は、炎の槍『フレイムスピア』でガジェットを貫いている。
フレイムアローより数は少ないが、その分大きさと破壊力は上だ。

「…ホルス、お前はここでガジェットを退治しててくれ。
なのは隊長とフェイト隊長には念話で伝えとく」

「グオオォォォ！！！」

何だか嬉しそうに鳴くホルス。

戦闘出来たのがそんなに嬉しいのだろうか？

「さてと…一旦離れるぞ」

≪了解です。そう言えば≫

「何だ？」

≪先程から口調が冷たくなりましたね？≫

「仕事モードにしたと言ってくれ。
こういう時はこういう口調の方がやりやすい…はず」

≪記録しておきます≫

「おいおい…」

回想終了。

今広暁がやっているのは遠距離狙撃。
弓矢でやるには難しいと思われがちだが、ある程度の腕とデバイスがあれば難しい技ではない。
実際、広暁もサジタリウスの補助がなければ遠くのガジェットを狙えないのだ。

遠すぎるガジェットは小さくて狙いにくいのだし。
ちなみに、スコープ通りに狙えば3桁の距離も余裕で当たったりする。
下手したら4桁の距離も当たるんじゃないかと思えるほどの性能だ。
文明の利器さまさまである。

「ま、矢に誘導性能をつけてもいいんだけど…」

≪『それだと意味がない』ですか?≫

「まぁな。狙う際の情報的な補助はありがたいけど、遠距離はどれだけ狙えるか試したいんだ」

こんなこと言ったらなのはやフェイトに叱られるかな?とサジタリウスに尋ねる。

≪大丈夫だと思います。そもそも、言わなければばれません≫

「お前…凄いこと言ってるぞ?」

≪事実を述べたまでです≫

「まったく…」

呆れながら言う広暁だが、その表情はどこか嬉しそうだ。

「さてと。んじゃまぁ…行きますか!」

≪了解しました≫

そう言って広暁はガジェットの方へ飛んでいく。
狙うは2機まとまって飛んでいる機体、近接戦をしかけるのだ。

「サジタリウス！」

≪はい、マスター≫

広暁の意志を汲み取ったのか、サジタリウスが矢を生成する。
その数6本、広暁が考えたのと同じ数だ。
ここら辺はさすが高性能と言ったところか。

「放つは1機につき3本…放て！」

号令と共に周囲に展開された矢が放たれる。放たれた矢はガジェットに向かって飛んでいき…

ドガァァン！

「1機外したか」

1機は3本の矢をまともにくらって爆発したが、もう1機は矢を回避した。
距離を取るのか、一旦こちらに背を向けて離れる。

「直接射るのに比べると、パワーもスピードも劣るな」

≪そこは今後の訓練次第です≫

「へいへいっと…！？」

そのもう1機がこちらに向かってレーザーを発射してきた。
訓練のおかげか、最初見た時は避け切れないと考えたレーザーも避け切ることが出来る。

「サジタリウス…お前、さっき頑丈って言ったよな？」

≪はい…まさか？≫

「そういうこと。お前を和弓型じゃなくて洋弓型にしたのはさ…こういう状況のためなんだよ！」

『ウオォ！』と叫びながら広暁はガジェットに向かって飛んでいく。
発射されるレーザーを巧みに避け、弓の持ち手を持って上段に構える。
そして、両腕を魔力により強化。
イメージするは…魏の初代皇帝のＣ６！
右からの袈裟斬りの要領で、上部の節でおもいっきり叩く！！

「ウオラアアァァ！！」

グゥワシャアァン！！

おもいっきり上段から振り抜かれた一撃は、ガジェットの前頭部を完全に破壊し…

ドガアァン！！

爆発した。

「お～。何か気持ちいいな～」

≪マスター…やるなら一言言って下さい≫

「分かってたくせに」

≪…はぁ≫

「何故お前が溜息を吐く、というか吐ける」

≪気分です≫

「そういうものなのか？」

≪そういうものなのです≫

これは人間とデバイスの会話です、お間違えのなきよう。
間違っても人間同士の会話ではありません。

（広暁君）

（フェイト隊長？）

（空のガジェットは全部倒したね）

（お？そうみたいですね）

（後は４人に任せよう。皆しっかりやってるみたいだし）

（了解）

空域は確保。後は広暁以外の４人のフォワードに任せることになった。

「ホルスー！戻って来ーい！！」

「グオォ！」

下で悠然と羽ばたいていたホルスも広暁の元へ戻って来る。

戦闘出来たのが嬉しいのか、その顔は心なしか清々しい。

シュタッ。

「やっぱり足が着くと落ち着くわ～」

≪空を飛ぶ魔導師の発言としてそれはどうかと思いますが≫

「まだ慣れてないんだよ。見逃してくれ」

≪…了解です≫

ホルスの肩に乗った広暁に突っ込むサジタリウス。

出会ってからまだ1時間と経ってないが、お互いにお互いをすんなりと受け入れている。

会話の節々に色々とおかしい単語が混ざるが、上手くやっているようだ。

一方その頃…

～リニアレール～

「ここじゃ魔法が使いにくい…エリオ君！」

「うん、分かった！」

２人が戦っていたのはガジェット？型。
？型・？型と比べて巨大で、ＡＭＦの無効化範囲も広い。
機体は球状だが、ベルト状のアームの伸ばすことで近接線も可能な厄介な相手だ。

すると２人は…

「「とう（えい）！」」

リニアレールから飛び降りた。傍から見たら自殺行為であるが、２人の思惑は違う。

『ライトニング０３・０４…飛び降り！？』

『一体何を!?』

『いや、あれでええ』

驚くルキノとアルトの2人に、はやてが語りかける。
もう1人、管制にあたっていたシャーリーも気がついたようだ。

『そっか!』

「そう。発生源から離れれば、ＡＭＦも弱くなる。
使えるよ…フルパフォーマンスの魔法が!
キャロ…制御に成功した竜魂召喚、見せつけてあげて!!」

「エリオ君、フリード!」

「キュクルー!」

「うん!」

≪竜魂召喚≫

キャロの掛け声と共にキャロとフリードが桃色の魔力光に包まれる。

「蒼穹を奔る白き閃光、我が翼となり、天を翔けよ」

(自分を信じる。そうすれば、フリードも応えてくれる!)

広暁に言われたことを胸に、キャロは詠唱を続ける。

「来(こ)よ、我が竜、フリードリヒ!竜魂召喚!!」

詠唱を終えると同時に魔力光が破れ、フリードが真の姿で現れる。

「エリオ君！」

「分かった！」

フリードの背にまたがるキャロ。キャロの左手に導かれる形で、エリオもフリードに乗る。

『あれが…フリードの真の姿…』

『なんやシャーリー、見たこと無かったんか？』

『初めてに決まってるじゃないですか！』

『今朝の訓練でキャロは成功したんやで？』

『本当ですか！？まだ訓練の映像見てなかった…』

『まあ、これであの2人は大丈夫やろ』

「そうですね。あっちの2人には救援はいらないです。さあ、レリックを回収するですよ！！」

「「はい！」」

リニアレールの上でエリオとキャロを見ていたスバルとティアナ。

彼女達にリィンが語りかけ、3人は再びリニアレールの中へと入って行った。

その後、『一閃必中』の掛け声と共にエリオがガジェット?型を破壊した。
ちなみにこの掛け声、広暁が教えた言葉だったりする。

『ガジェット反応、ロスト！』

『後はスターズ０３と０４がレリックを確保すれば終わりですね』

『そうですね…ちょっと待って下さい！これは!?』

一方その頃、重要貨物室前では…

「これでロックが開くはずよ」

重要貨物室にはガジェットが来てなかったのか、まだロックがかけられたままだ。

「よし！行くよ、マッハキャリバー！」

中にまだガジェットがいると思ったのか、新しくなったマッハキャリバーと走るのが楽しいのか。
ドアが開いた瞬間、スバルは突っ込んでいった。

「こら、スバル！何やってるのよ！！」

ティアナも慌てて追いかける。

その顔は呆れ顔というより、「ああ、またか」という諦めの顔に近い。

「え～っと、レリックは…」

「確か黒い箱に入ってるはずよ」

「黒い箱黒い箱……！？ティア、後ろ！！」

「えっ！？」

ティアナが振り向くとそこにいたのは…

「ふ～…」

ガジェット？型を破壊し、一息つくエリオ。

「エリオ君」

「キャロ？どうしたの？」

「ちょっとこっち来てくれない？」

「ん？いいよ」

そう言ってリニアレールに近づいてきたフリードに飛び乗るエリオ。
そのままフリードはリニアレールから離れる。

「えーっとね…」

「どうしたの？」

「そのね…帰ったらお兄ちゃんに話したいことがあるって言ったじゃない？」

「うん…もしかして、キャロも？」

「うん。私のこれまでのこと、お兄ちゃんに話そうと思って」

「僕も。機動六課に来る前のこと、お兄さんに話そうと思ってた」

「お兄ちゃん、受け入れてくれるかな…？」

「お兄さんなら大丈夫だよ」

「うん…」

2人で出動前に広暁に言ったことを話し合っている。
…というか、どことなく甘い空気が漂っているのは気のせいだろうか？

（エリオ、キャロ）

（（はい！？））

フェイトからの念話に驚く2人。

（今はまだ戦闘中だよ？スバルとティアナがレリック確保に向かってるけど、油断しないで）

（は、はい！）

（ごめんなさい！！）

フェイトに念話で叱られ、謝るエリオとキャロ。自分達の今の状況を確認し、話を終える。

「ご、ごめんね？エリオ君」

「ううん、僕の方こそ。今はここでスバルさんとティアナさんを待とう」

「そうだね」

2人はリニアレールに並走しながら飛ぶフリードに乗ってスバルとティアナを待つことに決めた。
するとその矢先…

グワシャアァァン！！

「「スバルさん！？」」

リニアレールの天井を突き破ってスバルが飛び出してきた。

「まったくもう…」

「にゃはは～…」

「あ～…」

3人は戦闘のため離れてしまったリニアーレールに向かっている。

ちなみに、なのはとフェイトもホルスの肩に乗っていたりする。

広暁が右肩、なのはとフェイトが左肩だ。

「エリオ、キャロ…」

「元気出して、フェイトちゃん！」

「……ドンマイ」

戦闘中にどことなく甘い空気になっていた2人を、フェイトが念話で戒めたのだ。

姿は見えないのに通信を駆使してそれに気付くフェイトもさすがだが、

『まったく…最初の出動にしちゃあエリオとキャロはリラックスしすぎちゃうか？
スバルとティアナは４回目やけど』

それらの情報を分かりやすくまとめてフェイトに送り返すはやてもどうかと思う。
この指揮官、絶対に楽しんでる。

「２人とも、広暁君の影響なのかな？」

「俺の？」

「そう。キャロは竜魂召喚に成功したし、エリオは動きに無駄が無くなって来てる」

「ん～…そうなんですかねえ？キャロはともかく、エリオには何も教えてませんよ？」

「そうだよ。ね、フェイトちゃん？」

「え！？あ、うん…」

「フェイトちゃん？」

まだ『広暁・兄事件（命名：フェイト）』を引きづっているようだ。
その時…

『なのはちゃん、フェイトちゃん、広暁！これ！！』

「「「!?」」」

3人の目の前に空間ディスプレイが開く。
そこに映し出されていたのは…

「「これは何!?」」「ガジェット!?」

3人は同時に叫んだが、広暁だけ叫んだ言葉が違う。
だが、誰もそれには気付かない。

「はやてちゃん!これは何!?」

『重要貨物室にいた奴らや。数は3機。こんな形のガジェットは見たことがないで!!』

「一体これは…!?」

3人が見たのはスバル・ティアナが相対する3機の機体。
それぞれ赤・黄・緑の機体をしており、二足歩行の人間型。
体にはギアを思わせる物が埋め込まれている。

一方広暁は、

(何故に3色ガジェット!?)

混乱していた。
そう、この3機を広暁だけは知っている。
それぞれ『レッド・ガジェット』『イエロー・ガジェット』『グリーン・ガジェット』。

纏めて略して『3色ガジェット』であり、『除去ガジェ』として猛威を振るったモンスターだ。
今は『マシンナーズ』にも組み込まれているカードである。

（何でこいつらが…？もしかしたらホルスが実体化したのと関係あるのか？）

広暁が思案していると…

「「広暁君！」」

「え！？は、はい！！」

「私達は先に行くから！」

「広暁君も早く付いて来てね！？」

「お、おぉ！了解！！」

ピシュウゥン！

2人はホルスの肩から降りると、あっとゆう間に行ってしまった。
全速力で飛んで行ったのか、2人の姿はもう広暁には見えない。

「伝えそびれたな…どうしよう……」

≪何をですか？マスター≫

サジタリウスの機械的な声だけが広暁の耳に届いた。

第１６話「射手ｖｓガジェット」（後書き）

ようやく遊戯王成分が出てきましたね。
３色ジェットと言えば、最近私の地元ではまた除去ガジェが流行ってきました。
『抹殺の使徒』を入れているからリバースモンスターが根こそぎ除外されるという…。
リバースモンスターがキーカードの私のデッキには天敵です、天敵。
……愚痴を言って申し訳ありませんでした！！

ここで一つお知らせです。
学業が忙しくなるので、更新が遅れるかもしれません。
もともと早くない更新ですが、遅れたら申し訳ありません。

それでは。
感想・訂正・意見等、お待ちしております。

第１７話「動き出す欲望・葛藤する現実」（前書き）

第１７話です。

……。

間空けて申し訳ありませんでした！！

言い訳させてもらいますと、実は卒業論文の作成と発表があったのです。

期日が迫ると、今まで気付かなかったこと・やりたいことがどんどん見つかり、それらをやっていたら大変なことになりました。

私、「最後に寝たのいつだ？」って初めて聞きましたよ…。

まぁ、もう発表は終わったんですけどね。

データをまとめて研究室に提出するので、更新の速度を上げるのは難しいと思いますが、これからもよろしくお願いします。

では。第１７話、始まるよ～♪

第17話「動き出す欲望・葛藤する現実」

「スバルさん！」

ガシッ！

リニアレールから飛び出してきたスバルを、フリードに乗っていたエリオがキャッチする。

「大丈夫ですか？」

「いったー…うん、大丈夫。それにしても…」

「はい。あれは一体何ですか？」

ぞろぞろとリニアレールの中から出て来たのは3色ガジェット。初めて見るそれらに、誰もが驚きを隠せない。

「こいつら一体何なのよ！？こんなタイプのガジェット、見たことが無いわ！」

勿論、彼女達はこれらの『ガジェット』のことは知らない。同じ『ガジェット』でも、その言葉の指す意味は全く異なるのだ。

（皆、聞こえる！？）

（（（（フェイト隊長！？））））

4人に向けて念話を送ったのはフェイトだった。

移動中に念話を送っているらしく、声もどこか焦り気味だ。

（今私となのは隊長と広暁君でがそっちに向かってる。私達が着くまで耐えて！）

（それは嬉しいんですけど…こいつらは一体何なんですか！？）

（ごめんね、ティアナ。それは私達にも分からないの。とにかく耐えて！皆、出来る？）

（フェイト隊長…）

（…はい！出来ます！！）

（えっ！？ティア！？）

（今の私たちじゃあ、こいつらを倒すことは難しい。だったら私達で、時間を稼ぐ！！
ただそれだけのことでしょ！？）

（ティア…うん、そうだよね！！）

（エリオと、キャロ。２人も大丈夫？）

（勿論です！）

（皆さんが来るまで頑張ります！）

（うん、良い返事。皆、頼んだよ？）

（（（（了解！！））））

念話を終えた４人は、それぞれ戦闘態勢をとる。

「こいつらにＡＭＦは無いわ。だけど恐ろしく頑丈で、私の弾丸もスバルのリボルバーナックルも効かないの」

「ＡＭＦが無いのに、ですか！？」

「あたしが殴った時は凹ませるくらいは出来たから、何回も攻撃すれば破壊出来ると思う。
だけど、３機同時だとそれも難しいの」

「ということは…」

「そういうことよ、エリオ。あたしとキャロ、フリードは援護。スバルとエリオは前衛！」

「「はい！！」」

エリオとキャロは勢いよく返事する。未知の敵といえど、恐怖心は無いようだ。

「まずは…キャロ！」

「はい！ティアさん！」

≪ブーストアップ≫

ケリュケイオンが光を発し、その光が大きくなる。

「行きます！」

キャロが手を振ると、光はティアナのデバイスクロスミラージュへと吸収される。

≪受諾≫

「いくわよ、クロスミラージュ！」

≪カードリッジロード。クロスファイアシュート≫

ティアナの周りに複数の橙色の弾丸が形成される。

キャロの援護を受けて強化されたそれは、ガジェット?型であれば複数同時に破壊出来るだけの破壊力と貫通力を持つ。

「シュート！！」

ティアナの掛け声と共に放たれる弾丸は計１５発、１機につき５発の計算だろう。だが。

【…攻撃確認。複数の弾丸による包囲攻撃】

【…回避を推奨】

【…回避します】

機械的な声と共にガジェットが動き。

ザンザンザン！！
避けた。
「「えっ！？」」
エリオとキャロは驚いた。目の前のガジェット（？）が話すことにではない。
それらがクロスファイアシュートを跳んで避けたことにだ。
「まだまだ！」
避けられた弾丸が再びガジェットのもとに向かっていく。
クロスファイアシュートは誘導制御が可能な射撃魔法。
完全に弾丸を消し去らない限りいつまでも付きまとう。
【…迎撃準備】
【…迎撃準備、承認】
【…迎撃します】
再び機械的な会話をする3機。
すると…
ザッザッ！
シュンシュン！！
キュイイイィィィン！

ピシュン！

「な！？私の弾丸を！？」

「そんな！？」

ティアナの放った弾丸全てが消された。
それも、手足による迎撃や体に埋め込まれたギアを回転させて、だ。

「だけど…スバル、エリオ！今よ！」

「「了解！！」」

そう、3機は上手く追い詰められていたのだ。先程スバルが突き破って出て来た穴の近くに。

（策は常に二重三重に…。広暁さんならもっといけただろうけど、今の私にはこれぐらいしか…！！）

これでも十分大したものだが。
穴の下、リニアレールの中には、既にキャロの『ツインブースト』を受けた2人がいた。

「いくよ、エリオ！」

「はい、スバルさん！」

「「デヤアアァァァ！！」」

２人は気合いの掛け声と共に跳び上がり。

「マッハキャリバー！！」「ストラーダ！！」

「「ウオオオォォォ！！」」

ズサッ！！ギュオオォォン！！

【…損傷率８０％。修復…不可能】

バチッ！バチバチッ！！

ドガァァン！！

爆発。

「よし！まずは１機！！」

「後は赤いのと黄色いの！！」

ストラーダの刺突とリボルバーナックルのパンチを食らったグリーン・ガジェットは粉砕された。

残すは２機、レッド・ガジェットとイエロー・ガジェット。

すると…

「皆、大丈夫！？」

「１機倒したみたいだね！」

「「「「なのは隊長！フェイト隊長！」」」」

４人が上空を見上げると、そこにいたのはなのはとフェイト。

「あれ！？お兄さんは！？」

「広暁君ならもうすぐ来るよ！私達は先行したの！」

「そういうこと！皆、下がって！あとは私達がやる！」

「「「「はい！！」」」」

２人の言ったことに素直に従い、４人はリニアレールの後方へと下がる。

そして、２人はそのままガジェットと相対する形をとった。

「これ…ガジェットなの？」

なのはがフェイトに問う。

「見たことないタイプ…ってわけでもなさそうだね。？・？・？型と配色が全く違う」

「じゃあ…どういうこと？」

「分からない。でもレリックの傍にいたってことは…」

「うん…」

「そう…」

「「こいつらは敵！」」

2人は答をだしたのか、武器を構え攻撃態勢をとる。
なのはは砲撃体勢、フェイトは斬撃体勢といったところか。

【…データ照合完了】

【…高町なのは、フェイト・T・ハラオウンの2名と確認。照合率…100％】

【【…攻撃します】】

先程まで沈黙を貫いていた2機もデータ処理を終えたのか2人の攻撃に備えるような構えを取る。

「「喋った！？」」

なのはは飛び立ちながら、フェイトはバルディッシュを横薙ぎに構えながら突っ込んだ。
勿論、喋ったことに対する驚き的な意味で。

「…まぁ、そこは後で調べるの！レイジングハート！！」

「うん！いくよ、バルディッシュ！！」

≪オー・ライト≫

≪イエッサー≫

先ず放たれたのは『ディバインシューター』。不規則な軌道を描いて飛ぶ誘導制御弾。
質と量は、先程のティアナのクロスファイアシュートを上回る。

【…回避…不可能】

【…迎撃します】

2機は先程と同じようにして迎撃し、攻撃を無力化する。
だがその機体は、先程より傷ついているのが分かる。

「フェイトちゃん！今！」

「分かった！」

2機の迎撃が終わったところで、フェイトが突っ込む。
バルディッシュのフォームは『ハーケンフォーム』。
先端に鎌のような魔力光を放つ形態である。
その魔力刃の密度は高く、切断する威力は折り紙付きだ。

「ハアアァァ！！」

フェイトが狙うは…右側にいるイエロー・ガジェット！！

【…回避しま】

スパアアァァン！！

言い終わる前に、フェイトの攻撃がイエロー・ガジェットを切り裂き。

【…完全…破壊…修復…不可能…】

ドガァァン！！

爆発した。

「あと…1機！」

残るはレッド・ガジェット1機のみ。ところがその時。

【…状況を不利と判断。撤退します…】

レッド・ガジェットがそう言うと、背中にあるギアが変形。ジェットエンジンの様な形に変形していく。

ボオオォォ！！

レッド・ガジェットは飛び立った。

「あ！逃げる気なの！？」

「逃がさない！」

2人もそれを慌てて追おうするが、それを止めたのは…

シュン！

「「！？」」

一筋の黒い光だった。

～広暁ｓｉｄｅ～

さて、どうしようか。
さっき見たあれはどう見ても3色ガジェットだ。
ガジェットの新型とは思えないし、俺の知ってるガジェットと考えるのが妥当だろう。
だとすると、一体何故？
どうして俺の知るガジェットがミッドチルダにいる？

「グオォ？」

そう考えながらホルスの方を見る。
そう、ホルスもあいつらと同じ、遊戯王のモンスターだ。

もしかすると…あいつらもカードが実体化した存在なのか？
だとすると、俺みたいにその主人がいるってことになるけど…。
ミッドチルダに遊戯王は存在しないし、こっちの地球にも存在しないことはなのは達から聞いた。
次元漂流者としてミッドチルダに飛ばされて、俺みたいな状況になったと考えるのが妥当だろう。

だとしたら、何故レリックを狙う？
レリックを狙う奴らに助けられたなら、言うことを聞かなきゃならないのは分かるけど…。

≪マスター？≫

「ん？」

≪後3分ほどでリニアレールに追い付きます≫

「分かった」

≪……≫

「どうした？まだ何かあるか？」

≪いえ…自分の中に貯め込まれるのは危険です。私に話して気が楽になるのなら話して下さい≫

「…ありがとな。だけど、今はまだ確証がないんだ。その時になったら話す」

≪…分かりました≫

サジタリウスにも気をつかわせたか。
良いデバイスに恵まれたな。
っていうか、どんだけ思いつめた顔で考えてたんだ、俺？

…っといけない、今は悩んでる時じゃない。
さっき来た通信を聞いた限りじゃ、もうなのはとフェイトは合流した。
俺も早く合流しないと！

気持ちを入れ替え、ガジェットとの戦闘に備えて気を引き締める。
さっきロングアーチからきた通信では、２人はもうリニアレールに着いたそうだ。
４人の連携のおかげでグリーン・ガジェットは撃墜出来たらしい。
着く頃には残った２機も２人が倒しているかもしれないが、万が一ということもある。

俺では戦力的にあの2人には遠く及ばないが、ホルスなら火力面でサポート出来るはずだ。
それに…

「一回自分の目で見ときたいしな」

モニターで見たとはいえ、自分の目で直接確認したい。
原始的とか古いとか言われるかもしれないが、そこは譲れない。
俺がガジェットについての考察を深めていると…

「グオォ!?」

「どうした、ホルス?」

ホルスが何か動揺したような声を出した。
周りを見回しても、ガジェットはおろか鳥さえ飛んでいない空だ。
ホルスが鳴いた理由は…?

ボオオォォ!

「え!?」

いきなりホルスの身体を黒炎が包み始めた。ちょっと待て、こうなるってことは…

「落ちる――――!!」

俺は飛べる。
だけど、いきなりこんな状況になったらこんなセリフが出ても可笑しくはない…よな?

空中で体勢を立て直し、改めてホルスの方を見ると、案の定ホルスは小さくなっていた。

「どうして小さくなった…？いや、本来の姿を維持出来なくなった…か？」

「キュイ…」

さっきのホルスの鳴き声、あれには動揺の色が表れていた。
ホルス自身も好きで小さくなったわけではないのだろう。
となると、何が外的要因による可能性が高い。
しかし、ホルスに聞いても分からないといった感じだ。
一体何故…？

…そういえば、小さい姿でいるのは魔力の消費が抑えられるからだったな。だとすると…

「サジタリウス。ホルスが巨大化してたのはどのぐらいだ？」

≪少々お待ち下さい……。1時間といったところですね≫

「1時間か…」

つまり、ホルスが本来の姿でいられるのは1時間が限度ってことか？
魔力の消費を抑えるのが小さい姿でいるためなら、炎を作らなければもう少し長く本来の姿でいられるということだろうか？

≪マスター、リニアレールが見えてきました≫

「おぅ…ってレッド・ガジェットが飛んでる!?」

仕方ない、ホルスのことは今は後回しだ。今は目の前のガジェットに集中しよう。

俺が見たのは、背中のギア部分がジェットエンジンになって飛んでるレッド・ガジェット。

逃げるつもりだろうが…逃がしはしない!!

≪目標までの標的７２ｍ。仰角７度。誘導付与≫

矢を瞬時に生成、構える。

弓道なら構えが面倒臭いが、それらを適当に高速で端折(はしょ)って最短で動作を終える。

誘導は…今は仕方ない!!

矢の生成から構えるまで約３秒。早くないかだと!?気にするな!!

狙うは…レッド・ガジェットの背中のジェットエンジン!

「一・撃・必・中!」

ピュン!

俺の放った矢は左なりのカーブを描きながら飛んでいき…

シュン!

ドガァァン!

レッド・ガジェットのジェットエンジンは爆発した。
あのスピードでカーブを描きながら飛んでいくって物理学的にはどうなんだろうな？
まぁ、この世界ならこれもありだろう。
俺は納得し、矢をくらったレッド・ガジェットの様子を見る。

「あいつは…まだ生きてるか」

≪問題ないでしょう。なのは隊長が向かっています≫

「なら大丈夫だな。さて…」

何て説明しようか？

～？？？～

『刻印ナンバー？、護送体制に入りました』

「ふぅん…」

『追撃戦力を送りますか？』

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ」

ピュン。

モニターが変わる。

「それにしても、この案件はやはりすばらしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っている上に…」

男は笑う。最高のおもちゃを見つけた、無邪気な子供のような笑顔で。

「この子達。生きて動いているプロジェクトFの残子を手に入れるチャンスがあるのだからね」

男の笑い声だけがその空間に響いた。そこで思い出したように話を始める。

「そして…この駒は素晴らしいね。まだＡＭＦは付与することは出来ていないが…単純な戦闘能力ならガジェットをも凌ぐ。今回はこれらを送ったが…今度は別ので試してみようか。それと…」

ピュン。

再びモニターが変わり、そこに映し出されたのは広暁とホルス。

「彼自身は人間の中でなら上の方に位置する人間だ…。頭脳も身体能力も優れている方だろう…だが」

ピュン。

モニターに映るのがホルスだけになる。

「この竜は素晴らしい！私のガジェットをいとも簡単に破壊して溶かすあの炎！

肉弾戦における格闘能力も申し分ない！是非とも我が手中に納めたいものだ…！！」

そう叫ぶ彼の傍らには、オレンジ色と銀色の人型のデザインをしたロボットが佇んでいた。

～起動六課会議室～

「それで広暁。話したいことというんは？」

現場検証やレリックの護送を終えたフォワード陣は、六課の会議室に集まっていた。
フォワード陣だけでなく、別の仕事から帰って来たシグナムとヴィータ。
はやてとリィン、シャマルとザフィーラもいる。

「まぁ…大体分かるけどな、言いたいことは」

「やっぱり…そういうことですか？」

「…あぁ。俺はこいつらを知ってる」

はやてとリィンの言ったことに対して広暁が返した言葉。
それに対し、会議室にいたメンバーの顔は驚愕の色に染まる。

「広暁、どういうことだ!?何故お前がこいつらを知っている!?」

「落ち着いて、シグナム。まだ広暁君は何も話してないから」

「テスタロッサ…済まない。広暁、続けてくれ」

感情が高ぶるシグナムをフェイトが抑える。広暁もそれを待って話を続けた。

「こいつらはそれぞれ『レッド・ガジェット』『イエロー・ガジェット』『グリーン・ガジェット』。
ホルスと同じ…遊戯王カードのモンスターだ」

「ホルスと同じ…！？」

「遊戯王カードのモンスター！？」

「どういうことですか、お兄さん！？」

「お兄ちゃん！？」

それぞれの反応を示すスバル・ティアナ・エリオ・キャロ。

「…前にも話した通り、俺のいた地球には遊戯王５Ｄ’ｓＯＣＧ…長いから遊戯王カードって呼ぶけど。遊戯王カードっていうカードゲームがある。こいつはモンスターカード・魔法（マジック）カード・罠（トラップ）カードって呼ばれる３種類のカードを駆使して相手のライフポイントを削るカードゲームなんだ。ライフポイントが尽きると負けになる」

「モンスターカードにも色々種類がある。ホルスは『炎属性』で『ドラゴン族』。属性は全部で７種類あって、闇・光・地・水・炎・風・神。種族は２２種類あって、ドラゴン・魔法使い・アンデット・戦士・獣戦士・獣・鳥獣・悪魔・天使・昆虫・恐竜・爬虫類・魚・海竜・機械・雷・水・炎・岩石・植物・サイキック・幻神獣」

一息入れて、広暁の説明は続く。

「さっきのガジェットは全て地属性機械族。遊戯王カードをやってる人間の間では３色ガジェットって呼ばれてた奴らだよ」

「…ホルスと同じような存在、か…」

「…その可能性が高い」

広暁の説明が終わると、一気に話が始まる。
何故カードゲームの存在が現実にいる?と言うシグナム。
ホルスと同じようにカードが実体化したの?と聞くなのは。
小さく独り言を話すフェイト。

「…俺にも分からない。ホルス、お前は?」

「キュイ……」

ホルスも分からないようで、困ったような悲しそうな声で鳴く。
自分が役に立てないのが悔しいのか、翼もしな垂れている。

「お前が悪いわけじゃないんだ、気に病むな」

「キュイ…」

広暁がホルスの頭を撫でる。
少しは落ち着いたのか、ホルスも先程よりは元気な声で鳴いた。
そのまま考え込むように、広暁は頭を下げる。

「それにしても分からないね。
このモンスターが出ただけならまだ納得出来る部分はあるよ。だけど…」

「そや。こいつらはレリックを狙うガジェットと一緒にいたんや」

「…となると」

「ああ。レリックを狙ってる奴が操ってた可能性が高いってことや。他のガジェットと一緒にな」

はやてが出した結論に全員が何ともいえない顔で頷く。

考えたくないが、これが一番可能性の高い結論だということに気付いていたようだ。

「ガジェット以外にもレリックを狙う輩を増やしてきたということか…小癪な真似を…！！」

シグナムが怒りを抑えながらも言った怒気が溢れる言葉に、誰も言葉を返すことが出来なかった。

すると、広暁が先程まで下げていた頭を上げて言葉を紡ぐ。

「本当にごめん」

「…何で広暁が謝るんや？」

「…もしかしたら、俺がミッドチルダに来たことに原因があるのかもしれない。だから…」

パアァン！

甲高い音が鳴り響く。言葉を続けようとする広暁の頬をはやてが平手打ちしたのだ。

「はやて…！？」

「はやて、何すんだよ！？」

「ふざけたこと言ってるんやない！！」

叩かれた広暁と隣にいたヴィータが反応するが、一蹴される。

「自分がミッドに来たことと関係がある？だから謝ったんか？ふざけるんやない！まだそんなこと分かったわけやないやろ！？」

「でも…」

「でももしかももあるか！
もし仮にそうだとしてもや、何であんたが謝る必要があるんや！？
あんたは被害者なんやで！？
前触れもなく別世界に飛ばされ、その世界で暮らすことを強いられた！！
そんなあんたが謝る必要がどこにある！？」

「……」

はやてが矢継ぎ早に言ったことに、広暁も押し黙ってしまった。

はやての言ったこともももっともだ。
広暁はいきなり別世界に飛ばされた。
そして、魔導師としての適性が高いために民間協力者として働くことになったのだ。

広暁本人が精神的にも肉体的にも完成しつつあるといっても、客観的に見ればあまりにも酷な話だ。
そんな状況にも関わらずに謝った広暁に、はやてはキレた。

「まったく…そんなに背負い込まへんでもええねん、機動六課(ここ)では。幾らでも頼れる人はいるんやで？もっとオープンにいったらどうや？」

「……」

「そうですよ、お兄さん！」

「私達じゃ頼りないかもしれないけど…お兄ちゃんが思いつめる必要はないです！」

「エリオ、キャロ…」

「ちびっ子2人もこう言ってるんやで？広暁」

「……」

広暁はなおも黙っている。しかしその顔は、先程謝ろうとした時と比べて幾分よくなっている。

「…はぁ。なんか、はやて相手だとペースが狂うな」

「褒めても何も出ーへんで？」

「褒めてません…」

ハハッ！と笑うはやてに対し、広暁が突っ込む。

突っ込む広暁の顔に、もう先程まであった自戒の念は無い。

「まっ、広暁も復活したようで何よりや」

「どっかの部隊長さんのおかげでな。ありがとさん」

「どういたしまして。それと…フェイトちゃん？」

「えっ？何、はやて？」

「何か伝えなあかんことがあるんとちゃうの？」

「…広暁君の話が終わってから改めて伝えようと思ってたんだけど…丁度いいかな」

フェイトが皆の前に出る。
出現した空間ディスプレイに映されたのは、ガジェット？型とレッド・ガジェットの破片。

「今日倒したガジェットのデータを本局でシャーリーと見てたんだけど…。
ガジェットに使われてたパーツとレッド・ガジェット、だっけ？
そのエンジン部分に使われてたパーツで一致する部品があったの」

「ってことはや」

「そう。さっき言った推論が正しいことが証明された。
この機械達を操る者とガジェットの作成者は同じということになる」

「ほんなら確定やな。これからの捜査は、こいつらも視野に入れて考えていかなあかん。
皆、分かったか？」

「「「「「「「「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」」」」

はやての言葉に全員が声を揃えて答えた。

そんな様子を見て、はやても満足げに微笑む。

「さてと、ほんなら今日は解散や。皆、ゆっくり休んで明日に備えや～」

「かしこまりました、主はやて」

「分かったわ、はやてちゃん」

「分かりました、主」

「アイス2個食っていいか？はやて」

守護騎士のうち、3人は至極真っ当な返事を返す。

…というか、ヴィータだけ言っていることがおかしい。

「アイスは1日1個までや」

「え～！今日は新しい事実も分かったしその記念てことで～！！」

ヴィータがはやての腕を揺さぶるが。

「駄目や」

どこかの樵（きこり）が相手の質問を拒むかのように答えた。

その瞳は数多の戦場を生き抜いてきた強さを秘めていたような気が

すると、後にヴィータは語る。

「そういえば、広暁」

「何です…何？シグナム」

相変わらず敬語になりそうなところを無理矢理戻す広暁。

「お前のデバイス…サジタリウスだったか？弓の形状をしていたな」

「うん」

「弓を使ったことがあるのか？」

「弓…というより弓道をな」

「弓道だと？」

「知ってるの？」

「地球にいたことがあったからな」

「だったら話が早い。昔さ、弓道をやってた時期があったんだよ」

「あれ？でも、お兄さんてソフトテニスをずっとやってたんじゃ？」

「中学生…１２歳からはな。小学校に入学した６歳から卒業する１２歳まで、弓道をやってたんだ」

「６歳からだと？随分と若い頃からというか…」

「俺がいた市はスポーツが盛んでさ、小学校の間は弓道教室に参加してたんだ。
元々母が学生時代に弓道をやってたから道具は一通り揃ってたし。
もっとも、本格的に始めたのは小学５年…１０歳からだけどな。
あんまり若い頃から弓道をやり過ぎると骨格形成に問題があるって言われてたから」

「なるほどな…その割には随分と離れたところにいるガジェットを射ていたが？」

「６年もやってたからな、基礎が出来てた。
それに、体もあの頃とは違う。
用途は違えどそれなりに鍛えてあるし。
何よりサジタリウスの補助が大きい。
こいつの補助がなきゃ当てることなんて出来なかった」

≪光栄です、マスター≫

「そこまでやってたなら、大会でいいところまでいったんじゃないか？」

「いや。大会は出てないんだ。母が拒んでな」

「どうしてだ？」

「まだ早いと思ってたんだと。
中学校に入学して、弓道部に入部してから大会に出させる予定だったらしいんだけど…」

「中学からはソフトテニスを始めたと…」

「そういうこと。怒られはせんかったけど、結構ショックだったみたいでな」

「まぁ、せっかく育てたのに別のスポーツに走られてはな」

「そこは父が擁護してくれたけどな。『広暁の道を決めるのは広暁だ』って」

「良い父親じゃないか、大切にしろよ？」

「…また会えるかどうか分からんけどな」

「っ！？済まない…」

せっかくいい具合にはやてがまとめたのに、シグナムがまた戻してしまった。

そんなシグナムの脇腹をはやてがどつく。

（どーしてくれるんやシグナム！？せっかく広暁が持ち直したのに！！）

（申し訳ありません、主はやて。私としたことが…）

（どうすんだよ、シグナム！？）

ついでにヴィータも加わって井戸端会議が始まるが。

「お～い。そこの3に～ん？」

「「「は、はい！？」」」

広暁に呼ばれて思わず叫ぶ3人。

「俺は気にしてないから。そこまで真面目に考えんでもいいよ」

「いや。でもな、広暁？」

「それにさ」

「広暁？」

はやての言葉を聞かず、広暁は言葉を繋げる。

「自分が恵まれた存在だって気付いたし。高望みすると罰が当たる」

「「「

「キュイ！」

広暁はホルスを連れて出て行ってしまった。

（恵まれた存在…？）

（もしかして…いえ、そんなことが……）

（何や、広暁。気付いとったんか？）

（どういう意味なのでしょうか？）

（何のことだろう？）

（恵まれた存在…か……）

（お兄さん…）

（お兄ちゃん…やっぱり気付いてたんだ……）

（まったく…恐ろしい奴だぜ……）

（先程の会話での周りの反応に気付いたのか？）

（鋭い人ね…）

（広暁……）

会議室を出た後、広暁は隊舎の外へ出るべく歩を進める。
その表情はどこか哀愁が漂い、今は２０歳という若さを感じさせない。

「恵まれてたんだな…俺」

自分の推論が当たっていたことに対し、広暁は安堵とも落胆ともつかない溜息を吐く。

「強いな…機動六課（ここ）の人は」

≪マスター≫

「どうした？」

≪先程言った言葉…どういう意味ですか？≫

「さっき言ったこと？」

≪『自分が恵まれた存在だって気付いたし。高望みすると罰が当たる』です。
どういう意味ですか？≫

「…録音してたのね。別に、そのまんまの意味だよ」

≪そのまんまの意味…ですか？≫

「そう。あとは自分で考えてくれ」

≪はぁ…≫

「キュッキュ～♪」

≪何故あなたが嬉しそうなのですか、ホルス？≫

「キュイ！」

≪……≫

サジタリウスがミッドチルダのネット回線に潜って広暁が言った言葉を調べたのは、また別の話。

≪言葉通りの意味しか出てこない…！！≫

第17話「動き出す欲望・葛藤する現実」（後書き）

第17話はこんな感じです。
なんかはやてがかっこよすぎる様な気がしますが…まぁ仕方ないよね（おいこら）！！
私の考えるシナリオ上、主人公に弓を使わせたのですが、その経緯に困りました。
何せ、部活はソフトテニスをやっていたことにしてしまったのですから！！

実は、市の弓道教室ということにしたのも理由があったりします。
私こと夢月も、小学生の間は市の陸上教室に参加してました。
その時一緒に走ってた友達が、今は大学駅伝で走ってるという事実を知ってびっくりしたつい2年前（作者の豆知識…？）。

まぁ、このような経緯で、弓道教室に参加していても不思議はないということにしました。

それでは。感想・意見・訂正等、お待ちしています。

第１８話「逃げる射手」（前書き）

第１８話です。
今回は、広暁の今後の方針を決める重要？な話です。
読む際は…どっしりと構えて広～い心で読んでください。

では。第１８話、始まるよ――――――――――――！！

第１８話「逃げる射手」

ザッザッザッ！

弓を片手にもち、空間シミュレーターが作り出した森の中を走るのは１人の男。

次元漂流者にして機動六課民間協力者、墨谷広暁。

彼は今…

ピュンピュンピュンピュンピュン！

「だーかーらー！これはきついって！！」

「お前なら多少の無茶は問題ない！どんどん行くぞー！！」

「いやーーーーーーーーー！！」

生命の危機に瀕していた。

それは遡ること２０分前。

広暁にとって初出動の任務の後、フォワード５人の訓練は個人技能に入った。

といっても、広暁は未だに攻撃魔法を使えない。

矢の生成はただ魔力を固めただけであって、とてもじゃないが魔法とは呼べないらしい。

実際は魔法なのだが、初歩の初歩もいいとこなのだ。

故に、訓練の間の空いてる時間を使ってサジタリウスに魔法を覚え

させ、それを発動することで体に覚えさせるというハードなメニューを組まれてしまった。

そもそも、本当は魔法の訓練すらまだする気は無かったのだ。

～広暁の戦闘記録を見た隊長陣の会話～

「これだけの矢が放てるなら、しばらくは弓だけに集中した方がいいんじゃない？」

「デバイスの補助があるとはいえ、速度と貫通力だけならなのはの砲撃と同じぐらいじゃないか？
数とか操作性とか鍛えたら凄いことになるぞ」

「私もその方がいいと思うな。
８年もブランクがあるようには見えないけど、弓の訓練だけに集中した方がいいと思う」

４人の内３人はこのように考え、広暁の訓練は弓を用いた狙撃練習にしようと考えていた。

だが。

「いや、それでは勿体ない」

「「「シグナム？」」」

反論を唱えたのがこの女性。
烈火の将ことライトニング分隊副隊長、シグナムである。

「勿体ないってどういうことだよ、シグナム？」

シグナムに聞き返したのは、鉄槌の騎士ことスターズ分隊副隊長、ヴィータ。

「主に聞いた話だが…広暁は矢の生成を独学でやっていたそうだな？」

「そうだよ。訓練の初日から今まで毎日。私が担当した後に始めたのが最初みたい」

「つまりだ。たったの1週間で奴は実戦レベルの矢を生成するまで漕ぎつけたということだろう？」

「そういうことだな。一気に大量に作るのはまだ出来ねえみたいだけど」

「では聞くが…ここにいる者で広暁と同じことが出来る奴はいるか？」

「「「！？」」」

シグナムの言葉に他の3人は同時に息をのむ。
今まで気がつかなかったことにたった今気がついたといった感じで。

「そうだ。魔力弾ならここにいる誰でも作れるだろう。
だが、それを矢の形に収束するとなると話は別だ」

「…確かに。術式を構築して発動する砲撃魔法なら砲撃の形はいくらでもあるけど、デバイスを使用しないで直接作るとなると…」

「難しいね。収束することは出来てもそれが矢の形を保つのは」

なのはの言ったことに対して、フェイトが繋げるように言ったこと。
それは、魔力の収束の難しさについてだった。
魔力弾を作ることは出来ても、形を変えて収束することは難しいこととされているのだ。
なお、砲撃としてそのまま撃ちだすのは魔力弾を作ることと大差ないらしい。
あくまで収束した後の『維持』が難しいのだ。

「それに、広暁は飛行魔法も1週間足らずで会得した。
本人の努力も勿論あるだろう。
だが単純な魔力の運用なら、先天的な資質があると見て間違いない」

「それも…そうだな。
ガジェットを直接破壊した時とか遠距離から狙撃する時とか、体の強化してたみたいだし」

「加えてだ。魔力を収束するだけで術式を構築しないから攻撃に移るまでのスピードは速いし、矢であるが故に砲撃のように撃ち続ける必要もない。矢に収束出来る魔力を増やしたらそれこそ凄いことになる。収束の形を変えれば攻撃のバリエーションも増えるだろうしな」

正に『シンプル・イズ・ザ・ベスト』。

「じゃあシグナムが言った勿体ないって…」

フェイトの言わんとしていることは、正に先程シグナムが言ったことに対する回答。

「弓だけに専念させるのではなく、魔力による身体能力の強化…自己ブーストだな、それも教える。捕獲魔法や防御魔法、移動魔法はデバイスに覚えさせておけばいいだろう」

「確かにそれなら効率は良いと思うけど…」

「広暁がその訓練についてこれるかな？」

なのはとフェイトが懸念するのは訓練内容。広暁が基礎的な魔法を使えるのならともかく、使えないのにこの量をこなすとなると…

「ばてるな、確実に」

ヴィータの言った通りになる。体力に自信があっても、慣れない魔法を毎日練習してたら確実にばてる。

「そこは私が尻を叩くさ。剣を交えることが出来ないとはいえ、私が直接鍛えられる奴がきたのだからな…！！」

シグナムは真っ赤に燃えていた。
それはもう、シグナムの身体から炎が溢れ出ているのが分かるぐらいに。
…というか、実際燃えている。

「ちょ、シグナム!?足元燃えてる!!」

気付かぬ内に魔力変換資質『炎熱』を発生させていたのは…ご愛敬。

このような会話が六課のオフィスで行われていた。
そして今は、空間シミュレーター（ｖｅｒｓｉｏｎ森林）。

「…というわけだ、分かったか？」

「…ある程度は」

「キュイ？」

説明を聞いた広暁は少々げんなりしていた。
どう考えても確実にばてる訓練メニューを組まされているのだ。
鍛えているとはいえ、それがこれからしばらく続くとなると気が滅入るというもの。

「何だ？やる気が感じられないが」

「確実にばてるメニューを組んだ張本人が言うセリフですかね？」

「心配知るな、簡単な治癒魔法も教えてやる」

「気絶することが前提なんですね、分かります」

もうどうにでもなれといった感じで広暁がボケたが、

「その通りだ」

素で返されてしまった。凹む。

「…はい、分かりました。で、今から何を？」

「そう焦るな。まずはお前の戦闘データのおさらいだ」

そう言うと、シグナムの目の前に空間ディスプレイが現れる。
そこに映し出されていたのは、広暁の身体能力や思考能力についてのデータ。

「身体能力は全て平均以上で、瞬発力・反射神経・敏捷性は同年代の中ではトップクラス。
洞察力に優れ、相手を観察し、そこから導き出される答えを基に攻める技巧派。
かといって直接的な行動が苦手というわけでもない。
技巧派寄りのオールラウンダーといったところか」

シグナムが言ったことに対し、広暁も所々頷きながら聞いていた。
身体能力は今まで鍛えた結果だし、自分の思考スタイルも何となく分かる。

ピッ。
空間ディスプレイを消し、シグナムは再び説明を始める。
「お前は敏捷性に優れた射手だ。
ティアナのような静物射撃型ではなく、敵を観察しながら動き回り、高速の矢で敵を倒す。
それが今考えられるお前に最適な戦闘スタイルだろう。
あえて名前をつけるなら『動物狙撃型』だな」
『敏捷性に優れた射手』　『動物狙撃型』
戦闘能力はフェイト、戦闘スタイルはなのはといったところだろうか？
良いとこ取りと言えば聞こえはいいが、器用貧乏になる可能性も否定出来ない。
というか、その言い方だとアフリカ辺りで横行してる密漁者のような気がする。
しかし、突っ込んだら面倒臭いことになりそうな気がするのでここはスルー。
「なんかガードウィングみたいだな」
「実際のところ、お前はフロントアタッカー以外ならどこでもいけるからな」
「あれ？でもその戦闘スタイルだとホルスが…」
「キュイ～」

「ホルスとの連携はまだ考えてないんだ。
お前に付いているとはいえ、ホルスは1匹だけでも十分な戦力になるからな。
それに、常に一緒にいなければならないというわけでもないだろう？」

「まぁ、確かに。まだ色々と分からんことはあるけどな」

シグナムが考える戦闘スタイルだと1人で動かなければならない。
小さい姿でも大きい姿でも、ホルスが付いて来るのは辛いだろう。

「それに動きまわるといっても、テスタロッサのように高速で動きまわれというわけではない。
戦場を移動しながら時には別々に、時には巨大化したホルスと同時に攻撃する。
狙撃型でありながらスピードに優れているという点を含めても、手札の多さがお前の利点だ」

手札が多いとその分どの行動を起こすか迷いがちだ。
状況判断力を鍛える必要があるなと広暁は考える。

「そういえば、弓で直接殴っていたな？」

「あれは試してみたかっただけ。
俺が敵に近づくことはまずないだろうし、近付かれたそうだったらすぐに離れる。
まぁ、ケースバイケースだけど」

「…そうか。それは残念だ」

シグナムが本当に残念そうで溜息を吐いた。
広暁も大体考えていることは分かるが、そこは突っ込まない。

「それでだ、広暁。矢を作ってから放つまでどれぐらいかかる？」

「対象の距離にもよるけど…大体3秒かな。
魔力の矢だと真っ直ぐ飛ぶから、重力とか空気抵抗を考えなくていいし。
対象を狙うだけでいいから楽だ。
誘導付きの矢とか、直接放たない矢ならもっと早いけど」

「それを1秒で出来るようにしろ」

「はい！？いやいや、それはきついって！！」

「お前なら出来るだろう？」

シグナムの命令に、広暁も驚きながら言葉を返す。期待されてもきついものはきつい。

「矢の生成に1秒、構えて放すまで2秒かかるんだぞ？
放す時までの動作を短縮しても、2秒が限界だって」

「生成しながら構えて放せばいいだろう」

「そんなこと…うーん……」

「生成してから構えるから時間がかかるのだろう？
だったら生成しながら構えればいいだけの話だ」

シグナムが言ったことに広暁は感銘を受けた。
今までは完全に矢を作り終えるまで構えてなかったのだ。
実戦はまだ1回しか経験していないので、仕方ないと言えば仕方ないことなのだが。
ここはやはり踏んできた場数の違いというものだろう。

「なるほど…筈の部分から作って先に弦にかけておけば、構えながら矢を作れるな。
それなら時間も短縮出来る」

「だろう？」

「じゃあ、今からその練習を？」

「いや、違う。今からやるのはこれだ」

シグナムの後ろから現れたのは…

「何だこれ？」

それは宙に浮かぶ5つの白い球体。

「これはスフィアと言ってな。早い話攻撃用のレーザーを発射する機械だ」

「…まさか」

広暁の頭を不安がよぎる。
レーザーを発射するスフィアが5機、何か意味深に笑うシグナム。
それらが意味するものは…

「大方お前の予想通りだ。このスフィアがお前に向かって攻撃をする。
終了条件はスフィアの全機撃墜だ」

「いきなり実戦ですか」

「体で覚えた方が早いだろ？」

「まぁ…確かに？」

納得出来ないようだが、そこはシグナムだからと広暁は割り切った。
と、ここで一つ疑問が生まれる。

「ホルスはどうする？」

「ホルスはやることはない。そうだな、フリードのところにでも行ってもらうか」

「だそうだ、ホルス。俺の訓練が終わるまでフリード達と一緒にいてくれ」

「キュッキュ～」

ホルスは飛んで行った。広暁が羨ましそうにホルスを見ていたような気がするが気のせいだろう。

「何か反論があると思っていたがな」

「…色々と諦めがついたんで」

訓練を始めるというのに落ち込んでいく広暁。そんな精神状態で大丈夫か？

「察しが良すぎるのも困りものだな。当然、この訓練には制限がある」

「どんな？」

「飛行・矢の生成・矢を放つことにおけるデバイスの補助・誘導付与の禁止。
魔力による体の強化は認めてやる。
訓練範囲はこの空間シミュレーター全てだ。
だからといって、他の新人のところには行かないようにしてほしいが」

「飛行の禁止はともかく…誘導をつけれないってのはきついな。っていうか、訓練範囲が空間シミュレーター全てってことは…」

誘導をつけるにはちょっと念じるだけでいいのだが、その分魔力も消費する。
それでも、当たらないよりはマシなのだ。
それがないというのはきつい。

「そうだ。常に移動しながら…つまり逃げながらだな、撃墜してもらう」

「制限多くない？ってゆーか、動きながら矢を放ったことなんて一度もないんだけど？」

「体の強化を認めてやるだけありがたく思え。では…」

「いきなり!?サジタリウス!!」

≪ＯＫ≫

広暁の掛け声と共にサジタリウスは、ペンダントから弓へと形態を変化させる。

「発射!!」

ピュンピュンピュンピュンピュン!!

５機のスフィアから一斉にレーザーが発射された。

第１８話「逃げる射手」（後書き）

何か新しい戦闘スタイルを広暁にと考えていたらこのようになりました。
比較対象がないのであれですが、面白い戦い方が出来ると思います。
実はこれも次話以降の伏線だったり…おっと、これ以上はいえませんね。
魔力の運用・資質についても同様のことが言えるので、ここでは割愛。

戦闘スタイルを決めるのが早すぎると思われる方がいるかもしれません。
しかし、短期間で技術を向上させる場合、その終着点や役割を決めて練習した方が効率がいいのです。
これはほとんどのスポーツや格闘技において言える事…のはず。

ではでは。感想・訂正・意見等、お待ちしています。

第１９話「三位一体」　（前書き）

第１９話です。
今回も、私の趣味が多分に含まれている部分があります。
「ぶっちゃけ、この設定いらなくね？」と思われる方もいるかもしれませんが…それでもやらせてください！お願いします！！

それでは。第１９話、始まります。

第19話「三位一体」

「さっきの爆発音は何でしょうね？」

「シグナムが広暁に何かやってんだろ。スフィアを何機か持ってったし」

ここでは同じフロントアタッカー同士、ヴィータがスバルに教えていた。

現在行っているのはバリアを張る際の下半身の使い方とマッハキャリバーの踏ん張り方だ。

「下半身は膝を落とす感じで軽く構える。

かといって落とし過ぎずに、左右への移動がすぐに出来る体勢…でしたっけ？」

「マッハキャリバーなら前後の移動は楽だからな。

拳の先にバリアを張る場合、右拳を出してるなら右足に6、左足に4力を乗せる感じだ」

ヴィータの説明にスバルは納得し、ヴィータもグラーフアイゼンを構える。

そしてヴィータが動こうとした正にその瞬間…

ザザッ！

「「！？」」

「えっ!?ヴィータとスバル!?」

茂みから出て来たのは広暁だった。後ろには5機のスフィア、ついでにその上空を飛ぶシグナム。

「シグナム!?何でこっちに来るんだよ!?」

「それは広暁に言ってくれ!私はただ追っているだけだ!!」

怒気を含んだヴィータの声に、シグナムも似たような声で返す。
だが、その顔は努めて冷静だ。
というか楽しそうだ。

「すいません!ちょっとお邪魔します!!」

そう言って広暁は魔力で足腰を強化し、2人の頭の上を飛び越える。
その途中で矢を生成し…

シュタッ!

着地と同時に構え…放つ!

シュン!

至近距離…といっても10mはあるが…から放たれた矢をスフィアは避けることが出来ず…

ドガァァン!

爆発。

「まず1機！失礼しました！！」

広暁は脱兎の如く逃げ去る。
それを追うは残り4機となったスフィアとシグナム。

「空中で射るのはさすがに無理か…。どんな姿勢からでも射ることが出来るように鍛えないとな」

シグナムは1人呟いた。獲物を狙う豹のような目をしながら。

「「……」」

取り残された2人。開いた口が塞がっていない。

「…何の訓練でしょう？」

「…実戦訓練だろ」

「実戦ですか？訓練ですか？」

「うっせぇ」

「そうだよ、エリオ。もっと広く動いて」

「はい、フェイトさん！」

ここではエリオとキャロが、スフィアから放たれるレーザーを避ける訓練をしている。

無論、広暁を狙っているのと違ってレーザーのダメージは少ない。

「エリオ…何ていうか…見えてる？」

「多分お兄ちゃんのおかげだと思います」

「広暁君の？」

フェイトが疑問に思ったこと。

それはエリオが目に見えない後ろからのレーザーも避けていることだった。

「一回見た全体の動きを確認・記憶した後、自分を上から見るように視点を変える。

マルチタスクを使ってその視点を意識しながら、攻撃を避けたりスフィアの死角に入るんです。

レーザーを発射する前は音がするので、予測がしやすいですから。

お兄ちゃんは鷹の目（ホークアイ）っていう技術だって言ってました」

「広暁君がそんなことを…」

フェイトも広暁には驚かされてばかりだ。
動きに無駄が無くなって来たと思ったら、このような技術まで知っているとは。

「マルチタスクを知ってこれを思いついたそうです。
お兄ちゃんがいた世界でも鷹の目はあったんですけど、マルチタスクがあれば楽に出来るかもって。
お兄ちゃんの知り合いでも鷹の目を出来る人はいたらしいんですけど、その人はバスケットボールの選手だったそうです」

バスケの選手がこんな技術を持っていたとは、とフェイトはちょっと驚愕。

「キュイ！」

ホルスも自慢げに鳴く。
こっちに来てからはフリードと何やら話していたが、今は自由気ままに飛んでいる。

……フェイトもやってみる。
自身の周りの状況を確認・記憶。
その後上から見下ろすような視点にチェンジ。

…なるほど、これは……。

「確かにこれなら周囲の状況を把握しやすいね」

「私はまだ出来ないんですけど…絶対出来るようになります！」

年少’ｓ2人に広暁は良い影響を与えている。

（なんか…私、取り残されてる？）

フェイトには悪い影響を与えているようだが。

「じゃあ、エリオ。そろそろキャロと…！？」

フェイトが『キャロと交代しようか』と言おうとした瞬間、その目に映ったのは。

「広暁君！？」

「キュイ！？」

森の中から跳んでくる広暁だった。というよりこの方向は…

「今度はフェイトとエリオとキャロ！？」

おもいっきり3人がいる方向に向かって飛んできている。

背後には4機のスフィアとこれまたシグナム。

「失礼します！」

訓練用のポールを足場にし、再び跳躍。

3人を飛び越え、その途中で矢を生成、番（つが）える。

体をスフィアの方に向け、最高到達点に達して体が安定したところで…放つ！

ピュン！

しかし、その矢は狙ったスフィアに当たることなく、先程広暁が出てきた森林の方へと向かう。
つまり外したのだ。

そして、

ドガァァン！

矢は着弾点を中心に半径数mの樹木を爆散、吹き飛ばした。

シュタッ！

「チッ！やっぱり止まって放たないと狙いがつけにくいな…！」

動きながら射るのは初めてなので、当てられなくても仕方ないと言えば仕方ない。
広暁は再び逃げようとするが…

「おっ？ラッキー！」

爆散した樹木を避けるために、スフィアが統制の無い行動をとり始めた。
さっきより距離はあるがこれなら…

「避けられる心配はない！」

狙うは2機まとまって動いているスフィア。
矢を生成、構え…放つ！

当たるのを確認せず、即座に次の矢を生成、構え…放つ！

この間、僅か４秒。
早速シグナムに言われたことを実践しているようで、時間が短い。
しかも、弓道のように上まで上げてから下ろす形ではなく、直接引っ張って弦に番えている。
こちらの方が早いことに気付いたのだろう。

ドガンドガァァン！！

「よっしゃ！あと2機！」

広暁は右手で小さくガッツポーズをし、また森林のほうへと逃げていった。
その後を残った2機のスフィアが追う。

「すまんな、テスタロッサ」

「え！？ううん、そんなことは…」

「そうか。では私は失礼する」

シグナムも2機のスフィアを追うように飛んでいった。
先程の2人と同じように、取り残された3人。

「何の訓練だろう…？」

「実戦…ですかね？」

「何て言うか…シグナム副隊長らしいですね」

「キュクルー」

「キュイ」

キャロの呟きに答えたのは2匹の竜だけだった。

「そう考えると、広暁さんは特殊ですね」

「そうだね。弓の形をしたデバイスなんて、シグナム以外で見たことないし」

訓練の合間の休憩。ティアナとなのはは、広暁の戦闘スタイルについて話していた。

ちなみに、『足は止めて視野は広く、あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる判断速度と命中精度』がなのはの考える射撃型魔導師の真髄である。

「広暁さんならどんな弾丸も同じ矢で撃ち落しそうですけど」

「それも…そうなのかな?逆に全部避けそうな気がするけど」

苦笑しながら答えるなのは。なのはの考えとは違うが、これはこれでありなのだろうか?

「広暁君は移動する射撃型、ううん、狙撃型魔導師ってことになるかな？」

「あ、でも。あたし、前に広暁さんに聞いたんですけど…」

「何を？」

「先日の出動で、広暁さんが放った矢が一回も外れなかったことです。
そのことを聞いたら、
『遠距離ならともかく、近・中距離で一撃必中の狙撃なんて無理。本命とフェイクを使い分けることに、間接攻撃の意味があると思う。まぁ、素人の俺の意見だけどね…』
って言ってました。
だから狙撃は、遠距離だけに意味がある言葉だって」

「フェイク、か…」

この間の訓練で広暁にいっぱい食わされたことを、なのはは思い出した。
なのはは想像した。
弓を構える広暁、狙われる自分。
放たれる矢とそこに隠される数多の権謀術数。

「…広暁君とは1対1で戦いたくないね」

「どういうことですか？なのはさんが負けることなんて…」

「何事にも絶対はないよ。

確かに私のが経験も手札も豊富だし、負ける可能性も圧倒的に低い。
対して広暁君はまだ全然魔法のことを知らない初心者。
まぁ、戦ってる時と戦い終わった後の気分の問題かな？」

一旦区切った後、再びなのはは話始める。どことなくその表情は暗い。

「私の考えを全て読んだ上で対処しそうなんだよね、広暁君。
広暁君がまだあまり魔法のことを知らなくても、行動を読まれた上で対処されたらやり辛いし…。
下手したら広範囲殲滅型の砲撃を使わないといけないかも。
直射型だと避けられそうだし。
何より、戦った後の疲労度が半端じゃないと思う。
心理戦はあまり得意じゃないしね」

ユーノ君やクロノ君と戦うみたいで嫌なんだよね～と苦笑しながら言うなのは。

補助（結界・捕縛・治癒）に長けたユーノと超オールラウンダーのクロノ。
彼らと同列に並べられるのは広暁にとって光栄…なことなのだろうか？
というか、彼女の知り合いの魔導師は彼らを除いて皆戦闘特化型の魔導師（全員女性）なのだが。

「広暁さんなら避けそうですね。『いちいち正面からぶつかってやる義理はない』とか言って」

ティアナもひどいことを言っているような気がするが、間違ってはいない。

実際、広暁はそうゆうタイプなのだ。

だが、今の段階でそこまで出来るわけがない。
１０年以上経験を積んでいるなのはと１ヶ月も経験していない広暁では雲泥の差がある。
スバルに一撃もらったのがそこまでショックだったのか、広暁を買い被り過ぎだ。
もしここに広暁がいたら「催眠でもかけられてる？」と言って本気でなのはを心配するだろう。

「そこにホルスも加わると…」

「うわ～…」

更に会話はヒートアップする。
ホルスの炎と広暁の弓矢。
素手で殴りかかってくるホルスと広暁の考える策。
訓練でホルスが巨大化することはないものの、初出動時の映像を見てティアナは驚いたのだ。
もしそれらと相対することになると…怖い。
フリードの真の姿を上回る竜が直接殴りかかって来るのはご免こうむりたい。
なのはならともかく、ティアナには怖すぎる。

「でも…ああゆうタイプも必要なのかもね」

「どういう意味ですか？」

「広暁君、余分に矢を放たないでしょ？
最近は数打てば当たるみたいな砲撃型魔導師も多いからね。

フェイクで矢を放つことはあっても、それは意味のある攻撃。
力の無駄遣いをしないってことなの。
広暁君みたいに無駄に魔力を使わない戦闘スタイルもいいのかなって。
狙って放った矢が外れることがあってもね」

「なるほど…」

今なのはが言ったことは、なのはの考える射撃型魔導師の真髄に通じるところがある。

『あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる』

これは、どんな弾丸もそれを撃ち落す最適の弾丸で撃ち落せ、という意味だ。
最適の弾丸を撃たなければ、その分余計に魔力を使うことになる。

「広暁さんはそこまで考えてあのデバイスを…？」

「それは…どうだろうね？
弓を選んだのも昔やってたのが理由みたいだし。
もしそうでなければ私やティアナと同じタイプになってたかもね」

「それはそれで怖いですね」

アハハーと2人は笑った。広暁が自分と同じタイプだったら、それはそれで怖いといった感じで。

「さてと、休憩は終了。訓練を続けるよ」

「はい、なのはさん…えっ！？」

立ち上がろうとしてティアナの目に飛び込んできたのは。

（今度はなのはとティアナかよ！？）

木々の間から出てきたのは、これまた広暁。ついでに2機のスフィアとシグナム。

（結局全員のところ回っちゃったじゃん…）

もう声を出す気力もないようで、頭の中で愚痴る。

他の新人のところには行かないようしろとは言われたが、来てしまったものは仕方ない。

「ちょっとゴメンナサイ！」

今度は飛び越えることはせず、素直に横へ逃げる。そのまま森の中に逃げるが、

ピュンピュン！

スフィアがレーザーを発射してくる。視界の隅でそれを捉え、レーザーを避けるが…

ドオォン！

レーザーをくらった樹木が爆散した。下手したら広暁が放った矢の威力を超えている。

「ちょ！？威力上がってない！？」

「お前も段々と慣れてきたようだからな！私からのサービスだ、出力は最大だぞ！！」

「いらねーってそんなサービス！！」

愚痴りながら矢を放つ。だがその方向は…

「上だと？どこに向かって放っている？」

広暁が放った矢は真上に向かって放たれた。
シグナムも2機のスフィアもなのはもティアナも、ついその方向を追ってしまう。

（広暁さんが無駄に射るはずがない。だったら広暁さんは…？）

ティアナが放たれた矢の出元を見る。だが、そこに広暁はいなかった。

（えっ！？一体どこに！？）

放った後すぐ逃げたのだろうか？それとも、別の場所から狙っている？答えは…

グワシャアァン！！

「「「な！？」」」

そのどちらでもなかった。
3人の上を影が通ったと思うと、次に目に飛び込んできたのは弓を上段に振りかぶる広暁。
そのまま弓を振り下ろし、スフィアを殴りつける。
返す弓でもう1機も殴ろうとしたが、避けられてしまった。

そう、広暁は矢を放った後すぐ足に自己ブーストをかけ、なのはとティアナの後ろの茂みに移動。
タイミングを見計らって跳躍し、スフィアを直接破壊したのだ。

「あと…1機…ハァ…ハァ…」

≪マスター、無茶しないで下さい≫

「無茶は…してねぇよ…ハァ…これが…一番…効率的…ハァ…なんだよ…」

さすがに広暁も疲れてきたようで、肩で息をしている。だが、まだ訓練は終わっていない。

「すぅ…はぁ。失礼しました！」

軽く深呼吸をし、広暁は再び逃げる。
それを追おうするシグナムの顔は、今日の訓練で一番といっていいほど笑顔だ。
そこに含まれる意味は別として。

「まさか直接殴りにくるとは…。フフ…スフィアも残り1機…どうくるかな…」

「シグナム…怖い…」

「シグナム副隊長…凄く…嬉しそうです…」

笑うシグナムに恐怖すら覚えてしまったなのはとティアナであった。

シュン！

ドガァァン！

「「きゃっ！？」」

広暁が先程放った矢が落ちてきて、それに驚いたなのはとティアナが広暁を怒ったのはまた別の話。

（あと1機…どうする？）

木々の間を逃げ回りながら広暁は考えている。

今は自己ブーストにより足、つまり脚力を強化して木々の間を跳んで逃げている状態だ。

故に、先程まで走って逃げていた時ほど息は荒くない。

残り1機なら逃げ回る必要もないので、広い場所に出て相対しても良いだろう。だがそれだと、

（『移動しながら』ってことにはならないよな）

シグナムの言った制限を破ることになる。訓練で制限を破るわけにはいかない。

（さて、どうしようか？）

広暁が最後の詰めをどうしようか考えていると、

ピュンピュンピュン！！

「よっ…と！」

タンタンタン！

一旦視界にとらえた後、左右への軽いステップでレーザーを避ける。それこそ最小限のステップで。

（こうゆう時にソフトテニスやってたのが役に立つな）

広暁は中学1年生から大学3年生までの約8年半、ソフトテニスを続けていた。

ポジションは前衛。

そして前衛の仕事は決め球を決めて、点を取ること。

そんなポジションである前衛に必要な力は…

『瞬発力』

こちらのペアの後衛が右側、相手側のペアがこちら側から見て左側で打ち合っているとしよう。
つまり正クロスだ。
前衛である広暁は、相手後衛とこちら側のコートのエンドラインの中央を結んだ線上に立つ。
この位置が左右どちらにも素早く動けるポジションだからだ。
そして正クロスで後衛同士が打ち合ってる際、それを狙って決めに行くのが前衛の1つの仕事だ。

この際、あまり早く動くと行動がばれて先程まで自分がいた場所、つまり『サイド』を抜かれる。
ならば、相手後衛が、打つコースを変えられないぎりぎりのタイミングで動けばいい。
それに必要なのが瞬発力であり、左右への足運び『ステップ』の速さなのだ。

今、広暁はその力を最大限に活かしている。
レーザーを避ける際、撃つタイミングと角度さえ分かれば無駄に動く必要はない。
作戦を考えながら2~3の少ないステップで避け切る。

（といっても、逃げてばっかりだとこっちが先にばてるな。
もっと乱射しても問題はないんだけど、それは止めとくか。

当たらない矢を放っても仕方ないしな）

広暁は更に思考を深める。どうすれば最後のスフィアを撃墜出来るか。

（待てよ？さっき放った矢の威力…森…木…乱射…）

何か思いついたのか、広暁は後ろを振り向いて確認する。

スフィアは後方約３０ｍ、シグナムもいるがそこは無視していいだろう。

（よし…やりますか！）

ザン！

両足に更に魔力を込め、更に跳躍力を上げる。

そのまま木々の間を跳び越え……スフィアとの距離を開ける！！

「距離を空けてきたか…遠距離からの狙撃でもする気か？」

シグナムは広暁の行動の真意を考える。

広暁なら狙撃でもおかしくないが、デバイスの補助は禁止している。

遠距離からの狙撃は難しいだろう。

シグナムが考えていると…

シュン！　シュン！　シュン！

矢が飛んできて地面に着弾、木々が爆散する。

爆散した木々の破片と土煙が織りなす煙幕はシグナムには嫌な存在だろう。
思わずシグナムは止まるが、スフィアは気にすることなく煙幕の中を突き進む。

（一体何を…？こんなことをしても視界が悪くなるだけ…。煙…突き進む…まさか！？）

シグナムが行動を起こそうとした正にその瞬間。

ドガァァン！

スフィアは撃墜された。

「あんな方法でスフィアを破壊するとはな」

「勘に頼った部分もあったけどね」

広暁が考えた作戦は単純。

放った矢を地面に着弾・爆発させることで視界を奪う。
人間なら思わず止まるだろうが、スフィアなら突き進む。
そして、煙から出たところを狙って矢を放つ。
当然この時は、木の陰に隠れていた。

「1回矢を外して地面に着弾して爆発を起こした時、結構煙が凄かったからな。
人間の視界じゃまず見えないぐらい。
だったら煙幕になると思ってさ。
あとは煙から出て来たスフィアを狙えばいいだけ。
黒い煙の中から白いスフィアが出てくるんだ、無茶苦茶狙いやすかった」

「相変わらず作戦を考えていたのか」

「作戦て呼べるほど大層なもんじゃないと思うよ?
全体の状況を見て、ベストな方法を考えただけだし」

「…やはりな」

「何か言った?」

「いや、何でもない」

シグナムがぼそりと呟くように言った言葉は広暁の耳には届かなかった。
勿論、シグナムもそれを広暁に伝える気もない。

「よし。今からは自己ブーストについて教える」

「自己ブースト？」

「魔力や魔法で肉体を強化することをそう呼ぶんだ。お前もさっきやってただろ？」

「なるほど、自己ブーストって言うのか」

「あぁ。では始めるぞ」

ピィ――――ッ！！

「はーい！じゃあ午前の訓練、終了！」

「「「「ハァハァ……」」」」

「……」

「はい、お疲れ。個別スキルに入ると少しきついでしょ？」

「ちょっと…ハァ…いうか…」

「その…ハァ…かなり…」

「……」

ティアナとエリオが言った言葉はここにいる5人の本心を代弁している。

実際は、かなりどころかとんでもなくきついのだが。

「広暁君？さっきから顔上げてないけど大丈夫？」

「……」

なのはに言われて広暁は左手で軽くサムズアップ。

顔を上げるが、その顔は他の4人の比ではないほど疲れているのが見てとれる。

ぶっちゃけ生気が無い。

「おい、シグナム。広暁にどんな訓練したんだ？」

「スフィア撃墜の後は自己ブーストの訓練だ。

足に魔力を込めての機動力強化や、拳に込めての肉弾戦を模した訓練をな。

その後は、魔力の収束の形を変えて攻撃バリエーションを増やす訓練をした」

「それだけでここまで疲れるわけないだろ？」

「いや、広暁の資質をもっと伸ばそうと思って…訓練中はずっと自

己ブーストさせたままだった」

「「「…は！？」」」

シグナム以外の隊長陣が呆気にとられたような声をだした。その理由は…

「それはやり過ぎだよ！並の魔導師でも自己ブーストの維持は難しいのに！！」

「魔法を発動してないならいいけど、もし発動してたら魔力が暴走したかもしれないんだよ！？」

「自己ブーストはその時々で瞬間的にやるものだぞ！？
それをずっと維持してたらばてるなんてレベルじゃねえぞ！！」

「うっ…すまん。思ったより広暁が上手くこなすものだからつい…」

3人が怒涛の如く言葉を繋げる。
自己ブーストというのは魔力や魔法による肉体の強化のことを表す。
広暁が行ったのは危険性の少ない前者であるが、それでも危険が無いわけではない。
魔力の運用・維持が上手くいかずに魔力が暴発することもあるのだ。
それをずっとやっていたとなると…

バタッ…。

「「「「「「「！？」」」」」」」

「キュイ！？」

「キュクル！？」

こうなる。広暁は倒れた。

第１９話「三位一体」（後書き）

第１９話、いかがだったでしょうか？
ソフトテニスについては…ご勘弁下さい、本気（マジ）で書きたかったんです！！
ボレーに関しては他にも、

・相手の行動を読む
・こちらの動きを悟られないようにする
・的確なコースで返す

といった技術が挙げられますが、私個人としては瞬発力が一番大事であると考え、このような話になりました。

全体的に広暁を持ち上げ過ぎな気がしますが…何故か書いてるうちにこうなってしまいました。
なのはのキャラは全体的に力任せの気があるので、広暁のように考える人間には苦手意識があるのかもしれません。
あまり会ったことのないタイプの人に苦手意識を感じるのと同じですね。

もっとも、広暁は考える人間ですが、そこまでずば抜けているわけではありません。
体より頭が先行するぐらいの感覚で（今は）構わないです。
それでもなのはが苦手意識を感じるのはやはり…自分の周りに少ないタイプの人間だからでしょうか？

ではでは。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お願いします。

第２０話「ｂｅｌｉｅｖｅ　ｉｎ　ｍｙｓｅｌｆ」（前書き）

第２０話です。
タイトルを初めて英語にしてみましたが…結構見栄えがいいですね、これ。
ですので、時たま英語のタイトルを使っていこうと思います。

ではでは。第２０話、始まるよ～♪

第20話「believe in myself」

～医務室～

パチッ。

「……。……！？」

ガバッ！

機動六課医務室。
この部屋の主たるシャマルは、今はいないようだ。
そんなこの部屋で、広暁は目を覚ました。

「あ～、一回集まった後倒れたのか…。気絶するなんて初めてだな」

「キュイ！？」

「ホルス！？」

「キュイー！」

ホルスが広暁に飛びついた。
ずっと心配していたのか、その顔はいつもより元気がなさそうだ。
だがそれ以上に、広暁が起きて嬉しいといった感情がその表情に出ているのが分かる。

「ありがとな、ホルス」

「キュイ～♪」

ホルスの首元を撫でてやると、気持ちよさそうに鳴いた。

「えーと…」

ホルスを撫でた後、気絶前の記憶を辿り現在の状況を確認。
その顔色は倒れる前より大分良くなっているようだ。

「もう2時…2時間以上寝てたのか」

「その通りだ」

「!?」

広暁は振り向いた。誰もいないと思っていた部屋にいたのは…

「気分はどうだ…広暁」

「大分楽になりましたよ…シグナム」

広暁を気絶に追い込んだ張本人、シグナムだった。
そんなシグナムを、ホルスは敵意丸出しで睨みつける。
主人をこんな状態になるまでしごくとは何様のつもりだ、と言わんばかりの表情だ。

「シャマルは?」

「あいつなら今はオフィスにいる。提出する書類に不備があったらしくてな」

「そう…」

医務室を静寂が包む。お互いに話そうとしない空気…というわけではない。

「ばてるどころじゃなかったな？」

「……」

シグナムが話そうとしないのだ。
その表情はいつもの厳しくもクールなものではなく、純粋に狼狽しているようにも見える。

「その…すまなかった」

「何が？」

「午前の訓練のことだ。私としたことがやりすぎてしまった…本当にすまない」

シグナムが頭を下げて謝った。
それに伴い、彼女のピンク髪のポニーテールも揺れる。
真面目な気質故だろうか、自身の過ちはちゃんと認めた上で広暁に謝罪する当たり、昨今の社会人にも見習ってほしいものだ。

「……」

「その…まだ怒っているか？」

「当然…と言いたいところだけど」

体ごとシグナムの方を向け、広暁は座り直す。
その顔は怒っているような表情ではなく、何かを考えている表情。
どちらかというと、笑顔に近いような気がする。

「いつまでも引きずっても仕方ないしな。それに、訓練で倒れたなら俺に非があるってことだろ？」

「キュイキュイ！！」

「違う！」と言いたげなホルスの言葉を繋ぐように、シグナムが言葉を紡ぐ。

「そんなことはない。今回のことは明らかに私の所為だ。
まだ魔法を学んで間もない広暁にあそこまでやらせたのが間違いだった」

「そうか…ならお互い様ってことで」

「は？」

広暁はそう言って右手を出した。その顔は優しく笑っており、シグナムも呆気にとられている。

「無理にでも訓練を終えさせなかった俺も悪いってこと。
だからこの話はこれで終わり。

まぁ、またあんな訓練をしてここの世話になることがあるならその限りじゃないけど」

「…善処しよう」

「いや、そこは断言してほしいんだけど!?」

2人は軽口をたたきながらも握手をした。断言はしてないが、今後は大丈夫だろう。

「キュー…」

ホルスは納得出来ていないようだ。

しかし、更に鳴いて反論しないところを見ると、とりあえずは納得したのだろう。

広暁が許したのに自分が反論するのは間違っていると考えているのだろうか?

「あとは俺が退院（?）したら缶コーヒーでもおごってもらえれば」

「…ちゃっかりしている奴だ」

悪いことをされたり良いことをしてあげたら見返りを求めるのは大学生の必須技能です。

昼飯を奢ってもらう・なりすましを頼むなどと一緒に、状況に応じて使い分けましょう。

「それと連絡事項だ」

「連絡事項?」

手を放した後、シグナムが話し始めた。今から言うことは隊長陣で話し合って決めたらしい。

「今日のお前の戦闘訓練は無しだ、ゆっくり療養しろということだろう。それと…」

そう言ってシグナムが制服のポケットから出したのはサジタリウス。そういえば無かったなと思いつつ、目の前のデバイスを見る。

「サジタリウス？無いと思ったらシグナムが？」

≪お元気そうで何よりです、マスター≫

「ありがとさん」

「幾つか魔法を覚えさせておいた。詳しいことはこいつに聞いてくれ」

「分かった」

広暁はサジタリウスを受けとって首からかける。

一瞬シグナムの顔が怪訝になったが、今は置いておくことにしよう。

「私は失礼する。シャマルも時機に戻るはずだから、奴の言うことを聞いてゆっくり休んでくれ」

「了か～い」

医務室から出て行くシグナムを、広暁は軽く手を振りながら見送る。

残された1人と1匹と1機は再び話を始めた。

「サジタリウス。俺が倒れた後どうなった？」

≪倒れたマスターをなのは隊長が浮遊魔法で医務室まで運んだ後、シャマル先生が治療しました。
倒れた理由は魔力の過剰使用。
2時間も全身に自己ブーストをかけていたなら当然の結果だそうです≫

「キュイ！」

2時間も自己ブーストを体にかけるなんて聞いたことがない、とシャマルは言っていたらしい。
改めて自分がやっていたことに恐れを抱く広暁。
それをやらせたシグナムって一体…。

「その前の訓練で作った矢と自己ブースト、自己ブーストかけながら作った魔力弾の変形体。
そいつらの分の魔力を自己ブーストに回してたらどれぐらいもつ？」

≪魔力量的には3時間が限度かと。何故そのようなことを？≫

「一つの目安…かな。
そこまでお前が心配することじゃないさ。
自己ブーストってのは本来、瞬間的にかけるのがメインなんだろ？
魔法による強化じゃなくて魔力による強化は特にさ。
さっきの訓練では長時間軽くかけてただけだしな」

≪確かにそうですが。もしまたこのようなことがあるなら、私はレ

ヴァンティンにかけあいます≫

「キュイ！」

「…それは止めてくれ。色々とめんどいことが起こりそうな気がする」

デバイスがデバイスにかけあうなんてありかよ、と心の中で突っ込みながらサジタリウスを宥める。

気になるところではあるが、転ばぬ先の杖だ。

というか、ホルスも誰かにかけあうつもりだろうか？

≪マスター、そろそろお休みになられた方が…≫

「そうだな。じゃあ最後、お前に覚えさせた魔法っていうのは？」

≪ラウンドシールド・リングバインド・フィジカルヒール・ソニックムーブ・ブリッツアクションの５つです。

ラウンドシールドは魔法陣を使用した円形の盾を作り出す防御魔法。

リングバインドは対象を魔力リングで縛る捕獲魔法。

フィジカルヒールは治癒魔法。

ソニックムーブは移動を加速する魔法。

ブリッツアクションは腕の振りやフットワークなど、体全体の振りを加速する魔法です。どの魔法もミッドチルダ式ですね。

発動形式としては魔法名を唱えるタイプなので、マスターが術式を構築する必要はありません≫

今言った中にバリア魔法が無いのは、既に広暁が使えるからであろう。

バリアならサジタリウスにもう覚えさせているのだ。

「まだ構築出来ないけどな。そうか、俺はミッドチルダ式でいくのか…」

自分の使う魔法の方針が決まったことに喜ぶ。だが、ここで一つ疑問が浮かんだ。

「攻撃用の魔法はないのか？」

先程サジタリウスが言った魔法の中に攻撃用の魔法がないのだ。一体何故だろうか？

≪マスターは魔力の扱いそのものに対して資質があるとシグナム副隊長は言っていました。ですので、攻撃は主に弓矢と魔力弾を変形させたもので練習するそうです。
加えてですが、まずは私に記録された５つの魔法を使うことで適性を見るとも言っていました≫

「ふーん…」

『魔力の扱いそのものに資質がある』

もしかして魔力弾の形を変えることが、だろうか？
確かに色々と変形も出来たし収束量も上げることが出来たが、それが難しいことだったのだろうか？
そもそも変形させたといっても、知っている技のパクリなのだが。

「……」

少し悩む広暁。だが、その後言ったことは…

「ちょっと練ｓｙ」

≪駄目です≫「キュイ！」

「へ～い…」

まだ療養中の身にはあるまじき言葉だった。
すかさずサジタリウスとホルスの神速の断りが入る。
渋々といった感じでベッドに戻り、布団を被ろうとすると…

ウィーン。

「シャマル？」

扉を開けて入って来たのは…

「お兄さん！！」「お兄ちゃん！！」

エリオとキャロだった。
フリードは留守番らしい。
どうやらお見舞いに来てくれたようだ。

「おっ、２人共。さっきはごめん…！？」

ズボッ！！

広暁が言葉を紡ぐことはなかった。
起きている広暁を見て嬉しかったのだろう、エリオとキャロが広暁に飛びかかったのだ。
それも結構なスピードで。

（痛い…）

言葉に出さなかったのは2人への配慮だろうが、それがかえって痛々しい。
そんな広暁に気付くことも無く、2人はマシンガンの如く言葉を紡ぐ。

「本当に大丈夫ですか！？頭が痛いとか気持ち悪いとか！！」

「なんだったら今から私がヒーリングしますから！！」

「もしかしてお腹空いてますか！？もしそうなら今すぐお昼を持って来ます！！」

「飲み物は何がいいですか！？紅茶ですか、コーヒーですか！？」

「…とりあえず落ち着こうか、2人共」

そう言って広暁はホルスに目配せをする。
ホルスは意味を汲み取ったのか、エリオとキャロの背後に回って頭

を小突いた…嘴で。

「「痛っ!?」」

ちょっと可哀想だが、これ以上続けられたら広暁がもたないのだ。

精神はもとより肉体が。

「…落ち着いた?」

「「ごめんなさい…」」

「ならいい。とりあえず降りてくれ」

「「はい…」」

2人はいそいそとベッドから降りるが。

「それで、お兄さん!体の方は大丈夫なんですか!?」

「シャマル先生に何もされてないですよね!?」

2人の攻撃、もとい口撃(こうげき)は止まらなかった。というか、キャロが言った言葉の意味は…?

「大丈夫、今は何ともない。

後は寝るだけだし、明日になれば治ってると思うから。

お昼はあとでシャマルに聞いてからな。

飲み物を飲むにしてもお茶か水だ」

たった70文字で今までに2人が言ったことを見事にまとめた。

さすが２０歳の元大学生、情報の整理はお手の物だ。

「「よかったぁ～…」」

安堵の溜息を吐くエリオとキャロ。

その顔は純粋に広暁の無事を喜んでいるようで、見ている広暁の顔も思わず綻ぶほどだ。

それから3人は今までのことを話した。

2人はデスクワークが一段落ついたので、休憩時間を利用して広暁のお見舞いに来たこと。

倒れた広暁をなのはが浮遊魔法で運んだことは勿論、シグナムがヴィータにズタボロとまではいかないまでも折檻されたこと。

スバルとティアナも後々お見舞いに来ること。

そして…

「あの…お兄さん。聞いてほしいことがあるんですけど……」

「急に改まってどうしたんだ？」

さっきまでとは打って変わってエリオが深刻な面持ちで話し始めた。

隣にいるキャロも似たような表情ということも考えると、今から話すことは重い話になるようだ。

広暁もそれを理解したのか、姿勢を正して2人を椅子の方へと誘導する。
椅子に座った2人は緊張をほぐすためだろうか、深呼吸を繰り返している。

「今から話すことって…前に聞いてほしいことがあるって言ったことだよな？」

「はい…。じゃあ、まずは僕から話します」

そう言ってエリオが話したこと。その内容は…

（重い、重過ぎる……）

エリオが話したのは自分の出生のこと。
エリオはモンディアル家の一人息子として生まれ、裕福な暮らしを送っていた。

しかしエリオが三歳の時、事件は起こった。
家に突然現れた科学者によって、半ば無理矢理研究施設に連れて行かれたのだ。
理由は、エリオが死んだモンディアル家の息子のクローンだったから。
その際、エリオが無理矢理連れて行かれるにも関わらず両親が途中で抵抗を止めたので、大好きな人に裏切られるという喪失感を味わったこと。
それに追い打ちをかけるように研究施設では非人道的な扱いを受けたので、益々心が荒れて自暴自棄になっていたこと。

そんなエリオを救ったのが、現保護責任者であるフェイトだった。
フェイトが訪れた際も、エリオは電撃を放出させて彼女を攻撃した。
そんなエリオに対してフェイトは全く抵抗せず、真摯な説得をしたのだ。

エリオの気持ちを全て分かってあげることは出来ない、だけど少しでも分かりたい。
だから悲しみで人を傷つけないで、楽しいことや嬉しいことを探して一緒に生きていきたいと。
そんなフェイトの説得にエリオの心は段々と氷解して行き、今に至るのだ。

「お兄さんに話そうかどうか迷いました。
だけどお兄さんはもう気付いていたみたいだし、何よりこれからも一緒に戦う仲間であるお兄さんにこのことを話さないのは失礼じゃないかって思って…」

「そうか……」

確かに広暁は、過去のエリオに何かあると考えていた。
１０歳で時空管理局の局員をやっていることは勿論、両親ではなく保護責任者がいること。
そして、自分がいた世界について話した時、両親のことを話したら顔が曇ったこと。
両親がいないことは想像がついていたが、まさかエリオがクローンということは考えもしなかった。

「私もそんな感じなんです」

続いてキャロが話した内容。
その内容はエリオとは違ったが、概ね似たようなものだった。
キャロは第５管理世界『アルザス』で、地方の召喚部族の子供として生まれた。
しかし、強力過ぎる竜召喚の力を恐れられ、たった一人で旅に出されたのだ。
管理局に拾われてからも行き場がなく、竜達の制御が出来ずにどの部隊からも持て余されていた。
しかし、上手く制御出来なくて当たり前なのだ、
正規の教育も訓練もほとんど受けていないのだから。
キャロ自身が戦いに怯えていたこともあり、フリードはちょっとした刺激ですぐに暴走した。
心を通わせた竜であっても、術者が正しく制御出来なかったら暴れ回るだけだ。

フェイトが保護した後も、キャロはしばらくの間覚えたままで、心を閉ざしていた。
今のように心から笑えるようになったのは、つい最近のことである

という。

「私も、お兄ちゃんには話そうかどうか迷いました。
だけど、エリオ君と相談して決めたんです、話そうって。
お兄ちゃんはもう気付いてたみたいだし……」

「……」

広暁を交えての初訓練の時、広暁は2人に言った。

「例え自分がどんなものを抱えていようと、自分を信じて1人の人間として自覚する」

この言葉があったからこそ2人は広暁に自分の過去を話す踏ん切りがついたのだろう。
しかし、これは広暁がそそのかしたと言っても過言ではない。

まだエリオ達との訓練に混じる前、広暁が隊長陣から魔法の訓練と勉強を受けていた時の話だ。
行動の時間帯や場所が違うとはいえ、広暁が他のＦＷメンバーと会う確率は低くない。
食堂で夕食を取ろうと思った広暁は、４人で夕食をとっていたＦＷメンバーを見つけたのだ。
その時、広暁は自分がいた世界のことを話した。
当然、家族のことも。
この時、スバル以外の全員が一瞬顔を暗くしたことに気付いてしまったのだ。
広暁のように観察力・洞察力に長けている人間は、総じて「気付く

力」が高い。
何かのきっかけで起きた動作や心情の変化に気付いてしまうのだ。
このことに加えてフェイトがエリオとキャロの保護責任者であることを考えると、2人は両親がいない、もしくはこころない両親によって何かひどい目にあわされたことがある。
広暁はそう考えていた。

過去に負い目を持っているから、エリオは動きに無駄が多く、キャロは竜魂召喚が制御出来ない。
広暁はそう考え、自分に過去のことを話すように仕向けたのだ。
2人が自分のことを『兄』として慕ってくれるのもこれに拍車をかけてしまった。
話してすっきりすれば訓練に集中することが出来、これから先も胸を張って生きることが出来る。
そう思った故の行動だったが、2人の過去は広暁にとっては正にパンドラの箱だった。

（俺もそれなりに苦労して生きて来たと思ってた。
だけど……この2人に比べたらどんだけ恵まれた人生を送ってきたんだ、俺は？）

広暁は地球の日本出身の人間だ。
普通の家庭に生まれて義務教育を受け、高校に進学。
勉強や部活、趣味に精を出しながら高校生活を満喫し、それぞれの分野で好成績を出した。そして、受験勉強を経て大学に進学。
大学に進学しても自分の将来が決まらず、決められた道筋の中でそれなりに生きて来た。
しかし、エリオとキャロは違う。
自分の生い立ちにもめげず、自分が生きる道を決めてそれに向かっ

て真っ直ぐ生きている。
今の広暁には、とてもじゃないが勝てる気がしない存在だ。

（だけど、２人は俺を兄として慕ってくれる。
だからこそ、自分の過去を話した。
今の俺じゃ到底２人の足元には及ばないだろうけど、その勇気を無駄にするにはいかない……よな）

広暁は意を決めて話す。２人の勇気を称え、自分を鼓舞するために。

「エリオ、キャロ」

「「は、はい！！」」

「２人は…今の自分をどう思う？」

「…僕はクローンです。
でも、だからといって自分を蔑むようなことはしません。
どんなことが起きても、僕は『エリオ・モンディアル』という１人の人間ですから！！」

「私もです。竜召喚の力を恐れられて村を追い出されはしました。
だけど、今の私はそれを制御することが出来ます。
自分の力を恐れはしません。
なぜなら…私は『キャロ・ル・ルシエ』という１人の人間ですから！！」

２人は言い切った、『自分は自分』という１人の存在であると。

例えどんな過去を抱えていようとも『自分は自分』。
そして、2人が断言したからこそ広暁も告げる。

「良い返事だ、2人共。
これから生きていく中で、色んな事があると思う。
だけど、過去を振り返ることはあっても、過去に縛られちゃ絶対に駄目だ。
人が生きるのは今、そして未来。
人は決して過去に生きることは出来ないんだからな」

「「はい！！」」

「良い返事だ」

返事に納得し、広暁は2人の頭を撫でる。
普段の広暁ならこのようなことはしないが、何故かやってしまった。
これで幾つ目のリミッターが外れたのだろうか？

「…って、ごめん！」

そう言って広暁は両手を2人の頭から話そうとするが…

「「もっと撫でて下さい！！」」

「！？」

エリオとキャロが凄い剣幕でそれを止めたので、広暁はそのまま2人の頭を撫で続けた。
この間、エリオとキャロは終始笑顔であったことを補足しておく。

一方その頃、医務室の扉前では…

「ど、どうしよう?ティア」

「入り辛いわね…この空気は」

広暁のお見舞いに来たスバルとティアナは中に入れずにいた。
自動扉とはいえ、中の声は聞こえる。
エリオとキャロが言った「もっと撫でて下さい!!」を聞いてしまったので、2人はちょっと入り辛くなってしまったのだ。
そして、扉から漏れているピンク色の幸せオーラの様なもの。
発生源はエリオとキャロだろうが、今この中に入ったら間違いなくやばいことになる。
故に2人が出した結論は……

「戻ろっか…」

「そうね…」

(もう広暁さんは大丈夫そうだし)

広暁は大丈夫だからと言い訳を心の中でして、早急に立ち去ることであった。

そんなこんなで再び医務室の中。
頭を撫でられてご満悦のエリオとキャロ、ちょっと両腕が疲れた広暁は雑談に花を咲かせていた。

「フェイトがエリオとキャロの保護責任者なんだよな？」

「はい。僕達2人はフェイトさんに引き取られたんです」

「ってことはさ。フェイトは2人のお母さんってことになるよな？」

「お、お母さんですか！？」

キャロは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。
広暁の言ったことはあながち間違いではないのだが、9歳しか年が離れていないフェイトのことをお母さんと呼ぶのはさすがに無理があるということだろうか？

「何ていうかその…エリオもキャロも、遠慮し過ぎなんだよ。もっとフェイトに甘えてもいいと思うぞ？」

「で、でも！フェイトさんいつも忙しそうですし…」

「そうです！私達が甘えたらフェイトさんの負担になるんじゃ……」

理由は違った。
2人はフェイトに対して遠慮していたのだ。
子供としての図々しさ、それが早熟な性格故に2人にはないのだ。

「確かにフェイトは忙しいと思う。
だけど、2人が甘えてくれないことがフェイトにとって辛いことは俺にも分かる。
本当にフェイトのことを心配するなら、2人に出来ることはもっと甘えることだと思う」

「「……」」

2人は考えるように顔を下げる。
広暁の言うこともだが、それでまたフェイトに心配をかけてしまうのではないか？
考えるのはいいことだが、この考えはけっして良い方向には行かない。
2人の思考を読みとった広暁は、更に言葉を紡ぐ。

「訓練や任務の時に甘えろとは言わないけどさ、プライベートではもっと甘えていいと思う。
無闇やたらに甘えなくてもいい、フェイトを頼るだけでもいいんだ。
例え、それがどんなに小さい事でも。
それと、もし出来るなら……お姉ちゃんかお母さんって呼んであげると喜ぶと思うよ？」

自分の中で考えを纏めているのだろう。
広暁が言った言葉を聞いた2人は、ちょっと難しそうな顔をしている。
だが、それも束の間。

意を決したのか、２人は口を開いた。

「お兄さん…僕、頑張ります！」

「私も、頑張ってフェイトさんに甘えます！！」

「お、おう。頑張れよ」

何か２人はとてつもなく意気込んでいる。
頑張るのはいいことだが……甘えることを頑張るというのは傍目から見てどう映るのだろうか？
……ちょっとずれているような気はするが、微笑ましい光景であることには間違いない。
広暁は想像した脳内ビジョンを消し、改めて２人を見る。

「そう言えば、時間は大丈夫か？」

「「時間、ですか？」」

「２人共、休憩時間を利用して来てくれたんだろ？
さすがに何十分も休憩時間があるとは思えないんだけど…」

「「…あっ！！」」

２人は同時に声を上げる。何かを思い出したのか、突然あたふたし始めた。

「ど、どうしよう、エリオ君！まだ報告書の作成が終わってないよ！！」

「だ、だだ、大丈夫！落ち着いて、キャロ！！」

どう見ても落ち着いているようには見えない2人。そんな2人に諭すように、広暁は言葉を紡ぐ。

「お見舞いありがとな、2人共。早く戻って報告書の作成、頑張れよ」

ナデナデ。

「「ウゥン～♪」」

広暁は再び両腕でエリオとキャロの頭を撫でた。
その心地良さに、先程までの2人の慌てっぷりはどこへやら。
兄に甘える弟と妹というよりも、主人に甘える子犬の方が表現的に正しく思える光景である。

「それじゃあ、お兄さん。失礼します」

「ゆっくり体を休めて下さいね」

「了解」

広暁に挨拶をした2人は医務室を出て、再びデスクワークのためにオフィスへと向かう……。

「俺も…強くならないとな……」

2人が出て行った後の医務室で、広暁は呟いた。
この言葉に込められた意味を知ってか知らずか、ホルスが翼を勢いよく羽ばたかせ始めた。
サジタリウスも何か思うところがあるのか、黒い水晶を点滅させて広暁に語りかける。

≪私も共に強くなります≫

「…ありがと。俺、ここまで強く何かを成し遂げたいって思ったの

は初めてかもしれない。これが、俺の生きる道……」

≪（……見つけられたのですね……）≫

「キュキュイ！！」

広暁の決意を聞き遂げた１匹と１機。
サジタリウスは数回水晶を点滅させてそれに応え、ホルスは鳴くことで応える。

１人と１匹と１機の新たなスタート。
それを決意させたのは、１０歳の男の子と女の子の２人であったという。

第２０話「ｂｅｌｉｅｖｅ　ｉｎ　ｍｙｓｅｌｆ」（後書き）

第２０話、いかがだったでしょうか？
自分の進む道が決まった広暁の今後をどう書いていくか…難しいですけど、それ以上に楽しさで溢れてます、私の心は。
…ちょっとキザでしたね、私反省。

では。感想・意見・訂正等、よろしくお願いします。

第２１話「考察」（前書き）

第２１話です。
今回の話では、魔法に関する私なりの解釈を含んだ部分が多々あります。
そこを踏まえた上で読んでいただけると、私としては嬉しいです。

では。第２１話、始まります。

第２１話「考察」

～部隊長室～

ここは部隊長室。
はやてとリィンが書類関係の仕事をすることが多いこの部屋に、数人の女性が集まっていた。
集まっているのは、はやて・リィン・なのは・フェイト・シグナム・ヴィータ。
彼女達が見ているのは、午前中の広暁の訓練映像。

「こんなことが出来るんだ…」

「執務官の仕事で協力してもらった本局の魔導師の方にこうゆうことを出来る人がいたけど…。
改めて見るとやっぱり凄いね」

「シグナムの言った通りやな。これは面白い資質や」

「凄いです～」

「もしこれをサジタリウスで放ったら…」

「殲滅力こそないが、火力は十分期待出来る。広暁ならそれも可能だ」

映像の中で広暁が行っていること、それは決して珍しいことではない。
ただ魔力を矢の形に生成しているだけだ。

だが、普通でないのはその集束量。
普段の広暁が魔力矢を生成する際に収束する魔力量を優に超えるそれは、術式を構築して発射する中距離砲撃魔法と同等の火力を持つ。
それを広暁は、魔力を集束して魔力矢を生成するという魔法の基礎中の基礎だけでやってのけた。

「これを放ったら……」

「……凄いことになるね」

なのはとフェイトの言う通り、これは凄いことである。
広暁は並の魔導師が放つ中距離砲撃魔法と同等の火力を持った矢を放てるのだ。
これを術式構築して収束出来る魔力量を増やしたり、誘導制御をつけて魔法にしたら…考えただけでも凄いことになる。
効果範囲が狭いとはいえ、火力が同等というだけで十分に凄いのだ。

「それだけではない。これを見てくれ」

そう言ってシグナムが切り替えた映像。
そこに映し出されていたのは、先程の矢の１／３程の長さの魔力矢を生成している広暁。
だが、その数が普通ではない。

「……全部で何個や？」

「え～と…全部で３２個です。広暁君は器用ですね～」

広暁は３２個の魔力矢を同時に生成しているのだ。
時間はかかる上に集中力も必要、集束出来る魔力量もそこまで多く

ない。
今の段階では誘導制御すら不可能だろう。
だが、もしもこれらが一斉に放たれたとしたら…避け切るのは難しい。
防ぐことは出来たとしても、防御魔法に回す魔力量が増えるのも必定。

「広暁なら出来ると思ってやらせたのだが…まさかここまで上手くいくとは思わなかった。
ここまで器用なことが出来る奴はそうそういない。
このまま鍛え続ければ、奴は必ず戦力になる。
ある程度出来るようになったら魔法にすればいい。
術式はミッドチルダ式の砲撃魔法のそれをちょっといじればいいしな。
そこまで難しくないだろうから、直にデバイス無しで広暁も発動出来るようになるはずだ。
それに……」

「シグナム、そろそろ落ち着こうか」

そろそろシグナムの歯止めが効かなくなってきたので、はやてが止めに入る。
先程のヴィータの折檻に懲りてないのか、また燃え上がっているように見えるが…気のせいだろう。

「広暁にはホルスもいるしな。
初めて見た時も驚いたけど、改めてこないだの出動時の映像を見たら驚いたぜ…」

「私もあれには驚いたな～、まさか格闘戦をするなんて思わなかったし。
それに、『フレイムアロー』っていう魔法も凄いよね」

「実際は炎を集束してるだけらしいけどな。広暁が考えたんだろうな、矢の形だったし」

ヴィータの言う通り、ホルスも凄い。
初出動時には強力な火炎放射だけでなく、矢の形に収束した炎を飛ばす『フレイムアロー』でガジェットを破壊し、あまつさえ肉弾戦までこなしたのだ。
だが……

「ほんま凄い奴やで、広暁は。だけど……リィン、そっちはどやった？」

「はいです。『ホルスの黒炎竜　ＬＶ８』という竜が載っている書籍は…なかったそうです」

「そうか……」

はやてはホルスという竜の存在についても調べていた。
広暁の話は信じているし、疑う気も更々ない。
しかし、何の理由もなくいきなり竜が表れるなど常識的に考えたら信じ難い話だ。
もっとも、その理由を見つけることが困難であることは想像に難くない。

故に、ホルスが存在するかもしれない管理世界のことを調べていたのだ。
無限書庫ならそれもあると思い、無限書庫司書長で友人でもあるユーノ・スクライアに捜索を依頼したのだが、結果は不発だった。
「でも！ホルスという名前なら見つけることが出来たそうです！！」
「ホンマか、リィン！？」
「はいです！これがそのデータです！！」
ピッ。
「これって…」
モニターに映し出されたのはホルスのデータ。しかしその内容は…
「エジプト神話やないか、これ？」
そう、エジプト神話だ。
なのは達の故郷である第９７管理外世界である地球。
古代に数多栄えた文明の中でも最も有名といっても過言ではない文明。
そんな文明である『エジプト文明』の神話である。
「私、歴史はちょっと……」
「ごめん、私も……」
「２人はもっと本読まなあかんで～？…っとリィン、説明続けてく

れるか？」

「ホルスはエジプト神話に出てくる神様で、冥界の神オシリスと豊穣の神イシスの子供。天空と太陽の神と言われています。外観は、隼の頭をした人間で描かれることが多かったそうです」

「天空と太陽の神…か。それは何となく分からんでもないんやけど…ホルスは竜やで？」

「でも、ホルスって鳥に似てない？嘴とか翼とか」

「私も初めて見た時、竜か鳥か迷ったよ。前足があるから竜だって思ったけど」

「2人共、論点がずれてるで」

はやての突っ込みに対し、なのはとフェイトは苦笑いをして口を噤んだ。

ちなみに、ヴィータとシグナムはずっと口を閉ざしている。

地球にいたことはあっても、古代文明のことなど知る機会は無かったのだろう。

「まぁ…これが分かっただけでもよしとするか。ほな、これで会議は終了やな」

この会議は元々ホルスのことを話すために開かれたのだが、何故かこのような会議になっていた。

リィンの報告は別として、それ以外は完全に予定外だったのである。

「私はこれから本局の航空武装隊に様があるから」

「私も、この間分かったガジェットのパーツのことで本局に」

「じゃ、あたし達で４人の面倒をみるか」

「そうだな」

「頼むな～」

「さてと！私は広暁のお見舞いにでも行こうかな～♪」

「え？この書類はどうするんですか？」

リィンが指差したのは、はやての机の上に積まれている書類の束。
部隊長として処理しなければならない書類は部隊員のそれとは比較にならないほど多い。

「帰って来たらやるから、リィンは先にやっといてや～」

「え！？はやてちゃん！？」

そのままはやては部隊長室を出ていく。
残されたリィンは、書類の束を見てため息を吐くしか出来なかった。

～医務室～

「攻撃魔法か…今日の訓練をやった感じだと、考えられるのは２つだな」

≪この２つですか？≫

「キュイ」

サジタリウスが映しだした映像、そこには広暁が作り出した矢が映っていた。
午前の訓練で試したことを基に、オリジナルの魔法を考察中なのだ。

「普通の矢より生成に時間はかかるけど、その分威力に特化した矢を放つ魔法。
火力では劣る小さめの矢を複数飛ばす魔法。
技名は……また考えるか」

シグナム曰く、矢として集束する魔力が多いほど速度は上がるが、誘導制御が効きにくいらしい。
体積が同じ物体でも、質量が大きい物体の方が早く飛ぶのと同じ理屈ということだろう。

「前者はまだやりやすいけど…後者はどうする？
俺が数本自分で矢を放って、後は周りに展開して発射。もしくは…」

≪マスターが生成された矢を分岐…ですね。マスターだけが行うのなら魔力量的に不可能に近いですが、術式を構築して魔法として放てばそれも簡単です。マスターはご自分だけでも３２本まで生成出来るのですから≫

「（術式って便利だな…）周りに展開する方は広く散開しやすいから広範囲向け。分岐する方は狙いを定めやすいからタイマン向けってところだな」

≪ですね≫

「キュキュイ」

所々ホルスの合いの手が入りながら会議？　は着々と進んでいく。
魔法の実践は止めたホルスとサジタリウスだが、魔法の考案は止めなかったらしい。
体を動かすわけでもないので、頭を使うぐらいはいいと判断したのだろう。

ちなみに、殲滅力の高いミサイルを１発放つより殲滅力は低くても複数のミサイルを放った方が着弾点の被害は大きい。
これと同じことを考えると、ケースバイケースとはいえ後者の魔法

の方が使う機会は多いだろう。
もっとも、あくまで『火力』や『殲滅力』を重視する場合の話だが。

「まぁ、後は術式を構築出来るようになってからだな」

≪マスターは術式に対する理解速度が早いような気がしますが…≫

「数学と物理の応用みたいなもんだからな。
伊達に小・中・高・大と勉強してないよ、数学も物理も得意だし。
まぁ、物理の勉強が始まったのは中学からだけど」

理系人間なめんじゃねぇ、と心の中で思っていそうな笑顔である。
そう考えると日本の若者も、理系ならミッドチルダでも活躍出来るのだろうか？
他にも、通信司令とかデバイスマスターとか。

「後は…う～ん……」

≪特に無いかと。私にプログラムされた魔法を試すわけにはいきませんし≫

サジタリウスの言葉に、広暁は難しい顔をする。
体は大丈夫とはいえ、シャマルの許し無しに勝手に出ていくわけにもいかないので暇なのだ。

「サジタリウス、シャマルは今何してるか分かるか？」

≪クラールヴィントに尋ねてみます……今はティータイムだそ

うです。後３０分ほどで戻ると≫

「あの医者……まぁ、いいか。それより、聞いてほしいことがあるんだけど…」

≪聞いてほしいこと、ですか？≫　「キュ？」

「あぁ。この間のガｚｙ」

「広暁～？失礼するで～？」

「！？」　「キュ！？」　≪！？≫

彼らは一斉にドアの方を振り向いた（実際に振り向いたのは広暁とホルスだが）。

声と口調から判断するに、はやてが来たようだ。

広暁は一瞬顔をしかめるが、すぐにそれを直してサジタリウスとホルスに話しかける。

「…話しはまた今度な。どうぞ～」

≪…了解です≫

「キュイ」

サジタリウスとホルスが了解の合図を告げた直後、はやてが扉をくぐって医務室へと入って来る。

片手には果物が入ったバスケットを持っており、どうやらお見舞い

に来てくれたようだ。

「思ったよりも大丈夫そうやな。心配したでーホント」

「いや～、申し訳ない。鍛えてるつもりだったんだけど…やっぱりまだ戦闘には慣れてなくて」

「こないだの出動時はそんな風に全く見えなかったけどな～…っと、これ。お見舞いの品やで」

「ありがと」

トテトテと部屋の中に入って来たはやては、ベットの傍の椅子に座る。

そのまま流れるような動作でバスケットからリンゴを取り出し、ナイフで剥き始めた。

「いや、さすがにそこまでしてもらうわけには……」

「怪我人が遠慮せんでえーの。ここは大人しくはやてちゃんに任せとき」

「ん～…」

広暁は納得いかないようだが、これ以上反論しても無駄と判断したのか口を閉じた。

そして視線は、はやての手元へと移動する。

右手に果物ナイフ、左手にリンゴを持ったはやては、器用にリンゴの皮を剥いていく。

それを見た広暁は、ちょっと羨ましそうな声ではやてに言った。

「はやて器用だな」

「まぁ、私は昔から料理してるからな。広暁は出来へんの？」

「剥けないことはないけど…皮に実が結構つくと思う。あんまりそういう機会無いし」

「実家暮らしの大学生はそんなもんやろな～。
これからの時代、ちゃんと料理も出来んといかんで？」

「だな…」

雑談をしながらも、はやてはリンゴの皮を器用に剥き続ける。ところがどっこい、その心中は……

（料理の出来る女を見せつけて好感度アップや！　カリムには負けへんでー！！）

広暁に料理が出来ることの大事さを教えつつも、その心はちょっと濁っていた。
その心の乱れが指先に表れないあたり凄いが、もしこれを広暁が知ったら…どうなるだろうか？

「ほら、剥けたで」

「サンキューな」

剥けたリンゴを切り分けたはやては、皿に乗せて広暁に渡そうとする。

広暁もそれを受け取ろうとするが…

ヒョイ。

（ン？）

ヒョイヒョイ。

…受け取ろうとするが、はやては広暁が皿を取ろうとするとその皿を移動させた。

何故このようなことをするのか…広暁は想像がつきながらも念のためはやてに尋ねる。

「リンゴ食べたいんですけど…」

「何言ってんねん。こうゆう時にはこれがお決まりやろ？」

サクッ。

はやてが取った行動、それはリンゴにフォークを指して広暁の目の前にかざすこと。

広暁もその行動が意図することが分からないわけではない。

しかし、その行動を実行に移すにはかなりの胆力がいる…

パクッ。

「えっ！？」

モグモグ…ゴックン。

「美味いな～、このリンゴ」

…はずなのだが、広暁は何の躊躇もなくリンゴに喰いついた。
そのまま咀嚼して飲み込み、感想を述べる。
その一連の流れに、はやては驚いているようだ。

「どうした？」

「え、いや、その…もう少し恥じらいがあるかな～と」

「そういう態度とったら負けたような気分になりそうな気がした」

「う～…」

「次、お願いしまーす」

「…はい」

ヒョイ。

パク。

モグモグ…ゴックン。

「美味いな～」

「うぅ～～……」

そんなこんなでリンゴを食べ終わった広暁。はやてが少し落ち込んでいる様な気がしないでもないような気がするが、広暁は気にしないことにする。

「そう言えば…お見舞いに来てくれたのは嬉しいんだけど、仕事はいいの？」

「大丈夫やで、リィンに任せてきたから…勿論、私も後でやるよ！？」

ちょっと鋭くなった広暁の視線に、はやては思わず語尾が上擦る。自分もやるという当たりさすがだが、自分の部下に戒められる部隊長…いいのか、それで？

「ってそんなことより！ホルスのことで分かったことがあったんや！！」

「分かったこと？」

気まずい流れを断ち切るため、何より自分の尊厳を守るためにはやては話題を変える。

その話題とは、先程リィンからの報告で分かったこと。

「ホルスはエジプト神話に出てくる神様で、冥界の神オシリスと豊穣の神イシスの子供。天空と太陽の神と言われてるそうや」

はやては自信満々と言った感じで言い切るが…

「ん？　そうだよ？」

「……パードゥン？」

広暁は「何それ？　そんなの、とっくの昔に知ってるよ？」と言わんばかりの表情で答えた。
余りに予想していない返答だったのか、はやては言葉が英語になる。

「えーと、広暁…知ってたんか？」

「うん。あ～…そうか。遊戯王カードの成り立ちについて話してなかったな」

「成り立ち？」

「アニメの話になるけど、遊戯王カードの元は３０００年前のエジプトが発祥ってことになってるんだ。だからアニメのキャラクターやカードには、エジプト神話の神の名前が多いんだよ」

「…マジで？」

「マジで。遊戯王カードやってると、神話に出てくる神様とか武器

の名前に詳しくなるんだよな～」

うんたらかんたらと広暁は遊戯王の雑学を話し始めるが、はやては意気消沈していた。
無限書庫を使ってまで調べた内容を、広暁がもう知っているとは思わなかったのだ。
雑学を話していていた広暁もそんなはやての様子に気付いたのか、はやてに話しかける。

「それで…ってはやて？　どうした？」

「…うぅん、何でもない。ほな、お大事に～……」

「うん？　分かった」

トボトボ…　ウィーン…　ガジャン…

「俺のせいかな…？」

≪半分はそうでしょうね≫

「キュイ？」

部隊長室を出たシグナムとヴィータは、オフィスへと向かっていた。
先程話した通り、フォワード４人のデスクワークを見るためである。

「シグナム、何難しい顔してんだ？」

「……」

「シグナム？おい、シグナム！？」

「…っ！？すまない、どうかしたか？」

「どうかしたか？じゃねえよ。何難しい顔してんだって聞いてんだよ」

「…あぁ、済まない。何、そんなに難しいことを考えてるわけじゃない」

「じゃあ何を考えてるんだよ？あたしでよかったら相談に乗るぜ？」

「そうだな…。ならば聞くが…」

「あぁ」

烈火の将と呼ばれているシグナムが悩む姿が珍しかったのか、ただ家族として心配だったのか。
理由は両方だろうが、本音でいえば後者だろう。
シグナムが放つであろう言葉を一字一句聞き漏らすまいと、ヴィータは身構える。

「サジタリウスの待機状態だが…ペンダント型で紫色の紐が通してあったな？」

「……確かにそうだけど？あたし達みたいに首からかけるんじゃねえのか？」

「それなんだが…なんとゆーか……広暁のイメージに合わなくてな……」

「……は？何を言ってんだお前は？」

シグナムが言ったことに対し、ヴィータは呆然とした。
それもそうであろう。
普段悩む姿を見せないシグナムが、珍しく悩んでいる素振りを見せた。
それを心配して理由を聞いたら、部下がデバイスにつけている紐がそいつのイメージに合わない。
生気が抜けるを通り越して、魂が昇天しかねない勢いだ。

「広暁は冷静というか落ち着いているというか…クールなイメージがあるだろ？
だから、紐の色は青とか黒の方が似合うと思うんだが……」

（折檻した時に頭を殴り過ぎたな…うん、そうに違いない。
次からはボディーを重点的に攻めるか……）

「もしくはイメージを明るくするために、オレンジや赤の方が似合っていると思うのだが…。
ヴィータ、お前はどう思う？」

「アー、ハイハイソウデスネー。ソッチノホウガイインジャナイカナー？」

「何故片言なのだ？」

ビビビビッ！

「！？」

「どうされました？　騎士カリム」

「私のセンスを悪く言われたような気がするわ」

「はい？」

この日の夜、教会の制服を着て姿見の前で延々と唸るカリムをシャッハは見たらしい。

第２１話「考察」（後書き）

第２１話、いかがだったでしょうか？
なのはの世界の魔法は、数学と物理、そしてＣ言語の様なプログラムに通ずる部分があるので、オリジナルの魔法を考えるのはそれほど難しくないと私は考えています。
ですので、これからも主人公である広暁にはオリジナルの魔法を使わせる機会が多いと思いますが、よろしくお願いします。
勿論、既存の魔法も使わせますよ？

では。感想・意見・間違い訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第２２話「日記」（前書き）

第２２話です。
今回の話は、視点転換はあれど全て１人称ですので、読む時は気をつけて下さいね？

では。第２２話、始まります。

第２２話「日記」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

あ～、今日も疲れた～。
今日の夜の訓練、あれは何だ？
気絶はしないけど、あれはいつ倒れてもおかしくないぞ。
何でセンターガードの俺がガードウィングのシグナムの攻撃を延々と受け続けるんだ？
移動型のセンターガードである俺を鍛える目的ってのは分かるし、「こういう状況もある！！」っていうシグナムの言い分も分かる。
だけど俺は、剣を持った相手に切りかかられたことなんて今まで一度もないんだぞ！？
剣筋は見えてもサジタリウスで不器用に防ぐことしか出来ないし、結局ほとんど避けて終わった…。
足に自己ブーストかけてたせいでまだ足が痛い…寝る前にフィジカルヒールかけとくか。
…っとその前に。

今日から日記を付けることにした。
ミッドチルダでの新しい生活を記す日記だ。
今まではミッドチルダに来る時に持っていた手帳に書いていた。
だが、さすがに手帳では限界がある。
その旨をなのはに話したところ、備品で余っていた大学ノートを貰うことが出来た。
これからはこのノートに日記を書いていきたい。

元の世界…異世界の地球に帰れるかどうかは分からないが、ミッドチルダに骨を埋める覚悟はある。
自分でも呆れるほど落ち着いているが、ミッドチルダに来てから何かが変わったのだろう。
自分がやりたいこと…自分の進みたい道。
それを見つけることが出来るかもしれない。
というより、もう見つかってると言った方が正しいか？

向こうの世界にいる家族や友人には勿論会いたい。
だが、今は会えないのなら思い出しても悲しくなるだけだ。
必要な時に思い出して感慨に耽ることが出来るようにしたいと思う。

…脳内で独り言を言っても悲しくなるだけだな、早く日記を書いて寝るか。

＝＝＝

あれだけやれば1月飛行訓練をするのと変わらないそうなので、まだ断定はしていなかったそうだ。
普通はあんなやり方で飛行の練習はしないそうだけどね。
だってあれが一番手っ取り早いと思ったんだもん。

だが、矢の生成を見てはっきりと分かったらしい。
魔力を弾の形…魔力弾にしたり、砲撃として打ち出すのは難しいことではない。
元来、魔力を集めると最も安定するのが球状らしい。
これは俺もやっていて分かった。
しかし、それを別の形に集束、維持となると話は変わる。
本来なら、球形の魔力弾より弾丸の様な形状の方が貫通力が高いのは自明の理。
だがそれをしないのは、なのは曰く

「変形して維持するのは難しいから、術式を構成して砲撃魔法を使うの」

つまり、俺はミッドチルダでは珍しいタイプの魔導師ということになる。

『集めた魔力を自在に変形して収束する』

出来る魔導師が存在しないわけではないが、それでも少ないらしい。
かと言って、日の目を見ないというわけでもない。
この資質がある人は身軽に行動出来るので、奇襲が主な任務だそうだ。
デバイスも持っているそうだが、ほとんど使わないらしい。
それでいいのか、あんた達…。

今更だが、俺はなのはやフェイトを呼び捨てだけどいいのか？
公私で使い分けてるけど、いくら年下でも自分の上司や上官を呼び捨てっていうのはなぁ。
シグナムやシャマルにいたっては俺より年上に見えるし。
そういえば、ザフィーラは何歳だ？
狼らしいけど、話せるならそれっぽい魔法生物とか…。
竜もいるから不思議じゃないけど、一体何歳なんだろうな？

話が逸れた。つまり俺は、

『魔力の扱いそのもの、もっと突っ込むならば集めた魔力の収束・変形・維持が得意』

ということになる。
したがって、主な攻撃方法は、矢を生成して狙撃。
もしくは、様々な形に変形させた魔力を攻撃に使うことにする。
術式構築やデバイスの補助が不要なので、ミッドチルダ式としては素早く攻撃に移ることが出来る。
と言っても、色々と手を出し過ぎると器用貧乏になるので、攻撃は矢関係に絞るつもりだ。
もっとも、それでは火力や殲滅力で劣るので、状況によってはちゃんとした魔法を使いたい。
魔力がエネルギーの塊とはいえ、ただ矢を放つだけでは破壊力で劣るのだ。
そう考えると、鏃（やじり）を無くして長い針みたいな矢にした方がいいか？
螺旋回転を加えて貫通力を上げるってのも有りだな。
ただでさえ魔力弾より貫通力が高い俺の矢の威力が上がるだろうし。
正確性は誘導制御で問題無い。

だけど誘導制御つけると速度がなぁ…。
臨機応変に、ということにしておこう。
火力・貫通力・速度・誘導制御によって別々の魔法を考えるっていう手もある。

防御魔法はバリア・シールド・フィールド系を使い分ければいい。
これら防御魔法に関しては、術式構築が自分で出来るようになった。
よって、サジタリウスに頼らなくても発動出来る。
もっとも、防御は最終手段であり、避ける方が俺には合っているのだが。
俺は元々瞬発力があり反射神経もよく、それらをスポーツとトレーニングで更に伸ばした。
この資質のおかげで魔力による身体強化も上手く出来るので、攻撃は避ける方が俺に合っている。
だが、センターガードというポジション上、避けてばかりもいられない。
味方に対する最低限の攻撃は防ぎたい。
まあとにかく何か新しい防御手段は考えたいので、これから推敲していこうと思う。

移動魔法はまだ考え中だ。
体の振りを加速する『ブリッツアクション』と、移動を加速する『ソニックムーブ』。
矢を番えるのにブリッツアクションは不要だし、速く動きたいなら足に魔力をかければいい。
高速移動するならソニックムーブは必要だが、俺の戦闘スタイルとポジションでは不要な気がする。
……あれ？
体じゃなくて、矢にこの2つの魔法はかけれないのかな？
もし出来るなら矢の速度が上がるだろうし。

矢といえば、前の出撃ではガジェットのＡＭＦを貫通出来た。
しかし、もっと強力なＡＭＦでは消されるかもしれない。
だったら魔法で金属の矢を作って、速度強化して放てば強力じゃないか？
魔力と違ってエネルギーじゃないから、爆発による殲滅は期待出来ない。
しかし、貫通力というただ一点においては魔力の矢を上回るだろう。
静物狙撃じゃないと当てるのは難しいだろうが、一考の余地ありだな。
金属生成の魔法があるか聞いておこう。

正直言って治癒魔法は難しい。
軽い筋肉痛や怪我なら直せるが、体全体を包み込むように出来ない。
俺が治癒魔法で治せるのは、あくまで体の一部分なのだ。
覚えておいて損はないので、時間があったらキャロかシャマルに詳しく教えてもらおうと思う。
……この短時間で学んでる身としては贅沢なことかもしれないが。

捕獲魔法は便利だ。
一旦捕まえてしまえば、貫通力のみに的を絞った矢を放って狙うことが出来る。
だけど今の俺では、対象がある程度近くにいないと捕まえることが出来ない。
対象が高速で移動するのも同様だ。
練習を積めば出来るようになるらしいので、攻撃の次に力を入れて練習したい。

今までやった感じでは、回復魔法以外はある程度こなせた。

つまり、魔力操作が俺の得意なスキルであり、回復魔法が苦手なスキルということになる。
結界魔法と召喚魔法はやったことがないので分からないが、暫定的に決めておく。
召喚魔法はレアスキル扱いみたいだから期待はしてないけど。

そういえば、未だに巨大化したホルスとの訓練がない。
今日だって、技が決まってないと訓練し辛いとかで一緒に訓練してないし。
前の出撃で分かった通り、ホルスが巨大化出来るのは1日1時間。
俺から魔力を供給すれば更に時間を伸ばすことは可能だとシャマルは言っていたが…。
それを考慮に入れてということだろうか？
炎の生成という点では小さくても大きくても変化はないので、別にいいのだが。
俺とホルスだけで出撃なんてまずないから、訓練をやっても無意味かもしれないしな。

そもそも、ホルスが規格外過ぎる。
俺達フォワード5人が束になっても、巨大化したホルスには勝てないだろう。
竜魂召喚によって真の姿になったフリードが加わってようやく勝てるといったところだ。

ホルス…お前は一体何なんだ？
この間の出撃の時に戦った3色ガジェットといい、一体ミッドチルダで何が起きてるんだ？
カードが実体化したと思ってたけど、実際は違うのか？
一体……？

これ以上深く考えても分からないものは分からない。
幾つか仮説は考えたが、今は目の前にある課題を順番にクリアしていきたいと思う。
明日も早いので、今日の日記はこれまでとする。

＝＝＝

「キュイキュイキュイキュイ」

「痛いって」

『つつく』が『みだれづき』になってきたので、軽く頭を撫でて攻撃を止めさせる。

明日も早朝訓練があるので、今日はもう寝るか。

部屋の電気を消してスリッパを脱ぎ、ベッドに入る。

ついでにホルスも入ってくる。

俺と一緒に寝るのが好きなようで、最近はよくベッドに入ってくるのだ。

羽を折りたためばコンパクトで体が温かいので、最近は寝つきがよくなった気がするな。

「目覚まし頼むな、サジタリウス」

『分かりました。お休みなさいませ』

「お休み～」

「キュイ～」

そして俺の意識は暗闇へと落ちていく……。

＜サジタリウスｓｉｄｅ＞

マスターは就寝されましたね。
今日から日記をつけることにしたようで、寝る前まで机に向かっていましたが……。
その光景をホルスが恨めしそうに見ていたのは私の気のせいでしょう。
断じて早く一緒に寝たいとホルスが思っていたとは思いません。
ええぇ、思いませんとも。

今日は夜の訓練を除いて、マスターの資質を伸ばすための訓練のようでした。
矢の生成も1秒強で出来るようになり、遠距離へ攻撃に移る速度としては六課最速らしいです。
シグナム副隊長は「もっと速く！」と言っていましたが、マスターならそれも可能でしょう。

マスターは努力家です。
通常の訓練に加え、ミッドチルダの言語の勉強。
デスクワークを行い、空いた時間を見つけては自主練をしています。
マスターは「俺が皆の足を引っ張るわけにはいかないしな」と言っていましたが……。
マスターは気付いていないのでしょうか？
今やフォワード5人の中でマスターが中心となっていることに。

……いえ、マスターは気付いていてそう言ったのでしょうね。
マスターは『気付く』人ですから。
一番新人の自分が中心になるわけにはいかない。
だからこそ自分は一歩引いて４人を見て、サポートする。
今はそれでいいかもしれませんが、段々とそれでは駄目になってきます。
マスターはそこのところを分かっているのでしょうか…？

……どちらにしろ、今の私には見守ることしか出来ませんね。
マスターが気付いていないとは思えませんし、気付いていないのなら私が忠告すればいいだけです。

ホルスは炎の収束バリエーションを増やす訓練をしていました。
技が確立していないと訓練もし辛いようで、今はまだホルスも５人の訓練には加わっていません。
攻撃用のフレイムアローとフレイムスピアだけでなく、防御・補助用の技も考えているようです。
勿論マスターと私も考えていますが…今ではホルスが自分だけで考えている時間の方が長いです。
マスターもホルスがここまで知能が高いとは思っていなかったらしく、とても驚いていました。
勿論、私もですが。
知能は人間と同じではないかと最近は考える程です。

娯楽のカードゲームから出て来た存在『ホルスの黒炎竜　ＬＶ８』。

その基となったエジプト神話に存在する天空と太陽の神『ホルス神』。

マスターは分からないと言っていましたが…マスターには幾つかの仮説があるのでしょう。

この間医務室で話そうとしていたこと。

そして、夜1人の時に何かを考えるように窓の外を見続けていること。

きっと、医務室で話そうとした仮説に更に考察を加えているのでしょう。

私としては、もっと気軽に相談してほしいものです。

自分の中に貯め込んで、結果として周りに被害をもたらす思春期の傍迷惑な人間とは違いますが…。

マスターは、出来ないことや確証が無いことは口に出さない性格のようです。

恐らく、あの時自分が言おうとしたことに改善点が見つかったのでしょう。

はやて部隊長が来る来ないに関わらず話は無くなっていたでしょうね。

政治家がテレビで発言するわけではないのですから、もっと気軽に相談してほしいものです。

ここは今度、マスターに強めに言っておきましょう。

…そういえば。

はやて部隊長と騎士カリムはマスターに気がある様ですが…マスターはどうされるのでしょうか?

私としては、マスターの幸せを祈るだけです。

こう言ってはなんですが、2人共しつこい性格のようですから。

このことを踏まえて、私もマスターをサポート出来るように精進し

ましょう。

目覚ましは予約しておきましたし、そろそろ私もスリープモードに移行しましょうか。
明日もまた、マスターと共に訓練に励みましょう。

＜ホルスｓｉｄｅ＞

「ス～ス～……」

初出動時の夢を見る。

「キュ…キュー……」

ガジェットを壊すシーン。

「キュ！」

左手で正拳突き。

「キュ！」

右手でフック。

「キュ！」

左足で前蹴り。

「キュ！」

右足でローキック。

「キュッキュ～♪」

スッキリ。

「キュイ～……」

夢は続く。

第２２話「日記」（後書き）

第２２話、いかがだったでしょうか？
サジタリウスが人間臭過ぎる…と思われる人が多いと思いますが、私としてはこれぐらいの方が好きです。
私の趣味で申し訳ありませんが、ご容赦下さい。

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第２３話「地球編１」（前書き）

第２３話です。
ここから数話、サウンドトラックの地球出張編になります。
広暁達の出張はどうなるのでしょうか？

ではでは。第２３話、始まります。

第２３話「地球編１」

ここは聖王教会、カリムの執務室。この部屋にいるのは２人の女性。
１人はカリム・グラシア。聖王教会教会騎士団騎士。
もう１人はシャッハ・ヌエラ。聖王教会修道女でカリムの秘書。
彼女達２人は、モニターに映し出された報告書を見ていた。

「ロストロギア発見の報告…ですか」

カリムの部屋に呼び出されたシャッハが見たのは、ロストロギア発見の報告書。
その文面を読んだシャッハは微妙に顔をしかめる。

「機動六課に捜査依頼ですか…機動六課はレリック専門では？」

「その可能性を否定し切れないから、よ。
勿論、こんな不確かな情報ではやての部隊を動かしたくはないのだけど…ねぇ？」

「…あぁ、そういうことですか」

本来ならロストロギアの保守と管理は聖王教会の使命の一つであり、専用の調査団もある。
しかし、それら全てがで払っており、今の聖王教会には動かせる手足が存在しないのだ。

「仕方ないわね…はやてに連絡しておきましょう。丁度いい里帰りになるでしょうしね」

「里帰り…ですか？もしかして、発見されたロストロギアがある場所は…」

「そう。第９７管理外世界…」

「地球への出張任務？」

「そうだよ。出発は明日の朝になるから、ちゃんと準備しておいてね？」

夜の訓練を終えて自主練をしていた広暁。

そこに訪れたがフェイトである。

広暁がエリオとキャロに言ったことが功を奏したようで、２人はフェイトに対して甘えるようになったらしく、そのことを広暁は度々聞かされていた。

もっとも、『お姉ちゃん』『お母さん』と呼ばれるのは恥ずかしいらしく、今まで通り『フェイトさん』と呼ばせているあたり、フェイトも事を急いでいた感が否めないが。

そのようなこともあり、フェイトは広暁に対してよく話しかけるよ

うになった。
今までは時たま敵対視するように見ていたのに、この変わり様。
女性というのは気に恐ろしき生き物である。

「内容は？」

「発見されたロストロギアの破壊・封印。可能なら後者ってことになるかな」

「となると…キャロが鍵だな」

「…相変わらず鋭いね、広暁は」

「どうもどうも」

相変わらずの広暁の鋭さにほんのちょっとだけフェイトは呆れつつ、フェイトは広暁の隣に立った。
そんなフェイトの行動が気になったのか、広暁はフェイトに尋ねる。

「どうかした？」

「う～ん…ちょっと気になるんだよね。広暁がどんな魔法を考えているのか」

「前にも話さなかったっけ？」

「原案はね。結構改良を加えたんでしょ？」

「まぁ…それなりに。今の俺じゃあ、そんな難しいことは出来ないけど」

「広暁は理解速度が早いからね。
もしかしたら、デバイス製作にも向いているかもしれないよ？
術式を理解してデバイスとの相性も考えながら、広暁は魔法を考えることが出来るしね」

「さすがにそこまでは…」

そこまで手を広げるつもりはないという意思を込め、広暁は顔の前で右手を左右に振る。
その動作の意味をフェイトは理解しつつも、更に広暁を褒める。

「でも、広暁君は本当にすごいと思うよ？
この短期間で他のフォワードと遜色ない程のところまで来てるし。
サジタリウスから放たれる矢は速くて正確。
その上、エリオ並の高速移動も出来るんでしょ？
エリオが嬉しそうに話してたよ」

「速度だけなら、ね。ジグザグならともかく、必要最低限の動きで移動するってのが出来ないし」

「今はそれで十分だよ。これから上手くなっていけばいいんだから」

「ん～…」

フェイトは今まで溜まっていたものを吐きだすかのように、広暁を褒める。
広暁も悪い気はしないのだが、さすがにそこまで言われると照れる。
それを顔に出さない当たりはさすがだが、これ以上言われると顔に出る恐れがあるので、広暁は話の腰を折ることにした。

「そういえばさ、このことを他のフォワードには言ったの？」

「あっ！？エリオとキャロに伝えてなかった！！」

「早く行ってあげたら？」

「そうだね！広暁、ありがとね！！」

最後に広暁の右手を両手で握手して、フェイトは隊舎の方へと走っていく。

すると、何かを思い出したように途中で体を反転して叫んだ。

「あっ、そうだ！！」

「どうしたー！？」

「前買えなかったケーキ買ってきたから！食堂に行けばもらえるからねー！！」

「分かったー！」

俺が頼んだのはザッハトルテだったなと思いつつ、広暁は体を反転する。

そのタイミングを見計らったのか、唐突にサジタリウスが広暁に話しかけた。

≪マスター、どうされました？≫

「ん？何のことだ？」

≪顔には出てなくても私にはお見通しです。何か考えるところがあるのでは？≫

「…分かっててよくそこまではっきり言えるな、お前」

≪マスター相手ですからね≫

「理由か、それ？まぁ…ただの照れだよ」

≪照れ…ですか？≫

「フェイトみたいな天才で秀才の魔導師に褒められるってのはさ、純粋に嬉しいもんだろ？」

≪天才で秀才…マスターも同類のように私は考えますが≫

「俺はどちらかってゆーと秀才型だ、天才の要素は持ってねーよ」

（フェイトみたいな天才型だと、感覚で術式を組めるからな。俺みたい奴は逐一理解しながらやるしかないんだよ…）

≪……≫

どこか自嘲気味の感じがする広暁の言葉。

サジタリウスも広暁の意図するところが分かったのか、言葉を発しない。

「まっ、そんなことは置いといてさ。部屋に戻って明日の準備するか。
平行世界とはいえ地球に行くんだしな」

≪…そうですね。ホルスも待っていることですし≫

先程までの空気を変えるように、広暁は明るく広暁は言い放った。
サジタリウスも空気を読んだのか、それ以上追及することはない。

≪（マスターは本心から言ったのでしょう。
悲観している様子は見られませんし、ただ事実を言っただけといった感じです。
これ以上何か言うのは野暮というものですね）≫

隊舎へと戻る途中、広暁の首からかけられていたサジタリウスはそう考えていた。

「食堂でケーキ貰わんとな～」

「さて…準備完了」

≪忘れ物はありませんか？≫

「大丈夫だ、問題ない」

「キュイ！」

「んじゃまぁ、行きますか…地球へ」

六課から支給されたスポーツバッグに荷物を入れ、広暁は部屋を出る。

といっても、その大部分を占めるのは着替えの服であり、日用品はほとんどない。

精々歯ブラシとかタオルぐらいだ。

「あ、お兄さん！」

部屋を出て数分歩いていると、エリオと出くわした。

エリオも広暁と同様のスポーツバッグを肩から掛けているが、その服装は制服ではない。

「エリオの私服って初めて見たな」

「そうですね、大概は局の制服か部屋着ですから…可笑しくないですか？」

エリオの服装は、白いインナーに水色の上着。

ズボンは深い青色のカーゴパンツであり、全体的に清潔感が漂う服装。

それらがエリオの赤い髪と合わさることで、活発な中にも冷静さが漂う雰囲気を作り出す。

「う～ん……いいと思うぞ？
専門的なことは分からないけど、エリオに似合ってるってのはよく分かる」

「あ、ありがとうございます！！」

初めて見せる私服姿を広暁に褒められ、エリオはご機嫌のようだ。
ちなみに広暁の服装は、ミッドチルダに飛ばされた時と同じ服装。
２人して歩いていると、場所が場所なら同じスポーツを楽しむ兄弟に見えるだろう。

「お？５人そろって来たみたいやな」

あの後隊舎の前でフォワード女性組と合流したフォワード男性組は、揃って部隊長室に到着した。
出発する前に最終確認を行うらしく、地球へ行く六課のメンバーが全てこの部屋に揃っている。
スターズ・ライトニング分隊のメンバーに加え、シャマルにはやてにリィン。
ぶっちゃけ、機動六課の主要メンバーが揃っている。

「こんなに主要メンバーが抜けて大丈夫？はやて部隊長」

「留守はグリフィス君とザフィーラがしっかり守ってくれるからな。問題あらへんで」

「ふーん…」

「ある程度の広域捜査になるから司令部もいるからな。それに、相手はレリックの可能性もあるロストロギアや。戦闘要員が多いことにこしたことはないで」

「なるほど…」

帰ってきたはやての言葉に対して広暁は未だに心配の情を隠せずにいるが、それを感じ取ったはやてが更に言葉を紡ぐ。広暁もそれに納得したようだ。

「さて、皆揃ったところで…最終確認や。今回の任務は第９７管理外世界の惑星『地球』で発見されたロストロギアの調査。出来ることなら封印処理して持ち帰ることが望ましい。移動はヘリで地上本部まで行った後、転送ポートで地球まで一っ飛びや。何か質問は？」

「はい」

「何やティアナ？」

「現地での宿泊施設はどうするんですか？人数は多いですし、泊まるところが必要では？」

「いい質問や、ティアナ。
地球には現地協力者がいるから、その人が所有するコテージを借りることになっとる」

「現地協力者？魔法文化が存在しない地球に？」

広暁の疑問ももっともだ。
魔法文化が存在する管理世界ならともかく、地球には魔法文化は存在しない。
そんな地球で協力者が得られることに疑問を感じるのは当然だ。

「それは現地に着いてからのお楽しみや♪」

「へ？」

「他に質問はあるか？ないなら行くで～」

「……」

広暁の質問はうやむやにされたが、はやてがそう言うならそうなのだろう。
広暁は自分の中で結論付けた（考えるのを止めたともいう）。

ババババッ！！

今広暁達がいるのは、地上本部へと向かうヘリの中。
その後部にすし詰めとまではいかなくても、満員御礼の状態で乗っている。

「地球か…改めて考えると何か変な感じだな」

「お兄ちゃんは平行世界の地球出身なんですよね？」

「その可能性が高いらしいな。はっきりとしたことは言えんけど」

広暁にとっては同じで異なる地球。
行くことに喜びはあったものの、自分のいた地球とは違うという事実、そこから来る悲しみもある。
それをエリオは察したのだろう、広暁に話しかけた。

「お兄さんは…辛いですか、地球に行くのは？」

何を突然…と考えた広暁だったが、そこは自前の洞察力で察知。
エリオの考えることを推測し、慎重に言葉を選ぶ。

「辛くないって言ったら嘘になるけど…楽しみの方が大きいかな。俺がいた町にいくわけじゃないけど、地球…しかも日本に行くことに変わりはないんだし。
どこが俺のいた地球と違うか比べたい」

広暁は軽く微笑みながらエリオに伝えた。
エリオも納得いく回答が得られて嬉しかったのか、広暁以上に笑顔だ。
ついでにキャロも笑顔だ。

彼女もエリオと同様、広暁のことを心配していたのだろう。

「ニパァ～／／／」

何故かフェイトも笑顔だが…ちょっと危ない方向の笑顔の様な気がする。

これに突っ込む勇気は広暁にはないので、別の話題を探すことにした。

そして目に入ってのは…

「そういえば、リィン曹長」

「どうしたです？広暁さん」

「リィン曹長は地球に行ったらその姿で行動するの？目立つと思うけど」

広暁の目に入ったのはフワフワと飛んでいるリィン。

ミッドチルダでも人目を引く姿だが、地球に行ったら目立つことこの上ないだろう。

地球に３０ｃｍぐらいの大きさで浮遊する人間などいないのだから。

「あ～、そういうことですか。

そういえば、フォワードの皆には見せたことがなかったですね」

ピィン！　キュイィィィィン！！

突然、リィンの体から閃光が発せられ、その光がリィンを包む。

やがて光が収まり、そこにいたのは……

「「「「えぇ！？」」」」　「わぁお」

エリオ・キャロと同い年ぐらいの女の子であった。
陸士隊の制服を着ており、リィンがそのまま大きくなった感じだ。

「可愛い～♪」

「大きくなれたんですね…」

「凄い…」

「わ～…」

広暁以外の４人は驚いたような表情だが、広暁はそこまで驚いているように見えない。
それに対して不満なのか、リィンが突っ込む。

「広暁さん…もう少し驚いてくれてもいいんじゃないですか～？」

「いやーその…驚くのに疲れたというか。
世界が違うなら常識も違うだろうし、一々俺の世界での常識と比べて驚くのもどうかなーと」

「うぅ～…はやてちゃ～ん、広暁さんが枯れてしまいました～」

「枯れたとは何だ、枯れたとは」

広暁の言ったことに対してちょっと傷ついたのか、リィンははやての元へと駆けて行った。
リィンをあやすはやての姿はまるで母親のようであり、その姿を見

て親子みたいだなと広暁が感じたことを記しておく。

「誰が母親や、誰が」

シュイィィィィン……

「はい、海鳴に到着ですー！」

「「「「「お～…」」」」」

本局に着いた後、はやてとヴォルケンリッターの3人は出張の手続きの少し遅れることになった。
よって、なのは・フェイト・リィン・フォワード5人が先に地球に飛んだのだ。

一瞬の閃光の後、そこに姿を現したのは広暁達機動六課出張組。
その場所は湖の傍であり、周りが木々に囲まれている。

森の真ん中に湖があるといった感じだ。
広暁達を挟んで湖の反対側にはコテージが建っており、その佇まいは自然に上手く溶け込んでいる。

「ここが神奈川県海鳴市……」

「広暁君のいた地球と似てる？」

「いや、さすがにこれだけじゃ…商店街とか見れば分かるかもしれんけど」

広暁が悲しみの感傷に浸っていないのを知っているのか、なのはは普通に広暁に尋ねた。
答える広暁も当たり障りのない返答をするあたり、先程ヘリの中で言ったのは本当なのだろう。

「さて…じゃあ、皆。
はやて部隊長達は手続きの関係で少し遅れてるから、まずは現地協力者が来るまでここで待機ね。
荷物はコテージの前に置いておけばいいから、それまで自由に行動してていいよ」

「「「「「はい！！」」」」」

なのはの号令から１０分後、５人は思い思いに過ごしていた。

スバルとティアナは大きな木の下でのんびりとしており、エリオとキャロは湖のほとりで会話に花を咲かせている。
一方広暁は……

「平和だ～……」

≪静かですね～……≫

「キュイ～……」

……いや、広暁達は、見事にだらけきっていた。
大の字で寝っ転がる広暁、その胸の上で輝くサジタリウス、羽を伸ばして伸び伸び状態のホルス。
傍から見たら平和な光景かもしれないが…任務中ということをこの1人と1機と1匹は忘れているのだろうか？

「キュイ！」

「ん？…あぁ、分かった」

広暁はホルスの合図にその身を起こし、身なりを正す。
ぶっちゃけ私服なのだが、正すものは正す。
そのままの流れで他の4人に収集を掛け、なのは・フェイト・リィンの元へと移動。
8人が集合した時には、丁度高そうなリムジンが湖に到着した時だった。

ブルルルル…　キキッ！！　ガチャッ！！

「なのは！フェイト！久し振り！！」

「アリサちゃん！」　「アリサ！」

車から降りて来たのはオレンジがかった金髪をした1人の女性。
年齢はなのはやフェイトと同じぐらいだろうか？
顔つきを見る限り、ハーフであることが窺える。

「本当に久しぶりね、2人共」

「今回はありがとう、アリサ」

「気にしなくていいわよ、役に立てるなら。
それに、こんな機会とはいえフェイト達に会えたんだしね」

（う～ん……家が金持ちの友達？いや、この感じだと親友って言った方が正しいか？）

広暁は……いつも通り勝手に考え込んでいた。
そんな広暁の心の中を読んだのか、なのはとフェイトがアリサを紹介する。

「紹介するね。この人はアリサちゃん。私とフェイトちゃん、はやてちゃんの幼馴染なの」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね？」

「「「「「よろしくお願いします！！」」」」」

アリサの挨拶に対し、元気よく挨拶を返す5人。
すると、そのメンツを見渡していたアリサの顔が微妙に曇った。

「なのは、この男の人は？新人フォワードは４人って聞いたけど」
「彼は墨谷広暁君。次元漂流者で、今は六課の民間協力者をやってもらっているの」
「墨谷広暁…日本人なの？」
「日本人です。ついでに言うと、平行世界の地球出身の可能性が高いです」
途中から広暁も会話に加わる。広暁が言ったことに興味を持ったのか、アリサは広暁に質問した。
「平行世界の地球ね…出身はどこなの？」
「愛知県伯氷市（はくひょう）」
「愛知県はともかく…伯氷市（はくひょう）は聞いたことが無いわね。平行世界出身っていうのも本当なのかしら」
「俺にも分かりませんけどね」
「見た感じは私と年は変わらないように見えるけど…もしかして大学生だった？
それと、敬語じゃなくてもいいわよ」
「じゃあ…お言葉に甘えて。
大学３年生だったな、ミッドチルダに飛ばされるまでは」

「どこの大学に通ってたの？」

「M大…じゃない、N大学」

「へぇ、結構いいところに通ってるじゃない！私は聖祥大学よ」

「聖祥大学？こっちの地球にもあるんだ…」

「色々と共通点はあるみたいね」

「そうだね」

「学部はどこだったの？」

「学部は……」

「「「「「「「「「……？」」」」」」」」」

アリサと広暁の話す内容に、他の六課陣はついていけないようだ。
何故なら、なのはとフェイトは中学までしか行っておらず、リィンは融合デバイス。
ティアナとスバルは訓練校から就職しており、エリオとキャロも早くから管理局入りしていた。
故に、広暁とアリサのキャンパストークについていけないのである。
興味本位からもう少し聞いていたいというのが全員の本音であるが、このままでは仕事が始まらないのでなのはは切り出すことにした。

「…コホン。会話を楽しんでるところ悪いんだけど、そろそろ仕事の話を…」

「あっ、すいません…」

「ごめんごめん。まさか大学のことで話せる人がいるなんて思わなかったからつい、ね」

「全くもう……」

なのはの叱責に対し、広暁は申し訳なさそうに、アリサは笑いながら答えた。
それに呆れながらもなのはは答えるが、怒っていない当たり気が緩んでいるのだろう。

そして話は、仕事の話へと移行する。
アリサはなのはやフェイトが魔導師であることを昔から知っているため、今回の申し出を受けたこと。
なのはの話では、ロストロギアが発見された箇所は数か所あるということ。
移動しているのか、それとも何か別の生き物が持ち歩いてるのか、詳細は不明だということ。

「場所は全部で4地点だから、4つのグループに分かれてそれぞれ操作をしようか。
スターズはスバルとティアナ、私とリィン。
フェイト隊長、ライトニングはどうする？」

「う～ん…じゃあ、エリオとキャロ、私と広暁君に分かれようか。
3人共、大丈夫？」

「「勿論です」」

チーム分けも決まったので、広暁達は早速仕事に移ることにした。
荷物はアリサの車に乗っていた黒服の人達が移動しておいてくれるそうだ。
ちなみに、何故自分達が来た時に皆がしっかり揃っていたのかとアリサがなのはに尋ねたところ、

「ホルスが車の音を聞いたから」

と、広暁が言ってアリサを感心させたことを追記しておく。
ホルス、もとい竜の感覚器官は人より優れているのだ。
ちなみに、ホルスとフリードは留守番である。
竜は地球では目立つのだ。

「キュイ～……」「キュクル～……」

今、フェイトと広暁は商店街を歩いてる。
ロストロギアが発見された地点の1つに商店街があり、今2人はその商店街を捜査中なのだ。
この商店街はフェイトが地球にいた頃には毎日のように通っていた商店街らしく、道に詳しい。

「結構人通りが多いんだな」

「この時間は学生や仕事帰りの人で賑わうからね。私もなのは達と一緒によく遊んだんだ」

歩きながら会話をする2人。
時たま歩く人が振り返るが、十中八九フェイトを見ているのだろう。
広暁もそれなりに良い顔立ちをしているが、それでもフェイトと自分を比べる程慢心してはいない。
歩きながら広暁はそう考えていた。

「私達見られてない？」

「見られてるのはフェイトでしょ」

「そうなのかな？広暁、結構かっこいいと思うけど。
よくアリサが見せてくれたファッション雑誌に載ってたモデルの人と同じぐらい」

「…喜んでいいのか、それは？確かに、モデルの勧誘はあったけどさ」

思い出すのは大学2年生の春。
名古屋を友人と歩いていたら、スーツを来たキャリアウーマンっぽい人に話しかけられたのだ。
話の内容が「モデルをやってみない？」だったので「興味無いです」と言って速攻立ち去ったが。

それを聞いたフェイトは「勿体ない」と言うが、当時の広暁にとって大学の講義をさぼってまでやりたいほど好奇心がそそられるものではなかったのだ。
フェイトもこの話題を引きずるのは広暁に悪いと考えたのか、話題

を変えることにした。

「広暁」

「ん？」

「この商店街…うぅん、地球は、広暁君のいた地球と違う？」

「う～ん…雰囲気とか空気は同じだと思う。
だけど、雑誌とかテレビ番組とか、ちょっと違うのもあるからな。
やっぱり俺は平行世界の地球…別の地球出身だと思う」

「そう……」

「まぁ、違うなら違うで別にいいんだけどね。
今は六課でしっかり働きたいし。
俺の故郷の地球のことを考えて、どうにかなるもんでもないしな」

広暁が言った言葉に、フェイトは驚いた。
故郷に帰れる可能性がほとんど無いということを広暁が知っているのは、フェイトも知っていた。
しかし、それをこうして広暁の口から聞いたのは初めてだったのだ。

（広暁が自分から地球のことを話すことは今までなかった。
自分からそんなことを話しても良いことは無いし、周りの空気を悪くするだけ。
はやてはそう言ってたけど、今初めて話した。
ということは……自分の中でけじめがついたのかな？
広暁、自分から空気を悪くするようなことは言わないから）

自分から空気を悪くするようなことを言う人間の方が少ないと思うのだが。
フェイトの知り合いにはそういう人間がいるのだろう。
主に関西弁で話すＹさんとか（セクハラ発言で）。

（フェイト隊長、広暁）

（（はやて部隊長？））

フェイトが思案していたら、２人に念話が来た。
どうやら、はやて達八神家組が到着したらしい。
しかも、ロストロギアの情報というおまけ付きだ。

（確認されたロストロギアは運搬中に噴出したものだそうで、危険性・事件性はないそうや。
攻撃性は無いそうやけど、出来れば破壊せずに封印して返してほしいとのこと）

（（了解））

（そっちの調査は終わった？）

（うん。商店街を一通り歩いたけど、特に何も無かったよ）

（ほな、２人共。もうロッジに帰って来てもええで）

（ＯＫ…っとそうだ、１つ質問が）

（どうした、広暁？）

（そのロストロギアの特徴は？外見とか能力とか）

（……あっ）

（どうした…まさか、聞くの忘れた？
その反応だと、連絡を一方的に受けたわけじゃなさそうだし）

（し、仕方ないやん！
教会の人に会ったのはええけど、カリムやなかったんやで！？
あのおっさん、ノンビリノンビリ話しよって！
もうこっちが報告を受けるのを我慢するのがいやになるほど！！）

（そういう問題じゃないと思うよ、はやて部隊長……）

念話という、脳内会話で繰り広げられる漫才…じゃなかった、ちょっと脱線した仕事の話。
ロッジまで戻る2人は、終始笑顔や呆れ顔を絶やさなかったという。

第２３話「地球編１」（後書き）

第２３話、いかがだってでしょうか？
「現実味のある主人公」をコンセプトに書いていますが、さすがに通っている大学まで書くのはやりすぎと思い、ローマ字で書くことにしました。
だけど、分かる人には分かりますかね？
Ｍ大…もといＮ大学。
さてさて、一体どこの大学なのでしょうか？

感想・意見・訂正等、お待ちしています。

第２４話「地球編２」（前書き）

第２４話です。
社会人としての生活が始まってからは時間が取れず、間が空いてしまいました…。
また間があくこともあると思いますが、よろしくお願いします。。

では。第２４話、始まります。

第２４話「地球編２」

「ちょっとスバル！お肉ばかりじゃなくて野菜も食べなさい！！」

「えぇ～、別にいいじゃん」

「はやて、お野菜焼けたよ」

「ありがとな、すずか」

「平和だね～……」

草木も眠る丑三つ時…ではなく、各家庭で夕食が始まるぐらいの時間。

コテージの傍ではバーベキュー大会が始まっていた。

夕食はバーベキューと決まっていたらしく、その準備もしっかりしていたそうだ。

広暁とフェイトが着いた時には既にはやてやシグナム、ヴィータがバーベキューの準備を始めていたため、実に手早く準備を終えることが出来た。

「楽しいな、こういうの」

「そうですね。こうやって皆でワイワイ食べることってあまりありませんから」

「楽しいですねー」

「あ、エリオ。口の周りが汚れてるよ」

「フェイトさん！？」

ゴシゴシ。

ライトニングの４人は仲良く固まってを食べていた。
エリオの周りが汚れているのが気になったのか、フェイトがハンカチでそれを拭く。
エリオも驚いているようだが、あまり抵抗しないところを見ると満更でもないのだろう。

「綺麗に食べなきゃ駄目だよ？」

「うぅ……／／／」

（俺が拭いてやった方がよかったかな？
いや、さすがにそれはやり過ぎか……この間約束したばっかだし）

「キャロもちょっと汚れてるね。ほら、こっち向いて」

「えっ！？あ、ありがとうございます…／／／」

（邪魔者は立ち去りますかね）

広暁はライトニングの元を離れ、別のテーブルへと向かう。
フェイトの世話焼きともかく、エリオとキャロが甘えるのはまだまだ難しいようだ。
ここは家族３人にさせてその発展に努めるのも発起人の役目と考え

たのだろう。

広暁が向かったテーブルにいたのは、八神家＋アリサとすずか。
それに加え、なのはの姉である高町美由希、フェイトの義姉でエイミィ・ハラオウン。
更には、フェイトの使い魔であるアルフまでいる大人数のテーブルだ。
自己紹介は既に済ませているので、そのまま広暁はテーブルの上の料理を…

「お～、広暁！肉食え肉！！」

…取ろうとしたら、アルフに山盛りの肉を載せられた。
その重さ、体感重量で約３００ｇ。
さすがに肉ばかりこの量を食べるのはきついので、少しアルフの皿に戻して野菜を乗せる。
栄養バランスは大事なのだ。

「あ、こら！ちゃんと肉食べないと大きくなれないぞ」

「これ以上伸びても日常生活が苦しくなるだけだと思うけどな…」

広暁の身長は１８４ｃｍ。
プロのバスケやバレーの選手と比べたら小さいが、それでも成人男性の平均＋１０ｃｍ以上ある。
十分に大きい領域に入るのだ。
これぐらい身長があると、電車の乗り降り時に頭をぶつけることもある。
たまにやると本気で痛く、そして恥ずかしいのだ。

料理を食べながら、再び広暁は周りの面子（メンツ）を見る。
機動六課のメンバーに加え、現地協力者やその友人までいるテーブルだ。
そして気になったのは…

（青紫の髪…？）

最初に会った時は気にしてなかったが、現地協力者の1人でもある月村すずか、その髪の色だ。
ミッドチルダの人間は地球でいう白色人種系の顔が多く、名前もそれっぽい。
髪の色が多彩なのは…世界が違えばそういうこともあると納得出来る。
しかし、月村すずかは名前や顔つきから判断しても日本人のはず。
異なる地球といえど、おおよそ日本人からかけ離れている色だ。

勿論、日本人でも髪の色が黒でない人もいる。
地毛で茶髪の友人が広暁にはいるし、先祖にロシア系が混じってるとかで銀髪の同級生もいた。
しかし、青紫の髪は広暁の知る限りでの常識では存在しない。
この惑星は広暁のいた地球とは違うとはいえ、地球であることに変わりは無いのだ。

（突然変異…そんなことあり得るのか？
いや…染めてるんだな、そうに違いない）

大学の構内を歩いていると、ピンクや緑に髪を染めた学生を見かけることもある。

広暁はそう自分の中で結論付けることで、これ以上考えるのを止めた。
例え、「染めて出る色じゃない…あれは地毛だ」と考えていたとしても。
これ以上考えても広暁には何の得も無いし、意味も無いのだ。

「結構食ったな…ちょっと歩いてくる」

「あんまり遠くに行っちゃ駄目やで～？」

はやての言葉に、軽く左手を挙げることで広暁は答えた。

＜広暁ｓｉｄｅ＞

バーベキューを食べた後、俺は湖の周りを歩いていた。
この湖は結構広いようで、コテージから見た限りでは反対側は微かに見える程度。

仮に人がいたとしても豆粒ぐらいにしか見えないだろう。
故に、その周りを歩くには結構時間がかかるので、散歩には最適だ。

「直らねぇもんだな…」

思い出すのは先程のこと…すずかの髪の色についての考察だ。
考えても意味は無いし、そんなこと別にどうでもいいっていうのが正直なところだ。
しかし、気になると深く考えてしまうのが俺の性格。
周囲のことを忘れて考えに没頭することはもうないが、それでもこうして考え込んでしまう。

だからといって、この性格のことを悪くばかり言うつもりはない。
よく考えるからこそ俺は世間一般でいう良い大学に入学出来たし、現にこの間まで通っていた。
「智のスポーツ」と言われるソフトテニスで全国大会まで行ったのもこの性格のおかげだ。
全国大会に行くことは出来かなったが、遊戯王カードの大会で西日本決勝まで行くことが出来た。

「考えてもしょうがないのにな…はぁ……」

≪マスター≫

「何だ？」

≪いい加減にして下さい。私はそんなに頼りないですか≫

サジタリウスが怒ってる？
いや、そんなことより…サジタリウスが頼りないってどういうことだ？
訓練から日常生活まで、十分頼りにしてるんだが。

「えーと…どういうこと？十分頼りにしてるけど」

≪とりとめのない話ならそうでしょう。
しかし、マスターは考え過ぎです。
どんなに下らない話でも確証がない話でも、私に相談してもいいのでは？
丁度いい機会ですからはっきり言わせてもらいますが、マスターは貯め込み過ぎです。
溜息を吐く程考えているのなら私に相談して下さい。
私はマスターのデバイス、『パートナー』ですよ？
そもそもですね…≫

…サジタリウスの説教が始まったよ。
インテリジェントデバイスってこんなに喋るもんなのか？
いや、ＡＩ（人工知能）を積んでるってのは知ってるけどさ、これはさすがに喋り過ぎの様な…。

≪マスター、聞いているのですか？≫

「…すみません、聞いてませんでした」

≪また考え込んでいましたね？
それは別にいいのですが…とにかく、私が言いたいのは。
分からないことや気になることがあるならどんなに小さなことでも相談してほしいということです。

考えるのは人間が持つ他の生物に無い特筆した技能であることは私も知っています。
しかし、それが過ぎて心が病んでしまっては意味がないんですよ？
もうここまで言ったんですからいい加減に分かって下さい≫

「……」

…考え過ぎ、か。
今までの口ぶりから考えると、サジタリウスは分かってるんだろうな。
俺が、『出来ないこと、確証が無いことは口に出さない』ってことに。
何故俺がこのようにすることを自分で決めたのか？
別に、大法螺を吹いて痛い目にあったって訳じゃない。
ただ自分で決めただけだ…これは俺が生きていく中で守ろうって。
どこで見聞きしたのか、今では覚えていない。
ただ、俺が生きていく中で守らなければいけないこと、守るべきことだと思ったのだ。
だから俺は、ずっとこの言葉を守って生きてきた。

…だけど、まさかこれが『考え過ぎる』っていう弊害を生むとは。
確証がないから、自分の中で納得がいくまで考える。
自分の中で結論が出るか、確証を得てやっと話す。
ディベートは例外だが、曖昧なことは話さないようにしてきた。
…結局、サジタリウスに怒られたわけだが。

もっと気軽に相談しても…いいのかな？
傍から見た俺がそんなに分かりやすいってことだろうし。

自分の中で考え過ぎって。
サジタリウスの口調からすると、結構前から考えてたみたいだし。

…これも1つの転機か。
自分の性格の短所があるなら、これを機会に直すってのも悪くない。
不完全さの無い完全さなど存在しないとも言うが、周りから見て短所だと思われるなら直すべきだ。
長所と短所は表裏一体とも言うけど気にしない。

何か関係ないようかことを言ったような気もするが…まぁ、いいか。
短所は直す、それだけだ。

「…分かったよ。これからは、もっと気軽に相談するようにする。心配掛けてごめん」

≪…分かって下さればいいのです。それで結局、何を考えていたのですか?≫

「ん?…あぁ、俺が考え過ぎる性格っていうのを考えてた」

≪その内容は?そんなに悩むことだったのですか?≫

「う〜ん…」

ついでだし、話してみるか。もっとも、何を言われるかは分からんけど…。

≪マスター…あなた……何故そのようなことを考えていたのですか……？≫

「うっ…気になったから考えてたんだよ。それ以上深い意味は無い」

案の定冷たい言葉を返された。

まぁ、他人（ひと）の髪の色で考え込むなんて、聞く限りでは馬鹿な話だけどさ。

というか、もう考えないようにしてたのに話したらまた思い出しちゃったじゃねえか。

≪私に当たらないで下さいよ？元を辿ればマスターに原因があるのですから≫

「…すいません」

インテリジェントデバイスって人の思考を読めるのか…？

～コテージ再び～

サジタリウスとの雑談をしながら、広暁はコテージへと戻った。
食事を取っている人間は半分程度であり、残り半分は雑談をしながら片付けている。
もう食器を片付けているテーブルもあるので、食事はもう終わりなのだろう。

「お帰り～。もう食事は終わりやけど大丈夫か？」

「大丈夫。ちゃんと食べたから」

はやてに軽く挨拶を返し、広暁は食事の片づけに合流する。
やることはバーベキュー用品の片付けと皿洗いだが、貴重な男手だとかで片付けに回された。

（今更だけど、男って俺とエリオだけじゃん…）

そのエリオは皿洗いを手伝っている。
ついでに言うと、フェイトとキャロも皿を洗っている。
こうして後ろ姿を見る限り、３人仲良く皿を洗う姿は十分に親子なのだが…。
先程のことを考えると、まだその道のりは遠いだろう。

そんなことを考えつつ、広暁は折り畳み式の椅子や机を畳んでいく。
学生時代に学校行事で幾度となく経験しているので、手際は見事なものだ。
その隣では、ホルスとフリードが仲良く？会話をしている。

「キュイキュイ」

「キュクルー」

「キュキュイ？」

「キュキュ！」

「キュイ！」

「キュル？」

「キュイキュイ」

「キュクルー」

…広暁には、会話の内容が全く分からないが。

竜同士言葉は通じているようだが、傍から見たら十分に奇妙な光景の様な気もする。

犬や猫でも、このように会話？をするのを広暁は見たことがないのだから。

「仲がいいにこしたことはない、か」

「そういうことや」

「っ！？」

後ろから声をかけられ、広暁は反射的に距離を取って振り返る。

六課で戦闘訓練をしていて身に着いた技術だが、もはや脊髄反射レベルで体が反応するらしい。

しっかり魔力で両足を強化しているあたり、魔力操作も無意識に出来るようになったのだろう。

でなければ数ｍはある距離を一瞬で跳ぶことは出来ない。

「相変わらず速いな～。瞬発力だけならフェイトちゃんとええ勝負やないか？」

「脅かすなよ…つーか、気配がしなかったぞ？」

「部隊長をなめたらあかんで～？」

（部隊長関係あるのか…？）

この台詞（セリフ）聞くの2度目だなと考えつつ、広暁は冷静に突っ込む…心の中で。

そして、シグナムとのマンツーマンの訓練が役に立つんだなと冷静に考える。

元々瞬発力は優れているが、あんな好戦的な剣士と訓練をすると否が応でも瞬発力が鍛えられる。

とんでもない速度で斬りつけてくるし、離れてもこれまたとんでもない速度で近付いて来るのだ。

シュランゲフォルムを必死で避けてシグナムに矢を打ち込んだのは良い思い出だ。

（こんなところで役にたっても意味無いような気がするけど…。

いや、そもそも役にすら立ってないような…）

「おーい？広暁ー？」

「すみません、聞いてませんでした」

「いや、まだ何も言ってないんやけど…」

短所を直そうと一念発起したはいいものの、そう簡単に直るようなものではない。

だからこそ『性格』なのだ。

「まぁええか。お風呂のことを言いに来たんよ」

「あっ、そうか。順番どうするの？」

コテージにはお風呂があるが、さすがにこの大所帯では一度に入るには限界がある。
その入る順番を尋ねに来たと思ったのだろう、広暁は答えた。

「いや、さすがにこの人数で入るには時間がかかるからな。だから広暁も早く準備してや」

「はやてちゃん、途中の説明が抜けてるよ…」

「準備？…あぁ、そういうことか」

はやての曖昧な説明でも、広暁はしっかりとその真意を汲み取ったようだ。
もっとも、広暁以外の全員が全員着替えとタオルを持って準備していたら普通は気付く。
…というか、広暁は1人で最後までテーブルの片づけをしていたのか？

「と、とにかく！今からうちらが行くんは、日本が次元世界に誇るエンターテインメント施設…」

「スーパー銭湯や！！」

一同が着いたのは海鳴市内のスーパー銭湯。
アリサ家の所有物である黒くて長いリムジンが駐車場に数台止まるのは実に異様な光景だ。
ホルスとフリード？当然留守番だ。

「お～。何か久し振りだな～」

「お兄ちゃんは来たことがあるんですか？」

「最後に来たのは高校生…４年ぐらい前かな？懐かしいな～」

雑談をしながらスーパー銭湯へとなだれ込む面々。その数、しめて１６人。
広暁とエリオを除いたら美女・美少女で構成される実に眼福なメンバーである。

「何名様ですか？」

「大人１２人、子供４人です」

（子供…？エリオとキャロとアルフと…ヴィータ？）

ヴィータは元々大人料金の予定だったのだが、「子供料金の方が安いやないか！！」とはやてに言われて渋々了承したのは余談である。

「お～。結構種類があるんだな」

「そうですね。凄く楽しみです！！」

広暁とエリオは男湯に興味津々のようだ。
広暁は懐かしさから、エリオは初めての体験に対する興奮から。
2人は女性陣に軽く挨拶をして男湯の暖簾をくぐろうとしたのだが…

「え？エリオ、一緒に入らないの？」

「エリオ君？」

…そうは問屋が卸さなかった。
フェイトとキャロが微妙に悲しい顔になっている。
ついでに手招きをしている。
悲しい顔で手招き…正にパラドックス。

「え、あ、いえ、あの、その……」

「私達は家族なんだよ？家族が同じお風呂に入っても全然大丈夫だよ？」

「そうだよ、エリオ君。私もフェイトさんも、エリオ君と一緒に入りたいんだよ？」

「その、僕は男ですから…」

（そういえば、何歳かまでは男も女湯に入っていいんだっけ？）

2人共、エリオに裸を見られることに抵抗はないのだろうか？
いや、ないのだからこのような態度を取るのだろうが…エリオはすっかり反応に困っている。
ついでに言うと、広暁の後ろに回り込んで半分だけ顔を出して2人と話している。
正に『恥ずかしさマ――――ックス！！』状態である。

「エリオは男なんだぞ？色々と多感な年頃だし、一緒に入るのは止めといた方がいいって」

「う～…広暁もエリオに味方するの？」

「エリオの意志を尊重したと言って下さい」

「お兄ちゃんのいけず…」

（キャロ…どこでそんな言葉を覚えたんだ……？）

広暁の言葉に2人はまだ納得していないようだが…広暁はそんな2人を尻目に男湯の暖簾をくぐる。
エリオもそんな広暁の後をそそくさとついて行く。
それを見送る2人の視線が珍しく非難がましいものであったことを、ここに追記しておく。

「「う～…」」

「ありがとうございました、お兄さん」

「いいってことよ。エリオも大変だな」

男2人は服を脱いでいた。服を脱ぎながら、広暁はエリオに銭湯でのマナーを教える。

「タオルは巻くなよ?それが銭湯でのマナーだからな」

「ちょっと恥ずかしいですね…」

男同士とはいえ、タオルを巻かないことにエリオは抵抗があるようだ。

六課の風呂ではエリオはそんなことはしないのだが、ここは初めてくるスーパー銭湯。

初めての場所なら当然周りは知らない人ばかりであり、そこからくる恥ずかしさがあるのだろう。

(どんなお風呂があるんだろう?)

エリオは広暁の説明を聞きながらも、初めての体験に心を躍らせていた。

そして、チラリと広暁の方を見る。

(お兄さん…筋肉質になってきてる…?)

エリオが見た広暁の肉体。
ほぼ毎日風呂では見ているが、このように改めて見て気付いたこと。
それは、段々と広暁の体が筋肉質になってきているということだ。
無駄な脂肪が無いなどという戯言ではなく、細マッチョなどという世迷言でもない。
マッチョには遠いものの、広暁の体は段々と戦闘用のそれに近付いているのだ。

……チラリ。

「…ハァ」

「どうした？溜息なんか吐いて」

「いえ…お兄さんの体、ガッチリしてていいなぁと。僕はこんなですから…」

「お前はまだ１０歳だぞ？第二次性徴期も来てないのに筋肉つけてもいいことないって」

「第二次性徴期…ですか？」

「男は大体１２歳前後から来るけど、そこで一気に背が伸びるんだよ。
それが来る前にトレーニングして筋肉付けると背が伸びなくなる。
例えば、４年後にキャロより背が低いなんて嫌だろ？」

「…それは嫌ですね」

「だろ？今はまだ無理しなくていいんだよ。身の丈に合ったことをすればいいんだ」

「はい！！」

広暁の分かりやすい説明も相まって、エリオは素直に広暁の言葉を受け止めた。
男のプライドなのか、キャロより背が低いのは嫌らしい（現段階では若干エリオの方が高い）。

そうこうしているうちに、２人はほとんどの衣服を脱ぎ終えた。
後は下半身に着ている下着を脱ぐのみ。
そして、広暁が下着に手をかけようとしたところで…

ガラッ！　「おじゃましま～す♪」

ガシッ！！　「えっ！？」

クルッ！！　「ていっ！！」

噂をすれば影。
広暁は瞬時にエリオの頭を掴んでそのまま９０度回転、キャロから頭を逸らせる。
ついでに自分の顔も背ける。

「キャ、キャキャ、キャ…キャロ！？どうしてここに！？」

「え～と…エリオ君が来ないから私が来たの。１１歳以下なら女の子でも男湯に入っていいんだって」

「……逆もまた然り……」

キャロは2人の行動に若干戸惑いつつもしっかりと現状を正確に伝えた。

エリオはまだ戸惑っているが、広暁は落ち着いているのか冷静に対応する。

「キャロ…ちゃんとタオル巻いてるよな？」

「はい。男女一緒に入るならタオルを巻くようにって係の人に言われましたけど…外した方がいいですか？」

「いや、ちゃんと巻いててくれ」

（お、お兄さん！どうしますか！？）

（…諦めろ。キャロは戻る気が無いみたいだし）

（ですよねー…）

（それと、ちゃんとタオルは巻くようにな）

（…はい）

色々と脱衣所で騒動があったものの、3人は体を洗って湯船に入る。
まずはスタンダードに普通の浴槽からいくようだ。

「あ――――――――……」

「気持ちいいですね～……」

「そうですね～……」

3人は足を伸ばして見事に脱力している。
六課はお風呂なので、当然その正体は湯。
しかし、ここは温泉。
そのお湯に隠される数多の成分が3人の体を確実にほぐしている。

「何か不思議だな…」　ボソッ

「お兄さん？どうしたんですか？」

「あぁ…ちょっと感慨にふけってた」

「感慨…ですか？」

「アルバイトから帰ろうと車に乗ったらミッドチルダに飛ばされて。
ガジェットに襲われてたら六課に助けられて保護されることになって。
魔力の素質とホルスのおかげで民間協力者として働くことになって。
任務の一環で俺がいた地球とは別の地球に来ることになって。
俺がいた世界じゃあ、確実に出来ないことだなと思ってさ。
『事実は小説よりも奇なり』ってやつかな」

「お兄ちゃんがいた地球にも、魔法はないんですよね？」

「俺の知る限りでは、な。ファンタジーのそれとは別物だろうし」

風呂に入ることで心が緩んだのだろう、広暁が自分の心情を語り始めた。

自分が世間一般で言う普通の道を歩んでいたらまず足を踏み入れることのなかった世界。

今、広暁はその道のりを歩いているのだ。

終着点があるかどうかはわからない。

しかし、終着点を決めることは出来る。

「俺がいた地球に帰れるかどうか、それはまだ分からない。

だから、俺はミッドチルダで魔法のことをもっと学びたいんだ。

少なくとも、管理局の魔導師として認められるぐらいにはな」

「お兄さんなら大丈夫ですよ！」

「そうです！それに、お兄ちゃんには私達がついてます！！」

広暁の決意表明ともとれる言葉を、２人は笑顔で肯定する。

その屈託のない笑顔に広暁も癒されたのか広暁の頬が緩んだ。

「そうだったな。よろしく頼みますよ、先輩方？」

「えっ！？せ、先輩ですか！？」

「ミッドチルダにしろ魔法のことにしろ、２人の方が俺よりは上だろ？だから先輩」

「私が、先輩…お兄ちゃんの、先輩……ウフフ……」

「……あれ？」

エリオは驚いて赤面するだけなのだが、キャロは怪しい笑みを浮かべている。

いや、精神というか魂がトリップしかけている…のか？

横顔を見た広暁は昔テレビの特番で見たどっかの山の痛い人だかステテコだかを思い出したが、すぐに気を取り直してキャロを正気に戻す。

「キャロ？キャロ！？」

「…ハッ！？ご、ごめんなさい…」

「すまん、冗談が過ぎたみたいだ」

「お兄さんでも冗談を言うんですね」

「人を堅物みたいに言わないでくれ…」

ウ～ンと広暁は両手を上に伸ばして伸びをする。

デスクワークをした後にやっても気持ちいいが、風呂の中でやるとまた格別だ。

「さてと…俺はサウナにでも入ってくるかな」

「私達は外の子供用露天風呂に行かない？」

「そうだね。じゃあ、お兄さん」

「おぅ。気をつけてな」

ザバァン。

3人は浴槽を出てそれぞれの目的地へと向かう…。

「まったく、キャロったら…」

「アハハ。子供の特権やな」

女風呂に行ったメンバーも、それぞれ様々な湯を楽しんでいた。
ヴィータが暗い表情になったり呪詛を呟いていた様な気がするが多分気のせいだろう。

「キャロは広暁にも懐いてるからな～」

「そうだね。私としては嬉しい限りだよ」

「ん？どういうことや？」

ズイッ。

フェイトの言動に気になるところがあったのか、はやてが尋ねる。
その目に修羅を宿しているような気がするが、フェイトはそれに気付かないのか言葉を返す。

「キャロもエリオも、人に甘えたり懐いたりすることが今までなかったからね。
広暁君はそのきっかけを作ってくれたんだもの。
お母さんとしては嬉しい限りです」

「自分で言う分にはいいんやな？」

「うっ…。だってまだ恥ずかしいよ」

（当たり…じゃなさそうやな。だけど念のため…）

「フェイトちゃんは広暁のこと…どう思う？」

「う～ん…エリオとキャロにきっかけを作ってくれた人かな？私は感謝してるよ」

「そういうことやなくて。広暁自身のことや」

「色んなことに鋭くて頭の回転の速い人？ちょっと羨ましいかな」

「それは広暁に対するフェイトちゃんの評価やろ。

フェイトちゃんが広暁のことをどう思ってるかってことや」

「う～ん…仲の良い男友達…じゃないか。お兄ちゃんみたいな人かな？」

「お兄ちゃん？クロノ君みたいな人ってこと？」

「真面目でちょっと頭が固くて、それでいて人に好かれる人。
広暁と話してるとお兄ちゃんと話してる感じがするの。
お兄ちゃんが遊びを覚えたら広暁みたいな感じになるんじゃないかな？」

「そっかー…」

「それがどうかしたの？」

「何でもない。ちょっと気になっただけや」

「ふーん？」

（フェイトちゃんにとって広暁は、気軽に話せて頼りになる人…ってところか。
恋愛感情を持ちそうにないからええんやけど…。
こんなにも早くフェイトちゃんを落とすなんて、広暁…恐ろしい子！！）

「ヘックシュ！」

サウナに入っていた広暁はくしゃみをした。

「サウナでくしゃみ？何故に？…縁起が悪いな、そろそろ出るか」

「「ヘックシュ！！」」

子供風呂に入っていた2人は同時にくしゃみをした。

「お風呂に入ってるのにくしゃみ？」

「外の空気に当たり過ぎたのかも。キャロ、そろそろ出よっか？」

「そうだね、エリオ君」

「ヘックシュ！」

聖王教会領の自宅で湯船に浸かっていたカリムはくしゃみをした。

「風邪？誰かが噂をしている？…いえ、もっと恐ろしいことが起きているような…？」

カリムは嫌な予感を拭うことが出来なかった。

第２４話「地球編２」（後書き）

２４話、いかがだったでしょうか？
前半は広暁の性格を再認識する話、後半はお風呂の話でした。
最近広暁の性格がずれてきたような気がするので、確認するためにも書きました。
サジタリウスがよく喋るのは…こういう性格だからですね、うん。

『考える』

人間の特筆技能であり生きていく上で何より必要な力…難しいですね。

では。感想、意見、間違い訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第２５話「地球編３」（前書き）

第２５話です。
今回は…いや、読んでもらった方が早いですね。
第２５話、始まるよ――――――！！

第２５話「地球編３」

サウナで異質な寒気を感じた広暁は一足先に湯からあがっていた。
女性組はまだ誰もあがってないようであり、湯の傍にある休憩室には誰もいない。

「どうすっかな～…おっ、あれは？」

時間をつぶす方法を模索していた広暁の目に映ったのはマッサージ機。
別に体が凝っているわけではないが、そんな状態じゃなくても風呂上がりなら気持ちいい。
スルスルとマッサージ機の方へと歩んだ広暁は、モードを「しっかり指圧」にして座る。

「ふぁあ…何か眠くなってきた…」

心地良い指圧が風呂上がりの体に染みるのか、広暁は睡魔に襲われ…

ワーワーワー！！

「んっ…ん～。何だ？」

何かの音で目覚めた広暁の視界に飛び込んできたもの、それは…

「だぁ！これでシグナムの7連勝かよ！！」

「さて…次は誰だ」

卓球台の前でくやしがるヴィータと得意げなシグナムであった。
この休憩室、実は卓球台もある。
どうやら広暁が眠ってる間に湯からあがってきた六課のメンバーが卓球をやっているらしい。

「次は私が行くよ！！」

「テスタロッサか…いいだろう」

ヴィータがシグナムに負けたようであり、次に名乗りを上げたのはフェイト。
フェイトのサーブから試合は始まり…

「5－3で私の勝ちだな」

「ハァ…ハァ…負けた…」

「…ふぅ。中々やるな、テスタロッサ。良い勝負だったぞ」

激戦を制したのはシグナムだった。
オレンジのピンポン玉が卓球台を目まぐるしい速度で移動する卓球。
元々2人が何かと速いこともありゲームは早く終わったのだが、3ポイント取れただけフェイトも凄いということだろう。

「次は誰が私とやるのだ？」

「にゃはは～…私は遠慮するよ」

「ぼ、僕もいいです…」

「シグナムって卓球こんなに強かったかな～？」

会話から推測するに、どうやら5ポイント先週の勝ち抜き戦らしい。
負けた方は交代し、勝った方は残るという方式だろう。

（体育の授業でよくやったな～…）

感慨にふけっていた広暁だが、そうは問屋が卸さない。
猛禽類が獲物を見つけた時の様な目でシグナムがこちらを睨んでいる。

「起きたか、広暁。お前はどうだ？」

「ん～…ＯＫ」

マッサージ機から立ち上がった広暁は卓球台へと移動する。
ラケットはペンとシェイクの２種類のうちシェイクを選択。
その後、屈伸やアキレス腱伸ばし、軽い柔軟運動をした後シグナムと相対する。

「さて…お願いします」

「お前が強いことを願っているぞ…！！」

どうやらシグナムの『バトルマニア』は勝負事なら何でも発動するらしい。
その気迫にシグナムは少し気圧されたが、体勢を立て直してシグナムを見つめる。

「サーブは？」

「サーブは常に挑戦者からだ」

「ならありがたく」

ラケットを器用に回した後、広暁はサーブの構えを取る。

（卓球か…確か夏に卓球部の奴とやって以来だな…）

ポ――――ン…

左手でピンポン球を高く上げ…

カン！！

右手に持ったラケットでスライス回転がかかるように…切る！！

自分のコートで跳ねた後シグナムのコートについた球は、広暁の狙い通り右側に曲がる。

しかし、相手もさすが。

シェイク特有の両面使用により、シグナムは裏面を使ったバックハンドで広暁のバックに返す。

カン！！

広暁もそれをバックハンドで返す。ドライブがかかった球は逆クロス、シグナムのバック側に。

「くっ…！！」

カン。

さすがのシグナムも逆サイドに逃げる様なドライブをまともに返すのは難しいらしく、返された球はロブとまではいかないまでも山なりに飛ぶ。

広暁はそれを好機（チャンス）と捉え、山なりに飛んできた球を正クロスの…

カン…

「なっ！？」

ネット際に落とした。シグナムもこれには意表を突かれたのか、反応が遅れてしまう。

しかし、そこは烈火の将。見事なフットワークと反射神経で球を返す。

「オラァ！！」

だが、これこそが広暁の狙い。
球を打ち返すために前のめりとなったシグナムは、体制を立て直すために体を戻す途中。
広暁はその隙を狙い、渾身のスマッシュを右サイドに真っ直ぐ叩き込んだ。
シグナムはそれに反応することが出来ず、飛んで行った球は壁で跳ね返って戻ってくる。

「ウシッ！！」

「まさかあそこでネット際に落とすとは…」

「馬鹿正直に打っても返されそうな気がしたんで」

「フフフッ…」

「ククククッ…」

2人は何ともいえない雰囲気を醸し出している。
シグナムはともかく、広暁のこんな顔を見るのは初めてなのか、他のメンバーは若干引いている。

「広暁君…何か怖いね」

「シグナムはともかく…なぁ？」

「お兄さんのあんな顔、初めて見ました」

なのはの言っていることは尤もで、はやてはちょっとひどいことを言っているような気もするが、今の2人には聞こえていないようだ。ギャラリーには真っ赤な炎を全身から出しているシグナムと黒炎を見に纏う広暁が見えている。

そう言えば某テニヌのアニメもこんな感じだったような…気のせいだろう、うん。

「あぁ、サービスは1本交代なんでな。次は私だ」

「OK」

足元に転がっていた球を拾ったシグナムはサービスの構えを取り…

「俺の勝ち…だな」

「クッ…この私が負けるとは……！！」

余裕の顔で立っている広暁と、とても悔しそうな顔で地に伏しているシグナム。
この現状から分かる通り、試合結果は広暁の勝ちだ。しかも５－２で。

「まさかシグナムが負けるとは…賭けは私の負けやないかー！！」

「…ちょっと、はやてさん。あなたは一体何を仰ってるんですか」

「いかん、つい口走ってもうた！
まさかシグナムと広暁どっちが勝つかにお金を賭けてたなんて口が裂けても言えへん！！」

「……これ、現実だよな？」

「…諦めろ。これが現実だ」

マンガで見る様な展開ではやてが自白したので、広暁は現実と非現実の境界を見失いそうになった。
しかし、シグナムに言われて何とか現実に戻る。

「まぁ、賭けごとやるなんてこんな機会ぐらいしかあらへんからな。息抜きは大事やで？」

「…フェイトはいいの？エリオとキャロの教育上」

「う～ん…遊びも大事だし、綺麗なところだけ見てたら将来辛いだろうし…」

「…まぁ、いっか」

ちなみに、広暁に賭けていたのはエリオとキャロだけだったらしく、2人が総取りした。
賭け金?1人100円だ。

「…敗者は潔く去るとしよう。広暁は残っていろ」

「え?まだやるの?」

「さっきも言ったが負けたら交代だからな。ここにいる全員に勝っても交代だ」

広暁がその全員を見渡すと、卓球をやる意欲がありそうなのが2割。残り8割はやる気が無い…というか、今の試合を見て戦意喪失に近い状態に陥っているようだ。

「まぁ…いっか。じゃあ、次は誰?」

「ほな、私が行くで」

出てきたのははやて。
浴衣姿が色っぽい19歳の部隊長だが、今の広暁にそんな物は目に映っていない。
ただ戦う相手を見据える、そんな感じだ。

「ほな…行くでー!」

カン!!

「５－０で俺の勝ち…」

「ハァハァ…広暁、あんた強過ぎるで！？」

「いや～、何というか…。まぁいいや。次は誰？」

「私は無視！？」

「じゃあ、あたしが行くぜ！！」

「ヴィータか…」

「５－０で俺の勝ち…」

「ハァ…ハァ…汚ねえぞ、広暁！あんなに左右前後に振りやがって！！」

「戦術に汚いって言われても…。まぁいいや、次は誰？」

「私が行こうかな」

「アリサ？卓球出来るの？」

「舐めてもらっちゃ困るわ。こう見えても幼馴染，Ｓの中では一番上手いのよ」

「５－１で俺の勝ち…」

「ハァ…ハァ…。何であんたそんなに上手いのよ！？」

「う～ん…慣れ？」

「慣れってなによ慣れって！！」

「慣れは慣れです」

ワーワーギャーギャー！！

「お兄さんて卓球強いんですね。初めて知りましたよ」

「お兄ちゃん、運動神経がいいのは知ってましたけど…」

「う～ん…何でだろうね？フェイトちゃん、分かる？」

「多分だけど…広暁、ソフトテニスやってたらしいじゃない？」

「確かにそうだけど…それがどうかしたの？」

「中学校の時体育でやった卓球を思い出したんだけどね。
強いのは卓球部の子だったけど、その次に強いのがソフトテニス部の子だったような気がするの」

ここで1つ、思い出して欲しい。
体育の授業等で卓球をやる時、強いのは当然卓球部の人だ。
しかし、その次に強いのはソフトテニス部の人だったであろう。

陸上部のように、運動神経の良い人が陸上部員の短距離走のタイムを抜くことはある。
しかし、ラケット系の競技は技量を問われる競技。
ひとえに経験値と技量の差が出る。

その中でもソフトテニスをやっていた人は、テニス・バトミントン・卓球等の全てのラケット系競技において平等の真価を発揮する。
何故なら、ソフトテニスは全てのラケット系競技に対応出来るスポーツだからだ。
ましてや、広暁は高校時代ソフトテニスで全国ベスト8まで行った実力者。
いくら運動神経がよくても、経験者でもない限り広暁に勝つのは難しいのだ。

「このまま広暁が勝ってもおもろないな…広暁！！」

「ん？」

「私と一つ、賭けをせーへんか？」

「内容次第だな」

「そこは素直に乗ってほしかったんやけど…まあええわ。
賭けの内容は簡単。
今から広暁が１０人抜きしたらうちが広暁に…せやな、１万円払う。
もしも広暁が負けたら、広暁が私達にまとめて１万円払う。
どや、結構おもろいやろ？」

「…で、ハンデは？」

「…もう少し人を信じてもいいと思うで、広暁」

「性分なんで。それで？」

「…広暁は全体を通して５ポイントまでなら点を取られてもええ。
広暁ならこれぐらいのハンデで十分やろ？」

「それはさすがにきついな。１人２ポイントまでは猶予が欲しい」

「何や、怖気づいたんか？」

「どう解釈するかはそちら次第」

「ぐぬぬ…！！」

はやて相手にここまで口で張り合う人間を見たことが無いのか、六課の面子（メンツ）は驚いているようだ。

アリサとすずかは苦笑いしているが…もしかして心当たりがあるのだろうか？
はやてとここまで口で張り合う人間に。

「だったら1人1ポイントまでや。これ以上は私もまけれへんで」

「交渉成立だな。俺は１０人抜きすれば１万円。１人１ポイントまでなら点を取られてもＯＫ」

「そして、広暁が1人に2ポイント以上取られたらその時点で私の勝ちや」

「「ククククッ……」」

2人共黒い笑みをもらし、背後からどす黒い空気が漏れているような気がするが……このことに全員気付いていながらも誰も突っ込まないのは、それが彼女達の領分ではないからだろう。
腹の探り合いや頭脳戦は彼女達の本文ではないのだ。
そんなことを言ったら広暁にもそれが適用されると思われるかもしれないが、広暁は性格的にも経歴的にもそうゆうのが得意であり経験値も多いので、その限りではない。

（あらあら…これは面白くなってきたわね♪
ヴォルケンリッターの参謀としてしっかり見届けないと♪）

…シャマルを除いて。

「最後に1つ、確認したいんだけど」

「何や？」

「日本のお金ってミッドで換金出来るのか？」

「出来るけど…何や、勝負が始まらんうちから勝った時のことを考えてるんか？」

「念のためだよ、念のため。で、最初は誰にする？」

「だったら私がいこうかしら」

「シャマル？大丈夫か？」

「まぁ、見てなさいって♪」

シャマルはラケットを片手に前へと出る。

金髪美人のボブカットの浴衣女性…いつもの広暁なら多少は見惚れただろうが、今の広暁は戦闘…ではなく試合を前にした1人のスポーツ選手。

例えシャマルを上記の通りに認識しても、それが試合に関係しなければほとんど気にしない。

広暁はただ冷静にシャマルを見据え、その一挙手一動作をつぶさに観察する。

「じゃあ、サーブは私からいくわよ」

「どうぞどうぞ」

（私じゃ広暁君には勝てないし、ここは試合を長引かせて出来るだ

けデータを得ましょう。
打つコースを変えれば癖や得意不得意も分かるでしょうし）

ポ――――ン……

人はそれを……

カン！！

「オラァ！！」

カン！！

「キャイン！？」

ズボッ！！

死亡フラグという。

「５－０で俺の勝ち、だな」

「ハァ…ハァ……負けた――――――！！」

「シャマル…あんた、何がしたかったんや？」

「大方、俺の苦手なコースとか癖とか見つけたかったんじゃないの？」

「…その通りです、はい」

「それは相手が分かっていなければの話だと思うんだけど……。俺がそれを表面に出さずにいたとは考えなかった？」

「だって広暁君、卓球上手いじゃない…そんなこと考える必要もないって思うわよ！」

「スポーツである以上考えるのが普通だって。何も考えずに戦うなんて、猪じゃあるまいしそんなことしません」

ギクッ！！

広暁の言葉に何故かなのはとスバルが反応したが、広暁はスルーする。

ぶっちゃけ突っ込んでもはぐらかされそうなので。

「次は誰？」

シ――――ン……

今の試合を見て広暁の雰囲気に呑まれたのか、誰も出て来ない。
何故なら、少しでもミスする可能性のあるショットは打たなくして、試合を繋げて相手のミスを誘う戦術に切り替えたからだ。
その策の結果、シャマルは1ポイントも取れずに疲労困憊で倒れている。
それに対して広暁が「普段からちゃんと鍛えないからこうゆうことになるんだぞ」と説教している。
筋トレは大事なのだ。

「…私が行くよ」

シャマルが何とか立ち上がって戻ろうとする途中、なのはが手を挙げた。

「はい、球」

ポポポポ――ン!!

(何、今の効果音?…まぁいっか。広暁君強いし、適当にやって負けようかな…)

…変な効果音はともかく、なのははやる気が感じられない。
広暁もそれに気付いているようで、ちょっと顔を顰めている。
やる気がない相手と戦っても面白くないし、勝っても気分が良いものではないのだ。

「なのはちゃ～ん?」

「何?はやてちゃん」

「もし手抜いたりしたら…」

ギクッ！

「抜いたりしたら…？」

「…夜道には気いつけや。
背後からいきなり…何者かに（主に胸を）襲われるかもしれへんで
……？」

シュタッ！！

「さぁ、広暁君！全力でいこうか！！」

「……（突っ込んだら負けだな、うん）」

なのはが覚悟を決め広暁も考えるのが面倒臭くなってきた時。

キュイィィン！！

「はやてちゃん！」「フェイトさん！」

クラールヴィントとケリュケイオンにロストロギアの反応が表れた。

「1万円…」

「お兄さん、その…」

「今は目の前のことを…」

「…了解」

ロストロギアの反応が出た後の六課の行動は迅速だった。
まずはシャマルが探索魔法でロストロギアの詳しい位置を特定し、
その周囲に結界を張る。
場所は2か所だったのでスターズとライトニングに分かれて向かう
ことになった。

その2か所は埋め立て地の工場街と山の中の開発地区。
広暁は卓球に未練たらたらだが、年下2人に諭されて気持ちを切り替える。
そして、ライトニングであるエリオ・キャロ・広暁は山の中の荒地に行き、そこで見たものは…

ポヨヨ～ン…　ポヨヨ～ン…　ポポポポ～ン…（！？）

「何でしょう、これ？」

「ちょっと…可愛いかも」

「スライムモンスタートークン…？」

丸くて水色のゼリー状の塊であった。
某ＲＰＧゲームに出てくるスライムに似てなくもないが、広暁には永続魔法「スライム増殖炉」によって生み出されるモンスター「スライムモンスタートークン」の方がしっくりくる。
それらが群れとなって跳ねており、その様はある種の癒しの光景のように見えなくもない。

「これを全部倒せばいいのか？」

『もしも～し？』

「はやて部隊長」

『そのロストロギアのことなんやけど、元々は1個の本体だけや。そいつが分裂してそれだけの数をなしてるんやけど、本体さえ叩けば分身体は消えるで』

「本体の特徴は？」

『特徴は分からんけど、そっちにいるのは全部同じ反応が出てるから全部分身体や。
だから全部倒してからスターズの方に向かってな』

「了解」

『ロングアーチと隊長陣は上空で待機してる。ライトニングは任せたで？』

プツン！

「2人共、話は聞いてたな？」

「「はい！！」」

「念のため少し距離を取る。その後俺が攻撃。
エリオは遊撃体勢、キャロはバックスで援護体勢だ」

「「了解！！」」

モニターではやての話を聞いた広暁は、エリオとキャロに的確に指示を出す。
今回の仕事は新人フォワードに任せることになったらしく、他のメンツは上空で待機のようだ。

「まずは3本…」

広暁は瞬時に矢を生成、その数3本。
それらを全て指の間で挟み、スライムの方に向ける。
そして…

シュイン！　シュイン！　シュイン！

ドガァァァン！！！

3本の矢はそれぞれスライムの群れに命中、爆発が爆発を呼んで大きな1つの爆発となる。
煙が晴れた時に彼らが見たのは、水色のゼリーが無数に散らばった光景であった。

（（3本も一気に放てるんだ……））

マンガやゲームではよく弓使いがやっているが、実際出来ないこともない。
どっかの映画ではエルフのかっこいいにーちゃんが3本同時に放っていたのだし。
もっとも、広暁も実際にやった時は「出来るもんだな…何故に？」と言ったが。

「案外…あっけなくない？」

「そうですね…ってお兄さん、後ろ！？」

エリオが凄い顔で叫んだので振り返ると、そこにはウネウネと動くスライムの残骸が。
気持ち悪いと広暁が思っていると、それらは段々とくっついていく。
当然、このあとの展開は…

「ホルス！」

「キュイ！」

『ブラック・メガフレイム』

ボオオォォ！！

ジュワアアアァァァ……

…正にフラグブレイカー。ホルスが吐いた炎はスライムを纏めて飲み込み、蒸発させた。

何故ホルスがいるのかって？元々リムジンの中にいて一緒に出動したのだ。当然フリードもいる。

「お兄ちゃん、速過ぎます…」

「キュクル～…」

「一々合体するのを待つ義理はないしな」

自分達の出番が無いことに多少悲しみを感じたのか、キャロがぼやいた。

エリオも似たような顔をしており、何のために僕はここにいるの？といった感じだ。

ところが…

「マジ…？」

広暁が見たのは、気化したスライムが気体から液体（？）になる光景。
段々とそれらは数が増え、また元の形へと近付いていく。

シュイン！

ドガァァン！

広暁が矢を放ってその体を分かつも、またスライムはくっつく。
広暁もこれ以上の攻撃は無駄と判断したのか、この後のことを考えながら静観することにした。
そして合体が終わり、また最初の状況に戻ってしまった。

「キャロ、捕縛だ」

「はい！！」

『アルケミックチェーン』

反撃も考えてキャロをいつでもカバー出来る位置に移動したのだが、反撃してくる様子は無い。
どうやらスライムに攻撃本能は無いようだ。

キャロの詠唱と共にスライムの足元（？）にピンク色の魔法陣が複数出現、そこから数多の鎖が伸びてスライムへと向かう。
しかし…

グニョニョニョ……

「おいおい…」

鎖はスライムの体を通り抜けた。
というより、鎖がスライムの中に埋まった。
見た感じは鎖がスライムを突き抜けているようで若干目の毒だ。

「エリオ、思いっ切り電気を流して」

「了解！」

エリオは自身の魔力変換資質「電気」を活かし、ストラーダに電気を帯電。
スライムに特攻、ストラーダを突き刺す。

「唸れストラーダ！」

バチバチバチバチ！！

電気の放電にスライムはその体躯を揺らし、放電された電撃を受けたスライムも同様の反応を取る。
しかし…

ポヨヨヨ――――ン…

「くっ…効果無しです！！」

シュイン！　シュイン！

ドガァァン！　ドガァァン！

攻撃に矢を放つが、爆発して体の破片が飛んでもまた合体する。

一体どうすればいい？広暁は考える。

（今まで勉強した限りだと、こうゆうタイプは動きを止めるか再生するためのコアを破壊するか…はやて部隊長が言ったように本体を叩くしかない。
動きを止めても意味無いし、再生するためのコアも無いみたいだし…んー…）

ポヨヨヨーン…

ニヘラニヘラとしたような表情をしたたくさんのスライムが広暁達を見ている。
正直腹が立つが、広暁はその怒りにそっと蓋をして冷静に考察を続ける。

（最初に全部ぶっ飛ばしてそのあと再生しそうになったのをホルスの炎で蒸発。
それがくっ付いてまた元通りに……ん？）

広暁は疑問点を見つけたのか、目の前のスライムとさっきぶっとばしたスライムを思い出す。

（体積が…最初見たよりも小さいスライムがいる……？
……なるほど、可能性的には十分有り得るか）

「エリオ、キャロ。今からスターズの方に向かってくれ。でかいのをあれに放つ」

「お兄さん!?」

「どういうことですか!?」

「あいつは体が破壊されてもまた戻る。
だけど、ホルスの炎をくらう前と後とでは後の方が体積の小さいスライムがいる。
となると、炎で蒸発して大気中に霧散した体の分体積が減ったっていう仮定が出来る」

「じゃあ、今からお兄さんがすることは…」

「こいつらを広範囲に拡散するようにバラバラにする。
キャロ、あいつらの周りを囲むように簡易的な結界を張っといてくれ。
逃げることはないと思うけど念のためにな」

エリオはそのような技は持ってないし、キャロも同様。
ホルスの炎では一旦は消すことは出来てもまた再生され、フリードも同様。
となると、残されたのは広暁の矢のみ。

「2人はここから結構離れてるから、万が一俺の魔法で何か起きてもそっちまで被害は及ばない。
だったら封印が出来るキャロがスターズの方に向かった方が効率がいい。
エリオはしっかりキャロを守れよ?」

「…分かりました!」

「お兄ちゃん、無茶しないでね！？」

「キュクルー！」

「ＯＫ」

シュイィィン…！！

エリオはすぐに駆けだし、キャロも結界を張った後すぐにその後を追う。

ホルスは広暁と共にいるが、どうせ言ってもホルスは離れないだろうし、広暁も言うつもりはない。

信頼する相棒が共にいた方が広暁にとっても精神的にはプラスになるからだ。

「…いくぞ」

『了解』

「キュイ！」

広暁は空に向けて飛び立つ。スライムはその姿を目（？）で追っているようだが逃げる様子はない。

もっとも、キャロが張った結界のせいで逃げることは出来ないのだが。

『ここまで放れれば十分でしょう。結界も有りますから周りに被害も及びません』

広暁はその場で跳ぶのを止め、スライムの方を見やる。

「ホルス」

サジタリウスをホルスに渡し…

パン！！

己のプリショット・ルーティン。指を上に向けた両掌を、音を立てて合わせる。

「いくぞ、サジタリウス」

『はい』

パシッ！

サジタリウスを受け取った瞬間、広暁の足元に黒色のミッドチルダ式魔法陣が浮かび上がる。

そう、今回広暁はデバイスであるサジタリウスと初めて共にまともな魔法を使うのだ。

（空気中の魔力素をリンカーコアで魔力に変換…）

魔法というのは大きく3つに分かれる。

1つ目は魔力をそのまま放つものであり、術式も魔法陣も必要ない。

単純に魔力を放つだけなので攻撃が主だ。

2つ目は魔導師が自分で術式を構成して魔法を発動するもので、これも魔法陣は必要ない。
デバイスが術式を構成することも可能だが、デバイスの処理能力を考えたらこれは非効率的だ。
そして3つ目こそ今回広暁が行う魔法、魔法陣を使用するものだ。
使用魔力量・効果・指向性等を図式化しておくことで、魔法陣を参照するだけで魔法を発動出来る。
魔法陣の形や模様は魔法形態や魔導師毎に特徴があるため、使用する魔法や形態を特定されてしまうのが弱点だが、発動も早く安定しているので、現在ミッドチルダでは最も普及しているタイプだ。

（殲滅…破壊…速度上昇…）

破壊というだけでは物足りない。
着弾点に大爆発を起こし、攻撃対象を爆散する矢。
サジタリウスから放つことで、それは更なる速度と破壊力を得る。

（魔力を矢に集束…サイクルを繰り返す…）

広暁が右手に構えた矢に、更に魔力が集束される。
総魔力量でなのはやフェイトに劣る広暁が何故これだけの魔力を収束出来るのか？
それは、広暁の資質が物語っている。
矢生成時における魔力集束量と複数同時制御、そして魔力の扱いそのものに対する資質。
そう、広暁は、魔力の制御能力では彼女達2人に勝っているのだ。
つまり、

リンカーコアで魔力素を魔力に変換　↓　広暁の総魔力量で作ることが出来る魔力を生成
↓　魔法陣を介して矢に収束

このサイクルを繰り返すことで、これ程までに魔力を集束した矢を生成することが出来る。
発動自体に膨大な魔力を必要とする魔法ならともかく、今広暁が行っているのは唯の狙撃魔法。
瞬間的に放出出来る魔力量の上限である『瞬間最大出力』量の魔力を集束するだけなら、サイクルを繰り返すことも十分に可能だ。
これによって体に負担がくるが、日々体を鍛えている広暁には大して堪えない。
体を鍛えることは魔導師にとって大切なことであるが、広暁はそれを今まで地で行ってきたのだ。

（体全体を魔力で強化…）

自身の技の反動に耐えるため、広暁は魔力で体を強化。
矢を構え、攻撃対象であるスライムの方を見る。

『張力強化、反動防止。伏角３０度』

（うまくいってくれよ…！！）

瞬間。

広暁の手から。

矢が放たれた。

第２５話「地球編３」　（後書き）

これが…第２５話です！
前半は広暁無双。
広暁はソフトテニス部ですが…私の経験上、ソフトテニス部は卓球が強いんですよね。
そりゃあ本職の方には負けますが、遊びでしか卓球をやらない人間が集まって卓球をやるとソフトテニス部出身者が無双をしてしまうという…。
そんなこんなで書きたくなって書いてしまいました、すいません。

後半は対ロストロギア戦。
普通の漫画なら最初の爆発の後復活するのを見てるでしょうが…広暁はそんなことしません。
彼はちゃんと現実を見てますから。

そして、第２５話にしてようやく広暁がオリジナルの魔法を使います。
私なりの解釈が多々含まれていますが、ご容赦下さい。
あ、ちゃんと技名は決まっていますよ？

では。感想・意見・間違い訂正ｅｔｃ、よろしくお願いします

第２６話「地球編４」（前書き）

第２６話です。
今回は後書きで広暁の魔法の説明をしますので、後書きもしっかり読んで下さいね？

では。第２６話、始まるよ――！！

第２６話「地球編４」

「お？広暁が何かやるみたいやな」

上空でスターズとラインニングの動向をモニターで見ている隊長陣。
スターズは本体を発見したはいいものの、その封印方法が無いため困っていた。
そこでキャロに連絡しようとしたころ、キャロからそちらに向かっているという念話が入ったのだ。
一連の流れに感心し、彼女達は広暁へと視線を向ける。

「魔法陣の特徴からして…砲撃魔法？」

「かなりの魔力量…広暁に制御出来るかな？」

「広暁は器用やからな。
制御能力と総魔力量に占める瞬間最大出力の割合でいったら２人より上や。
だからあんだけたくさんの魔力を何回も作り出して制御出来る。
今は２人共経験でそれを補えるけど、後数年経ったらその点では抜かれてるかもしれへんで～」

「「うっ……」」

（…はやてもだぜ…）

（主はやて、それはあなたもです）

はやてが言ったことになのはとフェイトはちょっとシュンとなる。

ヴィータとシグナムもそれに苦笑しつつ、心の中でははやてに突っ込む。

「はやてちゃん、チャージが終わったみたいよ」

「そうみたいやな。さて、広暁…ええもん見せてくれよ？」

シャマルの言葉にはやてがそう返した直後。

広暁の手から矢が放たれた。

「ティア、エリオとキャロがこっちに向かってるって！！」

ティアナとスバルの２人は、数多のスライムと対峙していた。
攻撃してこないとはいえ、これだけたくさんのスライムと対峙するのは精神的にくるものがようで、２人の顔には疲労感が見てとれる。

「もっと早く本体に気付いていればこんなに時間を取ることは…！！」

「今はそんなこと言っても仕方ないよ」

「分かってるわ！！」

ティアナは自分の不甲斐なさに言葉を荒くする。
元々ティアナはこういったところあったが、広暁が加わってからはそれが顕著になっていた。
それに気付いてるのかいかいのか定かではないが、スバルはティアナを窘める。

「スバルさん！！ティアナさん！！」

そこにエリオとキャロが到着した。
それなりの距離を走ったのか息を上げているが、その目からはヒシヒシとやる気が感じられる。

「２人共行ける！？作戦は念話で言った通りよ！！」

「はい！！」

ティアナとスバルは確認を取った後、すぐに行動を開始する。
封印処理を施す本体を孤立化し、封印しやすくするためだ。

「エリオ、向かいから回り込んで！！」

「はい、スバルさん！！」

マッハキャリバーが回転数を上げ、エリオの移動速度も上昇。
ティアナは全体を見据え、キャロは下がって封印のための詠唱を唱える。

「でやあぁぁ！！」

「せいっ！！」

前衛組2人の行動により1体だけ孤立したスライム、それが本体だ。

「クロスファイアー…シュート！！」

ドガガガアァァン！！

ティアナが放った魔法が本体を囲むように着弾、爆発を起こす。
これにより本体は一時的にその動きを止め…

「封印！！」

キャロによって封印された。

「上手くいったね！」

「そうですね…ティアナさん？」

封印が成功したことに対しスバルは純粋喜んでいるが、ティアナは若干苦い顔をしている。
それにエリオが気付き、ティアナに話しかけた。

「…！？ゴメン、ちょっと…」

「どうかしたの？ティア」

「…隊長や副隊長ならもっと早く出来ただろうなって思って」

「お兄さんは「身の丈に合ったことをすればいい」って言っていました。
今の僕達はまだまだ未熟ですし、隊長達を目標に頑張っていけばいいと思います」

「そう…よね……」

エリオの言ったことに対し、ティアナは渋々ながらといった感じで了承する。
広暁ならそれに気付いただろうが、まだ純粋なエリオはそれに気付かなかった。

「広暁さんは？まだスライムを倒してないのかな？」

「そういえば…」

キャロがスバルに返答しようとした正にその瞬間。

ドガアアア

『張力強化、反動防止。伏角３０度』

（うまくいってくれよ…！！）

「天…創…塵！！」

『天創塵（てんそうじん）』

広暁が様々な人の意見を聞き、サジタリウスが情報を集めて考えた魔法。
火力・殲滅力で劣る広暁が己の欠点を克服するために考えた魔法。
それがスライムの群れに一直線に飛んでいく。

ピィィィィン！！

「っ！？」

シュィィィィィィィィン……！！

ドガアアア

た距離で音より先に爆煙を見る、つまり…

「おいおい、まさか…」

『魔力反応完全消滅。天創塵の速度は音速を超えていますね』

「さすがにこれは……計算間違えたか？」

『サイクルを減らして発動までの時間を短くしましょうか？そうすれば放てる本数も増えますし』

「そっちのがいいな。結構体にくるぞ、これは」

『マスターの体だからその程度で済んでいるんです。もしティアナが放っていたとしたら反動で吹きとんでいますよ？』

「マジですか」

広暁とサジタリウスにはもう少し状況を見て物事を言ってほしいものだ。

天創塵の着弾地点には巨大なすり鉢状のクレーターが出来ている。

隕石が落ちたと言われても納得の光景だ。

もしこれが街中だったら……考えたくもない。

もっとも、考えても仕方のないことだったりするのだが。

『元々天創塵は堅い相手用に考えた魔法でしたよね？』

「正確には堅くてでかい相手、だけどな。

俺の戦闘スタイルだと、そういう奴以外は応用次第で何とかなる。

だけど、堅くてでかいのが相手だと俺の技も速さも活かせない。

そういう相手を爆散するための魔法だ。
それを初めて放つのが、あんなスライムだとは思わんかったけどな」
技術と速度に優れた広暁が、自身の苦手な堅いタイプを相手する時のために考えた魔法。
術式はなのはの『ディバインバスター』を参考にし、更に『ブリッツアクション』の術式を組み込むことで、対象に当たるまでの速度を上昇すると共に破壊力を上げる（速度＝破壊力）。
その結果誘導制御は失ったが、遠距離砲撃魔法『天創塵』が完成したのだ。

「それにしても…このクレーターは…なぁ？」

『シャマル先生の結界は物質再生効果も有ります。大丈夫でしょう』

「それは分かってるんだけど…これを修復するのって結構疲れそうだな…」

『マスターが気にしても仕方ないと思いますが？マスターが結界を張れるなら別ですが』

「そうだな…よし、戻るか！」

「キュイ！」

サジタリウスの言葉に広暁は2秒で思考を切り替える。
考えてもどうしようもないことを考えても仕方ないのだ。

「お～っす」

広暁がロッジに戻ると、既に広暁以外の六課メンバーは全員揃っていた。
シャマルが木の下で伸び切っているが…結界を張るのに疲れたんだろう、うん。

「広暁君！」「広暁！」

「はい！？」

「「さっきの魔法は何！？」」

その中の2人、なのはとフェイトが広暁に駆け寄る。

「何って…何て説明すればいいんだ？」

広暁は返答に困るが、それを2人は猛烈に捲し立てる。
その結果、広暁は天創塵の考案に至った経緯からその本質まで全て話すことになった。

「……とまぁ、こんなところ」

「自分の苦手な堅いタイプを相手にする時のために…」

「砲撃魔法にブリッツアクションの術式を組み込んだの…？」

「もしかしたらって思ってな。
調べた限りじゃブリッツアクションは体の動きを速くするための魔法みたいだけどさ、砲撃魔法に組み込めば速度を上げることも出来るんじゃないかって。
速度はそのまま破壊力に繋がるし」

「簡単な物理の公式だね」

すずかの言う通り、速度はそのまま破壊力に繋がる。
時速１０ｋｍで走る車と時速５０ｋｍで走る車、どちらに衝突された方が怪我がひどいか？
理屈はそれと同じである。

「盲点だったね…私、全然そんなこと考えなかったよ…」

「私も…」

「やっぱり視点の違いやろうな。
ミッド生まれの人間はブリッツアクションの使い方がそれで当たり前になってるし、私らも地球出身っていってもミッドで過ごした期間の方が密度が濃いし。
この間まで地球で生活してた広暁やからこそ考えられるんやろうな」

「それでも、ミッドの魔導師が誰か考えてもよさそうなもんだけど

な」

「う～ん…いるかもしれへんけど少ないやろうな。
既存の魔法をそのまま使う方が楽やし。
魔法を組み合わせることはあっても、大概は同系統の魔法や。
砲撃魔法と移動魔法を組み合わせようなんて考える魔導師はそうそうおらん。
発想に至る想像力とそれを実現出来るだけの応用力を持ってなきゃ無理や」

「ふ～ん…」

はやての言葉に広暁は納得？しつつ、なのはとフェイトの方を見る。
顔に影がかかって自己嫌悪に陥っているように見えるが、まぁ大丈夫だろう。
俺なんかよりよっぽどこの2人は強いんだしと考え、キャロに話しかける。

「封印はキャロがやったんだってな？」

「はい！初めてですけど…自分を信じて頑張りました！！」

広暁の確認に、キャロは笑顔で答えた。
自分を過去の束縛から解放してくれた人が言った言葉、それを胸に頑張ったと。
広暁は思わず頬が緩むが、キャロは少し不満そうだ。

「どうしたんだ？」

「…て下さい……」

「ん？」

「頭…撫でて下さい……／／／」

モジモジ……／／／

（……何だ、この破壊力は？）

１０歳の女の子がモジモジしながら上目遣いで「頭…撫でて下さい……／／／」。

その破壊力に広暁はちょっと理性が飛びそうになったが、自制心で何とか持ち堪える。

「グフッ！！」

フェイトが凄い声を出しながら倒れたような気がするが多分気のせいだろう。

俺も変わったなぁと考えつつ、キャロの頭を撫でる。

これは１人で封印をかけることに成功したキャロに対する報酬なのだと、自分に言い聞かせながら。

ナデナデ。

「ン～♪」

（いかん、これは癖になる…）

今の広暁の目には、小動物の様な風貌のキャロが頭を撫でられて幸せそうな映像が映っている。

可愛いものは可愛いのだ。

（そう言えば、どっかの誰かが「可愛いは正義！！」って言ってたな……）

広暁達フォワード陣はロッジの掃除をしている。

ロストロギアの封印という仕事が終わった後の、帰るための最後の仕上げだ。

アリサやすずかはそんななのは達を引き止めたが、短期予定の出張とはいえ本拠地であるミッドチルダを長い間空けるのは気が引けるというもの。

仕事が終わったなら早急に帰るのが筋なのだ。

「キャロ…大丈夫かな？」

「大丈夫…だと思う」

そんなフォワード陣の中でたった2人の男、エリオと広暁が目を向けた先には…

「う～ん…／／／」

「キュクル～…」

ソファの上で横になっているキャロの姿が。
何故こうなったのかというと、広暁がキャロの頭を撫でた後、キャロは更にお願いしたのだ。

「先輩って…呼んでくれませんか…？その…一回でいいですから…／／／」

お風呂でそう呼んだ時に何かに目覚めたのかな～と考えつつ、広暁は膝を曲げてキャロを見上げる姿勢になって呼んだ…「キャロ先輩」と。
キャロはそのまま仰向けに倒れたが、その顔はとても幸せそうなものであったことを追記しておく。
ついでに言うと、エリオも一瞬顔を強張らせて真っ赤になったが広暁は突っ込まなかった。
この年頃は多分こうゆうものなのだろうと自分に言い聞かせて。

（人が変われば常識が変わる。常識が変われば世界が変わる。世界が変われば人が変わる。
こうやって変わっていきまた時代は……何で俺はこんなことを考えてるんだ？）

どんなに変えようとしても、生きてきた人生の中で培った常識はそう簡単には変わらないのだよ。

「お兄さん？」

「ん？どうした？」

「僕はこのゴミ袋を外に出してきますね」

「おぅ。俺は掃除道具を片付けとくわ」

常識の整理は後、今は掃除をちゃちゃっと済ませるべきだ。
広暁はそう考え、テキパキと体を動かす……。

「もう帰っちゃうのね…」

「もっとゆっくりしていってほしかったな…」

「にゃはは～…さすがに、ね」

「これ以上ミッドチルダを空けるわけにもいかないから」

久し振りに会った友人、過ごした時間。
それは何物にも変え難い思い出。
過ごした時間は心のアルバムに仕舞われ、時はまた巡る。
巡る時の中で人は何を思い、生きるのか？

「何か今…詩っぽいのが聞こえなかったか…？」

「僕には聞こえませんでしたよ？」

（…幻聴？この年で？…帰ったらシャマルに診てもらおうかな…）

人間という生き物は生きる環境が変わると、大なり小なり精神に影響が出る。

それが憂鬱だったり疲労だったりと影響は様々だが、広暁の場合は幻聴だったようだ。

頑張れ広暁、負けるな広暁。可愛い弟と妹のためにも。

「さて…じゃあ、皆。ミッドチルダに帰るよ」

「任務の手際、結構いい感じだったよ」

「まだまだ甘いところもあるけどな」

「明日からまたみっちり練習だ」

「「「「「はい！！」」」」」

澄み渡る夜空にはつらつとした声が響く。それが示すのは……

「行っちゃったわね…」

「次の休暇に期待しよう？」

広暁達が去った後もコテージに残っているのはアリサとすずか。
先程まで過ごした時間を名残惜しむように、２人は佇む。
そんな風にして物思いにふけっていると、ふいにアリサが話し始めた。

「そういえば…ホルスだっけ？あの竜？」

「広暁君と一緒にいた？」

「そう。最近、大学の講義で習ったような気がするのよね」

「アリサちゃんがとってる講義だと…臨床心理学？」

「一般教養でとった講義って意味では合ってるんだけど…確か歴史系だったと思う」

「歴史系？だったらエジプト文化じゃない？」

「そう、エジプト文化よ！
エジプト神話に出てくる天空と太陽の神『ホルス神』。
本で読んだのは古い文献だったけど…どことなく似てたわね、あの竜に」

「エジプト神話に出てくる神様と同じ名前の竜…偶然かな？」

「名前がホルスってことしか聞いてないから…はっきりとは言えないわね。
だけどもしホルスっていう竜がいたとしたら…」

「いたとしたら？」

「古代エジプト文明と現代…いえ、もしかしたら異世界間の関係性を見つけることが出来るかもしれないわ」

妖艶な笑みを浮かべるアリサを「あぁ、またか」という表情で見つめるすずか。
自分が興味を持ったことにはとことん突き進むのがアリサという女性。
良いにしろ悪いにしろ、それがアリサという女性なのだ。

「私に手伝えることがあったら何でも言ってね？」

「ありがとね、すずか」

そんな彼女とこれからも親友でいられたらいいな。そう考えたすずかであった。

第２６話「地球編４」（後書き）

第２６話、いかがだったでしょうか？
前書きで述べた通り、広暁のオリジナル魔法『天創塵（てんそうじん）』について説明しますね。
この魔法を簡単に説明すると

『魔力を凄い集束した矢を音速でぶっ放す』

です。誘導も付加効果も無い、ただ真っ直ぐ音速で飛ぶ矢です。
音速で飛ぶ矢にで誘導をつけるのは、さすがに難しいでしょうから。
矢故に攻撃範囲は狭いですが、着弾点で大爆発を起こすのであまり関係ありません。
近い相手に放つとこちらも爆発に巻き込まれすし、攻撃対象が小さいと外す可能性もありますが。

あえて言うなら『テクニック又はスピードタイプが持つ大技』ってところでしょうか。
発動速度がそれほど遅くないのも、広暁が『器用』だからです。
魔力の集束にそれほど時間がかからないということですね。

ちなみに、上記のデータはあくまで『サジタリウスから放った場合』です。砲撃として矢を空中に浮かせた状態から飛ばしたら威力や速度は落ちますのであしからず。

これからもオリジナルの魔法を考えていきますが、さすがにこれはやり過ぎだ、と思われたらどしどし感想で書き込んで下さい。
強いキャラは好きですが、それが過ぎると何の面白みもないですから。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしています。

番外編1「変態という名の淑女」（前書き）

今回は番外編を書いてみました。
タイトルについては…本文を読めば理解出来ると思います！

では。番外編1、始まるよ～♪

番外編1「変態という名の淑女」

＜カリムｓｉｄｅ＞

カリカリカリカリ…

今日も今日とて私は事務仕事を行う。
聖王協会騎士という立場上、処理しなければならない書類は多い。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリ……

……一体これで何枚目かしら？
簡単な報告やデータはメールで送ればいいのに、重要なことは書類なのよね。
そうする理由も分かるけど、せめて重要度の定義をしっかりしてほしいわ。
どうしてロストロギア発掘チームの備品案に私が目を通す必要があるのかしら？
全体の予算案なら分かるけど、備品程度なら発掘チームの裁量に任せてあるというのに。
ロストロギアの管理は教会の仕事の一つ、それに必要な備品ならいくら使おうとも構わないのに。
これは次の会議での議題にするべきね、『重要度の定義付け』。

『騎士カリム、紅茶が入りました』

「ありがとう。では休憩にしましょうか」

シャッハが紅茶を入れてくれたようで、私も手を止める。
いつも彼女は私の仕事や思考の区切りがついたところで紅茶を入れてくれる。
私としてはありがたいのだけれど…どうしてそのタイミングが分かるのかしら？

コンコン。

「失礼します」

「どうぞ」

ノックの後、シャッハが紅茶と…あれはクッキーね、それらが乗った台車を押して入って来る。
そういえばもう午後3時なのね。

「今日の紅茶はアールグレイを使いました。地球産の紅茶です」

「地球産ですか」

この間飲んだセイロン…じゃなくスリランカの紅茶は美味しかったわ。
アールグレイはどんな味かしら？

スッ…

「……ふぅ。スリランカよりコクがありますね」

「さすがです、騎士カリム。

ダージリンは高い山の上で生産しているので、その分味にコクがでるのです」

シャッハの説明を聞きながら私は紅茶を飲む。
合間にクッキーを食べながらこうしてのんびりと過ごすのは至福の時間ですね。

「この間の機動六課の任務ですが、映像がまとまりましたので。今からご覧になりますか？」

本来なら報告書を見るだけで十分なのだけれど、これは私が希望した。なぜなら……

『天…創…塵！！』

「こ、これは…！？」

「凄い…！！」

広暁君が戦うのをこの目で見ることが出来るんですもの！！
前の初出動時の映像も良かったけど、今回の任務の映像もまた良いわね。
掛け声と共に大技を放つ広暁君……たまらないわ～♪

「これはもう…ＡＡＡランクの魔法ですよ！？」

「そんなに凄いのかしら？」

「音速で飛ぶ着弾点で大爆発を起こす魔法矢……対物破壊で言ったらかなり上位の魔法になります」

「対物破壊？」

「自身の苦手なタイプと戦う時のために彼は考えたのでしょう。
戦闘データを見る限り、彼は高速移動型の狙撃手。
スピードやテクニックはありますが、幾分火力に欠けます。
苦手なタイプ…堅固で巨大な相手を想定して考えたのでしょう。
そういったタイプ相手なら、発動に時間がかかる魔法でもさしてデメリットにはなりませんし。
魔法陣の構成を見る限りでは、攻撃対象に当たらずとも任意で爆発させることが可能なようです。
当たらなかった時の保険でしょうね」

「へぇ……ん？当たらなかった時の保険？堅固で巨大な相手に？」

「ある程度は応用が効くようにしたということでしょう。
小さい相手……例えば、ガジェットや魔導師相手に放つことも考慮に入れたということです。

例え対象に当たらなくても、傍で爆発させれば威力はさほど変わらないでしょうし。
それにしても……魔力量ＡＡ＋でこの収束魔力量……。
一体どれ程のスピードでサイクルを繰り返しているのでしょうか…？」

シャッハの話を聞いた限りでは、彼の総魔力量ではこれだけの威力の矢を放つのは難しいとのこと。
故に、魔力を矢に収束する術式を凄いスピードで繰り返していると。
なるほど、広暁君は凄い器用なのね。

「こんなことが…出来るんですね……」

「広暁君は一般的な魔導師の方と違って経歴が特殊ですから。出来ても不思議ではないでしょう？」

「確かに…そうかもしれませんが……」

「それよりシャッハ。そろそろ孤児院に行く時間ではなくて？」

「えっ…あ、もうこんな時間！？騎士カリム、申し訳ありませんが……」

「行ってらっしゃい。食器は別の方に片付けてもらうわ」

「ありがとうございます。それでは」

タッタッタッ……。

キィ……。

バタン……。

「さて…始めましょうか」

シャッハも行ったことですし…私は私の仕事を始めましょうか…。

ピッピッピッピッ……

『…喜んでいいのか、それは？確かに、モデルの勧誘はあったけどさ』

……隣を歩いているテスタロッサ執務官が邪魔ね。これは保留…っと。

『馬鹿正直に打っても返されそうな気がしたんで』

含みのある笑み…ポイント高いわね。コレクションに追加…っと。

『エリオはキャロをしっかり守れよ？』

幼い同僚に指示を出す広暁君…いいわね。これもコレクションに追加…っと。

『天…創…塵！！』

最後はやっぱりこれね。掛け声と共に大技を放つ広暁君……たまらないわ～♪

「あの…騎士カリム？」

「えっ！？」

誰かの声がしたかと思って顔を上げたら、そこにいたのは……シャッハ！？

孤児院に行ったんじゃなかったの！？

「受け取る書類を忘れたので戻ってみれば…あなたは一体、何をしているのですか？」

「ええっと…これは……その……」

まずいわ。この状況は非常にまずいわ！何が何でもこの状況を乗り切らないと…！！

「これは…広暁さんの映像の切り抜き、ですか？」

「え、えぇ、そうよ！
民間協力者とはいえ、彼はまだまだ管理局魔導師としては未熟な身！
私が考察して後ではやてにデータを送ろうかと…！」

ちょっとどもってしまったけど、これなら大丈夫よね！？
言ったことに何の矛盾も無いから！！
そうよね、シャッハ！？

「…戦闘映像の切り抜きに『笑顔』や『クールさ』という項目は必要ないと思いますが？」

「そ、それは、ほら！戦闘中の心理状態を表すためよ！
自分の心理状態が分かれば分析もしやすいでしょう！？」

今度もちゃんと切り返せたわよね！？
可笑しなところは無いわよね！？
お願いだからシャッハ、もうこれ以上何も聞かないで――――！！

「……最後に１つ。
戦闘映像の切り抜きの前にある映像、これは既に戦闘中ですらありませんが？」

ピキピキピキピキ…パリ――――ン……

（…終わったわ…）

―――――――

「……」

「間違いないですよね……？」

「は、はい！間違いありません！！」

普段のカリムを知っている人が見たら、この光景はまず信じられないだろう。

現在カリムは執務室の床の上で正座をしており、彼女の前にはシャッハが。

シャッハの顔は呆れとも怒りとも取れる表情で、それがまた恐怖を倍増させる。

「ということは…騎士カリム。この間あなたが私に言ったことは嘘ということになりますよね？」

「この間言ったことと言うと…何だったかしら？」

「……でも、広暁君を渡す気はないわよ？」

「うっ……」

この間言ったこととは、広暁が初めて聖王教会に行った時にカリムが言った言葉。

広暁のことが好きであるはやてに対し、カリムが先制攻撃をしかけるように言った言葉だ。

シャッハはその意味をすぐにその場で問いただしたのだが、

「ちょっとはやてをからかっただけよ」

と言ってそれ以上話すことはなかった。
それ以降カリムがそれを匂わせるような言動をシャッハは察知しなかったので気にしていなかったのだが…今回のようなことが起きてしまったわけだ。

「あなたは一体何をしているのですか…？
聖王教会騎士、管理局少将の方書きを持つ騎士カリムともあろう方が」

「え～と…その……」

「……惚れたのですか、彼に？」

「はぅ……／／／／」

シャッハの一言に、カリムは正座しながらも顔を赤くする。
それを見たシャッハは、安堵とも諦めともとれる表情をした。

「騎士カリム…私は幼少の頃よりあなたに仕えてきました。
あなたはその特異なレアスキル故にずっと教会領内で過ごされてきたことは知っています。
ですから、その……こういった色恋沙汰には無縁であったことも…
…知っています」

「……面と向かって言われると凄い傷つくわね、その言葉」

「事実ですから。とにかく！私が言いたいのは！！」

シャッハは言葉を一旦区切り、改めてカリムの方を見る。
今から言わんとすることが分かったのか、カリムは身構えた。

「こういうことはばれないようにやって下さい！！」

「……え？」

言われた言葉は青天の霹靂。
てっきり頭ごなしにどやされるものだと思っていたカリムは間抜けな声を出してしまった。
怒られると思ったらばれないようにやれと言われたのだから驚いたと言えば驚いただろうが……。
カリムの間抜けな声……これは貴重だ。

「こんなことをしていると他の騎士や修道士の方にばれたらどうするんですか。
気付いたのがたまたま私だからよかったですけど、他の方にばれたら誤魔化しがききませんよ？」

「え～と…シャッハ？怒らないの？」

「…先程も申し上げた通り、私はあなたの境遇を知っています。
ですから、初恋の衝撃にこのようなストーカー行為に走ってしまわれてもさほど驚きはしません」

「それは言い過ぎじゃ…」

「本人の許可を得ずに勝手にその人の映像を集める…これがストーカー行為でなくて何と言えば？」

「うっ……」

「本来ならこの行為自体を止めるところですよ？止められないだけまだマシと思って下さい」

「……どうして許してくれるの？」

カリムが疑問に思うところはそこだった。
聖王教会教会騎士団騎士、そして管理局少将であるカリム。
その特異なレアスキルと立場から、彼女には有力者からの縁談も多い。
それらを全て断っていたカリムに対し、シャッハは大なり小なりの不安があったのだ。
このまま縁談を断り続けて気付いたら適齢期を過ぎていたらどうしようとか。
そもそも初恋の経験も無いカリムに結婚が出来るのかとか。

「騎士カリムには幸せになっていただきたい…ただそれだけです」

それを口には出さないシャッハ……お美事にございまする。

「ありがとう、シャッハ！！」

その言葉を聞いて感極まったのか、カリムが立ち上がってシャッハに抱きつこうとした。
しかし、正座の力を侮るなかれ。
足が痺れたカリムはそのままシャッハを巻き込み転倒…

「せいっ！！」

ガシ！！

クルクル……。

スタッ。

「危ないところでしたね」

「広暁君にやってもらいたかったわね～」

「贅沢言わないで下さい、騎士カリム」

…しなかった。

それは正(まさ)しく、走ってくるお姫様を王子様が受け止めて回転、力のベクトルを変える秘儀の如く。

カリムの言葉にシャッハは呆れ顔だが、笑みがこぼれる当たり満更でもないのかもしれない。

「とにかく、騎士カリム！

ストーカー行為は誰にもばれないようにお願いします！！

もし次私が見ることがあれば、このことは広暁さんに報告しますからね！？」

「それは困るわね…分かったわ、シャッハ。次からはもっと周りに気をつけてやるわ」

「頼みますよ、ホントに……」

この後シャッハは書類を受け取って部屋を出ていった。そしてカリムは……

『何か今…詩っぽいのが聞こえなかったか…？』

「ちょっと疲れた顔の広暁君……心がくすぐられるわ～♪」

再び仕事に戻っていた。

番外編1「変態という名の淑女」（後書き）

番外編1、いかがだったでしょうか？
ここ最近空気だったカリムを書いていたら…こうなってしまいました。
好きになった人の映像を勝手に集めてコレクション…。
…あれ？これって立派な犯罪じゃ…。

…まぁ、教会騎士なら許されるということで（オイッ！！

では。感想、意見、間違い訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

番外編2「智恵の大海・知識の泉」（前書き）

またまた番外編です。
タイトルでどこぞの僧侶と学習塾を想像するかもしれませんが…それは気のせいですよ、気のせい。

では…番外編2、始まります。

番外編2「智恵の大海・知識の泉」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

「オリジナル魔法って結構簡単に考えれるもんだな」

『それ相応の知識があれば難しいことではありませんからね』

あ、どうも。今日も今日とてシグナムにしごかれた墨谷広暁です。
いつも通り訓練を終えて、今は夜。
最初はよく分からん呪文みたいな言語だと思ってたミッド語も英語に似ていると気付き、デスクワークぐらいの書類なら作れるようになりました。
なまじ英語に似てるだけやりやすかったりやりにくかったりしましたが、どうにかなるものですね。
だてにセンターと国立二次を突破しちゃいませんぜ、ハハッ！！

夜の訓練が疲れたのか、ホルスはもう寝ちゃいました。
ちなみに俺は、オリジナル魔法を考察しています。
既存の魔法ならなのは達にある程度教えてもらったけど、自分だけの魔法があるっていいですよね。
弓型のデバイスを使う人が少ないせいか、弓矢関係の魔法は少ないんですよ。

『マスター、テンションがおかしくありませんか？』

「そういう気分の時もあります」

その時々の気分を無理矢理変えるのは難しい。

ならば、それを理解した上で思考・行動すればいい。
理性で感情を完璧に抑えるなんて無理なんですよ。
そんなことが出来る人間がいたらお目にかかりたいものです。

『……今は何を考えているのですか？』

「原案の続き。対集団戦射撃魔法をな」

今俺が考えているのは、対集団戦射撃魔法。
たくさんいるガジェットを矢で一本ずつ破壊するのは色々と手間。
だったら矢を一度に複数展開して誘導制御をつけて放った方が楽だ。
そのために今は、色々な射撃魔法の実践映像や術式を見て考察している。

「アクセルシューターにクロスファイアシュート、スティンガースナイプか～…」

アクセルシューターの場合だと、なのはが制御出来る最大数は３２だと言っていた。
俺は魔力制御の才能だけで言ったらなのはより上なので、時間をかければそれより上はいけるらしい。
だけど……

「機動六課の試用期間は１年もないしな…そんなに時間をかけるわけにもいかない、か」

どっかの経営者は「短い人生、短所を補うより長所を伸ばせ」と言っていたが、１年ではきつい。
ならば、誘導制御の違う形を考えるしかない。

この3つの魔法は放った後から自分の意志で制御することが出来る。
だけど当然それに魔力やマルチタスクを持ってかれるし、数に限りがある。
なら……

「最初から攻撃対象にロックオンして放てば楽だな。
ガジェット相手ならずっと誘導制御する必要もないし。
魔力消費が減るからその分本数を増やせる」

実はこの間シャマルのもと結界魔法や探索魔法を試してみたら面白いことが分かった。
俺が持つ資質は、この2つの魔法にピッタリだったのだ。
何故なら、結界魔法や探索魔法はどちらも繊細で細かな魔力運用を必要なために苦手とする魔導師が多いらしく、『結界魔導師』という専門職すらあるらしい。
ところがどっこい、今の俺は中衛である動物狙撃型。
後衛も出来る資質を持っているのだ。

シャマルが「今すぐデバイスを変えましょう!!」と凄い目で言ってきたのには驚いた。
サジタリウスが今にも矢を生成しそうだったから断ったけど、あの目は本気だったよな…。

ちなみに俺の資質は『魔力制御能力』というより『魔力運用』といった方が正しいそうだ。
大層な言い方だけど、つまりは俺が『器用』ってことだよな?
要約するとこんなに安っぽくなるとは…言葉って大事だな、うん。

しっかし……身体能力は前衛向き、戦闘スタイルは中衛向き、魔法の才能は後衛向き。

何でこんなにばらけたんだろうな？
ちゃんと纏まっててくれれば色々とやりやすいのに。

……次元漂流者だから仕方ないな、うん。
はなっから魔導師になろうと思って鍛えてきたわけじゃないんだし。

まぁ、とにかく。
探索魔法で相手の位置を把握・ロックオン。
矢を作って一気にぶっ放せば、俺が考える対集団戦射撃魔法がとりあえずの形になる。

「大概の射撃魔法はスフィアを作ってそこから放つけど…俺には必要ないか？」

『その分を矢の生成に回した方が効率的ですし、想定する状況には合っていませんからね』

想定するのは、散在するガジェットを一斉に狙う必要がある時。
スフィアから放つって手もあるけど、それでは『連射』という形をとることになる。
連射である以上足を止める時間も長くなるし、発動する時間も長くなる。
ましてや、今の俺じゃあ３２なんて数のスフィアは作れないしな。

俺は移動型のセンターガード、足を止める時間は短い方がいい。
もっと言えば、移動しながら発射出来たらいい。
１人で戦うのならともかく、フォワードというチームで戦うのなら自分の領分は弁えるべきだ。
スフィアが必要な魔法はまた考えればいいしな。
その時はフォトンランサー・ファランクスシフトを基にして考えて

みるか。

「探索魔法で攻撃対象の位置を把握・ロックオン。
周囲に矢を作って展開、合図と共に発射。
天創塵と同じやり方で矢を作れば時間は短縮出来るな」

『探索魔法も同時に行ってはどうです？』

「俺に出来るか？」

『マスターなら大丈夫です。仮に出来なかったとしても、私が探索魔法を行えばいいのですから』

「なるほど…じゃあそれを原案にして考えて、細かいところは段々と変えていけばいいか。
あ、これは忘れるなよ？
射撃魔法に探索魔法の術式を組み込むんであって、２つを分けてやるんじゃないからな。
あくまで１つの魔法だ」

『分かっています』

さて…考えますか。

「……こんなところか？」

『とりあえずの形は出来ましたね』

「そうだな。夜中だし、実践はまた今度にするか」

とりあえずの形は出来たし、今日のところはこれで終わるか。
机の上の時計を見ると、時間は午後１０時３０分。
早朝訓練のことを考えても、寝るにはまだ早い。
……よし。

『マスター、どちらに？』

「食堂。いい酒があるんだよ～」

そう、酒だ。
実はこの間地球に任務で行った時に、何本かお酒を買っておいたのだ。
駄目元ではやてに頼んだらあっさり了承が出たのが驚いたな。

民間協力者とはいえ、しっかり給料は貰える。
隊員寮だから家賃はいらないし、携帯電話も持ってないし、地球で払ってた車のローンもない。
訓練漬けの毎日だから娯楽に使う暇もない。
給料を貰っても使い道がないから、高い酒をまとめて買うことが出

来た。
成人して1年と経ってないからビールの美味さは分からんけど、日本酒や焼酎の美味さは分かる。
休暇があったらミッドチルダの街に出てお酒買いたいな～。

『何故この部屋の冷蔵庫に入れないのですか？』

「つい飲んじゃいそうで怖いんだよ。朝起きれなくなるほど飲んだら困るし」

『マスターが…ですか？』

「用心に越したことはないってこと」

一回経験あるしな。

「これこれ」

食堂のおばちゃんに許可をもらって冷蔵庫に入れておいたお酒。
その中から白い曇りガラスの様な色をした瓶を取りだす。

「純米大吟醸…『霊峰泉（れいほうせん）』」

富士山の湧水を使ったお酒で精米率は４０％、醸造アルコールは入っていない。

正しく純米大吟醸の日本酒だ。

「ゆっくり飲むかな」

「広暁か？」

「ん？」

声を掛けられて振り向くと、そこにいたのは青い狼、ザフィーラだった。

その距離、約１０ｍ。今の俺なら一飛びで移動出来る…そんなことどうでもいいか。

「ザフィーラ？どうしたの？」

「夜の見回りだ」

「あ、ご苦労様です」

「広暁は何をしているのだ？」

「お酒飲もうと思ってさ」

「それは……日本酒か？」

「そうだよ？この間の任務で地球に行った時に買った奴。純米大吟醸の『霊峰泉』」

「……（ゴクッ）」

簡単に説明するとザフィーラが何か急に考え込み始めた……もしかして。

「ザフィーラも飲む？」

「いいのか？」

「勿論」

やっぱり飲みたいのね。

見回りのことは…まぁいいか。

真面目なザフィーラがそのことを考えないわけないし。

…狼って酒飲んでいいのか？

…別にいいわな、ミッドチルダだし。

「平皿に入れた方がいい？」

「いや、普通のグラスでいい」

「え？いや、飲みにくいだろ？」

「…あぁ、広暁には見せたことがなかったな」

そう言ってザフィーラがこちらに近付いて来る。

その過程でなんかよーわからん光がザフィーラを包んで…

「…おぉ」

そこにいたのは身長１９０ｃｍ、筋肉モリモリマッチョマンの変態…ではなくザフィーラだった。

銀髪に獣耳、浅黒い肌に管理局の制服を押し上げる筋骨隆々の肉体。
フサフサの尻尾がチャームポイントだな。

「魔法ってホントすげーな」

「驚かないのか？」

「時代を生き抜けるのは環境に合わせて生きられる人間だぜ？」

一々驚いてたら精神が持ちません。あ、ちょっとしょげたな。耳が垂れ下がった。

「適当なところに座っててくれない？」

「分かった」

グラスを探しますかね。

―――――――――

～男2人～

トクトクトクトクトク……。

「次は私が入れよう」

「どうも」

トクトクトクトクトク……。

「では」

「あぁ」

スッ…

「「乾杯」」

チン。

ゴクゴク……。

「…ふぅ。美味いな」

「あぁ…」

窓際に座った2人は、ただグラスに注がれた日本酒を飲む。
つまみが無くとも酒は進み、話題がなくても気まずくなることはない。
2人は窓の外、夜空に浮かぶ星を眺めながら飲み続ける。

「ホルスはどうした?」

「もう寝てる。夜の訓練で疲れたみたいでさ」

時折交わす会話、それが酒のつまみ。
機動六課の中でも貴重な、前線で戦える2人の男は酒を飲む。

「それ程の訓練をしたのか」

「あいつは技の調整。いくら器用でも、考えたばっかの技は上手く使えないし」

「お前の方はどうだ?」

「……クロスレンジの訓練だとか言って毎日斬りかかられてます」

実際の訓練の意図は近付かれた時にいかに避け、相手との距離を離すかに主軸をおいている。
広暁とて喧嘩ぐらいしかしたことはないし、格闘技の経験もほとんど無い。
そこでシグナムが考えたのがこの訓練方法。
瞬発力・反射神経に優れている広暁が、斬りかかってくるシグナムの攻撃をひたすら避ける。
基礎ぐらい教えろよと思った広暁だが、シグナムは「慣れろ！」の一言。
こんなんでどうにかなるのかよと思っていたが……慣れとは恐ろしいもの。
毎日やっていたら自然と体が動くようになるし、避け切れない攻撃はサジタリウスやバリアで防ぐ。
時たまヴィータやフェイトにも相手をしてもらっているので、動きが単調になることもない。
何だかんだで『神速のインパルス』の領域に足を踏み入れそうな広暁である。

「オリンピックの１００ｍ選手でも０．２秒前後だから０．１１秒なんて現実的にはあり得ないけどな」

「何のことだ？」

「…すまん、気にしないでくれ（何か変な電波が…）」

二次元は二次元、三次元は三次元だぜ、広暁さんよ。

「……そうか」

ザフィーラもそれ以上は追及する気はないのか、視線を月に移して

グラスをあおる。
こういう人間?は貴重だと考えつつ、広暁もグラスをあおる。

「「……」」

静かだが気まずくない、そんな空気。
元来2人共お喋りな性格ではなく、お酒もワイワイ飲むより静かに飲む方が好きな2人だ。
美味い酒、目を癒す星々、共に飲む仲間。
これ程の条件が揃っているなら、まず気まずい空気になることはない。

「ザフィーラはさ」

「何だ?」

「日本酒が好きなのか?」

「地球にいた頃は、主はやてが寝てからよく飲んでいた。
シグナムはビール、シャマルはワインが好きだったな。
ビールとワインはミッドチルダでは生産されているが、さすがに日本酒はなくてな」

「ふーん…ヴィータは酒を飲まないの?」

「酒は苦いから嫌いだと言っていたな」

「…さいですか」

話す内容はとりとめもない過去の話。

3人共お酒は飲むがはやてが小学生のため、起きている間は酒を飲んでいなかったこと。
ヴィータは酒の美味さが分からないから、アイスを食べていたこと。
そんな会話をしていて、ザフィーラは以前から疑問に思っていたことを広暁に聞いた。

「…気にならないのか？」

「ん？何を？」

「機動六課のことだ。鋭いお前が気付いていないはずがない」

「……気付いているというか、調べて分かったのがちょっとだけ…なんだけどな。
民間協力者が調べて分かることなんてたかが知れてるし」

ザフィーラが言ったことに対し、広暁は少し苦い顔をして答える。
広暁が気になっていること、それは機動六課のこと。
少数精鋭部隊の実験、対ロストロギア専門の部隊の設立。
話を聞いただけでは納得出来るが、それは広暁がまだ民間協力者になりたての頃。
時空管理局のことを学んでいた広暁はふと疑問に思ったのだ。

「本当の機動六課の設立目的は何だ？」

時空管理局の大抵の部隊は少数の高ランク魔導師と多数の低ランク魔導師、そして魔導師でない管理局員で構成されているので、実験的な意味で設立されたとしてもさほど違和感はない。

しかし、対ロストロギア専門部隊の設立。

これについて広暁は気になっていた。
ロストロギアは滅んだ魔法文明が残した魔法技術の遺産。
これ程のものを専門とするのに、どうして少数精鋭部隊にする必要があるのか？
そもそも機動課はどこの部署もロストロギアを扱っているし、何故専門の部隊を作る必要がある？
少数精鋭部隊の実験という意図も絡んでくるが、必要にかられて設立された部隊とは考えにくい。
何か別の意図が合って設立された部隊、それが今の広暁の出した結論だった。

「それにさ…いくらはやてにコネがないとはいえ、このメンバーはおかしくない？
１０年来の友人にはやて所有の守護騎士４人。
フォワードは将来の可能性を評価したって感じだし、ロングアーチも研修を終えた新人がチラホラ。
後見人は教会騎士のカリム・グラシア、クロノ・ハラオウン提督、リンディ・ハラオウン執務統括官。
全員が全員六課の人間と深い繋がりがある。
何ていうか…あえて繋がりの深い人間と新人ばっかり揃えた部隊って感じがするんだよな。
そうするしか方法がなかったんじゃなくて」

「……そうか。じゃあ、広暁は機動六課設立に別の目的があると考えているのか？」

「……素人意見だけど。言ってもいいか？」

広暁の言葉に頷き、ザフィーラは広暁の眼を見る。
それを了承と受け取った広暁は、言葉を紡いだ。

「何か…それこそ今の時空管理局では対応出来ない事件が起きた時に対応するため。
それが機動六課の『本当の』設立目的じゃないか……って考えた」

「……!?そう考えた理由は?」

ザフィーラの眼に一瞬走った動揺の色を広暁は見過ごさなかった。
しかし、今はそれを問うても無駄だと判断したのか、ザフィーラの問いに答える。

「帰納法だけど、な。
一回騎士カリムに会いに行った時に、そこでレリックの話を聞いたんだ。
その時、「この後に起こるはずの事件も対処を間違えるわけにはいかない」って漏らしたんだよ。
その時は対して気にならんかったけど、機動六課の設立目的のことを考えてたらそれを思い出した。
予言か占いか理由は分からないけど、カリムは何かの方法でそれを知ったんじゃないかって。
地球じゃあ馬鹿にされそうな話だけど、ミッドチルダならそれでも不思議じゃないし」

話す内容に対し、ザフィーラは真剣な目をして話を聞く。
広暁の常識が段々と崩れてきた気がするが、それは気にしない。

「そう考えたら後はトントン拍子で考えが纏まった。
予言の内容に対応する部隊なんて理由で部隊は作れないから、それ

っぽい理由で部隊を設立する。
新人や将来性を期待した人が多いのも、単に実験部隊だから集められなかったんじゃない。
予言の事件が起きて対応出来なくても、部隊員が未熟だからっていう理由でお咎めを受けにくいから。
どこの世界でも上層部ってのは、部下が企業のことを考えて行動しても結果が出なければ叩くからな。
まぁ、企業っていうのは好き嫌いじゃなくて仕事が出来る出来ないで選ぶから当然なんだけど。
好き嫌いで考えてたら企業として成り立たないし、過程じゃなくて結果が大事だからな。
経営者と労働者の観点の違いってところかねー」

（…7割方当たりといったところか。お前は…どこまで観えているのだ？）

広暁の言ったことに対し、ザフィーラはその鉄面皮の下では驚かずにはいられなかった。
本当の設立目的を知っているのは、六課のメンバーではやてとヴォルケンリッターの5人のみ。
過程が違うとはいえ、広暁は本当の設立目的をほとんど推論だけで当てたのだ。

「だけどさ」

「何だ？」

「この推論、騎士カリムに関することで色々と不確定要素が多い」

「不確定要素だと？」

「まず騎士カリムが…何てゆーか、占いか予言が出来なきゃいけない。
そういう魔法とかレアスキルとかあるならともかく、調べた限りじゃ分からなかったし。
もし本当にそういう能力があったとしても、予言を信じて部隊を設立ってのも…ねぇ？
調べる手段がネット・本・人伝とはいえ、ある程度当たるなら調べて分かってもよさそうなもんだし。
時空管理局の上層部がそれを信じているならもっと細かいことが分かるはず。
それが調べても分からないってのは…そういう能力が無いか、あったとしても大して当たらないか。
前者なら推論が崩れるし、後者なら何故当たりもしない予言を信じて部隊を設立したってことになる。
そこが分かんないんだよなー……」

（……地上本部が騎士カリムの予言に否定的な立場ということまでは分からなかったか。
民間協力者という立場ではそれが限界か……）

眼の前で頭を捻る広暁に対し、ザフィーラは内心ほっとしながら考えを纏めていた。
興味本位で聞いたこととはいえ、ここまで深く真実に近付くとは思っていなかったから。
だからこそ、ザフィーラは考える。
広暁の言った推論に対し、自分はどう答えるべきか。
しかし……それを考える必要はなかった。

「あ、無理して考えなくてもいいよ？」

「…どういうことだ？」

「俺の言ったことにどうやって返したらいいのか…考えてるだろ？」

「……」

「だんまりですか…まぁいいや。
正直な話、俺は誰かにこの推論を言いたかったんだよ。
それを聞いてくれただけでも十分」

「いいのか？」

「言っても本当の理由は教えてくれないだろ？
それに、ミッドチルダに来て1年と経ってない俺が考えたことだよ？
当たってる可能性は低いだろうし。
仮に当たってたとしても、俺が考えつくようなことなら皆それ以上のことを考えてるだろうし。
ただ言わないだけで。
俺はまだまだ勉強中の身だし、どうしても地球にいた頃の常識で考えちゃうし」

「……そうか」

「考えるのは好きだけど、それを誰にも言えないってのは結構きつくてな」

そう言って広暁は一気にグラスをあおる。

７２０ｍｌ瓶の日本酒とはいえ、男２人が飲むには足りなかったらしい。
同じく空のザフィーラのグラスを持ち、広暁は立ち上がる。
「聞いてくれてありがとさん。俺はそろそろ失礼するね」
「あぁ。私はもう一回りしたら眠るとしよう」
「そっか。お休み～」
「お前は言ったらしいな、世界が変われば常識は変わると。だがそれは違う」
１人食堂に残ったザフィーラはぼやいた。
広暁が言ったこと…それは人間が持つ常識のこと。
世界が変われば常識は変わる。
だからこそ前の世界、地球の常識に囚われていてはいけないと。
「常識とは己が生き様で見につくもの。

生きる世界など、精々外的要因に過ぎない。
だからこそお前は機動六課設立の真の目的に限りなく近づくことが出来た。
客観的視点と思考を繰り返す用心深さ、何より物事に『気付く』洞察力。
それらがお前の強みだ。
ミッドチルダにいる期間が短いという理由で己を卑下するな」

紡がれた言葉、それを聞く対象である広暁はここにはいない。
しかし、ザフィーラはあえて言わなかったのだ。
彼は守護獣…護り見護る者だから。
広暁なら言わずともそれに気付き、自分という存在を昇華させると確信していたから。

「今のお前に足りないものは、魔導師としての経験だ。
もしお前がこのまま訓練を積んで時空管理局という組織をより深く知ったら…あるいは……」

そこまで言ってザフィーラは口を閉じる。
これ以上言っては、まるでそれが実現する可能性が無くなるかのように。

「…私も行くか」

そこにはもう1人の男はいなかった。
いたのは1匹の狼…いや、守護獣。
歩を進め、その姿は夜の闇へと消える……。

『よかったのですか、マスター？まだ気になることがあったのでは？』

「何のこと？」

『例えば…何故マスターが機動六課で民間協力者として働いているか…とか』

「…俺？」

『（カマかけにはひっかかりませんでしたか…しかし）私自身が考えたことです。
常識的に考えたら、マスターはどこか管理局保有の保護施設に回されるのが妥当でしょう。
マスターだけならともかく、ホルスもいるのですから。
敵意が無いとはいえ、未知の竜であるホルスに何の拘束も無いというのはおかしいです』

サジタリウスは追撃の手を緩めない。
カマをかけることに失敗したなら別の方法で聞き出せばいい。

「言われてみりゃそうだな。
どうして俺はここで民間協力者をやってるのか？
あの時は願ったり叶ったりって感じだったけど、今考えるとおかしい話だよな。
次元漂流者の保護も時空管理局の仕事とはいえ、機動六課は試用期間1年の実験部隊。
その前線メンバーに、あの時魔法ド素人の俺を加えた」

『（今の言い方…本当に気にしていなかった？）』

「サジタリウス」

『何でしょう？』

「…カマをかける時はもっと上手くやれよ？」

『（ギクッ！？）…何のことでしょう？』

「言葉通りの意味だよ」

『……ハァ。マスターには敵いませんね』

「心理戦のテクがガジェット相手に役立てば嬉しいんだけどな」

『技術を身につけて損はありません』

「へいへいっと……」

自室へと続く長い廊下を歩きつつ、1人と1機は談笑する。
気になることはあっても、それを広暁はザフィーラに話さなかった。

その真意は分からなかったが、サジタリウスもそれ以上問おうとはしない。
以前の広暁ならいざしらず、今の広暁なら近いうちに話してくれると分かっていたから。

「俺が民間協力者として誘われた理由…ねぇ。十中八九ホルスが関係してんだろーな」

『カードから現れた存在で、エジプト神話では天空と太陽の神『ホルス神』。
私にはさっぱり分かりませんね』

「俺も分からん。カードが実体化するなんてアニメの中の話だけだと思ってたし。
常識離れにも程がある…ってこっちの世界ならそれもあり得るのか？」

『……マスター、さすがにそこまで壊れてはまずいかと』

「バイト帰りに車に乗ろうとしたら知らない公園のベンチに座ってた。
こんなこと経験すりゃ誰だって壊れるって」

スッ……　ピッ……　ウィーン……

「まぁ…その時になればはやてが話してくれるだろ。今聞いても適当にはぐらかされるだけだし」

『その時が遅くなければいいですね』

「不吉なこと言うなよ……」

上着を脱いだ広暁はベットに入る。
そこには既に寝入っているホルスがおり、その寝姿はとても可愛い。
つい数時間前は炎をバンバン放出してシグナムと張り合っていた竜の欠片も無い。

「目覚まし頼むな」

『分かりました。お休みなさいませ』

「お休み～」

寝入りにつく広暁を見守るのは光り輝く数多の星。
今夜広暁が言った一言が実は……この先を語るにはまだ少し早い。
時が来れば自ずと答えに広暁は辿り着くだろう。

広暁がミッドチルダに飛ばされたのは何故か？
ホルスの正体は一体何なのか？
それらを知る者は…今はまだいない。

番外編2「智恵の大海・知識の泉」（後書き）

番外編2、いかがだったでしょうか？
機動六課設立の真の目的…アニメを見ていて思ったんですけど、早い段階から誰か気付いてても不思議じゃないですよね。
そういうわけで、広暁は自分なりに考察しました。
手段があれなのは…現代っ子だからということで。

所々おかしいのは、広暁がどうしても日本にある企業やその風土を考えてしまうからです。
働き始めて間もない、精々アルバイトぐらいしか経験のない彼に組織の裏や闇まで考えることは難しいと思います…例え知識として知っていたとしても。

なお、ヴルケンリッターの酒の趣味や機動六課設立の本当の目的を知っている面子はオリジナル設定です。

では。感想・意見訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第２７話「ホテル・アグスタ　知」（前書き）

第２７話です。
今回から数話、ホテル・アグスタ編です。
戦闘シーンが多くて大変ですが…頑張れ、私！！

では…第２７話、始まります。

第27話「ホテル・アグスタ　知」

この前の出動の時もそれなりにうまくはやったけど、ただそれだけだった。
毎日の訓練もあんまり強くなってる実感がない。
手の中には優秀すぎる相棒がいて、あたしの周りには天才と歴戦の勇者ばっかり。
1人だけ例外もいるけど、彼の能力を考えたらそれも納得してしまう。
今も疑問に思ってる…自分が何でここにいるのか。
あの人は何であたしを部下に選んだのか…。

毎日の訓練のおかげで、魔法という力にも大分慣れてきた。
どうしてこうなったのか…今の俺には分からない。
だけどこうなったおかげで、俺は自分の道を見つけることが出来た。
今まで生きてきた中でようやく見つけた道だ、進まないわけにはいかない。
俺の進む道、その先に一体何があるのか？
それはまだ分からないけど…今はただ進むだけだ。

初めて恋というものを知った。
最初はその余韻に浮かれてたけど、そう浮かれてもいられない。
彼を好いているのは私だけではないのだから。
私の権限を使えば彼を囲うことも可能だけど…そんなことはしたく

ない。
そんなことをしても、彼は決して喜ばないから。
だから…正々堂々、戦って彼を手に入れるわ。

「う～ん…」

『どうされました？』

「どうしたのだ？」

「キュイ？」

ここはホテル・アグスタの裏にある搬入口。
ミッドチルダでも指折りの高級ホテルであり、広暁が今いる場所。
今回の任務は、ここで行われる骨董美術オークションの会場警備と人員警護である。

「今回の任務、ロストロギアをレリックと誤認したガジェットが出る可能性を考慮した任務だよな？」

『なのは隊長はそう仰ってましたね。それがどうかしましたか？』

「警備が固すぎないか？人が多いのはともかくとして、部署が多過ぎる」

「各方面の有力者が集まるからな。警備に成功すれば評価も上がるからだろう」

「…なるほど、ここに管理局員がいなかったのはそれが理由か…」

苦笑しながら言葉を返す広暁に、ザフィーラも似たような顔で頷く。
現在の警備体制は、なのは・フェイト・はやての3人が会場内の警備。
ヴィータ・シグナム・シャマルの3人が会場内で外の警戒。
スバルとティアナはホテルの内外を徘徊しており、エリオとキャロは地下に行っている。

広暁は最初エリオとキャロと行動をする予定だったのだが、それにザフィーラが待ったをかけた。
3人で回ると、何かあった時に反応出来る確立を下げてしまう。
だから私と広暁が外の警護に回った方が効率がいいだろうと。
なのは達隊長陣もそれに同意し、1人と2匹は搬入口にいる。
ここにロストロギアが納入されるので、警護をした方がいいと考えたからだ。
男と竜と狼が来たことに初めは訝しげな視線を向けられたが、事情を話したらやけに素直に納得した。
ここには民間の警備会社の人しかいないらしく、時空管理局の魔導師が来たのが嬉しいらしい。
ついでに言うと…警備員やホテルの従業員にはザフィーラとホルス

は広暁の召喚獣と思われている。

「ちゃんと仕事しろよな…」

『いいところを見せたいのでしょうね。何か起こらなければ意味無いというのに』

「何も起こらないに越したことはない。仮に起きたとしても、そのために私達がいるのだ」

「だな」

パン！！

ザフィーラの言ったことに対し、広暁は自らのプリショット・ルーティンを行って答える。

いつでも最高のパフォーマンスをするために必要なこと。

それはやることが変わっても、ましてや生きる世界が変わっても変えることはない。

「まぁ…前みたいなことが起きなきゃそれでいいさ」

「前みたいなこと…あの3色ガジェットという奴らか？」

「あぁ…今度は別のモンスターが来るかも」

『マスター、それはフラグです』

「……お前はどこでそんな言葉を覚えたんだ」

『この間ミッドチルダの回線に潜った時に色々と』

「…さいですか」

＜ティアナｓｉｄｅ＞

（でも今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合かぁ）

（そーね…あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長達の事）

（う～ん…父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど。
八神部隊長の使ってるデバイスが魔道書型で、それの名前が『夜天の書』っていうこと。副隊長達とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だってこと。
で、それにリイン曹長を合わせて６人揃えば『無敵の戦力』ってこと。
ま、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しくは知らないけど…）

（レアスキル持ちの人は皆そうよね…）

（ティア、なんか気になるの？）

（別に）

（そう。じゃあ、また後でね）

（うん…）

六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。
八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバーＳ。
副隊長でもニアＳランク。
他の隊員達だって…前線から管制官まで、未来のエリート達ばっか

り。

あの歳でもうBランクを取ってるエリオと、レアで強力な竜召喚士のキャロは2人ともフェイトさんの秘蔵っ子。

危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

そして…広暁さん。

民間協力者として六課に来た次元漂流者。

大学生だったらしいけど、スポーツで全国クラスの腕前と身体能力を持つ人。

向こうの世界で言う難関大学に通っていたらしく、知識が豊富で智恵もある。

魔力運用に天賦の才能を持ち、デバイスの補助無しに矢の形状に魔力を集束出来る人。

ホルスという炎を操る竜を従え、戦闘能力は真の姿のフリードを超える。

魔法を初めて2カ月足らずで私と同じ…いえ、それ以上のレベルまでいっている人……。

やっぱり、うちの部隊で凡人は私だけか…だけど、そんなの関係ない！

私は…立ち止まるわけにはいかないんだ！

ホテルの屋上で警備をしているのはシャマル。
身に纏った白衣が風に揺れ、ボブカットのブロンドヘアーが風になびく。

「まさか広暁君が後衛型の魔導師だったなんて…」

考えていたのはつい最近分かったこと。
広暁に頼まれたシャマルは結界・治癒・探索魔法を教えたのだが、予想していないことが分かった。
広暁は『魔力運用』に優れており、結界・探索魔法が非常に上手かったのだ。
まだ大規模な結界は張れないが、ガジェット相手なら強度は十分実

用クラス。
探索魔法も同様で、今の広暁ならホテル内のどこに誰がいるか、時間をかければ見つけられるだろう。

「魔力集束や自己ブーストはその応用ってわけね…いきなり応用からいくというのも変な話だけど。
仕方ないことといえば仕方ないことなのかしら…」

いきなり実戦に放り込まれるのだから、必然的に戦闘スタイルは攻撃的なものになる。
ましてや広暁は身体能力に優れており、弓道をやっていた経験もある。
デバイスが弓型で動物狙撃型の砲撃魔導師になっても不思議は無い。

「また今度教える時に誘ってみようかしら…でもサジタリウスが怖いし…」

1人で悶々と考えていたシャマル。その時…

キュイィィィィン…！！

「っ！？クラールヴィントのセンサーに反応！シャーリー！！」

クラールヴィントのセンサーに獲物がかかった。

『はい…来た来た、来ましたよ！』

『ガジェットドローン陸戦？型…３０、３５！』

『陸戦？型…２、３、４！』

「前線各員へ。状況は広域防御線です。ロングアーチ1の総合回線と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います」

（スターズ3、了解！）

（ライトニング3、了解！）

（ライトニング4、了解！）

（スターズ4、了解！）

（ライトニング5、了解）

フォワードの5人は連絡を受け、それぞれが戦闘態勢に入る。広暁もすぐに表玄関の方へ行こうとしたが、続けてシャマルから連絡が入った。

「広暁君は私のところへ来て。他の子はティアナの指揮で防衛ラインを堅守して」

（どういうことですか？）

「私1人じゃこれだけの広さの探索魔法を張るのは難しいの。広暁君は私の補佐を頼むわ」

（ホルスも連れていきますか？）

「そうね…念のためお願いするわ」

（了解）

即座に行動を開始する5人。
ティアナは現場の情報を得るためにシャマルに情報を送ってもらい、
ホテルの中にいたスバルは外へ。
地下にいたエリオとキャロも地上へと上がる。
広暁もシャマルのもとへと行くために、ホテルの外側から一気に屋上へと飛ぶ。

（私とシグナム、ヴィータはガジェットの迎撃へと向かう。抜かるなよ）

（了解。そっちこそ、こんがり良い色に焼けんようにな）

（ぬかせ…）

ザフィーラが走り出すと同時に、ホテル内にいたヴィータとシグナムは騎士甲冑を纏う。

ヒュン…！！

装着を終えて飛んで行くのは2筋の光。
赤いゴスロリの騎士甲冑を纏ったヴィータと、下半身が大段に露出した騎士甲冑を纏ったシグナム。

「広暁はシャマルの手伝いか」

「あいつは元々そっちに適性があるからな。ミッドチルダで生まれ育っていたなら補助型の魔導師として花を咲かせていただろう」

「ホントに器用な奴だな。あれで魔力量が多ければ言うことないんだけど」

「天は二物を与えず、だ。もしそうだったら高町以上の魔導師になっているぞ」

ヴィータが新人のところまでガジェットは行かせねえと言えば、シグナムはそれを過保護と言う。

雑談をしているように見えても、2人はしっかりとその目にガジェットを捉えている。

今までの戦いから、心理的に余裕が無いと戦闘が厳しくなることは分かり切っているから。

「ホルスだけでも来てくれたらいいのだが」

「お前こそ贅沢言うな。ホルスがこんな場所で暴れたら森林火災が起きるぞ」

「…それもそうだな。では、私は先に行く。私が大型を潰すから、お前は細かいのを叩いてくれ」

「おうよ」

「ガジェットは副隊長達とザフィーラが各個撃破。順調ね」

「今のところは…ですけど」

「不吉なこと言わないの」

そんな会話をしていたのは、騎士甲冑を纏ったシャマルとバリアジャケットをまとった広暁。

シャマルがホテル周りの森林一体に探索魔法を張っており、広暁はホテル内と周辺に張っている。

シャマルだけでは探索魔法の効果範囲に穴が出る可能性があるらしく、広暁がホテル内外を、シャマルがその外側広域に張ることでその可能性を消しているのだ。

「探索魔法って神経使いますね…」

「慣れれば簡単よ？それに、広暁君は探索魔法を初めてまだすぐ何だから。
効果範囲が広いだけで十分よ」

「ありがとうございます…っと、ホルス？」

そんな会話をしていると、ホルスの様子がおかしいことに広暁は気付く。
どこかそわそわとしており、その紅い両眼はしきりに動いている。

「何か見つけたのか？」

竜であるホルスの五感は、人間である広暁よりかなり優れている。
そんなホルスが魔法でも見つけられない何かに気付いたと思ったのか、広暁はホルスに話しかける。

「キュイ…キュ！？」

ホルスが言葉を紡ごうとしたその時。

「！？この反応は！？」

再びクラールヴィントに反応が表れた。

「…っ！？」

「キャロ、どうしたの？」

「近くで誰かが召喚を使ってる！」

『クラールヴィントのセンサーにも反応！だけどこの魔力反応って…！！』

『お…大きい…！』

ホテル・アグスタを遠巻きに見る2人の人間。
1人は黒と茶色を基調した服に身を包んでいる男。
もう1人は黒と紫を基調した、ゴスロリ服を纏った少女。
少女が魔法を発動し、彼女の足元の魔法陣から両生類の卵を彷彿とさせる物体が出てくる。

「我が甲、小さき者、羽ばたく者、言の葉に応え、我が命を果たせ…。召喚、インゼクトツーク」

ミチ…ミチミチ……ズシャァァン……！！

詠唱が終わると同時に触手が破裂し、中から出てきたのは大量の…虫？
画鋲に羽が1対生えた様なその姿は、イメージだけは虫と思えても、言及すれば虫とは思えない。
そんなよく分からない虫が、卵の中から大量に生まれた。

「ミッション、オブジェクトコントロール…いってらっしゃい、気を付けてね」

少女の言葉に1回点滅することで反応した虫達は、一斉に飛んで行く…。

「はぁ！！」

ガン！！

「何！？」

最初に違和感に気付いたのはシグナムだった。
ガジェット？型と戦っていた彼女は、順当にそれを撃破していった。
しかし、急に相手の防御反応が良くなったのだ。

（一体どういうことだ…ヴィータ！！）

（こっちも一緒だ！シュワルベフリーゲンが全部避けられる！急に動きがよくなりやがった！）

（有人操作に切り替わった…！？）

（何があった…？）

シャマルと広暁も念話に加わる。
もしこれが先程反応にあった召喚士の魔法なら、新人たちのところに回り込まれる可能性が高い。
念話内で話し合った４人は行動を決める。

（ヴィータ、お前はラインまで下がれ）

（分かった）

（ザフィーラ、シグナムと合流して）

（心得た）

（スバル・ティアナ・エリオ・キャロ。遠隔召喚の可能性もあるから、常に気を抜くなよ）

（（（（はい！！））））

それぞれが適切な配置へと移動する。

しかし、この時の彼女達は知る由も無かった…更なる敵が迫っていることを。

そして…それらに対する知識を持ち合わせているのが、広暁だけであることを。

第27話「ホテル・アグスタ　知」（後書き）

第27話、いかがだったでしょうか？
番外編をやって思ったのですが、原作通りのルートにオリ主を混ぜるのって難しいですね…今更ですが。

広暁の魔法の資質に関してですが、要約すると『器用』ということです。
または『効率がいい』と言った方がよろしいでしょうか？
こういった才能はなのは二次小説のオリ主には無いのでやってみたくなってやってしまいました。
もし疑問に感じることがあれば感想に書き込んで下さると嬉しいです。

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしています。

第２８話「ホテル・アグスタ　散」（前書き）

ちょっと間が空いてしまいましたが…第２８話です。
今回はちょっとした訂正がありますので、後書きもしっかり読んで下さいね？

では…第２８話、始まります。

第２８話「ホテル・アグスタ　散」

「つまり…召喚士の魔力反応の後、急にガジェットの動きがよくなったと？」

「そうよ。一体どうして…？」

ホテル屋上、現場指揮をしていたシャマルと広暁は考察していた。
召喚士による大きな魔力反応、その後すぐにガジェットの動きが眼に見えてよくなったのだ。

「召喚士が何をしたか分かりますか？」

「さすがにそこまでは分からないわね…」

シャマルに分からないことを広暁が分かるわけがない。
だからこそ、広暁は考える。
自分が長所として認め、周りからも長所として認識されている洞察力。
様々なデータを基に、現状で最も可能性が高いことを考察する。

（召喚士…大きな魔力反応…急に動きの良くなったガジェット…）

過程の仮定を考え、召喚士の立場になって。
もし自分が召喚士ならガジェットにどのような魔法を施すか？

（魔力反応……召喚士？）

キーワードは召喚士。

召喚士がガジェットに施す魔法、それは一体何か？
自分の知識を基に、冷静に、客観的視点に立って考える。

（召喚…魔力反応…ガジェットの動きの向上…まさか！？）

データがデータを結び、それは情報となる。
情報となった広暁の考察結果は、それが現状ではどのような位置づけになるか？

（…他の可能性も否定し切れない。だけど、これが今俺が考える最も可能性的にあり得ること）

考察……終了。考察結果を告げる相手は現状での上司。

「シャマル先生、俺の考えを聞いてもらえますか？」

「いいわよ、言ってみて」

シャマルもそれを快諾する。
経験では広暁は六課の中で一番下だが、歩んできた人生に裏付けされた洞察力を認めているから。
広暁が今の問題をどのように考察したか、シャマルは聞きたいのだ。

「召喚士が何か…例えばガジェットの動きを向上させる小さな物を多数召喚した…俺はそう考えます」

「小さな物？」

「召喚師である以上、何かそういった類のものを召喚するのが自然。
魔力反応があっても何が起きたかシャマル先生が分からないのは、

魔法によって召喚された何かが小さ過ぎて魔力反応を探知しにくいから。
ガジェットの動きを向上させる…例えばガジェットと融合する小さな機械を召喚したと考えます」

「……なるほど、可能性的には十分有り得るわね」

広暁の言ったことに対し、シャマルは素直に感心した。
この少ない判断材料を基に、これだけの考察をした広暁に対して。
しかし、広暁は更に言葉を続ける。

「ですけど、まだ分からないことが」

「分からないこと？」

「ガジェットの動きを良くすること自体がおかしいんです。
ガジェットの動きを良くするってことは、向こうが本気で何かを狙いにきているということ。
だったら最初から動きをよくした状態でここを襲撃すれば、奪える可能性も上がる。
だけど相手は、途中からガジェットの動きをよくする魔法を使った。
何故そうしなかったか…可能性は３つ。
１つ目は召喚士の合流が遅れて、仕方なく途中から魔法を使った。
２つ目は、偶然召喚士が近くを通りかかって、え～と…ヘリの中で聞いたのは……」

「ジェイル・スカリエッティ？」

「そう、そのスカリエッティの要求に承諾して魔法を使った。３つ目は…それ以外の何かです」

「…よくこの短時間でそこまで考えられるわね」

「…そういう性格なんです」

広暁の考察を基に、現場指揮を行っている2人は更に考える。
もし広暁の言ったことが本当なら、ガジェットを叩くのはシグナム達3人に任せた方がいいだろう。
しかしシャマル達が念話で考えた通り、召喚士なら一気にガジェットを転送することも可能だ。
ならば現状ではどうするべきか？
その時…

「シャマル！広暁君！！」

「この声は…リィン曹長！？」

「はいです！！」

いきなり目の前に現れたのはリインだった。
どこから現れたのか分からないが、急に現れたのでそうとしか言えない。
突っ込んだら負けだ。

「話は聞かせてもらいました。
もし広暁君の考え通りなら、その小さい何かがガジェットの動きを良くしたのは間違いないです。
しかし、だからといって現状で取れる手段はありません。
このままガジェットの破壊を続行するということでいいですか？」

「…そうですね。ガジェットの動きが良くなった今じゃ、取れる手段がありませんし」

「それじゃあ、お願いしますね？」

「リイン曹長はどちらに？」

「召喚士の姿だけでも見に行きます。私1人じゃ叩けませんが、せめて姿を確認するだけなら…」

召喚士の姿を捉えることも確かに大切だ。
加えて、現状で自由に動けるのはリィンのみ。
今後のことを考えても現状のことを考えても、リィンが行くのは適切な判断だと分かる。
しかし…

「リイン曹長だけじゃ何かあったときに危険です。ホルスも連れてって下さい。
シャマル先生、いいですか？」

「えっ、でもそれじゃあ…」

「いいのよ、リインちゃん。本来私だけでやることを広暁君に手伝ってもらってたの。
それでも十分なのに、ホルスまでいるのはさすがに…ね。
何より、リインちゃんに何かあったら悲しいわ」

「シャマル…広暁君…分かりました。ホルス、お願いしていいですか？」

「キュ！！」

ホルスは大きく鳴くことでリィンに答える。
翼を大きく広げて羽ばたく様は正に竜。
その様子を見た広暁とシャマルも、思わず笑みがこぼれる。

「それじゃあ、行ってきます！ホルス、行きますよ！！」

「キュイ！！」

シュタッ！！

シュイイィィィン……。

あっとゆう間に飛んで行った1人と1匹。
リインがホルスの背中に乗っていたような気がするが気のせいだろう。

「…ドラゴン・ライダー？」

「どうしたの？」

「いえ、何でも」

広暁のぼやきについ突っ込んでしまったシャマルだが、すぐに気を取り直して現場指揮に戻る。
ところが…

「そう……っ！？この反応は！？」

「こうなるわな…」

「遠隔召喚、来ます！」

「やっぱり来ましたね…お兄さんからの念話がなければ焦るところでした」

「召喚士ってこんなことも出来るんだね」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもありますから」

「まったく…ぼさっとしてないで迎撃行くわよ！！」

「「「おう！！」」」

「やはり来たわね…遠隔召喚」

「……」

「広暁君？」

「……」

モニターで遠隔召喚を見ていた2人。
シャマルは予想通りといった感じだが、広暁は苦い顔をして熟考している。
まるで、どうしてこんなことをしたのかといった風に。

「広暁君!?」

「っ!?すいません…」

「何か気になることでもあるの?」

「えぇ、まぁ…」

「だったら言って。自分1人で考え込むのは良い判断じゃないわ」

「…そうですね」

広暁の癖を知っていたシャマルは、諭すように忠告する。
その裏には、「自分1人で考え込んで自滅したら意味無いのよ」という忠告も含まれているが、広暁はそれに気付いていても今は気付かないふりをして答える。

「忠告した手前、こんなこと言うのも変かと思うんですけど…。
どうしてあいつらの正面に召喚したんですかね?
搬入口の近くとか…悪くても人気の少ないところに召喚すればいいのに」

「確かに…一体どうして？」

「本当の狙いが別にあるか、もしくは……っ！？囮か！？」

「囮！？」

「俺達の注意をこっちに引き付けて、本当の狙いは警備が薄かった搬入口。もしそうだとしたら…」

「まずいわね。だけど、可能性の話でしょ？」

「それでも、可能性である以上有り得ることなんです。俺に行かせてもらえませんか？」

広暁の言ったことは確かに正論だ。
もしもガジェットが囮なら、搬入口から入ってロストロギアを狙われる可能性もあり得る。
しかし、あくまでこれは広暁が考えた可能性の話。
そんな曖昧なもので動かせていいのか、シャマルは考える。

「お願いします」

「でも広暁君じゃ…」

「フォワード４人と副隊長２人は防衛、隊長２人と部隊長はホテルの中の警護。
シャマル先生は現場指揮でザフィーラは迎撃。
リイン曹長とホルスは召喚士の確認。
行けるのはシャマル先生の手伝いをしている俺だけなんです」

「それでも…広暁君の戦い方じゃ地下では不利よ」

搬入口とはいっても、それはそのまま地下の駐車場に直結している。
そして、広暁の戦闘スタイルでは地下での戦いは厳しい。
広暁はセンターガードとしては異例の動物狙撃型であり、広大な大空の空中戦でこそ真価を発揮する。
足を止めるタイプの静物射撃型に変えることも出来るが、如何せん経験が少ない。
広暁はフォワードとして訓練をしているため、フォワードのチームとして足りないものを補うための戦闘スタイルをとる必要があるから。
足を止める静物射撃型より、自由に移動して中距離から援護出来る動物狙撃型の方が都合がいいのだ。

「まだ何か来るって決まったわけじゃないし、あくまで可能性の話です。
来なければそれでＯＫだし…来たら来たで適切な判断をします」

「広暁君なら無茶をすることはないでしょうけど…」

「…俺ってそんなに信用されてませんか？」

「普段真面目な人ほど、追い詰められた時に爆発するものよ？」

「……仮にそういう性格だとしてもそうはならないようにしますから許可を下さい」

「……」

シャマルは考える、広暁を行かせていいか。

現状で考えれば、広暁以外に行ける人間はいない。
しかし、広暁の戦闘スタイルでは地下での戦闘は不利。
あくまで可能性の話とはいえ、判断を下す以上熟考しなければならない。

（広暁君の性格から考えて、まず無茶をすることはない。
洞察力や判断力も優れているから、よっぽどのことがない限りは大丈夫だと思うのだけれど…）

「……」

判断を焦っても、それは絶対に広暁が望む結果にはつながらない。
そんな子供の様なことを広暁はしないし、しても無駄骨ということも分かっている。
だからこそ広暁はシャマルの判断を待つ。そして…シャマルが判断を下す。

「分かったわ。行くのは認めるけど、決して無茶はしないように。危険だと感じたらすぐに戻ってくること、それが条件よ」

「了解。それじゃ…」

いざ広暁が行こうとすると…

キュイィィィィン……！！

「クラールヴィントに反応！？」

「またですか！？」

「ドクターのおもちゃが…増えた？」

「何を考えているのだ、あいつは…」

ホテル・アグスタから離れた所にいた2人が見たのは、更に増えたガジェット。
それらもまたホテル・アグスタに向かっている。

「まだインゼクトツークも十分…ミッション、オブジェクトコントロール」

少女が魔法を唱えると、空中に散開していた虫達がまたもガジェットの中に入っていく。
動きが良くなったガジェットは、ホテル・アグスタへと向かう。

「あいつらには虫をつけないのか？」

「あれは付けちゃ駄目って…前会った時に、試したいことがあるってドクターが言ってた」

男が指差した先にいたのは……

『照準…異常無し』

『装甲…異常無し』

『右腕…異常無し』

『指揮…異常無し』

ガジェットには似ても似つかない風貌をした、４種類の機械達であった。

『ガジェット？型…２０、２５、３０！！』

『ガジェット？型…３、４、５！！』

「更に増えるの！？」

「おいおい…」

現場指揮に当たっていた２人は頭を悩ませていた。

ただでさえ動きの良くなったガジェットに手を焼いているのに、更

に数が増えたのだ。
増えたガジェットもまた動きが良くなると思うと…

『シャマル、広暁君！！』

「リインちゃん！？」

『召喚士の場所に向かう途中で機械っぽい虫を見つけました！今はホルスと一緒に交戦中です！！』

「交戦！？大丈夫ですか！？」

『ほとんどホルスが焼いちゃったので私はやることがないです…』

「…リイン曹長は今からどうしますか？」

『そちらに戻って戦場指揮に務めたいと思います。シャマル、いいですか？』

「勿論。広暁君、地下の方をお願いね？」

「了解、と言いたいところなんですけど…増えたガジェットの対処はどうします？」

広暁が気になるのはそこだった。
今はまだ対処出来ているが、増援として来たガジェットの対処は正直言って難しい。
新人４人は持ち場を離れるわけにはいかず、ヴィータは４人と合流するために移動。
最前線で戦っているのはシグナムとザフィーラだけであり、増援に

は対処出来ないだろう。

「厳しいけれど…2人に頑張ってもらうしかないわ。
はやてちゃん達は動くことが出来ないし、広暁君が言った可能性を排除するわけにはいかない。
私が動けたらいいんだけど、指揮がなくなったら統率を取るのは難しい。
だから…今はこうするしかないの」

「…そうとも限りませんよ？」

「えっ…？」

「俺がここから増援のガジェットを可能な限り叩きます」

「え！？そんな魔法を使えるの！？」

シャマルは驚いた。
シャマルの知っている広暁の魔法は、ほとんどがなのはやフェイトに教わったもの。
それらは全てが移動魔法や砲撃魔法であり、広範囲に使える魔法を持っていると知らないからだ。

「こうゆう時のために考えておいたんです。
シャマル先生が判断に困ったのは、時間がかかると考えたからですよね？
俺が広範囲魔法を使えたら、ガジェットを叩かせてからでも搬入口に行かせることが出来ますから。
だから、今ここで俺が可能な限りガジェットを叩きます」

「それは本当なのね？」

「ちゃんと練習もしましたし、ぶっつけ本番というわけでもありません。
ガジェット相手に放つのは初めて…ですけど」

「…いいわ、やりなさい。広暁君がやってた範囲は私がカバーするから」

「ありがとうございます」

シャマルの配慮に感謝し、広暁は探索魔法を解く。
ホルスはそんな広暁の背後に回り、まるで広暁を守る様な位置に着く。
広暁の魔法発動を誰にも邪魔させないという空気が感じ取れ、それは広暁にも伝わる。

（ホルスに気を使わせたか…俺も失敗は出来んな）

シュン…！！

パン！！

パシッ！！

左手に持っていたサジタリウスを軽く上空に投げ、音を立てて両手を叩く。
プリショットルーティンを行うことで集中力を高め、サジタリウスをキャッチ…魔法を発動する。

「カードリッジロード」

ガシャンガシャン！！

消費するは2発のカードリッジ。足元に浮かぶは黒色のミッドチルダ式魔法陣。

発動するは天創塵に続く第2の魔法。発動と同時に広暁の周囲を薄く黒い光が包み込む。

（探索…捕捉…）

探索魔法を使い、攻撃対象をロックオン。

範囲が広いとはいえ、捕捉する短時間のためだけに使うならシャマルと同範囲も広暁に可能。

（？型１６機…）

攻撃可能…いや、確実に撃破可能な数は？型１６機。

その中に？型は含まれていない。

防御力で？型を上回る？型を攻撃するのは、今の広暁には分が悪い。

自分に出来ることを、今は確実にやる。

（収束…形成…）

探索魔法を行う過程で同時進行して周りに集束されていた魔力。

それらが段々と矢の形に形成されていく。

遠距離砲撃魔法の天創塵と違い、１対多を想定して考案された対集団射撃魔法。

（展開…展開…）

こなす要領は天創塵と同じ。
異なるのは1本に集束するか数を増やすか？
鍛えられた肉体と類稀なる魔力制御能力を持って矢を更に生成する。

（何これ…！？多すぎる…！！）

生成される矢、それらは一様に短い。長さは精々天創塵の1／8程度、針といっても過言でない長さ。
収束魔力量も普段広暁が放つ矢と大して変わらない。しかし、その数は異常。
十では足りぬ、百でも足りぬ。16機のガジェットに向けて放つ量としては明らかに異常。

（準備完了）

周囲に展開される矢の数、占めて128本。
あまりに多過ぎる矢、それらが整然と並ぶ様はまるで矢の壁。

「セット」

広暁の掛け声と共に、それらの矢はそれぞれの攻撃対象であるガジェットの方向を向く。
ガジェット1機につき8本、占めて16機のガジェットが広暁の攻撃対象。

「篠雹霰・弐式！！」

ヴィ――――――――――――――――――ン！！！！

『篠雹霰・弐式（じょうはくせん・にしき）』

弦を弾くと同時に１２８本の矢がそれぞれの攻撃対象であるがジェットに向かって飛んでいく。
一纏め８本の矢が空中を飛ぶ様は天を奔（はし）る流れ星の様だがその攻撃は非情。

虫がついたことで動きが良くなり、自在に攻撃を避けるガジェット。
しかしそれは飛んで来る矢が１本だけならの話。
一纏め８本の矢がまるでタイミングを計ったかのように絶妙なタイミングで飛んで来る。
仮に最初の矢を避けることが出来たとしても、第２第３の矢がそれ以上の回避を許さない。
その結果、例え１本１本の矢の威力は小さくてもガジェットは破壊される。
最初から１本で仕留めようなんて考えていない。
８本で１本、質より量。

一方こちらは、１０機のガジェットがホテルに向かって飛んでいる。
それらが森の中でも開けた空き地に出た所で…

シュンシュンシュンシュンシュンシュンシュンシュンシュンシュンシュンシュン

！！！！！

ドガァンドガァンドガァンドガァンドガァンドガァンドガァンドガァンドガァン！！！！！

１０機全てが破壊された。
もしもガジェットが話すことが出来たら、一様に口を揃えてこう言うだろう。

「避け切れない」

天より降り注ぐ矢の雨、占めて８０本。
矢が短いとはいえ、その破壊力は普通の矢より少しばかり威力が劣る程度。
ＡＭＦといえど破ることは難しいことではない。

仮に角度やＡＭＦの強度等の条件で矢が防がれても、別方向から向かって行けばいいだけの話。
現在知られているガジェットのＡＭＦは一度に１つの面しかＡＭＦを張ることが出来ない。
例え１本防がれても、別方向から突っ込めばいい。
使うのは魔力でも体力ではない…頭脳。

「ふぅ…」

「広暁君、今の魔法は…？」

「対集団戦射撃魔法…『篠雹霰・弐式』」

遠距離攻撃の貫通力と攻撃速度において、広暁は六課随一。
しかし弓矢の性質上、一度に放てる矢は数本が限界。
直接放たずに周囲に展開してもいいが、質と量はたかが知れている。
そこで広暁が考えたのが篠雹霰。
硬くて遅い相手を想定した遠距離砲撃魔法『天創塵』と違い、複数の相手を数多の矢で攻撃。
矢を長くすれば本数は少なくなるが威力は上がり、逆に短くすれば本数は多くなるが威力は下がる。
誘導制御や本数の関係上、広暁並の魔力制御能力あってこそ出来る魔法だ。

「篠雹霰…篠つく雹霰（ひょうあられ）…」

細く群がって生える竹を『篠竹』と言う。
篠竹を束にして地面に付きおろすように激しく降る雨を『篠つく雨』と言う。
しかし篠雹霰において振ってくるのは、雨ではなく矢。
その破壊力は……荒れ狂う積乱雲の中で生み出される雹霰の如し。

「っ！？」

一瞬眩暈がしたかと思うと、広暁は倒れそうになった。
それを膝に手を当てて支えることで無理矢理体制を保つ。
シャマルも広暁の傍に駆け寄ると、治癒魔法をかけて広暁の回復を図る。

「カードリッジ2発ロード…結構体にきますね」

「いくら体を鍛えてもこればかりは、ね。徐々に体を慣らしていくかないわ」

カードリッジは自己で作り出せる魔力量より多くの魔力を使いたい時に使用する。

広暁の場合はそんなことをしなくも矢を生成出来るのだが、それでは時間がかかってしまう。

1本の矢に収束する天創塵と違い、128本の矢を作るだけのサイクルを篠雹霰は繰り返すのだから。

本数を減らしてもよかったが、その分矢に収束する魔力は増えるので要する時間は変わらない。

故にカードリッジを使うことで時間を短縮したのだが、結果としてかなり疲労してしまった。

体を鍛えているとはいえ、限界寸前を繰り返すより1回でも限界を超える方が体にはこたえるのだ。

ティアナやスバルはしょっちゅう使っているので大して問題ないだろうと考えていた広暁だったが、今回のことで考えることになった。

もっとも徐々に慣らしていけばいいということなので、練習のメニューをどうしようか、ということに関してだが。

「さすがに8本は多かったかな…」

「こればかりは経験を積むしかないわね。3~4本で十分だったと思うわよ?」

「まだまだですね、俺も」

「(それは本心から言ってるのかしら…?)大丈夫?ちゃんと動け

る？」

コキリ…。

「大丈夫です、体はちゃんと動きます。それじゃあ、俺は行きますね」

「えぇ、気をつけてね」

一通り体を動かした後、広暁は搬入口へと飛んで行く。

その後ろ姿を見ていたシャマルはボソリと呟いた。

「日本人の美徳…かしら？」

第２８話「ホテル・アグスタ　散」（後書き）

第２８話、いかがだったでしょうか？

篠雹霰（じょうはくせん）・弐式（にしき）の説明は本文中でほとんど言ってしまったので、説明は省かせていただきます。

そして…前書きで書いた訂正のことですが。

地球編４で書いた天創塵（てんそうじん）の説明、その中でこの技の能力を詳しく数値化したものを消去します。

何故なら、詳しく決め過ぎると後々自由が利かなくなるからです。

私の勝手で申し訳ありませんが、ご容赦下さい。

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしています。

第２９話「ホテル・アグスタ　現」（前書き）

第２９話です。

俗に言う仕事疲れという奴が溜まり、更新が遅れてしまったことを謝罪させていただきます。
もっとこまめに更新出来たらいいのですが…難しいです。

では……。第２９話、始まります。

第２９話「ホテル・アグスタ　現」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

「おいおいティアナ…」

搬入口に向かう途中で急にシャマルから念話が入ったから見てみれば…何をやってるんだ、あいつは？

カードリッジ４発のクロスファイアーシュート、しかも２０発以上同時誘導制御なんて…。

今のティアナには無理だろ、俺にも分かるぞ。

俺はさっき篠雹霰を１２８本放ったけど、あれは誘導制御じゃなくてロックオン。

８本で１本だから実際は１６本みたいなもんだし、実はそんなに難しいものじゃない。

案の定操作を誤った弾は一発がスバルの方へと飛んで行った。

何とかヴィータ副隊長が間に合って打ち返したからよかったけど…２人共、最後衛まで下げられた。

「そういや…あんまりティアナと話したことないな」

今まで見てきた感じでは、真面目でちょっと皮肉屋で、ひたむきに上を目指す人って感じだった。

自主連も俺以上にやってるし、自分を客観的に見れない人間じゃないと思ってたんだが。

「…ティアナに似た後輩がいたな…」

高校時代、俺の1つ下の後輩にティアナに似た奴がいたことを思い出した。
ただひたすらにソフトテニスが上手くなるために、部活内で誰よりも練習をしていた後輩が。
技術面だけで言ったら俺よりも上だったけど如何せん…今は関係無いか。

あれ?俺って中学・高校とソフトテニス部で、大学はソフトテニスサークルに所属してたんだよな…?
デバイスは弓型だし、ここ2ヵ月ラケット握ってないし…いかん、無性に打ちたくなってきた。

「一回ティアナと話した方がいいかな。あ、でも…その前になのは隊長に聞いてみるか」

仕事のことを口に出して無理矢理軌道修正する。
さっきの思考は今は全然関係ないし、今考えても無意味だ。

ティアナに話を聞きたいけど、念のためなのは隊長に先に聞いてみるか。
どうにも…機動六課は訳ありの人が多いからな。
丁度、俺もなのは隊長に聞きたいことがあるし。
何か起こってからじゃ遅い、『転ばぬ先の杖』だ。

「さてと…この思考はここまで」

搬入口の前に着いた俺は、飛行魔法を解いて地面に足をつける。そ

して俺が見たのは…

「当たりですかい…」

搬入口の両脇に立っていた2人の警備員が倒れていた。
見た感じ血は出てないし、前向きに綺麗に倒れている。
後ろから首筋を手刀で一撃…っていうのが妥当なところだろう。

（……冷静だな、俺……）

人一倍冷静な性格と自負しているが、目の前で気絶している人間を見るのはこれが初めてだ。
普通に地球で暮らしてたら気絶してる人間を見る機会なんてまずないし。
そんな俺が…どうして？

「…考えても仕方ない、か」

今は任務中、ましてやその任務を妨害する奴が表れた可能性がある。
やるべきことをやる…それだけだ。

「クラールヴィントに連絡」

『はい』

直接シャマルに念話で聞いてもいいが、さっき聞いた限りでは今は立て込んでいる。
クラールヴィントに連絡して、俺がこの2人を治療してる間に返事を待つといのが適切な判断だろう。

「先ずは…意識を回復させなきゃな」

普段使うフィジカルヒールは、あくまで治癒魔法。
傷を直したり疲労を取り除くならともかく、意識を失ってる相手に使ってもほとんど効果が無い。
だから今使うべきは…

「マインドリターン」

ブワァァァン……。

生物の意識を戻すための魔法『マインドリターン』。
人間相手に使うのは初めてだが、思ったより順調だ。
そのまま数秒すると、1人目が眼を覚ました。

「ウッ…！あなたは…墨谷さん？」

「はい。時空管理局本局古代遺物管理部機動六課所属、民間協力者の墨谷広暁です。
体の方はどうですか？」

「ちょっと首筋が痛いですが…大丈夫です」

「そうですか、良かったです。
そちらの方の意識も戻しますから、その間に記憶を整理しておいてもらえますか？
色々と聞きたいことがあるので」

「えっ？…あぁ、そういうことですか」

相手が理解したのを確認した後、２人目にもマインドリターンをかける。
こっちの人の方が体を鍛えているのか、早く目を覚ました。
１人目と同じ説明をした後、早速話を聞きにかかる。

「では…何が起こったか、説明をお願いします」

「はい。我々は先程…つい１０分前までここに立って警備をしていました。
すると突然、紫色の光がここに向かって飛んできたのです」

紫色の光？魔導師が飛んでる時の比喩表現のあれか？

「いえ、それは…人ではありませんでした。
何て言ったらいいのか…まるで昆虫の姿をした人間、いえ、人間の姿をした昆虫のようでした」

昆虫人間？人間昆虫？
一番妥当なのは…召喚士が何かそういった類の召喚獣をこっちに飛ばしたってところか。

「我々が連絡を取ろうと通信デバイスに手を伸ばした瞬間、首筋に衝撃がはしりました。
その後は…墨谷さんに会うまで意識は有りませんでした」

「そうですか…地下には見回りの方が何人かいましたよね？」

「はい…ですが……」

この人達がこの調子だと、その昆虫人間だが人間昆虫に警備員は倒された可能性が高い。
さて…どうするか……。

（広暁君）

（シャマル先生？）

グッドタイミングというべきか、シャマル先生から念話が来た。丁度いい、支持を仰ぎますか。

（クラールヴィントから話は聞いたわ。詳しいことを教えて）

（はい）

……

……

（なるほど…分かったわ、広暁君はそのまま地下のオークション品の確認に行ってちょうだい。
こっちはちょっとトラブルがあったけど、順調にガジェットは撃破出来てる。
後は広暁君の方を確認したら、全体の状況を把握出来るわ）

（他の部署に連絡をした方がいいですかね？）

（そうね。だけど、応援が来るには時間がかかるわよ？1人でその虫と闘えるの？）

（逃げるって選択肢は無くなりましたしね…やばくても時間は稼ぐようにします）

（無茶はしちゃ駄目よ？）

（了解）

管理局の地上は色々としがらみがあるってのは本当なんだな…。
えっ？トラブル？今は突っ込む時じゃない。理性ある人間ならちゃんと空気を読まなきゃ。

「局の魔導師の方に連絡をして、そちらの方の指示に従って下さい。私は下に行って様子を見てきます」

「はい…気をつけて下さいね？相手は得体の知れない化け物かもしれませんから」

「了解です」

ザッ。　シュイィィン…。

立ち上がり、サジタリウスを左手に持って俺は再び飛ぶ。
しっかし、昆虫人間だか人間昆虫…ねぇ？どんなＵＭＡだろ？
あれか、剣と盾を持ってて無死虫団に所属してるのか？
それとも、「お前は一体何だ？」って言って最後に爆死するのか？

『マスター、１人でボケても意味無いです』

「……」

…マジでこいつ、俺の思考を読んでるんじゃねえか…？

そのまま俺は飛び続ける。
搬入口から地下へと続く通路は緩やかな下り坂になっており、今のところ不審な点は無い。

「誰も倒れてないな、警備員は全員地下か？」

『そのようですね。通路を見回らないとは考えにくいですし、見回り箇所の交代か所用で場所を空けたと考えるのが自然でしょう』

「この下り坂に非常口以外の出入り口が無いとはいえ…杜撰だな」

転ばぬ先の杖って諺を知らないのかね？
あ、ここミッドチルダだったな、そんな諺無くても不思議じゃないか。

「到着…っと」

下り坂が終わり、検問所っぽい施設が見えてきた。
日本の駐車場と似た感じで、身分証を示すか駐車料金を払わないとあのバーが上がらないのだろう。
ここが高級ホテルってことを考えると、前者の可能性が高いか。

「探索魔法」

『はい』

サジタリウスに探索魔法を任せ、俺はバーの横、人が1人立って入れるぐらいの建物の中を見る。

「…やっぱり」

案の定そこにいたのは気絶した警備員。
制服はさっきの2人と同じで、同じ会社の警備員と見て間違い無い。
見た感じ外傷も無いし、彼には悪いがしばらくこのままでいてもらおう。
今はＵＭＡの確認が先だ。

『マスター、ここから半径８０m以内で倒れている人間が3名。
それと…人間ではない何かの反応が１つ。
体の形状から判断して、人間であるとは考えられません』

「何かそいつについて分かるか？」

『今使っている探索魔法ですと、これ以上詳しくは難しいです。

精々、体温が人間より多少低いといったことぐらいしか分かりません』

変化が大きいとはいえ、昆虫である蜂の体温はほぼ人間と同じと言われている。
それと同じことを考えると…マジで昆虫人間だか人間昆虫？

「距離は？」

『真っ直ぐ５０ｍ、左に１０ｍ。トラックに積まれているロストロギアを漁っていると思われます』

もっと詳しく調べたいけど、逃げられたら元も子もない。
多少リスクはあるが、このまま突っ込むか。

確かこうゆう場合…先ずは相手に自分の身分を証明して警告。
指示に従わないなら攻撃は許可されるんだったな。
となると…どうやって気付かれずに近付くか…。

「…っと、その前に。シャマル先生に報告しないと」

途中経過ぐらいは報告した方がいいよね、うん。

『その件ですが、マスター』

「ん？」

『シャマル先生から連絡で、「そっちのことはあなたに全て任せるわ。責任は私が取るから」だそうです』

「……」

あれだな、シャマル先生は現場指揮で忙しいんだな。
ここは額面通り受け取るとしよう（断じて責任逃れとか考えてない）。
え～と…どうやって対象に近付くかってところまで考えたんだったな。

「消音魔法はまだ覚えてないし…」

『ソニック・ムーブで一気に跳んでは？
魔力で両足を強化した状態でソニック・ムーブを使えば、一瞬で移動出来るかと』

「OK、それで行こう」

スゥ――――…ハァ。　スゥ――――…ハァ。　スゥ――――ハァ。

深呼吸をして、動悸と感情を落ち着かせる。
犯罪者相手に1人で当たるのはこれが初めてだけど…どうにかするしかないよな。
シャマル先生も、俺なら大丈夫だと考えて俺を行かせてくれたんだ。
……そう考えるとプレッシャー大きいな。

『大丈夫ですか？』

「正直言うと…ちょっと怖い」

『自分を客観的に見られるなら大丈夫です』

「ありがと…3つ数えたら行くぞ」

『ｙｅｓ』

「3…」

冷静に…。

「2…」

落ち着いて…。

「1…」

勇気を出して…。

「0！」

一気に……跳ぶ！！

『ソニック・ムーブ』

魔力の自己ブーストによる脚力強化と移動速度を速める魔法『ソニック・ムーブ』の併用で…５０ｍある距離を一気に詰める！！

キュイィィン…！！

目標到達地点に着くのと同時に矢を生成、サジタリウスの弦にかけていつでも放てる状態に。
ついでに身分証明書を出現させ、頭の中で反復した言葉を口に出す。

「時空管理局です。窃盗罪、並びに公務執行妨害であなたを逮捕します……！？」

ある程度は覚悟してたけど…マジでこいつ人間じゃなかったな。いや、疑ってたわけじゃないけど。

「……」

そこにいたのは…正しく人間昆虫、いや、人間の姿を模倣した昆虫だ。
全身を覆う黒い甲殻、所々に見られる鋭く攻撃的なデザイン。
眼が４つあり、首には紫色の長いマフラーをしている…何で？
…いや、今はそんなことはどうでもいい。
返事が無いとなると…もしかして言葉を話せないのか？
念のため、もう１度言ってみるか。

「もう１度だけ言います。私は時空管理局の魔導師です。
窃盗罪、並びに公務執行妨害であなたを逮捕…！？」

シュン！！

ザッ！！

「っ！？何でこうなるかなぁ…！！」

突然ＵＭＡが俺に向かって突撃、右手に鋭い鉤爪ものを出現させて俺に向かって突き刺してきた。
避け切れたのはいいとして…こいつ今、俺の心臓を狙ったぞ！？
バリアジャケットがあるとはいえ、あんな一撃を喰らったら意識が飛ぶかもしれない。
一撃が命取りの可能性か…バリア魔法があるとはいえ、防御は回避に専念した方が良さそうだ。

「投降の意思は無し…いくぞ」

『了解』

キュィィン…。　シュン！

先ずは様子見、矢を１本真正面からＵＭＡに向かって放つ。
しかしそれなりに距離が離れていたこともあり、ＵＭＡはそれを軽く右に移動することで避けた。
だけど残念、俺の矢は…

ドガァァァン！！

「っ！？」

任意のタイミングで爆発させることが出来る。
最初から爆発させるタイミングを決めておくか、俺がそう念じることで爆発する。
今の場合は、矢が避けられた時に爆発するように念じておいた。
誘導矢と同じで、普通に矢を放つより若干魔力を使うが、要は使いどころだ。

キュイィィン…！！

瞬時に矢を2本生成し、構え…同時に放つ！！

シュンシュン！！

ドガンドガァァァン！！

さっき放った矢と同じく、爆煙の中、奴がいるであろう場所で爆発する2本の矢。

あまり序盤から手札を晒すのは好きじゃないが、向こうは昆虫。

知能は人間程では無いだろうし、こちらの主な攻撃手段がばれたとしても大した問題じゃない。

っていうか、サジタリウスがこんな形してる時点でもうバレバレだ。

ザン！！

後ろに一飛びし、煙が晴れるのを待つ。

それと同時に周囲に矢を数本展開し、いつでも発射可能な状態に。

ここまで離れれば、さっきのような不意打ちでも反応するまでの時間が増える。

その分思考に回せるので闘いを有利に進められる。

「さて…どうなったかな？」

まずは戦力分析の意味で仕掛けたが……。

「……」

「あら～……」

ＵＭＡは平然と立っていた。
体中が汚れていて所々傷もあるし、マフラーも若干ボロボロになってる。
俺の攻撃は効いてるんだろうが…平然と立ってるあたり俺なんかよりは痛みに強いようだ。
さすが昆虫、人間とは違うな。

『マスター、どうされます？』

「持久戦なら勝機は十分にありそうだけど…」

見た感じこいつに遠距離攻撃手段は無いし、さっきの不意打ちを見る限りではスピードはエリオ以上フェイト隊長以下といったところ。とっさの不意打ちならこいつのスピードも全開に近いはずだし、十分反応可能なスピードだ。
別に最高速度で張り合う必要はない、要は反応出来ればいい。
反射神経と瞬発力には十分に自信がある。

天創塵を使ったら下手したらホテルが倒壊するかもしれないし、篠雹霰を使う時間はくれないだろうし…地道に魔法矢で体力を削って弱めの天創塵で仕留めるか。
簡単に捕らえられる程俺は強くないし、向こうも弱くないだろう。
時間をかけてじっくりと体力を削る。
……こうゆう時に接近戦が出来ない自分が嫌だな。

「誘導矢を主体で攻める。ある程度弱ったらバインドで捉えて天創塵だ」

『バインドの方は任せて下さい。特別強固な術式を構築します』

「あぁ…いくぞ」

魔法矢を配置し直し……

ザン！！

……続きだ！！

第２９話「ホテル・アグスタ　現」（後書き）

第２９話、いかだだったでしょうか？

マインド・リターンはオリジナルの魔法ですが、広暁が考えたわけではありません。

原作には出てこない魔法、という風に認識して下さい。

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第３０話「ホテル・アグスタ　察」（前書き）

第３０話です。
いや～……どうしても投稿に間が空いてしまいます。
しかも私の小説は細かな描写が多いので、どうしてもアニメ１話分が長くなってしまう…。
ホテル・アグスタ編だけでもう４話目ですよ…。

とはいえ、私の作風を無理矢理変えるのは難しい上に不本意なので、この形式のままで進めていきたいと思います。
そんな私が執筆している小説ですが、これからも読んでいただけたら幸いです。

では…第３０話、始まります。

第３０話「ホテル・アグスタ　察」

ウィ――――――――――ン……ガシャン！！！！

ズガガガガガ！！

ギン！！　ガン！！　ゴン！！

「…広暁君に聞いた方がいいわね」

それは突然だった。
前線でガジェットを破壊していたシグナムとザフィーラ。
２人から念話が入ったのでその内容を聞くと、また未確認のガジェットが現れたというのだ。

シグナムとザフィーラが闘っていたのは３機の機械。
最も背が高く、遠距離から狙撃してくる黄土色の機体。
右腕についた刀を振るい、シグナムと斬り合っている緑色の機体。
縦横無尽に移動し、他２機への攻撃を阻害する青色の機体。

最初のうちはまだよかった。
前回リニアレールで出現した３色ガジェットのこともあり、冷静に対応出来ていたからだ。
しかし、シグナムとザフィーラが３機と戦闘している途中で事態が急展開を迎えた。
突如として３機が合体し……ホルスを上回る巨体になってホテル・アグスタへと進攻を始めたのだ。

質量保存の法則を完全に無視しているが、ミッドチルダなのでシャマルは突っ込まない。

「……まずいわね……」

今のところはまだ引きとめられているが、余り長引かせるわけにもいかない。

新人４人はガジェットと奮戦中であり、最前線でガジェットと闘っているのはヴィータだけなのだ。

いくら元が空戦ＡＡＡ＋とはいえ、２．５ランクダウンで数十機のガジェットを破壊するのは骨が折れる。

「任せると言った手前こっちから連絡するのは気が引けるけど…仕方ないわね」

自分の中で考えを纏め、シャマルは広暁へと念話を送信する。しかし…

ザ…ザザ……ザ……。

「これは…ノイズ？」

念話にノイズが入り、広暁へと繋がらない。

念話も魔法の一種であり、狭いところで複数人が同時に念話をするとノイズが入ることがある。

しかし、ここはホテル・アグスタ。

敷地は広く、シャマル程補助魔法に長けた魔導師の念話にノイズが入るとは考えにくい。

「…ん？繋がったわね」

気になるところであるが、今は広暁に現状を伝えるのが優先だ。
シャマルはそう考え、広暁に現状を話す。

（どうしました、シャマル先生？
オークション品を漁っていた人間昆虫と戦闘中なんで、手短にお願いします）

（分かったわ。今、シグナムとザフィーラが初めて見るガジェットと戦闘中なの。
映像を送るから何か知っていることがあったら教えてちょうだい）

（了解……ってこいつ！？）

（知ってるの！？）

分かっていたこととはいえ、やはり本人の口から聞くと驚きも一入（ひとしお）だ。
しかし、ここで広暁の話を途切れさせるわけにはいかないので、無駄な口を挟まないようにする。

（マシンナーズ・フォースって言って、３種類のマシンナーズが合体して出来るモンスターです。
いるのはこいつだけなんですか？）

（ええ。最初は３種類の…モンスター？だけだったんだけど、途中でいきなり合体したの）

（多分それは『督戦官コヴィントン』ってモンスターの能力です。
赤い色のモンスターがいませんでしたか？）

（離れた場所にいたんだけど…合体した後いなくなったわ）

（そうですか…攻撃力ならマシンナーズ・フォースはホルスより上なんです。
遊戯王カードの話ですけど、現実に現れている以上可能性は高いです。
今の戦況はどうですか？）

人間昆虫と闘っていると言っていたが、冷静に受け答える当たり広暁には余裕が感じられる。
シャマルもそれに気付いているが、全て任せると言った以上そこは突っ込まない。

（森の中、開けた大地でシグナムとザフィーラが引き止めているわ。
だけど、これ以上長くはもちそうにない。
他のガジェットの撃破もしなきゃいけないし…）

（…シャマル先生、俺の案を聞いてもらえますか？）

それから数分後……

ゴオオオ

森の一角に黒炎のドームが形成された。

「大丈夫か？ホルスに任せて」

「今はホルスに任せる他ない。何より、現状であいつの相手に最も適しているのはホルスなのだからな」

「制限時間付き…だがな。私達が戻るまで頼んだぞ……ホルス！！」

『バーニング・インフェルノ』

立ち上るは漆黒の炎。
地獄の業火と比喩しても納得のそれは、瞬く間に2匹の周囲を包み込む。

「「……」」

対峙するは2つの巨体。
鋼鉄の機械兵『マシンナーズ・フォース』と天空と太陽の竜『ホルスの黒炎竜　ＬＶ８』。
炎の結界、バーニング・インフェルノを物ともしない機械兵は、ただ冷静に銃を構える。

…ガチャン！！

動作は一瞬、反応は刹那。
マシンナーズ・フォースが銃を構えたと思ったその瞬間、ホルスは既にその場にはいなかった。
１０ｍ以上はあろうかというその巨体を一瞬にして横に移動、銃の軌道上から離れたのだ。

『フレイム・スピア』

１本５ｍはあろうかという炎の槍を生成、その数４本。
それらがマシンナーズ・フォースに向かって放たれる。

ドガガガガガガガガガガ！！

「！？」

放たれた極太の矢をマシンナーズ・フォースは全て銃弾で撃ち落とす。
しかしその銃弾は、鉛玉ではなく魔力弾。
広暁が放つ矢より速度も遅い。
ホルスもそれに気付いたのか、攻撃を直接的なものに変える。

『フレイム・ソード』

両手で持つは炎の大剣。
ホルスの身の丈に合ったその剣を両手で握りしめ、相手の体目がけて……振り下ろす！！

ギィィィン！！

まるで金属同士がぶつかったかのような音を立てる炎の大剣と武骨な銃。
ホルスが作り出す炎の大剣、それは鉄さえも容易に溶かし切り裂く灼熱の剣。
それをマシンナーズ・フォースは易々と受け止めた。

ギギギギギ……！！

ガン！！

ドガガガガガ！！

これ以上押し合っても無駄と判断したのか、ホルスは距離を取る。
その過程でフレイム・ソードをフレイム・アローに変えて放つが、

全て撃ち落とされてしまった。

ドガガガガガガガガガガ！！

続け様に撃たれた銃弾をギリギリで避けるホルス。
いくら銃弾が速いとはいえ、その速度は広暁が放つ矢程の速さはない。
ホルスはその矢を相手に普段から訓練しているのでこんなにギリギリで避けることはないはず。
ならば一体何故…？

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

その答えは2匹を覆う炎の結界、バーニング・インフェルノにある。
実はこの結界、そんなに堅固なものではない。
いくらホルスが作り出した炎の結界とはいえ、所詮は炎。
体長１０ｍを超える2匹が暴れ回るだけの結界をフレイム・スピア並の強度で作ることは難しい。
ましてやこれは、魔導師が作るような結界ではない。
ただ炎を固めただけの力任せによって作り出された、いわば炎のドーム。
マシンナーズ・フォースが一点に集中して攻撃すればそう時間がかからずに穴が開いてしまうだろう。
ならば何故、マシンナーズ・フォースは結界を破ろうとしないのか？
何故なら…

ドガガガガガ！！

シュウゥゥン…！！

ゴオォォォォォ！！

例え穴が開いたとしても、一瞬にして修復されてしまうのだ。
固く作れないのなら作らなければいい、故に修復能力を高めた炎の結界。

そして、これこそがホルスの動きに繊細さが欠けている理由。
ただ結界を張るだけなら容易。
結界の中に対象を閉じ込めるにしても、自分が外からそれを制御するのなら難しいことではない。
しかし今のホルスは、その結界の中で戦闘を行っている。
結界を維持しながら時には肉弾戦を、時には間接攻撃を行っているのだ。
この状況が、ホルスの動きから繊細さを欠いている。
ましてや、ここは『炎』の結界の中。
時間が経つごとに結界内の酸素は消費されていく。
機械であるマシンナーズ・フォースはともかく、呼吸をせねばならないホルスには酷過ぎる環境。
それに加え、炎を生成することは出来ても、炎が燃焼し続けるには酸素が必要。
段々と技の威力も落ちてくる。
フレイム・ソードがどこか不安定に見えたのもそれが原因だろう。

だからといって、バーニング・インフェルノを解除するわけにはいかない。

この結界を解いてしまったら、マシンナーズ・フォースがホテル・アグスタへと進攻してしまう。

それを防ぐ為に、今はホルスが足止めをする。
主人である広暁がＵＭＡを倒し、機動六課のメンバーが他のガジェットを全て破壊するその時まで。

ホルスが考えた限りでは、それが終るまでに大して時間はかからないはず。
故にホルスは結界内でマシンナーズ・フォースと戦う。
その時が来た時、より確実にマシンナーズ・フォースを倒すために。
出来る限り戦って疲労させておく。

『やるべき事をやれ。難しかったら別の方法でそれを成し遂げろ。
目的は１つでも、過程は１つじゃない』

シャマルから聞いた広暁の伝言を頭の中で反復し、ホルスは今後の行動を考える。
今ホルスがやるべきはマシンナーズ・フォースの足止め、それ以外の何物でもない。
ならば、どうやって足止めするか。その答えがこの技、バーニング・インフェルノだ。
単純に戦闘をしては森林火災を起こしてしまい、かといって肉弾戦だけでは限界がある。
ならば森の中でも開けた大地であるここで、炎の結界、バーニング・インフェルノを使ってマシンナーズ・フォースを閉じ込める。

必要なのは足止めであり、この馬鹿でかい機械兵を倒すことでは無い。
時間をかけてこいつを引き止め、尚且つ自分の疲労は最低限で済ませられるようにする。
それが今ホルスのやるべき事であり、現状だ。

可能なら倒してもいいだろうが、それはあくまで可能ならの話。
現段階では、ホルスは足止めを主軸に戦闘をすると決めた。

この結界の中では、ホルスの飛行能力も翼も役に立たない。
相手は銃を持っており、防御力と手数では向こうの方が上。
互角であるのは攻撃力、勝っているのはスピード。
戦闘する上での手札を確認し、与えられた任務をこなすためにホルスは考察する。

ガチャン…！！

牽制しながらも考えを纏めていると、マシンナーズ・フォースが体を反転して走り出した。
ホルスもその意図するところを理解し、その背中に十八番の技であるブラック・メガフレイム…高熱の黒炎を口から吐き出すことで行動を阻害しようとする。

しかし、相手もさるもの。
まるで最初からホルスの行動が分かっていたかのように体を移動させ、灼熱の炎を避ける。

ここでホルスは、奴には何か策があるのではないか?と考えた。
背を向けて走り出し、背中に来るであろう攻撃を最初から分かっていたかのように避けてみせる。
間接攻撃を防がれて冷静さを失った自分が直接攻撃…例えば先程使ったフレイム・ソードのような直接攻撃を仕掛けさせるために。

確証は得られないが、その可能性が高い。
そう考えたホルスは、走るマシンナーズ・フォースに向けて大量のフレイム・アローを発射する。

「……!?」

ホルスの行動が想定外だったのか、マシンナーズ・フォースは足を止め、銃から魔力弾を連射することでフレイム・アローを相殺する。
しかし、放たれた量が先程より多く、且つ範囲が広かったために数本の矢を被弾してしまった。
フレイム・スピア程ではないが、ガジェット?型のＡＭＦを容易く貫通するフレイム・アローだ。
被弾した箇所は多少削れており、黒い焦げ跡も見てとれる。

「グオォ…」

どうやらマシンナーズ・フォースは、策を張ることは出来る。
しかしそれも単純なもので、自分が簡単に見破れる程度のものだ。

ここで新たに「頭脳」という言葉が勝っている手札に加えられる。
恐らく機械兵であるが故に、柔軟な発想・思慮深い考察というものが出来ないのだろう。
主人が主人なので、何だかんだでホルスは考察が得意になってしまったのだ。

少し頑固なところも似ているのは内緒だ。

無論、自分がこのように考察するのを見越した上でわざとあのような行動を取った可能性もある。

可能性が低いとはいえ、そのことも考慮に入れながら足止めをしなければならないだろう。

そのように考えながら、ホルスは再びマシンナーズ・フォースに向き合うのであった。

第３０話「ホテル・アグスタ　察」（後書き）

第３０話、いかがだったでしょうか？
今回ホルスが使った技の中で『バーニング・インフェルノ』というものがありましたね。
実はこの技、昔やっていたアニメで出てきた技です（間に『・』は入っていませんでしたが）。
分かる人はいるのでしょうか？

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第３１話「ホテル・アグスタ　倒」（前書き）

第３１話です。
戦闘シーンの描写が難しかった…おっと、ここで愚痴ってはいけませんね。

では…。第３１話、始まるよ～♪

第３１話「ホテル・アグスタ　倒」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

ザン！！　シュン！！

キュィィン…！！　ピュウウゥゥゥン……！！

ドガアアアアアアアアアン！！

「……っ！？」

ザンザンザン！！

「ハァ…ハァ……ハァ……疲れた～」

『向こうも大分弱ってきています。もう一息です』

「おうよ……ふぅ」

シャマル先生の念話から数分、俺はまだＵＭＡと闘っている。
とっととこいつを倒すか捉えてホルスの援護に行かなきゃいけない。
いくらホルスが強くても、あいつの巨大化制限時間は１時間。
何より、モンスターとしては最高クラスの攻撃力をもつマシンナーズ・フォースが相手だ。
炎を使って戦闘しながらだともっと短くなるかもしれないし、急ぐにこしたことはない。

「探索魔法は？」

『駄目です。魔法を阻害する何か…ＡＭＦの様なものに阻害されているようです』

実はさっきから対象を分析に長けた探索魔法を発動してるんだけど、全然上手くいかない。
俺は戦闘に集中し、サジタリウスはＵＭＡの分析をする。
そういう考えだったんだけど、何故か探索魔法が発動出来ない。
いや、発動は出来るんだけど…全くといっていい程探索範囲が広がらない。

「シャマル先生に聞きたくても念話が繋がらないしなぁ…」

ついでに言うと念話も繋がらない。
念話は話したい相手を頭に浮かべ、それを念じることで発動出来る。
しかし、何故かノイズが入ってシャマル先生に繋がらない。
他のメンバーにも試してみたが、誰とも繋がらなかった。
もしかして…俺が外部とコンタクトを取れないようにしてる？

「探索魔法が使えないのは、情報が漏れるのを防ぐため。
発動者は…多分あいつを召喚した魔導師。だとしたら…」

『ＡＭＦの様なものを発動する生物を召喚してこの地下に飛ばした、といったところでしょうか』

「最初から使わなかったのは、俺の存在が想定外だったから。
あいつを通して俺のことを知って、そういう能力持ちの生物を飛ばしたってところだろうな」

『と言っても、その生物を探す暇は無いですね』

「だな。最悪ロストロギアが無事ならそれで良いし、あいつを倒した方が早い」

俺達がこの会話をしてるのは駐車場にある柱の陰。
戦闘のせいで少し酷いことになってるけど、人1人隠れるだけのスペースなら十分にある。
UMAはさっきの攻撃で距離を開けてきたし、俺も疲れたから今は動かない方が無難。
疲れをとるのが、俺が今やるべきこと。
こんなヘロヘロの体で動いても、一撃くらってポポポポ～ンって吹っ飛ばされるのがオチだ。

「一撃ももらってないとはいえ、さすがに疲れたな…『フィジカルヒール』」

ポワアァァン……。

あぁ～……気持ちいい。

『マスターの瞬発力は凄いですからね。後は持久力さえあれば…』

「贅沢言うな。これでも同年代では上の下ぐらいの持久力はあったんだぞ」

陸上部や水泳部の「俺には肺が4つある!!」みたいな奴らと比べられても困る（確かテニス部のブラジル人とのハーフの奴もそんなこと言ってたような…）。
……戦闘中だってのに何考えてんだ、俺は。でもまぁ…不思議だな、ホント。

民間協力者として2ヶ月も経っていないのに、こんな荒事に巻き込まれるってことが。
『事実は小説よりも奇なり』か、よく言ったもんだ……いかん！危ない危ない危ない……。
あやうく現実逃避するところだった。

「あと何本か打ったらバインドをかけるぞ」

『了解です。術式構築中はフォロー出来ませんので』

「ＯＫ。全部避け切る」

他の部署の援軍は正直言って期待してない。
地上の面倒臭さははやて部隊長から聞いてるし。
分からないって言ったら嘘になるし、分かる以上考えても仕方ない。
素早く思考を切り替えられる人間程仕事が出来る、これ、社会人の常識。

キュイイィィィィィィン……！！

さて…ラストスパートといくか……！！

～森の中～

「ガリューが手こずっている…だと？」

「うん…」

森の中、バーニング・インフェルノを見ながら2人の魔導師は話していた。

ドクターと呼ぶ科学者から奪取を依頼されたロストロギア、それを

探しに行かせた彼女の召喚獣『ガリュー』から連絡が入ったのだ…
「戦況が思わしくない」と。

「相手は…あの民間協力者か。竜を従え、異世界から来たという…」

「彼は…強い。精神とか肉体とか…そういうのじゃない」

「信念…か？」

「……（コクリ）」

壮年の男が言った言葉に対し、少女は無言で頷くことで答える。
その顔には、幼いながらも哀愁が漂っており、少女は年齢不相応の雰囲気を醸し出す。
そんな彼女の心情を分かっていても、壮年の男は何も言わず、ただ少女を見つめる。

「ガリューが危ない目にあうのは…嫌。危なくなったら戻って来るように伝える」

「いいのか？」

「いい。ドクターの頼みも大事だけど、ガリューの方がもっと大事」

そう言った少女は、右手の手袋型デバイス、その紫色の結晶部分にそっと念を込める。
すると結晶部分が光り始め、そのまま数秒経つと光は終息した。

「あっちは…どうする？」

「あればっかりは俺には無理だ」

「私も…虫を召喚するには魔力が足りない…」

「ならば…もう少し離れるか。今はまだ大丈夫だが、巻き添えをくらうかもしれん」

「うん…」

ガリューのことを話し終えた2人はホルスとマシンナーズ・フォースの戦闘を話し始めた。
しかし、それに介入するには無理だと判断したのか更にバーニング・インフェルノから離れるようだ。

「異世界の竜…か」

ドガァァァン！！

「っ！？」

バアァン！！

ザンザンザン！！

「そろそろだな…」

広暁が放った魔法矢をまともにくらったＵＭＡは大きく吹き飛び、駐車場の壁に叩きつけられた。

地面に落ちるその様を眺めながら、広暁は距離を取って魔法陣を展開する。

近くで放つと天創塵の余波が飛んでくるかもしれないし、まだＵＭＡが余力を残していて奇襲を仕掛けてくる可能性があるからだ。

「バインドは？」

『９５％…９６％……１００％。リングバインド、×４（バイフォー）！！』

バシュンバシュンバシュンバシュン！！

「っ！？」

（……鬼畜だ……）

サジタリウスがＵＭＡに発動したのはリングバインド。

バインドの初歩中の初歩、対象をリング状に構成された魔力の捕縛

輪で拘束する魔法。
そんな簡単な魔法でも、構築密度を上げてその数を増やせばたちまち上位の捕縛魔法に変わる。
発動に時間がかかるのが難点だが、上位の捕縛魔法を発動するより簡単で魔力消費が少ないのが利点だ。

「天創塵チャージ率…９１％…９２％…」

もう少しでチャージが終わると言ったところで、広暁は再度ＵＭＡの方を見やる。
体は傷だらけで、首に巻いていた長い紫色のマフラーはほとんど首回りを残すのみ。
地面に倒れ伏したまま動かないので、ここで攻撃を止めるというのも１つの手段だろう。

（念には念をだ、用心に越したことはない。石橋を叩き過ぎて壊しても、別の橋を探せばいい。
なんか……２ヵ月前の俺じゃあ考えられんな、こんなこと。
『朱に交われば赤くなる』……人に拳銃を向けて撃つのもこんな感じなのか……？
…いや…今更にも程があるか。もう何本こいつに向けて放ったんだよ……）

心の中で攻撃に対する葛藤もあったようだが、それの意味するところを汲み取って理解した上で広暁は天創塵を放つ覚悟を決める。
覚悟無き攻撃に意志は宿らない、まるでそう考えているような目をしながら。

「非殺傷設定…か……」

『天創塵』

ピィィン…！

シュイイイィィィィィィィィン……！！

ドガアアア

～熾烈～

ホルスとマシンナーズ・フォースの戦いは熾烈を極めていた。
圧倒的な防御力と銃による手数でごり押しするマシンナーズ・フォースを、豊富な技と主人譲りの洞察力で的確に捌き、迎撃するホルス。
マシンナーズ・フォースの攻撃をホルスが捌き、迎撃するというパターンが続いていたが、ここで闘いに変化が現れる。

「っ！？」

攻撃のため銃口をホルスに向けたマシンナーズ・フォースだが、その先にホルスはいなかった。
すぐに周囲を確認するが、ホルスはどこにもいない。
一体どこにいったのだ？マシンナーズ・フォースは更に捜索範囲を広げるが…その必要はなかった。

シュン！！

ブオォォォ……グシャアァァン！！

ズザザザザザザザザザザザザザザ！！

攻撃をまともにくらい、マシンナーズ・フォースは吹き飛んだ。
視線を戻したその先には、炎の大剣『フレイム・ソード』を握りしめるホルスの姿が。

プスプス…バチ…バチ…。

右脇腹部分にフレイム・ソードをくらったようで、その箇所はえぐ

れており、火花が散っている。
しかし、今のマシンナーズ・フォースの脳の中を交錯する思考にその様なことは1ミリもない。

「……（スチャッ）」

そう、今この機械兵の脳の中を交錯しているのは、どのようにしてホルスがこの身に攻撃を当てたか？
視界には捉えられず、正しく攻撃をくらってから気付いたといった感じだった。
インプットされたデータを探しても、ホルスが高速移動や瞬間移動を使えるといったデータはない。
データとしてあるのは、ホルスが炎を自在に生みだし、操る。
そして、戦闘時にこそ巨大化するが、普段は小さい姿でいること…
……小さい姿？

ウィ――ン……！？

気付いた時にはもう遅い。ホルスは再びシンナーズ・フォースの視界から消えていた。
足元に気配を感じて視線を移動させれば…そこには小さい姿のホルスが。

「……（ニヤリ）」

『無明逆流れ』

スパアアァァァン…！！

一瞬にして巨大化、炎の大剣『フレイム・ソード』を作り出したホ

ルスが、真下からの切り上げの要領でマシンナーズ・フォースの正中線を切り裂いた。
マシンナーズ・フォースも咄嗟にバックステップで避けたものの、まるで刀が伸びたかのようにして体を斬られ、その体には縦一直線の傷が出来た。

プス…プス……プス……。

そう、ホルスは高速移動をしたのでも瞬間移動をしたのでもない。
小さい姿になってマシンナーズ・フォースの視界から外れることで、擬似的に姿を消していたのだ。

移動速度では、ホルスはマシンナーズ・フォースを上回っている。
しかし、ホルスの体長は優に１０ｍを超えているのだ。
幾ら速く移動出来ても、目で追える以上防いだり避けたりするのは難しいことではない。

だが…もしもホルスの体が戦闘時のそれより小さかったら？
例えば…時速１６０ｋｍで走って来る自動車と時速１６０ｋｍで飛んで来る野球ボール、どちらが避けやすいだろうか？
恐怖を感じるのは自動車だろうが、避けやすいのもまた自動車であろう。
自動車は人間より大きく、避けるまでの間目で追うのも容易だ。

しかし…もしもそれが野球ボールだったら？
ましてや、今まで自分と同等の大きさだったのに、速度はそのまま１／１０以下のサイズになったら…？
目で追うことは勿論、攻撃を避けるのはより一層困難になるだろう。

何より、小さくなることで、体が必要とする酸素の量は大幅に少な

くなる。
ホルスにとってこれ程好条件の戦い方はない。

「……グオォ」

ホルスがこのような攻撃的な行動に出た理由、それは説明するまでもないだろう。
足止めより破壊する方が適当、もしくは簡単であると判断したからだ。
その考えは当たっていたようであり、戦闘の序盤で見られた固さは今のホルスにはない。
相手を観察して得られた情報から、勝つための手段・方法をシミュレーション。
それを実行に移し、相手を追い詰めるという手法を取っている。
いかに堅固な肉体と高水準の演算能力を持つ機械兵であるマシンナーズ・フォースといえど、大した策もたてることが出来ず、ましてや柔軟に状況に対応することが出来なくてはただの木偶(でくのぼう)の坊と同じだ。

「……（ボウッ）」

フレイム・ソードを拡散し、ホルスは頭上に炎を集める。
集束される炎、そこにあるのは曲線の芸術。
巨大化状態のホルスの身の丈に合ったその武器の大きさ、直径約８m。
生成されし武器は……チャクラム。
黒炎を極限まで圧縮し、研ぎ澄ました武器は、古代インドで用いられたという投擲武器。

本来は中央に指を入れることで回して投擲するものだが、ホルスは自分の手の長さ分チャクラムの炎刃を潰すことで、投げて使うことを可能とする。

「……！？」

あれはヤバイ。

本能的？にマシンナーズ・フォースはそう感じたのか、ホルスに向けて銃を構える。しかし…

ボオオオォォォォ……！！　シュンシュンシュン！！

「っ！？」

『フレイム・バインド』

気付いた時にはもう手遅れだった。

マシンナーズ・フォースの体には幾重にもわたって炎の拘束輪が出来ていたのだ。

しかもそれを作った炎は…バーニング・インフェルノの炎。

唯の炎の壁だと思っていたものが、いきなり炎の拘束輪を生成したのだ。

そう…マシンナーズ・フォースは知らなかった。この壁の本当の意味を。

バーニング・インフェルノは、使用目的こそ対象を閉じ込める炎のドームだ。

しかし、本来の用途はそれだけではない。

中に閉じ込めた敵を３６０度全方位無死角の炎で攻撃出来ることにこそ意味がある。

綺麗に言えば反撃を許さない。汚く言えば嬲り殺し。そんなことを可能にする大技なのだ。

だがしかし、ホルスはその手法を取らなかった。
より確実に足止め（最初の目的）を遂行するために。
そして、足止めから破壊に目的を変えてもその手法を取らなかった。
マシンナーズ・フォースに植え付けた「バーニング・インフェルノは修復能力が高い唯の炎のドーム」という意識を変えさせないために。

自身が相手を確実に屠れる大技を繰り出せるための準備をし、相手の反撃の芽を摘むために。
ホルスはただこの一瞬、この技のためだけにバーニング・インフェルノの炎を使ったのだ。

グギギギ…！！

いくら力任せにフレイム・バインドを解こうとしても、それが解けることはない。
今回使ったフレイム・バインドにおいて強化されているのは、『強度』ではなく『修復能力』。
今のバーニング・インフェルノの特性そのままのそれは、力任せに解こうとして炎の結合を弱めようとも、すぐに再生・補完される。
それに気付けばまだ解く方法はあるだろうが、マシンナーズ・フォースにそれは無理な話。
所詮は機械、臨機応変な判断力では生き物であるホルスには到底及

ばないのだ。

スッ……。

チャクラムを生成し終えたホルスは、それを右手に持ち背中に背負うように構える。

体全体を使って投げ、遠心力によって速度が増したそれをくらったら……どうなるだろうか？

『旋竜・炎王刃（せんりゅう・えんおうじん）』

第３１話「ホテル・アグスタ　倒」（後書き）

第３１話、いかがだったでしょうか？
車とボールの件ですが…これは私の私見です。
時速１６０ｋｍで向かってくる自動車と野球ボール…。
それなりに離れた場所からなら、自動車の方が避けやすい気がするんですよね。
ずっと目で追えるわけですから。

広暁の葛藤と決意…これは後々大事になってくる…かもしれません。

…っといけない、忘れるところでした。
前回の話でホルスが使った技、『バーニング・インフェルノ』。
これは『クラッシュギア』というアニメで迅キョウスケが使うクラッシュギア『ディノファランクス』の技です。
本来のこの技はスピンによって起きた摩擦熱を纏ったまま相手にぶつかる技ですが、ホルスの技を考えた時に何故かこの名前が頭をよぎったのでそのまま採用しました。
こんな感じで技を考えたりオマージュすることが多々あると思いますので、これからもよろしくお願いします。

では。感想・意見・間違い訂正等、よろしくお願いします。

第３２話「ホテル・アグスタ　収」（前書き）

第３２話です。
もうすぐお盆休みに入るので、そうなったら書き貯めが出来る…と思います。
そうすればもう少し間隔短めに投稿出来るので…頑張れ、私！！

では……。第３２話、始まります。

第３２話「ホテル・アグスタ　収」

～終息～

「……報告は以上です」

『そっか～……まぁ、ロストロギアは奪われへんかったし、それだけで十分や。
そんなに気に病まんでもえぇ、ちょっと休んだら現場検分に合流してや』

「了解…」

報告を終えた広暁は、隣に控えているホルスをチラ見する。
マシンナーズ・フォースとの戦闘で怪我を負ったものの、幸いにも重症と呼べるような傷は無い。
広暁は戦闘による疲労だけなので、少し休憩したらすぐに現場検分に参加出来るだろう。

「ホルス、こっち向いて」

「キュイ♪」

『フィジカルヒール』

ブワアァァァン……。

「キュ…キュイ～♪」

（色っぽい声だな、おい）

回復魔法が気持ち良かったのか、ホルスは何ともいえない色っぽい声？を出す。

竜の色っぽい鳴き声は初めて聞いたが、人間のそれと大して変わらないことに感心し、また１つ雑学が増えたことに僅かな喜びを感じる広暁である。

（フリードも同じような鳴き声出すのかな？）

「フェイト隊長～」

「広暁！？大丈夫だった！？」

現場検分のため、広暁はホテル前、ガジェットの残骸が散らばっている所に移動した。

なのはを呼んでもよかったが、自分はライトニング分隊であることを考え、フェイトを呼んだのだ。

「駐車場で召喚獣と闘ったって聞いたけど…」

「探索魔法は使えず、サジタリウス付属の録音・録画魔法も使えませんでした。
駐車場の監視カメラに映像は残ってましたけど…それだけだと情報が少ないので、はやて部隊長の知り合いのアコース査察官が魔法で俺から直接情報を引き出すらしいです」

「そう…ってそういうことじゃなくて！怪我とかしてない！？」

エリオとキャロの相手をする時の癖だろうか、フェイトはやけに広暁を気にかけている。
本人にしてみたら悪気はないのだろうが、幾ら上司とはいえフェイトの様な金髪巨乳美人に数多の管理局局員の見ている前でこんなに心配されるのは恥ずかしい。
そう思った広暁は、とっとと話題を変えることにした。

「大丈夫です、怪我はしてません。それより、俺は何をすればいいですか？
こういったことは六課ではまだ勉強してないので」

「えっ？う～ん…はやてのところに行くのはいつ？」

「３０分後です」

「だったら大丈夫だね。ユーノと会っておこうか？」

「ユーノというと…無限書庫司書長のユーノ・スクライア司書長ですか？考古学者でもある」

「そう。私やなのは、はやての幼馴染なの。
ユーノと知り合いになっておけば管理局で仕事をする上で色々と便利だよ」

ここ2ヵ月で勉強した知識を引っ張り出して答えたことに、フェイトが上乗せして答える。
その知識では、無限書庫はミッドチルダだけでなく、他の管理世界に関するありとあらゆる情報が載っている書物が無限に存在する施設だ。
そこのトップである人間と知り合っておいてまず損はないだろう。

「了解です。スクライア先生はどちらに？」

「正面玄関の当たりにいると思うよ。緑色のスーツを着た金髪の男の人だからね」

「分かりました」

フェイトからユーノの居場所を聞いた広暁は、正面玄関へと歩を進める。
正直な話フェイトに付いて来てもらって紹介を頼みたかったが、彼女にも立場というものがある。
六課では一尉扱いの執務官である彼女が現場検分に不参加、というわけにはいかないだろう。
そう考えた広暁の頭に、ここで1つの不安が過(よぎ)った。

（…スクライア先生って年幾つなんだ？フェイト隊長の幼馴染だと…下手したら年下？
いや、ＭＡ☆ＳＡ☆ＭＡ～）

この時、フェイトにも1つの不安が頭を過った。

（あっ…ユーノ今、なのはと一緒だったんだ…。なのは……ごめん！！）

～査察官と部隊長～

「消えた機械兵と召喚獣…ね」

「広暁とホルスが上手く相手してくれてたんやけど…な」

ここはホテル・アグスタ上層階にある喫茶店。対峙して話すは1組の男女。

男はアコース・ヴェロッサ。時空管理局本局の査察官。

女は八神はやて。時空管理局本局の特別捜査官にして機動六課部隊長。

「地球出身でありながら地球出身でない次元漂流者。従えるは天空と太陽の竜…」

「広暁自身はそんな気全然ないみたいやけどな。従えるっていうより共に闘う。
どっちかって言うとパートナーみたいに考えてると思うで」

「そうだろうね。映像を見る限りでは真面目な好青年みたいだし」

「ヴェロッサとちごうてな♪」

「おいおい…ひどいな」

仕事の話をしているとはいえ、その雰囲気は穏やかそのものだ。それもそのはず。
ヴェロッサがカリムの義弟ということもあり、この2人、それなりに面識があって仲もいいのだ。

「カリムもはやても詳しいことを教えてくれないけど…時機が来たら教えてくれるんだろう？」

「…せやな。今はまだ、あまり人に言うことも出来ん。
時機…いや、その時が来たら言うことになると思う」

「彼ならもう勘づいていそうだけどね」

「いや、さすがにそれは…う～ん…でも、広暁鋭いからなぁ……」

「おいおい…本当なのかい？冗談のつもりで言ったのに」

「何て言ったらえーのか…観察力というか、洞察力というか…とにかく広暁は鋭いんよ。

私達ですら気付かないことに気付く力を持ってるんや。
今はまだそれを活かしきるだけの知識が無いけど、後数年もしたら凄いことになると思うで」

「ふ～ん…（彼がミッドチルダに永住するのは決定事項なのかな…？）。
それで？彼はいつ頃来るの？」

「さっきフェイトちゃんに聞いた限りでは、今はユーノ君と会ってるはずや。
もう少ししたら来ると思うで」

広暁がはやてとヴェロッサに呼ばれた理由…それはマシンナーズ・フォースとガリューの行方にある。
マシンナーズ・フォースを倒そうと旋竜・炎王刃を投擲したホルス。
ガリューにとどめを刺そうと弱めの天創塵を放った広暁。

ホルスは正に旋竜・炎王刃が当たろうとした瞬間。
広暁は天創塵が当たって爆発が起こり、爆煙が引いてきた時。
そこには攻撃対象の姿は無かった。

いや、無かったと言うと語弊があるか。
マシンナーズ・フォースは召喚士により強制的に遠隔送還され。
ガリューは爆煙が引いていく中、一筋の紫色の光となって逃げて行った。
ホルスは戦闘専門のため遠隔送還を防ぐ術（すべ）をホルスは持っておらず。
広暁は瞬間最大速度（瞬発力）ならともかく、単純な飛行速度ではガリューに負けていたのだ。
つまり……最初から逃げようと思えば簡単に逃げられたのである。

ガリューが飛んで来たことを考慮に入れて考えれば、飛んで逃げることも想定出来る。
その飛行速度が、自分の飛行速度より上である可能性も。
そのことに気が付かなかった自分自身に心底腹を立てた広暁は、六課の人間の前ではまず見せたことが無い様な苦虫を噛み潰す表情をしていたらしい。
サジタリウスがこっそりとはやてに知らせた限りでは、広暁の体内で魔力の奔流が起きて一気に放出され、地面を半径数mにわたって陥没させたとも。
魔導師としては上の下程度の魔力量とはいえ、魔力運用に天賦の才能を持つ広暁だ。
被害がこの程度で済んだのは広暁の理性がまだ感情に負けていなかったからだろう。

サジタリウスやはやてに諭されて落ち着いたものの、まだそのことが思考のスパイラルとなって頭の中を渦巻いているかもしれない。
はやてはそんな広暁を想像し、辛い表情を見せる。

「大丈夫かなぁ…広暁」

「さっきの通信を見る限りでは大丈夫そうだったじゃないか」

「それはそうなんやけど……」

「…本当に広暁君のことが好きなんだね」

「うん……って！何を言うとるんや、ヴェロッサ！？」

はやてが慌てて自分の言ったことを否定すると、そこにはとてもい

い笑顔をしたヴェロッサが。
これは…そう、大好きなおもちゃを見つけた子犬、いや、いじる対象を見つけた遊び人の目だ。

「いや～、まさかシャッハが言っていたことが本当だったとはね。そうかそうか、広暁君は我が麗しの姉と妹に同時に好意を持たれているわけか。
これはこれは……」

「シャッハか!?シャッハがこのことをヴェロッサに言うたんか!?」

ヴェロッサに詰め寄るはやての表情は先程までの落ち着いた表情の微塵の欠片も無い。
それはどう見ても、隠していた秘密を暴露されて大慌てしている1人の女性だ。

「査察官を舐めてもらってはこまるね。
気付く力…それなら僕だって十分に持っているよ。
カリムとシャッハが話してる時の空気と行くか距離感というか…そういうのが変わった気がしてね。
気になってシャッハを問い詰めてみたら案の定…というわけさ。
シャッハは分かりやすいからね♪」

「シャッハ…あんた…頼むで…ホンマに…」

2人共まだ広暁に対してアプローチはほとんどしていないので、ばれたとしてもさしたる問題にはならなかったりするのが実情なのだが。
はやてにしてみたら、自分の純情?を知る人間が増えるのは良い気

分ではないのだろう。

（まぁ…カリムのそれとはやてのそれはちょっと違うみたいだけど…僕が言うことじゃないしね。
僕は…影でこっそり見守ることにしようかな♪）

ピュイン。

『はやて部隊長』

「うわっと!?広暁!?」

『どうされました?』

「いや…何でもないで。何かあったんか?」

急な広暁のモニター連絡にはやては一瞬動揺するが、すぐに姿勢を正して座り直す。
広暁も多少は気になったようだが、さしたる興味も無いのか早々に連絡事項を伝えた。

『スクライア先生との面談が終わったので今からそちらに向かいます。
ホテル最上階の喫茶店でしたよね?』

「そやで。ユーノ君とは何話したん?」

『簡単な自己紹介と魔法のこと…読書魔法や結界魔法など色々と。

それと、無限書庫閲覧の許可をもらいました』

「読書魔法を教わったんか。あれは便利やからな～」

『はい。では、今からそちらに向かいますね』

「了解。待ってるで～」

シュン…。

広暁の後ろにどことなくふくれっ面のなのはがいた様な気がしないでもないが多分気のせいだろう。

はやてはそう自分に言い聞かせ、広暁との会話を終わらせた。

「広暁がいたのは正面玄関やから、あと5分もすれば来ると思うで」

「了解。僕も軽く準備をしようかな」

～葛藤～

（……気持ちわりぃ……）

現場検証を終えた六課の面々は、ヘリに乗って帰路へと着いた。
今は今日の午後・夜の訓練は無しであることを告げられ、隊舎へと続く道を歩いているところだ。

「お兄さん、どうしました？」

「アコース査察官に魔法で直接脳内の記憶を引き出してもらったんだけどな。
俺が思い出せる記憶だけだと限度があるし。
その時の感覚がまだ残ってて…ちょっと気持ち悪い」

「大丈夫ですか？何か薬を…」

「寝りゃ直るらしいから、今日はもう寝るよ。読書魔法試してみたかったけど、また今度だな…」

この後キャロが回復魔法をかけてくれたが、さしたる効果は無かった。
そんなキャロを慰め、フォワード女性陣と別れた広暁は、エリオと2人男子寮を歩く。

「それじゃあ、お兄さん。また明日」

「あぁ。んじゃな」

スッ…。　ピッ…。　ウィーン…。

「ふぅ…」

『お疲れのようですね』

「そりゃあ…な。あんな戦闘したわけだし。お前はどうなんだ？」

『特に私は…いつも通りスリープモードに入れば修復されます』

「便利だな～。ホルス、お前は…」

ス～……ス～……。

「…疲れたみたいだな。部屋に着くなり爆睡とは…」

『あの巨大な機械兵をあと少しで倒すところまでいったそうですからね。
体力だけでなく、精神も相当磨り減らしたのでしょう』

「そうだな…よっと」

広暁はホルスを抱えると、そのままベットの上へ。
掛け布団をかけてやり、いつも通りの体勢にセットする。

「風呂は…もういいや。明日の朝シャワー浴びよっと……」

シュル…。　パサッ…。

「目覚まし頼むな～……」

『了解です。ゆっくりとお休み下さい』

ボスン…。

（ティアナの奴…別れ際に自主練するって言ってたし、今頃1人で練習してるんだろうな…。
ホントなら話を聞きにいって道を示すのが年長者の務めってもんだけど…。
部活やサークルの後輩じゃあるまいし、俺はほとんどティアナの過

去を知らない。
大した知識…ましてや別世界出身の俺が聞きに行ったって、ただ話を引っ掻き回すだけ…。
いや…だからこそ……気付くこともあるんじゃ……だ――――――――――――――っ、もう！！全然考えが纏まらん！！
……考えるのは止めてもう寝よう。こんな頭で考えたっていい考えは浮かばん。
なのはかフェイトあたりに聞いてからの方がいい。また明日、リフレッシュした頭で考えよう……）

眠りに落ちる途中の頭で考えるのは、今日無茶をしてミスをした１人の仲間のこと。
この様に考えてしまうのは、中学・高校と部活動に励み、大学でサークル活動をしていた経歴からか？
それとも……生来の広暁が持つ性格故か？
転ばぬ先の杖…それを実行するために…広暁は意識が遠のきながらも考え続けた。

（最悪の事態…は……避けない……と……）

「あたしとティアはコンビなんだから。一緒に頑張るの！」

「もう誰も！傷つけたくないから！！」

「少し…頭冷やそうか……？」

第３２話「ホテル・アグスタ　収」（後書き）

第３２話、いかがだったでしょうか？
長くなってしまったホテル・アグスタ編もようやく終了し、この後は遂にあの話となります。
どうゆう風に変わるかは…私の好み？腕？次第。
とりあえずは…書くという楽しさを忘れずに話を続けられたらなと思います。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしています。

第３３話「己という存在」（前書き）

第３３話です。
今回の話は、ある意味で私の思想と言いますか…好きな考えを書き込みました。
その思想とは……？

前置きはこれぐらいにして。
第３３話……始まります。

第３３話「己という存在」

～魔王の影～

「少し…頭冷やそうか……？」

ガバッ！！

「ハァ…ハァ……。何だ今のは……！？」

ベッドから勢いよく起き上がった広暁は、まだはっきりとしない頭で辺りを見回す。

時計を見ると、現在の時刻は午前５時丁度。

いつもは目覚ましを午前５時半にセットしているので、３０分も早く目が覚めた計算になる。

「スゥ――――――――――…ハァ。落ち着け…クールになれ…俺は冷静だ…」

深呼吸と自己暗示により、興奮し切った頭を無理矢理クールダウン。

つい先程起きた出来事…夢の内容を冷静に思い出す。

「バインドされたスバルに…遠距離砲撃魔法を撃とうとしたティアナ…。

んで……それを撃墜しようとしてたなのは。

全員バリアジャケットを着てたから…２ｏｎ１の模擬戦か…？」

自身の記憶と経験を頼りに、つい先程見た夢の内容を冷静に考察。

感情を一切シャットアウトし、客観的に考える。

「俺の記憶が確かなら…今までこんなことはなかった。唯の夢…？

いや、もしかすると…」

広暁は理系人間だ。

得意な科目は理系に偏っているし、高校も理系。大学も理系の学部に通っていた。

しかし…科学万能説を公言する程科学を盲信しているわけではない。

科学が発展して精々数百年、人間はそれ以前よりもっと長い期間を生きてきた。

その期間、世の理を解明しようとしたり、未知の分野の知識を得ようと世界中を回った人間はいるが、科学で全てが解明出来ると思ったり、科学こそ全てでオカルトなど存在しないと考えていた人間はほとんどいない。

だからこそ宗教は存在するのだし、だからこそ人間は自然を恐れ、敬ってきた。

そして…だからこそ広暁の頭の中を過(よぎ)る１つの単語。それは…

「予知夢…？」

＝＝＝

「どうしよう…誰かに相談した方がいいか？
…馬鹿にされるだけの気がするな、ちょっと表現変えるか…」

こうなる夢を見たのでそれに対する対策を考えましょう…聞いた限りでは普通に馬鹿にされる話だ。
『予知夢』のようなレアスキルがあるならともかく、今のところ広暁にそのようなレアスキルはない。
故に……

「最悪の事態が起きる前に…起きてからじゃ遅い。その前に、必ず…」

自身が見た夢を参考に、寝る前に考えた最悪の事態を改変、性急かつ確実に事態を収束。
広暁はその様に自分の中で結論付けた。

「…黙っててくれてサンキューな」

『いえいえ』

「キュイ！」

実に空気の読める1機と1匹であった。

＜広暁ｓｉｄｅ＞

「キング・クリムゾン！！」

『マスター、まだ医務室は開いていますよ？』

「何となく言いたくなっただけだ、病気じゃない」

『…そうですか』

今の時間は午後９時。
夜の訓練も終わり、いつもなら風呂に入ってのんびりする時間。
だけど今朝の夢…もとい最悪の事態を防ぐためにも、ティアナに話を聞かないといけない。
最初の予定では先になのはかフェイト当たりに報告して、その後でティアナと話し合うつもりだった。
だけど…

「ティアナって自分の中に溜め込むタイプだからな～…」

『そういう人を相手に理路整然とした正論で攻めると逆効果ですからね』

「攻めるわけじゃないけどな」

ティアナみたいに自分を律する力が強い人間は、良くも悪くも感情を外に出さない。
日常的なものならともかく、例えば、自分の将来に関することなどは他人には相談しないタイプだ。

ちなみにこの知識、去年買った『これで君も今日からテレパスだ！！』っていう本に書いてあった。
題名はともかく、内容的にはまともな心理学の本なので、それなりには信用してる。
よくテレビに出てる脳科学者が出した本なんだけど…追及は止めよう、うん。

「まぁ、とにかく。先にティアナに話を聞いて、引き出せるだけ引き出す。
なのはに相談に行くのはその後だな。
場合によってはティアナも連れて行った方がいいかも」

『マスターで大丈夫ですか？そういった事が得意には思えませんが』

「…傷つくぞ、おい」

『マスターなら、「放っておけ、あいつ自身の問題だ」と言いそうですから。
「俺が口出ししていいようなことじゃない」もありですね』

「それで済むならな。とてもじゃないけどそれで済むとは思えないし。それに……」

『それに？』

「……何回か経験してるんだよ、ああいう人間の相手は」

『？』

中学・高校・大学とな……。

「……やってるね～……」

『そうですね』

ティアナを探して六課の敷地内を歩いていたら、案の定自主練していた。
自分の周りに無数のスフィアを配置し、光ったスフィアに銃を向ける。
瞬発力と正確性を鍛える訓練…ターゲットトレーニングだったかな？

「動きは正確だけど…何か鈍いな。どんだけやってるんだ？」

「４時間だよ、４時間」

「…ヴァイス陸曹、驚かさないで下さい」

「全然驚いてる様には見えねぇが」

振り向くとそこにいたのは、六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニック陸曹。
まだ制服を着ているところを見ると、ヘリの整備でもしてたのかな？
民間協力者としてお世話になって以来、年が近いということもありよくしてもらっている人だ。
この前は一緒に日本酒を飲んだけど、味が気に入ったらしく、一本譲った。
何でも疲れた日の夜に熱燗で飲むと、翌朝疲れが吹き飛んでるとか。

「おいおい、敬語は止めてくれ。仕事中ならともかく、今はただのヴァイス・グランセニックだぜ？」

「…確かヴァイス陸曹、２６歳でしたよね？俺は２０歳ですし、年上の人には敬語で話すのが礼儀かと」

「そんなかてーこと言うなって。じゃあ、あれだ。これは先輩命令ってことで」

「…分かったよ」

女の人だけじゃなくて、男の人もフランクだよな、ミッドの人って。2ヵ月近く経つけど、日本人の俺には未だに馴染めない…愚痴っても意味無いな、止め止め。

「4時間も練習してるって言ったけど、あの訓練を4時間も？」

「休憩を挟まないでぶっ通しでな。体が資本なんだから休めって言ったんだが、まるで効果無しだ」

…この人はティアナの練習を4時間ずっと見てたのか？

いやいや、例えばヘリの整備の傍ら時たま見てただけだ。

さすがに4時間もずっと見続けるなんてあまりにＨＥＮＴＡＩ過ぎる行為、ヴァイスはしない…と思う。

「じゃあ、次は俺が行ってみるかな」

「おいおい、大丈夫か？ティアナは結構頑固だぜ？」

「慣れてるってわけでもないけど…昔何回か経験してるんで。あの手の手合いは」

「そっか。ほんじゃまぁ、お前に頼むわ。ティアナにガツンと言ってやってくれ」

「努力はするけどな、期待はすんなよ？」

「へいへいっと。ほんじゃなぁ～」

「おぅ」

後ろ手に手を振りながらヴァイスは帰って行った。さて…とりあえずシミュレーションしとくか。

……

……

「…こんなところか。さて…行きますか」

一通りのシミュレーションは終了。

シミュレーションをするのとしないのじゃ、成功率が段違いなんだよな。

漫画の知識だけど、これが本当なんだよ、マジで。

ザクザクザクザク……。

草を踏みしめる音が、俺の鼓膜を震えさせる。
ティアナの耳にも聞こえてると思うけど、ティアナは一向に練習を止める気配が無い。
気付いてないのか、気付いていて放っておいているのか…。

「ティアナ～？」

「……」

カン！　カン！　カン！　カン！

「ティアナ～？」

「……」

カン！　カン！　カン！　カン！

……無視ですかい。んじゃ、まぁ……

「…そんなに今の教導が不満？」

ピタッ！

おっ？止まった。

「……何のことですか」

そのセリフ自体、「あたしは今の教導に不満があります」って言ってるようなもんだぞ。

言葉は選んで使わないと相手にちゃんと意味は伝わらない、その逆も然り。

「ちょっと休憩しない？教導のメニューのことで話したいことがあってな」

ポイ。

俺は缶飲料を投げ、ティアナはクロスミラージュを待機状態に戻して見事にキャッチ。

まずは軽くジャブ…というより話すきっかけを作る。

一方的な忠告は、今のティアナには拒絶されるだけだ。

「…いいですよ」

「どうも～」

まずは第一段階クリア…っと。

ティアナが傍の木に寄りかかって座ったので、俺もその隣に腰を下ろす。

ついでに自分の分の缶飲料のプルタブを開け、軽く一飲み。

ゴクゴク……。

「ふぅ……」

「それで、教導のことで話というのは？」

「ティアナさ…今の教導のメニューに不満があるだろ？なのはが組んでるやつ」

「……」

沈黙は肯定と受け取るよ？

「…広暁さんはどう思うんですか」

……質問に質問で返してきたよ、この子。

女性の専売特許と言えば専売特許だけど、やられるとこれ、結構腹が立つ。

普段なら「先に聞いたのは俺だけど？」って言い返すところだけど、ここは引くか。

下手に刺激して聞きたいこと聞けなかったら意味無いし。

「素人意見だけど。それでもいいか？」

「構いませんよ。実力でいったら広暁さんは私よりも上ですしね」

ティアナは陸士訓練校で2年学んでるし、その後陸士隊に勤務してた経験もあるらしいし。

俺みたいなぽっと出の意見を聞いてくれるか不安だったけど、すんなり聞いてくれそうでよかった。
……後半の卑屈っぽい言葉はしっかり覚えたからな、ティアナ（多分これも原因の1つだろう）。

「基礎固めが多過ぎる気がするんだよな。
機動六課設立の目的はある程度はやてに聞いたんだけどさ。
ロストロギアの確保、そしてそれを狙うガジェットとの戦闘が主な俺達の仕事。
いつ出動がかかるか分からない職務内容にしては基礎固めが多過ぎると思う。
基礎は軽く確かめる程度で、後は実戦形式ばっかりの方がまだ現実的じゃない？
フォワード陣がまだヨチヨチ歩きの新人で全然使えないってんなら話は分からんでもないけどさ。
俺はともかくとして、スバルとティアナは陸士訓練校を卒業して陸士隊で働いてたし。
エリオは本局の保護施設にいたとはいえ、フェイトの個人指導を受けてた。
キャロも竜魂召喚はともかく、それ以外のスキルなら自然保護隊にいた時に一通り勉強したらしいし。
基礎の確認で1～2週間使うならともかく、ここ2ヵ月の訓練ほとんどそれに使うのはやり過ぎだと思う。
基礎をやるなら各訓練の最初の方の時間を使えば十分じゃない？」

「……」

まだ喋らないか。だったらもう少し……。

「チーム戦の練習もそう。

チームで闘うなら、下手に短所を補うより長所を伸ばすのに時間を使った方がいい。
それはいいんだけど、チームで闘うってことにこだわり過ぎな気がするんだよな。
人っていう生き物は、他人（ひと）に頼らないと生きられないんじゃない。
人として独立してこそ他人（ひと）を頼ることが出来る。
チームで闘うことに意識を置き過ぎて個人の力量を上げることを忘れたら意味が無いと思う。
チームっていう枠組みがあっても、それを意識し過ぎたら本末転倒だろ。
個々人の力があってこそ、チームってのは意味がある。
個々人の力があってこそ、自然にチームとして纏まる。
そうやっていくうちに出来あがるものが、ホントのチームプレイじゃないか？」

さて…どうくる？

「…それは…広暁さんの考えですか？」

「……自分の経験と考察、プラス得た知識に考察をして俺の中に糧として蓄えたもの…かな」

「……」

「ティアナはどう思うんだ？」

……そろそろくるかな？

「私は…もっと強くなりたいんです。
なのはさん達から機動六課へのお誘いを受けたのも、ここでなら私の夢を変えるために良い勉強が出来ると考えたからなんです。
フェイトさんは現役の執務官ですし、なのはさんも航空戦技教導隊所属の教導官ですから。
その考えは間違っていませんでした。
フェイトさんからは執務官試験の試験問題や実際の仕事内容を聞かせていただきましたし。
なのはさんからは今まで以上に厳しい訓練を受けることで自分の技術を向上させることが出来ました」

見た感じ・聞いた感じでは全然問題なさそうだな。となると…この後に核心がくるか？

「ですけど……」

「ん？どうした？」

一旦話すのを止めたと思ったらさっきまで下を向いて話してたティアナがこっちをチラッと見た。
今の目は…何かを決意する時の目だな、久し振りに見た。

「…聞いてくれますか？」

「……勿論」

…ようやく核心に辿りつけたか。ここからが本番だな…。

「…怖いんです、自分がいつか埋もれてしまうんじゃないかって。どうして私はなのはさんにこの機動六課へ誘われたのか。最初は浮かれていましたけど、ここで過ごしていくうちに段々とその怖さが増していくんです。

隊長陣は2人共Sランクオーバーの魔導師ですし、副隊長陣もニアSランク。

部隊長であるはやてさんにいたってはSSランクですし…。

私を除いたフォワードメンバーもそうです。

スバルは可能性の塊で先天魔法を持っていますし、キャロも「竜魂召喚」という稀少技能(レアスキル)を。

エリオは魔力変換資質「電気」持ちで、まだ10歳なのにBランクを取っています。それに……」

そこまで言ったティアナは再び俺の方をチラ見する…あぁ、そういうことね。

「あなたもです…広暁さん。

魔力運用に天賦の才能を持ち、矢の生成だけでなく結界・探索魔法まで僅かな時間で習得しました。

これだけならまだあなたは『魔力量はそこそこだがその運用に才能がある』天才肌の魔導師程度で済んだと思います。ですけど…」

それって程度で済むのか…？　いや、褒められて悪い気はしないんだけど…。

何だろ、この微妙な感情は…。

「あなたにはホルスという竜がいます。
小さい時ですら戦闘力は言うに及ばず、巨大化したらその戦闘力は何倍にも膨れ上がります。
それほど力のある竜を、あなたは何一つ苦労することなく従えている。
キャロですら数年は制御出来なかった竜魂召喚という似たような前例があるにも関わらず…です」

……そういうことね。つまりティアナは……

「稀少な才能を持った人間の中で、何の才能も持たない自分が埋もれるのが怖い…ってことか？」

「……その通りです」

しかし、それにしても……。

「よく俺に話す気になったな。恥ずかしいとか、自分の弱いところを見せたくないとか言って話さない人がほとんどっぽい内容なのに」

「それは……／／／」

俺がそう言ったら、ティアナは下を向いて何かモジモジしだした…
…えっ？　いや、まさか……。

「広暁さんになら、その…話してもいいようか気がしたんです。

何ていうか…広暁さんなら真摯な態度で相談に乗ってくれそうな気がして」

「……俺が聞きにこなかったら、ティアナは俺の所に相談に来てた？」

「可能性は高いですね」

どうして俺ってこう…昔っから人に相談されるんだ？

いや、俺の性格を考えると分からないでもないんだけど…何か納得いかない。

あれか？　俺はそんなに年とって見えるのか？　若年寄ですか？

どっちかっていうと俺は冷たい人間だし……今はこんなこと考えてる場合じゃない、止め止め。

「……」

「…どう思いますか？」

「…ティアナが埋もれるか埋もれないかってことに関して？」

「……（コクリ」

ちょっと冷たい言い方になったけど、向こうも本音を話してくれたんだ。

こっちも下手に言葉を選ぶより本心…俺らしい話し方で喋った方がいい。

さて……いきますかね。

「俺は――――――――――」

第３３話「己という存在」　（後書き）

第３３話、いかがだったでしょうか？
チームの在り方…これは私が読んだ漫画、そしてとあるスポーツ選手が言った言葉を基にしています。
チームを意識し過ぎてもいい結果は生まない。
個々人が己の力量を上げてこそ、自然にチームプレイが出来上がる。

もし元ネタが分かる方がいらっしゃったら、感想で書き込んで下さると嬉しいです。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしています。

第３４話「可視不可視」（前書き）

第３４話です。
どうにかして８月中に投稿したかった、後悔はちょっとしている。

……というわけで。
今回の話では、今まで私が書いてきた広暁と感じが変わります。
しかし……私の作風と広暁の境遇、性格を考えていただければ納得いただけると思います。

では……。第３４話、始まります。

第３４話「可視不可視」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

Ｇｏｏｄ　ｅｖｅｎｉｎｇ、墨谷広暁です。
話を終えた俺達は、早速なのはの所へ行くことにしました。
と言っても、なのはに割り当てられている寮の部屋に直接行くわけじゃありません。
この時間はまだ空間シミュレーターにいるとフェイトから聞いたので、今は隊舎のロビーにいます。
データを纏めるためにオフィスルームに戻るはずですからね、そこを捕まえる算段です。
もし今夜が無理ならまた時間を作ってもらえばいいし、そんなに切羽詰まってないのが現状だったりするんですけどね。
ワーカーホリックっぽいし、ほぼ確実に捕まるとは思うんだけど……。

チラッ。

「……／／／／」

それより問題は……どうしよう、この子？
話を終えた辺りからずっとこの調子だよ。
顔赤くなってるし、時たまチラッとこっちを見ては慌てて顔逸らすし……。
これは…アレだよなぁ……。
ミッドチルダに来てから、何かが俺の中で狂い始めたなぁ……。
俺ってこんな人間だったっけ……？

ティアナが風邪を引いてるかもしれない？
可能性として０とは言えないけど、そんな可能性が低い事が真っ先に頭に浮かぶのは二次創作オリ主最強系小説の鈍感主人公、もしくはハーレムアニメの何事にも中途半端主人公だけで十分だ。
頭が良くて機転も利くくせに恋愛や自分に向けられる感情には鈍感？
そんな都合よく人類の進化の軌跡から外れたバカがいるかボケ。
リアルにいないからこそ憧れを二次元の世界で表現したいってんなら気持ちは分からないって言ったら嘘になるけど、あそこまで露骨だと気持ち悪いだけだっての。

俺のイメージに合わない？
失礼な、俺だってついこの間までは大学生だったんだぞ。
パソコンで二次創作の小説を読んでたし、『歌ってみた』とかの動画も某動画投稿サイトで見てたわ。

罵詈雑言言葉を言う俺の姿が想像出来ない？
もう１回言うけど、俺はこの間まで大学生だった。
友人と話す時は普通に使ってたし、テレビのニュースを見て使うことも普通にあったぞ。
ただ、ミッドチルダに来てからは使う機会が無かっただけ。
同年代どころか、年下の人間の方が圧倒的に関わった人間は多いわけだし。
ましてや、俺はここでは一番下っ端に当たるわけだし。
大体……

「に…広暁さん？大丈夫ですか？」

「っ！？…すまん、ちょっと思考回路がショートしてた」

「そ、そうですか」

いかん、冗談じゃなく思考回路がショートしかけた。
考え過ぎる癖…直そうとは決めたものの、簡単には直らんなぁ…。
まぁいい、なのはが来るまで静かに待つとするか…。

＜ティアナｓｉｄｅ＞

「に…広暁さん？大丈夫ですか？」

「っ！？…すまん、ちょっと思考回路がショートしてた」

「そ、そうですか（よかった、ばれてないみたいね……）」

に…じゃなかった、腕を組んで考え事をしていた広暁さん。
段々と表情が強張ってきたから話しかけてみたけど…いつものことだったようで安心した。
エリオとキャロから聞いた話だけど、広暁さんは考え過ぎる癖があ

るらしい。
きっと、さっきの話し合いの事を頭の中で整理していたのだろう。

チラッ。

「……」

「……／／／／」

まただ……広暁さんの顔を見ると凄くドキドキする。
いつからだろう、この感情は……。

初めて会った時は、如何にも苦労を知らないで育った年上の男の人って感じだった。
次元漂流者ってことには驚いたけど、ただそれだけ。

魔導師としての素質、そしてホルスという竜。
それらのことを考慮に入れて民間協力者として働くことになっても、大した感情は湧かなかった。
魔法のことを知らない人が、六課でそれを学ぶことは効率的じゃないぐらいにしか考えなかった。

だけど、私の考えは簡単に打ち砕かれた。
魔法のことは知らなくても、勉強・練習のプロセスは人並みどころかずば抜けて知っていたようで、あっという間に実戦でも動けるようになった広暁さん。

本人の才能だけでなく、『努力』という言葉を人一倍知っている強さを、私は彼に感じた。
だからこそ、私も一層努力した。

魔法を知って一月と経っていない人に負けたくなかったから。
けれど……あの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが変わった。

「過去を振り返ることはあっても、過去に縛られちゃ絶対に駄目だ。
人が生きるのは今、そして未来。
人は決して過去に生きることは出来ないんだからな」

広暁さんが訓練中に倒れ、そのお見舞いにスバルと医務室に行った時だった。
話はここからしか聞こえず、ここから前の会話の内容も知らないので前後関係は分からない。
だけどこの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが崩れた様な気がしたのだ。

「人は決して過去に生きることは出来ない」

私は兄の…ティーダ・ランスターの幻影を追っていたのではないのだろうか？
両親が早くに死に、年の離れた妹である私を管理局で働きながら育ててくれた兄。
兄の葬儀で局員が言った、兄を馬鹿にするような言葉を私は許せなかった。

だからこそ、私は今まで努力してきた。
兄が叶えることが出来なかった、執務官になるという夢。
そして…ランスターの弾丸は全てを撃ち抜くということを証明するために。

けれど、広暁さんの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが崩れた様な気がした。
一緒にいたスバルにはばれなかったと思うけど、正直不安だった。
私が今まで培ってきたもの、歩んで来た道が否定された様な気がして。

そんなモヤモヤとした感情が私の中に燻ったまま起こった、ホテル・アグスタでの誤射。
ランスターの弾丸は無能じゃない、ランスターの弾丸は全てを撃ち抜く。
それを証明するためだったのに……自分の能力を客観的に把握していなかったのだ、私は。
なのはさんに諭されて一応は納得出来たけど、私の中では未だにあの燻った感情が存在していた。
それが気持ち悪くて、寮に戻ってからは一心不乱に自主練を続けた。
訓練が基礎的なものばかりで強くなった実感が湧かないっていうのもこれに拍車をかけたのだけれど。

スバル・エリオ・キャロからは無茶するなと言われ、広暁さんからは効率的なトレーニング方法を聞いていたけど、そんなものは関係無かった。
この燻った感情を消し去りたい、ただその一心で自主練をしていた。

そして、燻った感情が消えないまま自主練を続けていると、広暁さんが現れた。

いることには気付いていたけど、大方エリオ・キャロ当たりに言われて私の自主練を止めるように頼まれたのだろうと思い、無視することにした。
だけど、聞こえた言葉は…

「…そんなに今の教導が不満？」

あたしの自主連とはあまり関係の無いことのようで、よく考えれば私の自主連と関係あること。
予想していなかった言葉に、私は思わず言葉を返してしまった。

「……何のことですか」

半ば喧嘩を売る様な口調だったと思う。
だけど広暁さんはそんなことを気に留めずに言葉を返してきた。

「ちょっと休憩しない？教導のメニューのことで話したいことがあってな」

今思えば、全て広暁さんの思わく通りだったのだろう。
あまり関係の無い話題から話を始め、自分の考えを少し曝け出すことで相手に安心を与える。
安心感を与えた後は、自分の知りたい情報を少しずつ聞き出していけばいいだけ。
案の定と言うべきか、私は悩んでいたことを広暁さんに話した。

スバルにも話したことがないのに…どうしてだろう？

…いえ、私は……その答えを知っている。

彼と話している時…いや、彼といるだけで私の中の燻った感情が消えるのだから。

（兄さん…みたいなのよね…）

勿論、私の兄さん『ティーダ・ランスター』と広暁さんは別人だ。

性格面で言っても、明るくて話すことが好きだった兄さんと比べて、広暁さんはどちらかと言うと物静かで、1人で読書するのが好きなタイプだろう（本人もそう言ってたし）。

けれど……

（2人共…人を引き付ける力を持っている……）

加えて、包容力…とでも言うのだろうか。

兄さんがフンワリと上から包み込む感じであるのに対し、広暁さんは下からしっかり支えてくれるような…そんな優しさがあるような気がするのよね。

そんな包容力があるからこそ、私は広暁さんに、その……惹かれているのだと思う。

恋愛感情とは違う、自分が一緒にいたいと思える人。

憧れ……こうありたいと思えるような人……。

（まったく……とんだ回り道だったわね……）

私はこの…燻った感情を消し去ることは出来ないと思う。
それを消してしまったら、私という存在が消えてしまうかもしれないから。
だけど、それを別のもの…別の形に変えることは出来る。

兄さんの夢を叶えなくないと言ったら嘘になる。
だけど、私ティアナ・ランスターが生きるのは過去ではなく今、そして未来なんだ。
私は私のために…執務官になるという夢を叶えたい。
そして、その先にあるものを掴めるよう努力したい。
よく考えたら私は、執務官になって何をしたいってことすら考えていなかったのだから。
兄さんの夢だけど……私は私なんだ。
いいよね、兄さん……？

～魔王襲来～

「あれ？広暁君にティアナ？」

「ホントだ。２人してどうしたんだ？」

作業を終えたなのはとヴィータが見たのは、ロビーで座っている広暁とティアナだった。
広暁は腕を組んでジッと目を閉じており、ティアナは膝の上で手を握ったまま思案顔をしている。
傍目には恋人同士……に見えないと言ったら嘘になるが可能性的には限りなく低いだろう。

「う～ん…私達を待ってたとか？」

「だったら早く行ってやらないとな。行くぞ、なのは」

「あっ！？待ってよ～ヴィータちゃ～ん！」

決戦の火蓋が今……切られた。

第３４話「可視不可視」（後書き）

第３４話、いかがだったでしょうか？
話の冒頭では、広暁の口悪いバージョンを初披露しました。
どんなに真面目な性格でも、リアルな世界では、悪口を言わない人間はいないと思います。
故に、私の小説の作風、広暁の性格の多面性という観点から、彼には悪口を言ってもらいました。

そして…ティアナの心情描写。

『自分の人生は自分のもの』

この言葉を忘れずに生きていきたい…そんな自分勝手な願望から今回の話に書かせていただきました。

今回の話は、読者の皆様によって好き嫌いが分かれるかと思います。
感想はどんとこいですが、誹謗中傷はなるべく書きこまないでもらえると嬉しいです。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしています。

第３５話「相違と合意」（前書き）

第３５話です。
いよいよ、広暁となのはのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩが始まります。
はてさて、どういった展開になるのでしょうか？

では……。第３５話、始まります。

第３５話「相違と合意」

～なるようになるだろ～

「「「「「……」」」」」

「「……」」

ここはなのはとフェイトにあてがわれた寮の部屋…ではなく、食堂の一角。

教導のことで話したいと言った2人に、なのはとヴィータは少し怪訝な顔をしながらも快く応じた。

ロビーでそのまま話すということに決まったのだが、そこに通りかかったのがフェイトとシグナム。

執務官の仕事を終えたフェイトと交代部隊の仕事を終えたシグナムはたまたま鉢合わせしたらしく、食堂で一服しながら雑談でも交わそうか、という話になったらしい。

故にその流れで、６人は食堂に移動して話すことになった。

「……以上です」

自分達が感じた教導の疑問点を簡潔に話したティアナと広暁。

話を聞き終え、一様に顔を伏せるなのは達隊長・副隊長陣。

そんな彼女達が醸し出す空気を疑問に思ったのか、長き沈黙を広暁が破った。

「え～と……どうした？」

無論、広暁とて、ただこの空気に耐え切れず言葉を発したのではない。

彼女達が「何と説明したらいいか？」と頭の中で考えていることは想像に難くない。

しかしこのままでは、何となく嫌な方向に（主に話が進まない的な意味で）進みそうな気がしたのだ。

とあるスポーツで全国級の元高校生として、幾度となく部活で行なったミーティングの経験が。

学生生活に勤しんでいた元大学生として、いつの間にか身に付けていた『空気を読む』という技能が。

２０年とはいえ、今までに培った経験に基づく直観が、広暁に『沈黙を破る』という手段を取らせた。

「……なのは」

「うん……」

「「……」」

フェイトの言葉で覚悟を決めたのか、なのはは顔を上げて２人を見る。

その顔は、どこか儚げながらも決意に満ちた目をしていた。

「いい、２人共。今から話すことを黙って聞いて。聞き終わったら

…感想を聞かせてくれるかな？」

「「……はい」」

「……以上、なのはさんの失敗談でした～」

（なのはさんに……そんな過去が……）

（まぁ…大体予想通りか……考えたのよりは重かったけど。
ある意味当然なのかねぇ……エリオ・キャロっていう前例もあるし）

話し終えたなのはは悲哀な笑顔、聞き終えたティアナと広暁は無表情と言う名の悲しげな思案顔。

フェイトとヴィータもなのはと似たような表情をしており、シグナムは話の途中から目を閉じたまま。
シグナムは未だに目を開けないが……。

「それじゃあ、感想を聞かせてくれるかな？」

「あ、はい…広暁さん？」

「…考えがまだ纏まってない。先に頼めるか？」

「はい……」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

なのはの話を纏めると……

？９歳で魔法に目覚めて、類い稀な才能と命懸けの実戦でＰＴ事件

や闇の書事件を解決

?:魔導師として働いて2年、11歳に死亡寸前の怪我を負う。原因は2年間で溜めた無茶と負担のツケ

?:復帰不可能とまで言われたが、半年間の過酷なリハビリの結果、復帰

?:故に俺達には無茶をしてほしくなくて、訓練は基礎と対隊長・副隊長の模擬戦が中心

要約すると……こうなるよなぁ。

何て言うか……大体予想通りと言うか……。

あんまり軽い気持ちで調べるもんじゃなかったなぁ……。

……現実逃避してる場合じゃないな。

とりあえず、ティアナが話してるうちに考えを纏めておくか。

～それは人として～

「なのはさんが私達のことをそんなに考えているなんて……本当にすみませんでした。
これからはもう、無茶な自手練はしないようにします」

「うん。ありがとう、ティアナ」

なのはの過去、そして彼女が行う教導の意味。
それを知ったティアナは、半分泣きながら感想を述べていた。
フェイトは神妙な面持ちで、ヴィータは苦虫を噛み潰したような表情をしている。
シグナムは未だに目を開けないが……。

「じゃあ、次。広暁君、お願い出来るかな？」

「オッケー」

スゥ――――――――――ハァ……。

大きく息を吸って吐く広暁。
それを話し始める合図だと悟ったのか、ティアナを含めた４人は何故か背筋を正した。
それに「何でそんなことを？」と疑問に思った広暁だが、特に興味もないので話をすることにした。

「ティアナの言ってた通り、俺達のことをそこまで考えて教導のメニューを組んでいたことには素直に感謝、いや、敬服って言っても言い過ぎじゃない。だけど……」

「え？　え～と…何か問題があるのかな？」

「問題というより……疑問点かな」

「疑問点…？」

「疑問点」

自分の教導に対して素直に疑問点をぶつけてくる人間が今までいなかったのだろうか、なのはは広暁の返答に対しおっかなびっくりと言った感じで言葉を返した。

そんななのはの対応を見て、広暁は改めて言葉を選びながらなのはに話す。

「１つ目は前提条件。

俺達が簡単に壊れないように、基礎と模擬戦重視の教導っていうのは理解出来た。

だけど、それはなのはみたいに魔法を実戦の中で学んできた魔導師だけに通じる理論じゃない？

俺ならともかく、俺以外の４人には少し無理のある言葉だと思う。

スバルとティアナは陸士訓練校を卒業して陸士隊で働いてたし。

エリオは本局の保護施設にいたとはいえ、フェイトの個人指導を受けてた。

キャロも竜魂召喚はともかく、それ以外のスキルなら自然保護隊にいた時に一通り勉強したらしいし。

だよね、フェイト？」

「えっ？　あ、う、うん。そうだね……」

「そういう意味では、ティアナとスバルは言うに及ばず。エリオとキャロも、それなりに体は出来てるわけだよな。だったら、模擬戦はともかく、ガジェットを使った実戦形式を増やしてもいいと思う」

「ひ、広暁君。それは……」

「２つ目が」

なのはが口を挟もうとしても、広暁は構わず話を続ける。交渉ではなく、これはある意味では討論である。自分が言っていることが全て正しいとは、広暁は思っていない。しかし、相手に付け入る隙を与えては、今回の場合においては話の流れを断ち切ってしまう。故に広暁は、更に言葉を紡ぐ。

「２つ目が、俺達に教導の意味を教えなかったこと。成長する為とか俺達の為にってことで、今までみたいな教導の形をとってたのは分かった。だけど俺達は、なのはがさっき言った教導の『本当の』意味を全く知らなかったし、考えなかった。俺は性格がこんなだから、ある程度考えてこうやってなのはに疑問点を言うことは出来る。だけど……」

チラッ。

「っ……」

「ティアナはそれを疑問に感じても、聞くことが出来なかった。もしもティアナがもっと自主練をして体を壊したら元も子もないと思わない？」

断言するのではなく、判断を委ねる。

訪問販売で用いられる手法であり、聞き手が判断を下すことで発言者の言葉が正しいと思わせる手法。

「過去の失敗談を言えとは言わないけど、教導の意味ぐらいは言っておいてもよかったんじゃない？

そうすれば、今回みたいに俺とティアナが態々（わざわざ）聞きにくることもなかっただろうし。

勿論、単純に何か疑問を聞きにくることを除いてだけど」

「……」

（あれ？　何か間違えたか？）

広暁は困惑していた。
教導の疑問点を述べ、なのはの反論を聞いた後、お互いに意見をぶつけながら話を纏めていく。
その予定だったのだが……なのはが下を向いたまま、さっきから頭を上げようとしないのだ。

（言い過ぎた……わけないよな？　男同士の口喧嘩じゃあるまいし、言葉はちゃんと選んだ。
俺の言ったことが間違ってた？　いや、少しぐらい間違ってたとしても、芯は間違ってない。
となると……男に何か言われるのに慣れてない？
いや、教導官っていう立場なら、年配の教導官とかに色々言われることもあるはずだし……）

いつも通り頭の中で考えまくり、盛大に悩む広暁。
下を向いて『上半身が震えている』なのはを、心配するように見守るフェイト。

何をしていいのか分からず、プチ右往左往状態のヴィータ。
未だに目を開けないシグナム。

「なのは……さん？」

空気を読んだのか読んでいないのか、なのはに話しかけるティアナ。
しかし……結果としてこれが、状況を変えるための一手となった。

「これなの――――――――――――――――――――――――！！！！！」

「「「「！？」」」」

「これよ、これ！　教導官は若き魔導師を導く者！
そのためには、力と力、技と技、速さと速さ！
何より、腹を割ってお互いに気の済むまで話し合うのが一番なの！」

（どこで間違えたんだ……？　いや、今はこの暴走状態のなのはを
何とかしないと……）

「さぁ、広暁君！　私と気が済むまで話し合いましょう！
教導のことでも私生活のことでも恋のことでも！
何でも私が相談に乗ってあげるからね！」

（……最後の一つは置いておくとして。ここはとりあえず……）

「なのは、落ち着いて。教導のことで話し合うなら落ち着いてる方がいいから。
教導のことで話すのは本望だけど、今のなのはじゃ話し合うのは難しいから」

「これが落ち着いていられるかなの！
ここ数年は！　どこの部隊に教導に行っても！　皆私の言うことを素直に聞くだけで！
誰一人！　私に対して！　意見しようとしなかった！
そりゃあ私だって、巷では『エースオブエース』なんて言われてるよ…だけど！
憧れてくれるのは嬉しいけど！　ただ私の言うことを素直に聞くだけの子なんて！　全然面白くないの！
私は！　もっと！　教え子と闘いたいの――――――――――――――――！！」

（……なのはに対する認識を変えたほうがいいかな……）

（なのはさんが壊れた……）

そのままテンションが上がったなのはと終始冷めていた広暁は議論を交わし。
フェイト・ヴィータ・ティアナは置き去りにされ（シグナムは相も変わらず）。
気がついたら時刻はすっかり0時を回っていた。

ちなみにこれからの教導は、もう少し実戦的にし、対ガジェット戦の割合を増やすことに決まった。
強くなった実感が湧かないと訓練に不満を感じると広暁から聞いたなのはは、そのへんをもう少し考えていくことにもしたらしい。

「しっかし……自分の教導の意味を教えるのが恥ずかしいって……」

「いや～、その……教えなくても分かってくれると思っていたと言いますか……」

「言わなきゃ分からないこともあるからね？
何かあってからじゃ遅いんだからね？
ってか、元を正せばあんたの性でこんな時間まで議論する羽目になったんだよ？
実際もう起こったんだよ？」

「それは分かってるけど～……」

「人は目に見えないものを求めたがるって言うけどさ？

それは目に見えるもの、つまり、見えて・聞けて・感じて。
知覚出来るものが大事っていう前提があってこそ成り立つものだよ？
目に見えるものを蔑ろにして、目に見えないものを追い求めたら本末転倒だよ？
ねぇ、分かってる？　そこんとこ、分かってる？
ねぇ？　ねぇ！？　ねぇ！？！？　ねぇ！？！？！？！？」

（広暁君……そこまで言わなくても～……）

（広暁さんも壊れた……）

夜はまだまだ続く。

第３５話「相違と合意」（後書き）

第３５話、いかがだったでしょうか？
魔王降臨を期待していた方は御免なさい。
ですけど、アニメ的にはともかく、私の作品的にはあの展開は無理があります。
広暁なら無茶な練習をしているティアナを止めるでしょうし、教導のメニューに疑問を感じたらほぼ確実にそれを言いに行きますから。

今回も少し広暁が壊れました。
どんなに真面目な人間でも、壊れる時は壊れるものです。

ちなみに。なのはが言った「私はもっと教え子と闘いたい」。
これは私が通っていた大学の外部講師の教授が言った言葉です。
学生には積極的に意見を言ってもらい、それに自分が全力で応えたいということなのでしょうね。
無論、肉体的な意味では闘いませんよ？　もう７０近い高齢の方ですからね。

他にも伏線っぽいものは仕込んでおきましたが、これは後々明らかになりますので。

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第３６話「ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　ｃｈａｉｎ，　ｉｔ　ｉｓ　ｆｏｒｅｖｅｒ」

第３６話です。
今回は久方振りの英語の題名です。かっこいいですよね～。
それでは。だい３６話、始まります。

第36話「invisible chain, it is forever」

～埠頭～

「風が気持ちいいですね……」

「……そうだな」

海からの風が2人の肌を撫で、ティアナのオレンジ髪のツインテールが風に靡く。

話し合いを終えた広暁とティアナは、埠頭を歩いていた。

もうすぐ夏を迎えるとはいえ、まだこの時期の夜は涼しい。

ましてや、海辺に建っている機動六課の隊舎なら尚更だ。

「それにしても、さっきは驚きました。あんな広暁さん、初めてみましたよ？」

「色々と溜め込む性格でさ。偶に吐き出さないと、後々めんどいことになる」

「そ、そうだったんですか……」

普段落ち着いている人程、感情が爆発した時は手がつけられなくなる。

世間一般ではそのように言うことが多い。

広暁もその類に漏れず、話し合いが終わった後、なのはに心ゆくまで愚痴をぶちまけた。

言っていることが的確で筋も通っていたため、なのははまともに反論することすら出来ず、ただ頷くことしか出来なかった。

社会人１０年目のなのはを論破する社会人経験僅か２ヶ月の広暁…
…中々にシュールだっただろう。

「ま、これで明日からの訓練も変わるし。結果オーライかな？」

「そうですね。本当にありがとうございました、広暁さん」

ペコリ。

ティアナは広暁に頭を下げる。
それを見た広暁は、右手を軽く顔の前で振りながら言葉を返した。

「いいのいいの。どうせ俺一人でもやってたことだし」

「ム～……。あたしはついでですか？」

「否定は出来んな」

「……ハァ。今更言っても仕方のないことだったんですけどね……」

そう言ったティアナは、埠頭に腰を降ろした。
もうこれ以上はこのことで話さないという意思表示なのだろう。
広暁もティアナの隣に腰を降ろし、海に向かって投げ出された両足をブラブラと揺らす。

「子供っぽいですよ？」

「ティアナ達が大人なだけだ。俺はまだまだ子供なんだよ」

「……」

～back to the under tree～

「…どう思いますか？」

「…ティアナが埋もれるか埋もれないかってことに関して？」

「……（コクリ」

「俺は――――――――――――――――――――そうは思わない。
ティアナが埋もれるなんてことはまずないと思う」

「え……？」

「そもそもさ。俺っていうイレギュラーがいなければ、フォワードはティアナ達４人だったわけだろ？
高い突破力と防御力を持つ、ＦＡ（フロントアタッカー）のスバル。
魔力変換資質と抜きん出たスピードの一撃離脱戦法、ＧＷ（ガードウィング）のエリオ。
竜召喚による大型火力と豊富な補助魔法を持つ、ＦＢ（フルバック）のキャロ。
んで……」

一旦言葉を区切った広暁はティアナを見る。
どこか期待しているような、それでいて諦めているような顔。
それを確認した広暁は言葉を続ける。

「射撃と幻術を駆使して仲間を活かした戦い方をする、ＣＧ（センターガード）のティアナ。
その４人のうちの１人なわけだろ、ティアナは。
埋もれる要素なんて見当たらんだろ」

「ですけど、私には他の３人のような才能も素質も……」

「だーかーら。そこが間違いなんだって」

「どういう……ことですか？」

「才能っていうのは、目に見えるものだけじゃないってこと」

「目に見える……もの？」

「ティアナが持ってるのはな、統率力っていう才能なんだよ。
味方のことを把握して、意図を汲んで、指示を出して。
チームのリーダーや司令塔が持つべき才能。
それをティアナは持ってる」

「統率力……」

「俺が混ざった、最初の訓練もそうだったろ？
作戦を考えたのは大体俺だけど、それをちゃんと理解して全体に指示を出したのはティアナだった。
俺もエリオやキャロに支持は出したけど、あれは所詮後付け。
ティアナが元々持つ、統率力のおかげなんだよ。
俺はそれを後押ししただけ」

「……」

「目に見えるものを追うのは当然っちゃあ当然だし、それは至極当然のこと。
だけど、人間が内に持つ才能……統率力とか、洞察力とか？
そういう才能に目を向けてもいいと思うぞ」

言い終えた広暁は一息吐き、空を仰いだ。
空には星が輝いており、地球とは違う2つの月が2人を明るく照らす。

「まっ、考えてみて。答えを出すのに悩みすぎなんてことはないから」

「……はい」

～どうしてこうなった～

あれからティアナは一頻り考え、広暁に隊舎へ行こうと促し。
広暁はそれを承諾し、２人は隊舎へと向かい。
話し合いを終えた広暁は、ティアナに誘われて埠頭に至る。

「……答えは出たのか？」

「いえ、まだです……ですけど」

広暁はティアナの過去のことを知らない。
大体予想がつく上、調べればある程度のことは分かると確信しているから。

「私は私……ティアナ・ランスターとして、これからも努力していきたいと思います。
執務官になるという夢を叶えるためにも、まずは六課（ここ）で経験を積んで。
後々後悔しないために……今はしっかりと学んでいきたいと思います」

「……そっか」

フッ……。

ティアナの言葉を聞いた広暁は、一瞬笑ったよ……ようにティアナには見えた。

あまりに一瞬だったので定かではないが、初めて見た、広暁の笑顔……。

ついついティアナの顔は赤くなる。

「夢に向かってひた走る若者……いいねぇ」

「そんな年寄り臭いことを言わないで下さいよ……」

雰囲気台無しじゃないですかと溜息を吐くティアナ。

それに対して、広暁はごく自然に言葉を返す。

「いや、単純に羨ましいんだよ」

「羨ましい……ですか？」

「前の世界…地球にいたころの俺はな。

夢なんてなかった…というより、全然分からなかった。

決められた線路（レール）の上をずっと歩いてきてさ。

部活で良い成績を出しても、それなりにレベルの高い大学に通っても。

２０歳（はたち）の大学３年生になっても、将来進みたい道が決まらなかった。

だからかな…ティアナ・スバル・エリオ・キャロを見てると、凄い

羨ましくなる時があるんだよ。
俺が何となく過ごしてた時から自分の将来のことを考えてる４人を見てるとな」

そう言った広暁は、再び足をブラブラとする。
自分はまだまだ子供である、そんなことを証明するかのように。

「でも……今は見つけられたんですよね？」

「……まぁね。まだこの先、何が起きるか分からないけど」

誰から聞いた？　と広暁は聞き返さない。
大方の予想はつくし、今ここで聞き返しても大して意味はないから。

「まっ、頑張るしかないよな。とりあえずは、ティアナ達に認められる魔導師にならないとな」

「えっ？　いえ、実力なら広暁さんの方が上じゃあ……？」

今のティアナにしてみたら、広暁と闘って勝てと言われたら、まず無理ですと言うだろう。
それほど広暁は一気に実力をつけたし、闘い方というものも心得ている。
何より、広暁にはホルスがいる。
広暁と１対１で闘うだけでも無理難題であるのに、ホルスが加わったら無理を通り越しているという次元ではないのだ。

「俺には、圧倒的にミッドチルダっていう世界での経験が足りない。
経済・思想・風土・流通・歴史、どれをとっても俺の知識はこの世界のとは違う。

どんなに戦闘力が上がっても智恵をつけても、これぱっかしはどうにもならん。
少なくともこの世界を第二の故郷位に考えられるようにならんとな」

自分で決めた道、そして自分で決めた将来とはいえ、まだ地球に帰ることを諦めたわけではない。
しかし何度も言うが、これは初めて広暁が『自分で考えた将来の進路』なのだ。
地球には未練があるし、まだまだこれからのミッドチルダでの生活には不安がある。
しかし、一度道を決めた以上は妥協したくない。
臨機応変な対応をとることはあっても、道を進む為に必要な手段を模索するにしても。
手段として妥協はしても、自分自身に妥協はしたくないのだ。

「まぁ、これからも頼むな。下手したらあと１０ヵ月足らずの付き合いかもしれないけど」

「……」

そう言って広暁は空を仰ぐ。
そこにあるは２つの月、そして数多に瞬く星々。
地球とは異なる夜空に、広暁は改めて異世界にいることを体感した。

「んじゃ、そろそろ戻るか」

「あ、あの！！」

「ん？」

睡眠のために寮に戻ることを提案して立ち上がった広暁に、ティアナが待ったをかける。

ティアナは勢いのまま立ち上がり、広暁を見上げる形になった。

身長差が３０ｃｍ程あるのだから当然と言えば当然だが。

「お願いを……聞いてもらえますか……？」

「内容によるんだけど……」

「いいよ」と快諾することもなければ、「嫌だ」と拒絶することもしない。

内容次第、まずは話を聞いてからだ。

それこそ人からの頼みを聞く時の受け答え。

「え、えーと…その……」

モジモジ……／／／／

（あ～……これってあれか？）

ティアナのモジモジする態度を見た広暁は、ティアナが言うであろ

う言葉を予測した。
そういった経験がないわけではないが、如何せんそれも過去の話。
受け答えの言葉はある程度思いつくものの、後ろめたさと恥ずかしさから口を閉ざしてしまう。

（何て返せそう……？）

（……よし！）

悩む広暁の姿に触発されたのか、ティアナは下げていた顔を上げる。
そして……言葉は発せられた。

「に、兄さんって呼ばせてください！！」

「……えっ？　兄さん？」

まだあまり広暁を知らないティアナから見たら、今の広暁の顔は実に新鮮に映るだろう。
驚愕や興奮、呆然が入り交じったような表情。
真面目で冷静、常に先のことを考えて行動するというイメージを広暁に持っていたティアナからすれば驚き以外のなにものでもない。

「え～と、その……何故に兄さん？」

「……／／／」

「……エリオやキャロみたいなもんか？」

「そ…それでお願いします……／／／」

（甘え…尊敬…憧れ…そんなとこか？　……ハァ、俺ってこんな人間だったっけ？）

ミッドチルダに来てから何度目かの「俺ってこんな人間だったっけ？」。

生きる世界が変われば人の見られ方も変わる、それは広暁も同様。

地球にいた頃はともかく、ミッドチルダに来てから年下に対して定着しつつあるお兄さんキャラに、さすがに今回は戸惑いを隠せない。

「呼ぶ分には構わんけど、大丈夫？　スバルとかシャーリーあたりにからかわれるんじゃねぇか？」

「……大丈夫です。私、負けませんから！」

（……早く戻って寝よう……）

テクテク……。

「あっ！　兄さん、待って下さーい！！」

兄妹？　の真夜中の一コマ。

もしかしたらこれからも機会があればありえたりする……のかもしれない。

第３６話「ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　ｃｈａｉｎ，　ｉｔ　ｉｓ　ｆｏｒｅｖｅｒ」

第３６話、いかがだったでしょうか？
書いていたら、何故かティアナも妹ポジションになってしまいました。
でもまぁ……仕方ないよね、うん！！
ある程度年上の男性なら、ティアナは大抵の主人公の娘ｏｒ妹ポジションになるような気がします。
フォワード陣の中ではリーダー格ですが、そんな彼女が甘える姿がいいのですかね？

それでは、今回はここら辺で。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしています。

第３６．５話「準備６割・判断２割・運２割」（前書き）

第３６．５話です。
調子がいいのでいつもより間を置かずに投稿しました。
今回の話は、ちょっとした裏話的内容になります。

では。第３６．５話、始まります。

第３６．５話「準備６割・判断２割・運２割」

～賽は投げられた～

「俺ってお兄さんキャラだっけ……？」

『よかったですね、マスター。弟１人に妹２人。立派な４人兄妹の長男ですよ』

「……お前なぁ」

ティアナと別れた広暁は、１人男子寮の廊下を歩いていた。
明日の早朝訓練が中止ということはストラーダとケリュケイオンにサジタリウスが伝えてあり、マッハキャリバーにはクロスミラージュが伝えた。
もう０時を回っているが、今夜は多少夜更ししても問題はないだろう。
そんな風に考えている中、サジタリウスが広暁に話しかけた。

「４人兄妹の長男……ねぇ」

『マスター？』

「いや、姉ちゃんを思い出しただけだ」

『姉ちゃん……姉（あね）ですか？』

「そっ。俺の姉ちゃん」

話してなかったっけ？　といった風にサジタリウスに話しかける。
サジタリウスが聞いたことがないと言うと、広暁は過去を振り返る。
記憶の糸を手繰ると、両親のことは話したが、姉のことは誰にも話していないことに気付いた。
もっとも、両親のことを話したといっても、いるというだけでどんな人かまでは話していないのだが。

「まぁ……俺の状況を考えると話さん方がいいかもな。変に気を遣われると俺も対応出来んし」

『そうですね。でも、私は聞いてみたいです。マスターのお姉さんの話を』

「姉ちゃんの？　う～ん……」

話すことは吝(やぶさ)かではないが、何て説明したらいいか、そんな空気。
そんな空気の中、広暁の名前を呼ぶ高い女性の声。

「広暁。今いいか？」

「シグ…ナム？」

「それで……俺に聞きたいことって？」

「お前と違って腹の探り合いは苦手なのでな、単刀直入に聞く」

（いや、俺も別段得意ってわけじゃないんだけど）

場所は変わって、ここは階段の踊り場。
広暁の部屋は寮の2階にあり、ここは1階と2階を結ぶ階段の踊り場である。
ここに着いて再び階段を登ろうとした矢先、広暁はシグナムに声をかけられた。
恐らくシグナムは、広暁の部屋の前で広暁が帰ってくるのを待っていたのだろう。

「お前は……高町の教導の意味を知っていたのか？」

「……ずっとあの姿勢だったのはそういうことね。情状酌量の余地は？」

「ない」

「ですよね～」

「「……」」

「「気づいてたのか」」

シグナムが話したこと、それはなのはの身に起きた事件のこと。
それを広暁は既に知っていたのか？　ということだった。
そして……この会話の流れでいくと……。

「結論から言うと……知ってたっていうより、一番確立の高い予想だった。
つーか、何でシグナムは俺が知ってるって考えたの？」

「高町が事件のことを話終わったあと、お前とティアナに感想を求めただろ？
その時のお前の顔がどうしても引っかかってな。
あれは何かを考える顔じゃない。予想が当たって、当たったことに後悔している時の顔だった」

（女性は怖いね。ポーカーフェイスの練習でもするか？）

人間の表情の変化からその人の感情・思考の変化を読み取る。
言葉で言うのは簡単だが、これはそう簡単に出来るものではない。
広暁のように元々観察力・洞察力に優れた人間なら気づきたくなくても気づいてしまうが、本当に出来ない人は出来ないし、表情の変化にすら気づかないことも多々ある。
男性より女性の方が優れているこの力、シグナムはそれに加えて魔導師としての経験があるのだろう、自分の表情の変化に気づいたのだろうと広暁は考えた。

「ずっと目を閉じて腕を組んでたのは？」

「最初は話を聞くだけの予定だったのだがな。
途中で少し目を開いたら、お前の表情の変化に気付いた。
すぐに聞こうかどうか迷ってるうちに話は終わったのでな、今こうして聞きに来ただけだ」

どんだけタイミングいいんだよというツッコミを心の中に封印しつつ、広暁は考える。
別に話しても問題はないし、シグナムの性格から考えて深く追求することもないだろう。
しかし……自分が勝手になのはのことを調べたことに対してはどうだろうか？
公開情報とはいえ、どうにも話すのが憚る。

そんな風に悩む広暁を見て何か思うところがあるのか、シグナムは言葉を繋ぐ。
お前のことだから間違った方法で調べたわけではないのだろう、だから私は何を聞いても驚かないと。
そもそも、一民間協力者で調べられることに正しいも間違いもなく、どこまで閲覧出来るか出来ないかの違いなのだが、考えるのが少し

面倒臭くなってきた広暁はもう話すことにした。

「人に教える立場の人に多いんだけどな。
ああゆう人は大体、自分の過去の失敗を教え子に繰り返させないように……って考えてる人が多い。
だからとりあえず、なのはの経歴を調べてみた。
管理局員の経歴ぐらいなら、俺でも六課のネットワークから普通に入れるからな」

「高町の経歴を……？」

「9歳の時にユ……スクライア先生に会って魔法を知ったのは、こないだ会ったときに聞いたからな。
それから色んな事件を解決して、2年後。
詳しい事件の詳細は載ってなかったけど、半年間入院したって載ってた。
後はそこから推測を立てただけだ」

「たったそれだけで……分かったのか？」

シグナムが驚くのも無理はない。
今広暁が言った限りでは、広暁の持つ情報はデータとして載っていたなのはの経歴のみ。
ホテル・アグスタでユーノと会ったとはいえ、そこまで詳しくなのはのことをユーノが話すとは考えにくいからだ。

「馬鹿げた魔力量を持つ9歳の女の子が、ずっと実戦を続けてきたんだよ？
途中から管理局に入ってそれ相応の訓練を受けたとしても、体に疲労が溜まるのは自明の理だろ。

んで11歳の時に、詳しいことは知らないけど何かの事件で重傷を負った。
それが今までの実戦で溜まったガタや疲労からきたものかどうかは知らん。
だけど半年間のリハビリの末に復帰ってことは、よっぽどの重傷を負ったか、それプラス今までに体に溜まったものの影響でリハビリが長引いたって可能性が高い。
あと、なのはの性格を考えると、教え子には自分と同じ失敗をしてほしくないって考えるだろ。
だからあそこまで徹底して基礎と模擬戦を中心とした訓練メニューを組んだ。
俺はそう考えた」

つまり広暁は、ユーノからなのはが魔法を知った経緯は聞いたが、詳しい実状は知らない。
判断材料は、なのはの過去の経歴と現在のなのはの性格のみ。
それだけで広暁は、なのはの教導の意味と真意を当てたのだ。

それを考えると、シグナムは身震いした。
別段、広暁が教導の意味を知ったことに対して驚きはしない。
身震いしたのは……広暁がなのはの経歴を調べ、教導の意味を考え、意見を言いに来たこと。
普通…というより、ある程度普通の人間がこのような行動を起こすとすると、教導の意味を考えてもそのバックグラウンドたるなのはの経歴まで調べたりはしないだろう。
仮に調べて教導の意味が分かったとしても、態々(わざわざ)物申しに上司であるなのはのところへ行きはしない。
しかし広暁は、経歴を調べ、教導の意味を考え、なのはに意見を言いに行った。
普段は大人しい印象が強い広暁だけに、シグナムは身震いしたのだ。

「お前にそこまでの行動力があったとはな……驚きだ」

「行動してから後悔しろ、ってわけでもないけどさ。
行動して問題無さそうだから行動した、それだけだよ」

「問題無さそうだからだと？　お前にしては随分と曖昧な理由だな」

「気になることや間違ってることでも、馬鹿正直に言えばいいってことはそうそうないだろ。
そんなのが許されるのはテレビとか漫画の2次元の世界の話だけだ。
そもそも行動していいのか？　行動したとして、それが周りに与える影響は？
行動するにしても、そのプロセスは？　行動するために必要な準備は？　考えたらキリがねぇよ。
……まぁ、まだ民間協力者歴2ヶ月の俺が言っても、全然重みがないけど」

自分の意見を、最後に自嘲気味の一文で終わらせる広暁。
言葉だけでなく、顔もどことなくそれっぽい顔をしているので本心から言っているのだろう。
シグナムはそれに気づいていながら、然も気にしないかのようにして言葉をつなぐ。

「そんなことはない。お前のように、最初から最後まで考えて行動出来る人間は必要だ。
テスタロッサはともかく、高町は『当たって砕けろ精神』が抜けていないからな。
これぱっかりは、どんなに教導をしても魔導師として経験を積んでもどうにもならん」

「当たって砕けろって……いや、それよりも。
俺みたいな次元漂流者で民間協力者の人間にそこまで期待されても、
正直困るんだけど」

「……それは本心か？」

「（やっぱりばれるよねぇ……）自分を守るための日本人的謙虚精
神です」

「謙虚なのは結構だがな、あまり謙虚すぎると周りの人間を貶める
ことになる。
そこは重々承知しておけよ？」

「……分かった」

「分かればいい」

「あっ……そういやさ、シグナム」

「どうした？」

「……はやてのことなんだけどさ」

「主はやてがどうかしたのか？」

さっきまでとは打って変わって、広暁は言いにくそうに話を切り出した。

内容が内容だけにシグナムも真面目な態度になるが、広暁の様子を見ると違和感が拭えない。

そもそもシグナムは、こんな風に物事を言いにくそうな広暁は初めて見た、と思っていたりする。

「はやてってさ……俺に気がある？」

「確か…そんなことを言っていた様な気がするが？

家に帰るとシャマルと2人でいつも盛り上がっているぞ」

「（その割には全然アプローチがないな……）はやてに伝えといてほしいことがあるんだけど……」

「構わないが？」

尚言いにくそうに言葉を紡ぐ広暁。

しかしそれでも、はやてに言いたいことがあるのだろう。

シグナムの眼を見て、広暁は会話を続ける。

「はやてが俺に気があるのは確かだろうけど、それは愛とか恋とかからくるものじゃないと思う。

焦りとか物珍しさとか……とにかく、はやてが考えてるものとは違うと思うんだよ。
だからもっと良く考えて……いや、『俯瞰的に』考えるように言ってくれない？
こんな理由ではやての仕事に支障が出たら俺も嫌だし」

「……分かった、伝えておこう。
私はこの手のことには疎いからよく分からないが、お前が言うのなら間違いはないのだろうな」

俺も経験が多いわけじゃないけどな、と補足して広暁は嘆息する（それでもはやてより多い自負は何となくあるが）。

アプローチこそ少ないが、はやてが自分のことをそういった対象として見ているのは分かっている。
それは別段迷惑なことではなく、男として普通に嬉しいことだ（そのやり方はともかくとして）。
しかし、彼女が愛とか恋とかと考えているものは、傍から見たら全然異なるのだ。
広暁1人が勝手にそう思い込んでいるのならともかく、周りの誰が見てもそう分かるような。
それに浮かされているはやてを見るのは良い気分ではないし、周りに悪影響を与える可能性もある。

その結果、自分勝手だなと思いつつも広暁は行動に出た。
直接言ってもいいのだが、こうゆうことは間接的に伝えたほうが効果がある。　何故なら、

本人に直接言いにくい　↓　他の人に伝言を頼む　↓　信憑性が高まる

といった風になるからだ。
なまじいつでも本人に言える環境にあるので、より信憑性が高まる。
ましてや、頭がいい人ほどこの図式が成り立つだろう。
ある程度頭のいい人は先を考えて思考が出来るし、自分で出した結論なら尚更疑いはしないだろう。

「頼むね。どうにもはやては、焦ってる様な気がするんだよなぁ……」

「主はやては小学生の時から管理局員として働いているからな。
中学を卒業してからはずっと働き詰めだ。
そういった色恋沙汰にはほとんど無縁と言っていいからな」

「……はぁ。良くも悪くも俺が六課（ここ）の人達に影響を与えちゃってるのか……」

はやて・フェイト・エリオ・キャロ・ティアナ・なのは。
六課に来てから広暁の影響で変わった人間はまだまだいる。
広暁が辿ってきた人生が、彼女らにとっては異質だったから。
彼の元いた世界では『優れている』程度の過去であり、歩んできた人生。
それを蓄積し考察して己の糧とした人間『墨谷広暁』が、六課の人達を変えたのだ。

「まぁ……お前の故郷のことは我々でも調べている。

安心しろとは言わんが、あまり悲観的にならないでくれ。
お前には過ぎた忠告かもしれんが」

「……OK。とりあえず、明日からの訓練を頑張るよ」

「高町も気合が入っていたからな。私も、明日からは更にたっぷり扱(しご)くぞ？」

「お手やわらかに頼むよ……んじゃ、御休み～」

「あぁ、御休み」

フゥ……。

後ろ手に手を振りながら広暁は去る。
「お疲れさ～ん」とでも聞こえてきそうな程哀愁が漂った背中を見たシグナムはため息を漏らした。

「……ザフィーラの言っていた通りだな。
まさか六課設立の本当の目的だけでなく、高町の教導の本当の意味まで探り当てるとは。
見える…いや、観(み)えるのか？」

心に宿るは淡き期待、口から漏れるは感嘆の一言。
一度生まれた感情は彼女の脳内をグルグルと回る、それは結論へと続く思考の過程。

（……それだけではない。
物事に気づく力、それを調べる積極性、自分が起こす行動が周りに与える影響を考える用心深さ。
全てを考えた上で行動し、自分が思い描く結果を導き出す。
観察力・洞察力でなく、本当に優れているのは……計画実行力（オーガナイズ）。
全体を見据えて動く力か……これは偶然なのか？）

足りなかったピースがカチリ、と音を立ててはまる。
力としては十分でも、技術としては足りないところが多々ある機動六課。
それも含めて機動六課を作ったはやてだが、それは所詮成り立ちの話。
目的が目的とはいえ、組織として運営していく上では、少々心許ない部分もある。

全てにおいて完全などない。
不完全を含めた完全こそが人間が理想とすべきあり方。
足りないところはあってはいけないが、良いとこ取りでは組織は成り立たない。
全てを含み内包してこそ、人間としても組織としても最高と言える。
それにシグナムが気づいたかどうかは……今は誰も知る由もない。

第３６．５話「準備６割・判断２割・運２割」（後書き）

第３６．５話、いかがだったでしょうか？
主人公設定と第１２話にも載っていますが、広暁の本当に優れている能力は計画実行力（オーガナイズ）です。
他の、例えば観察力や洞察力も優れているわけですが、それはこの力の遂行する上での必要材料的な要素が強いんですね。
勿論……全ての力には裏があるのですが。

はやてについてですが……これは本当に申し訳ありません。
私の腕がまだまだ未熟な面もあり、広暁に好意を寄せる人間が２人以上だと話が中々進まなくなってしまう恐れが浮上しました。
そのため、はやての恋愛フラグは折ることになりました。
私自身、ハーレム（２人以上）が苦手という意識があるのも、恐らくは影響していると思われます。
誠に申し訳ありませんが、ご容赦ください。

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第３７話「本日の天気は晴れ時々大荒れ」（前書き）

第３７話です。
タイトルがあれなのは気にしないでいただけると助かります（懇願）。

では。第３７話、始まります。

第３７話「本日の天気は晴れ時々大荒れ」

～それは突然に～

「ってなわけで。広暁にはＢランク昇進試験を受けてもらうで」

「何が「ってなわけで」かは知らんが、早くバインド解け」

いつもは怒りを外に出さない広暁もこの時ばかりは怒っていた。
強化された訓練メニューを消化して昼食を食べた後のことだ。
以前会った時にユーノから無限書庫閲覧の許可をもらった広暁は、早速いくつかの本を借り、郵送で送ってもらった。
午後のデスクワークまで時間があるのでそれらの本を外で読もうと思い中庭に出たのだが、そこでいきなりバインドを（２桁ぐらい）かけられたのだ。
ホルスが近くにいればよかったが、あいにくホルスはフリードと散歩に出かけている。
辺りを見回しても局員は見当たらないので、このタイミングを見計らってバインドをかけられたらしい。

魔力や術式構築の特徴からしてはやての魔法だと判断した広暁は抵抗を諦めた。
魔力運用の技術差や魔力量のリミッターはともかく、自分とはやてとでは１０年近くキャリアの差があり、それ意外にも負けている面は多々ある。
抵抗しても無意味だし、無駄に疲れるだけだ。

しかし、バインドを避けられなかったこととは話は別だ。

瞬発力と反射神経の良さを自負しているだけに、バインドに反応出来なかった自分には腹が立った。

「なのはちゃんと違うて私は中・遠距離からでも相手に気づかれずにバインドをかけれるんや。
結構集中力必要な上に術式の構築がめんどいからよー使わへんけどな」

「聞いてもないのに態々説明ありがとう。早くバインド解け」

反応出来なければ、どんなに瞬発力に優れていても反射神経が良くても無意味ということだろう。
そこまで考えて、広暁は再び眼の前のはやてを見る。
人を弄って遊ぶのが好きそうな、どこの学校にも会社にもいそうな種類の人間。
相手をするのは面倒臭いが、このままではもっと面倒臭いことになるのでとりあえず頭を働かせる。

「そんなに怒らへんでもえーやんかぁ～。これも部隊長と隊員のコミュニケーションの一つやで～？」

「……念のため言っておくけどな。９割５分方はやての為だぞ」

「はっ？　それはどういう……」

スパアアアアン……！！

「な、何や！？」

ズル…。　ズル…。　ガシャァァン……。

「……（グゴゴゴゴゴゴゴゴ！！）

（思ったより早かったな……）

２人が目を向けた先にいたのは、右前足にフレイム・ソードを持ったホルスだった。

金属製の扉を容易く切り裂く摂氏１０００度を軽く超える研ぎ澄まされた炎。

炎を研ぎ澄ますという原理は広暁には分からないが、実際に目の前にそれを具現化した武器があるので、まぁ考えても無駄だろう。

「ど、どうして！？　どうしてここにホルスが来るんや！？」

理由を説明する義理は無い。

そんな暇があるならとっととバインドを解かせるか、これからのことを考えた方がよっぽど有意義だ。

スパパパパパパパパパパァァン！！

はやてが慌てている間に、ホルスの一振りにより広暁のバインドは全て切られる。
主人の安全を確認したホルスは、すぐにはやての方に向き直った。

ボウ…ボウ…ボウボウ…ボウボウボウボウ！！

「え、え～と……ホルスさん？
あなた様の背後に浮かぶ、その炎の輪っかは一体何でしょうか？」

「『旋竜・炎王刃』×8（バィ）ってところか。ちょっと多くないか？」

「キュイキュイ！！」

ボウ…！

1個増えた。

「（……まぁ、いっか）ホルス、頼んだ」

「キュイ……！！」

『旋竜・炎王刃×9（バイナイン）』

「アッ――――――

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけや」

「分かった。そんじゃまぁ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけや」

「分かった。そんじゃまぁ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけや」

「分かった。そんじゃまぁ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけや」

「分かった。そんじゃまぁ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけや」

「分かった。そんじゃまぁ、話を聞かせてもらいましょうか」

「……なぁ。この炎、解いてくれへん？」

「だ、そうだが？　ホルス」

「キュ！」

ギュッ！

「アッ――――――――――――――――――――！！」

「広暁が六課に来て、もう2ヶ月以上経つやろ？
元々はあんたの故郷への帰還方法が分かるまで民間協力者やってもらうつもりやったんだけど……」

「帰還方法が中々見つからない。
これ以上働くにしてもそれ相応の資格がいる。
だから現状で一番妥当なBランク試験を受けろ…ってこと？」

無駄な会話が続くこと一刻、ようやくはやてが非を認めたので、ホルスはバインドを解いた。
まだ警戒心剥き出しではやてを睨んでいるが、広暁に嗜められ、今は広暁の横に佇んでいる。

「話が早くて助かるわ～。試験は今日の夕方や」

「……いきなりすぎねぇか？」

「しゃーないやろ？　急に決まったんやし、上からの命令やし」

「……分かった。試験の場所と内容は？」

「試験の場所は空間シミュレーター。せやから、今日の午後の訓練は全面的に中止や。
試験の内容はまだ私も聞いてないから、多分その場で聞かされると思うで。
あ、広暁は午後のデスクワーク免除やからな」

「事前の対策はとりにくいってことか……。
でもまぁ、空間シミュレーターでやるってことは、戦闘をすることは間違いないか。
それじゃあ、俺はこれで」

「空いてる人は応援に行くと思うから。頑張るんやで～」

「了解っと」

ウィ――――ン…。　ガシャン。

「『俯瞰的に』か…。あんたの方がよっぽどか大人やで、広暁。
ただ、あんたには経験が足りないだけや。
もしもあんたが後数年でも管理局で働いたら……やめややめ、こんな考え。
私の勝手な願望を広暁に押し付けたらあかん。
……私も、もっと遊んどけばよかったなぁ……」

「……ってことなんだけど。スバル達の時はどんな試験だった？」

「あたし達の時か～……ティア、どんな試験だったっけ？」

「もう忘れたの？　まだ3ヶ月しか経ってないのに」

広暁・スバル・ティアナの3人は食堂にいた。
午後の訓練が中止ということは既に伝わっており、本来ならデスクワーク業務の時間。
試験のことを聞きたい広暁は、監督していたなのはから許可をもらい、2人を食堂へと連れ出した。
ちなみに、広暁のデスクワークは免除である。

「あたし達の時は、各所に配置されたスフィアを撃破しながら時間内にゴールする方式でした。
ですけど、あれはツーマンセル専用の試験ですから。
兄さんは1人で受けるでしょうし、別の試験の可能性が高いですね」

「兄貴なら大丈夫だよ！　あたしやティアより強いんだから！！」

「……確かに事実だけど、そこまではっきり言われると結構傷つくんだけど？　スバル」

ティアナがジト目でスバルを睨んでいるが、広暁は軽くスルー。
ちなみに、何故スバルが広暁のことを『兄貴』と呼んでいるかというと、

ティアナ、広暁を『兄さん』と呼ぶ
←
だったらあたしもと乗ってくるスバル
←
広暁断る、しかしスバルはしつこい
←

ということがあった為である。
ヴァイスからは「やるね～、この色男」と言われ。
エリオからは「僕達全員兄弟ですね！！」と言われ。
いつから弟の俺が兄属性を持ったんだと考えたが、広暁はそれについて深く考えようとはしなかった。
考えても現状が変わるわけではないし、『兄』として慕われるのが結構気持ちいいから。
広暁は何か危ない属性に目覚めてしまったのかもしれない。

「ネットで一通り調べたんだけど、試験の内容は載ってなかったんだよな」

「試験自体は毎年変わりますけど、幾つか種類があってローテーションしてたと思います。
でも、その内容は公表されていないんですよね。
あたし達も３８６部隊の先輩や同僚から話を聞く程度でしたし」

「いつもなら試験内容は試験日の1月以上前に受験者に発表されるんだけどね～。
兄貴の場合は事情が事情だから、発表もなかったのかな？」

「情報を集めようにも時間がかかりそうだし……。
下手に情報収集するよりも、自分の力を確認した方がいいかな」

「その方がいいかもしれませんね。あたし達も手伝えたらいいんですけど……」

「まだデスクワークがあるんだろ？
本音を言ったら手伝って欲しいけど、２人はまだ仕事があるし。
話を聞かせてもらって、試験までの時間の過ごし方を決められただけでも十分だよ」

「受かってね、兄貴！！」

「無論、そういうつもりで試験には望む。ほんじゃまぁ、２人共。
ありがとな」

「Ｂランク試験か～。兄貴はどういう試験になるんだろ？」

「基本は変わらないと思うわよ。スフィアの種類と配置、制限時間が変わるぐらいかしらね」

「そっかぁ～……でも、兄貴なら大丈夫だよね？」

「えぇ、兄さんならきっと。……そういえば、スバル」

「うん？」

「あんたはどうして兄さんのことを『兄貴』って呼ぶの？」

「だって、ティアもエリオもキャロも皆、広暁さんのことを『兄』

として慕ってるし。
あたし1人だけ仲間外れみたいで嫌なんだもん」

「本音は？」

「年上の兄弟っていいよね！　頼れる『兄』なんて特に！！
『兄貴』って呼んでるのもそれが理由なんだ～♪」

（あんたも……あたしと同類だったのね……）

3年来の友人の知りたくない秘密を知ってしまったことに、ティアナは心の中で嘆息した。

「あれ？」

『どうされました？』

「キュイ？」

空間シミュレーターは試験まで使用中止なので、広暁は六課近くの林に来ていた。
攻撃魔法でないならここでも問題はないし、術式の確認をするにしてもここが丁度いいからだ。

「いやさ。俺が試験を受けるのはいいけど、ホルスはどうするんだ？試験の内容があの２人に聞いた通りなら、ホルスがいると一瞬で終わるぞ」

『それは……そうですね。ガジェットのＡＭＦを簡単に破壊しますからね、ホルスは。
その気になれば空間シミュレーターを丸ごと火の海にすることも出来ますし』

「キュイ！」

（じゃあ、試験は俺１人で受けるのか？）

一旦気づき出すと止まらない。
今まで気付かなかったこと・考えなかったことがグルグルと広暁の頭の中を巡る。

「はやてはホルスのことを何て説明したんだろ？
俺は平行世界にあるかもしれない地球出身、ホルスは遊戯王のカードが実体化したもの。
……バカ正直に言うわけないよな？」

『私からは何とも……。部隊長のことですから、抜かりは無いと思いますが……』

「……そうだな。まぁ、今は考えるだけ無駄か」

「キュ！！」

（何でお前はそこでそんなにいい返事をするんだ、ホルス。お前の問題なのに……）

気にしたら負けだよ。

（……釈然としないけど、今は目の前のことを考えよう、うん）

ブオォォォォン……。

広暁は足元に魔法陣を展開し、形成された魔法陣の確認をする。
展開する魔法陣は、対集団戦専用魔法『篠雹霰』。
今のところ全部で参式まである対集団戦狙撃魔法。

「弐式はともかく、問題は参式だな。壱式はその都度量と速さと攻撃範囲を変えればいいし」

『そうですね。
それと、弐式は探索魔法との併用が基本ですから、今回の試験では使う機会はないでしょうね。
そこまで悠長に魔法を発動までの時間があるとは思えません』

「探索魔法なくても出来るけど、捕捉が難しいからな。
見えなかったり速く移動してる奴はまだ無理だ」

魔法の特徴柄、弐式は魔方陣がなければ使用は困難である。
どこにいるか分からない相手を探索魔法で捕捉し、誘導矢で狙い打

つのが弍式の本質だ。
しかし、狙撃魔法に探索魔法の術式を組み込んだため、術式はそれなりに複雑である。
今の広暁に弍式の術式を構築することは出来ないわけではないが、時間がかかってしまうのだ。

「問題は参式かぁ。あれを使う状況ってかなり限定されるよな」

『そもそも、何故マスターは参式を考えたのですか？
制圧力なら天創塵以上ですが、時間がかかる上に準備中も攻撃される危険がありますよね？』

「う～ん……かっこいいから」

『……はい？』

「かっこいいから。正しく『篠（しの）つく雹霰』って技じゃん、参式は」

『……時たまマスターは私の予想の斜め上をいくことを言いますね』

「人を『俺、頭堅いから』人間みたいに言わないでくれる？」

『マスターは考えが固いのであって、思考は柔らかいんですよね。
時たま顔とイメージに合わないことを言いますが』

「悪口を言わない人間なんていないし、顔と性格が一致するなんて妄想は信じてないぞ、俺は」

軽口を叩きながらも、広暁は魔法発動の確認を、サジタリウスは魔法陣の確認をしている。

その様子は正にお互いを信頼しきったパートナー。

ツン！！

「痛いって」

「キュイ！！」

ホルスがやきもちを焼くのも仕方ないと言える。
そんな感じで魔法陣の確認を行い、ユーノに送ってもらった本に載っていた魔法を実践していく広暁。
幾つかの新魔法を試したところで、はやてからの通信が届いた。

ピュン！

『ひ～ろ～あ～き～。そろそろ空間シミュレーターの方に向かってくれへん？』

「ん？　もう始まる？」

『そういうこっちゃ。き～つけてな～♪』

「（……何か裏がありそうな気がする）ＯＫ」

プツン……。

「行きますか」

『了解です』

「キュイ！」

第３７話「本日の天気は晴れ時々大荒れ」（後書き）

第３７話、いかがだったでしょうか？
民間協力者とはいえ、それなりの資格も必要なはず。
そう考え、広暁には試験を受けてもらうことにしました。
試験内容は次話で分かりますので、それまでお待ち下さい。

スバルも広暁の妹的ポジションになりました、ちょっと後悔している。
スバルだけ普通の呼び方では違和感があるような気がして、気がついたらこのような話になっていました。
あくまで呼び方の話ですから、他の３人と大した違いはないということを念頭に入れて下さると助かります。
……内に秘めたる思いはしりませんがね？

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしています。

第３８話「いいね！　いい試験だよ！」（前書き）

第３８話です。
題名の通り、今回から広暁のＢランク昇進試験が始まります。
何度目かの戦闘シーンですが、よろしくお願いします。

では。第３８話……始まります。

第３８話「いいね！　いい試験だよ！」

～空間シミュレーター～

ワーワー！！　キャーキャー！！

（……どうしてこうなった）

既にバリアジャケットを展開し、サジタリウスを弓の形態に展開した広暁。
戦闘の準備は万端、しかしその心は風雨が吹きすさんでいた。
確かに空いている六課の人間は応援に来ると聞いていたが、どう考えてもおかしい。
人数的にもおかしいが、その面子（メンツ）的にもだ。
陸士隊や本局の局員だけでなく、中には聖王協会の騎士すら見える。

「俺は見世物か……？」

『次元漂流者・類い稀な魔力制御能力・ホルスの黒炎竜。目立つなという方が無理ですね』

「キュイ？」

「……カリムがさっきからこっちに手を振ってるんだけど」

『気づいてらしたのですか？　二重の意味で』

「あの中じゃカリムの服装は浮くし、そういう対象として見られてることは何となく分かってた。
鈍感どころか敏感だからなぁ…俺は。気づきたくなくても気づいちゃうし」

「キュイ！」

ポン！

ホルスがやけにいい笑顔で広暁の肩を叩いたが、広暁はその意味を深く考えないことにした。
それにしてもこの竜、ノリノリである。

ちなみに、試験が始まるまであと１５分。
試験会場である空間シミュレーターにはホルスと来るようにはやてから連絡があったので、恐らくはホルスと一緒に試験を受けるものと思われる。
しかし、ホルスと共に試験を受けるのならば、色々と変わることは必然。
ホルスの巨大化が禁止されたり、スフィアの数が増えたり、ガジェットが異様に強くなったり。
考えられることは考えシミュレーションをした広暁だが、それでも一抹の不安は残る。
というか、そもそも……

「どこにもスフィアやガジェットが見えないよな。まだ試験内容も聞かされてないし。
始まるまでは出てこないのか？」

『もしくは、そもそも試験にそれらを使わないか……ですね』

「あと考えられるのは、試験官の魔導師と闘って試験官に認められたらってやつか、それとも……はやてはもう知ってるけど、俺に伝える気がないか。
対策取られるのが嫌だってのが、そういう場合は理由になるな」

一通りのシミュレーションはしたし、もう考えても無駄だと判断した広暁は考えるのをやめた。
あとは時が来るのを待つだけ、そう考えて。

～一方こちらは～

「何をしてるのかな？」

「瓦礫に座って腕を組んで……精神統一？」

「一流のスポーツ選手は最高のパフォーマンスをするために、自分

の精神と肉体の状態を最高の状態にもってくるためのプリショット・ルーティンがあるって聞いたことがある。
今広暁がやってるあれは、その精神の方やろうな。
精神統一をすることで、自分の心の平静を保とうとしてるのかもしれん」

「ですです～♪」

「だけどあいつの心があれ以上平静になるって……」

「少なくとも我々の中では一番だろう。
もっとも、あれ以上に心を平静に保てる奴などまだまだ武装隊にはいるがな」

「それでも、今の広暁君が落ち着いているのはよく分かるわ。
初めての試験なのに、本当にすごいわねぇ」

「あれが本来のあいつの姿なのだろうな。冷静沈着を絵に描いたような奴だ」

「兄貴なら……絶対に大丈夫だよね？」

「絶対とは言い切れないわ。そもそも、兄さんなら「絶対」なんて断言はしないわよ」

「お兄さんなら「ベストを尽くす」とか「全力でいく」ですね」

「それがお兄ちゃんですから。「中途半端な勝利宣言は心を曇らせる」って言いそうですね」

（（（（（（（（本当に兄妹みたいだ……））））））））

フォワードメンバーに加え、隊長・副隊長陣。
更にはシャマルとザフィーラ（狼形態）、はやてとリインまで加わった豪華応援メンバー。
お前ら仕事しろよと言われそうだが、はやてとリインは仕事を他のロングアーチに任せ（丸投げし）。
シャマルが勤務する医務室は現在閉室中。
ザフィーラは特にやることもなかったので、はやてに付いて来た。
他のメンバーはデスクワークを早めに片付けた結果である。
お前ら、（一部を除いて）仕事しろよ。

「はやて、試験内容はまだ分かんねぇのか？」

「いや、もう分かってるで？　ただ、広暁に知らせたら対策を取られるからな、伝えへんかっただけや」

「ならば、我々には教えても問題無かったのでは？」

「私も最初はそう考えたんやけどなぁ……念には念をや。
私がここにいるメンバーに話して広暁には話さんでって念を押したとしても、広暁はほぼ確実に聞いて回るやろ？
もし知っている人に広暁が話しかけてその人が知らないって言ったとしても、広暁ならほんの少しの何かの変化に気づいて情報を引きずり出しそうで怖いんや。

今回は聞いたのがたまたまスバルとティアナ1セットだけやからよかったけど、スバルかティアナ1人だけだったら確実にゲロってるで？」

つまるところ、今回の試験方法は広暁が対策をとりやすく、なおかつ、それをやられるとまずい試験であるということである。
恐らく、対策をバリバリにとってきたのでは広暁の力を測れないとはやてはふんだのだろう。

「あ、あたしは！　そんなこと…ないと……思います……」

「それだけ沈んだ声で言っても説得力がないわよ、スバル……」

あたしも隠し通せる自信はありませんけど、と付け足すティアナ。
広暁の知らないところで、広暁の評価はどんどん上がって？　います。

～一方こちらは？～

「広暁君、気づいてくれたかしら？」

「彼なら気づいてると思うよ。何しろ姉さん、もう１５分位手を振ってたからね」

なのは達とは離れたところにいる、聖王教会教会騎士団御一行。
その集団のトップである教会騎士カリムと、義弟にして本局査察官であるヴェロッサはのんびりと話していた。

「でもさ、姉さん。彼を好きなのはともかくとして、アプローチはしたの？」

「それが……全くできないのよねぇ。私の立場柄、広暁君に会うことは簡単には出来ないから」

「姉さんの権限を使えば簡単じゃないか」

「そんなことをしたら『強引な女』って思われるかもしれないじゃない。
広暁君にはもっと奥ゆかしいところを見せないと！」

（まったく……変なところで奥手だねぇ、我が姉は）

広暁に気があるカリム、それを見てちょっかいを出して楽しむヴェロッサ。
女性の騎士は呆れ顔であるが、男性の騎士はどことなく怒り顔である。
仮に一段階進んだとしても、まだまだ波乱はありそうだ。

「シャッハの調子はどうかしら？」

「万全だよ。今はもう、待ちきれなくてウズウズしてるんじゃないかな」

～まぁまぁ落ち着いて～

試験開始まで、残すところあと5分。
各々それぞれの開始位置に立ち、お互いの姿を確認。
ホルスは審判団の所へと行っている。
少し心配した広暁だが、はやてとヴォルケンリッターもいるのでまぁ大丈夫だろうと考え、再び目の前の教会騎士を見て軽く会話をする。

「つまり、模擬戦をしてシスター・シャッハに認められればいいんですね？」

「要約するとそうなります。あ、シャッハで構いませんよ？」

「……せめてシャッハさんにしていただけませんか？」

「駄目です。それと、出来れば敬語も止めていただきたいですね」

「（……どうしてこうなった）分かったよ……シャッハ」

試験の内容は簡単である。

シャッハと1対1の模擬戦を行い、その内容を見たシャッハが合否を判断するのだ。

更に、この試験には追加ボーナスのようなものがある。

観客…もとい管理局員＋教会騎士の一定数が広暁をBランク以上だと認めれば、例えシャッハの判断が不合格でも合格することが出来るのだ。

なお、試験時間は1時間。それなりに長期戦である。

だったら何故ホルスと一緒に来いと言われたのか謎であるが、広暁は考えないことにした。

大方の予想はつくし、それ以上に、考えても答えが纏まりそうにないから。

期待と予測、その2つが必ずしも重なるとは限らないのだ。

ちなみにシャッハには魔力リミッターがかけられており、今は2ランクダウンでAランク相当にまで力を下げられている。

広暁を相手にするには、それで十分…というより、Bランク昇進試験にＡＡＡランクの魔導師が実力そのままで出るわけにはいかないのだろう。

「ただしこのボーナスは、あくまで私の判断が『曖昧』だった時に限ります。

明らかに不合格であると私が判断した場合は、例え一定数いっていても不合格ですから」

「了解。それはそうと、俺が敬語じゃなくていいならシャッハも敬語じゃなくていいんじゃ？」

「私はこちらの方が話しやすくて……申し訳ありません」

「いや、無理なら別にいいよ。話し方を強制するみたいな言い方になってごめん」

「構いませんよ（なるほど、ちゃんと相手のフォローも出来るようですね……）」

試験方法がこのようになったのは、単純に広暁の境遇にある。
次元漂流者に正規のBランク昇進試験の内容をそのまま、というわけにはいかないという上層部の判断らしい。
広暁が聞いたら「古い習慣を変えれんだけじゃん」と言いそうだが。
とにもかくにもそのようなことがあり、広暁の試験内容は試験官との模擬戦形式になった。

ここで問題になってくるのが試験官だ。
いくら急激に力をつけたとはいえ、広暁は世間一般の魔導師から見たらまだまだひよっ子扱い。
そんな魔導師相手に本局も地上本部も人員を割くわけにはいかなかった。
というより、割くことは出来るが、そこは大きな組織。
色々と柵（しがらみ）やら慣例やらがあるらしく、なかなか試験官が決まらなかった。

そこに出てきたのが、聖王教会教会騎士にして管理局少将の肩書きを持つカリム。

彼女の鶴の一声で試験官はシャッハに決まり、現在に至るというわけだ。

（なんか……カリムの「計画通り！」って声が聞こえてきそうだな……）

『マスター、気にしたら負けです』

「俺って分かりやすいか？」

『いえ、マスターの考えていることを分かる人は少ないと思いますよ？
私はマスターと四六時中一緒にいるのですから、きっと慣れたのでしょう。
マスターの考えていることは大方予測出来るようになりました』

「何それ怖い」

『気にしたら負けです』

「いい目してんねサボテンね」

『へっへ、３歳か』

「何故そのネタを知ってる」

『気にしたら負けです』

「（……普段こいつが何してんのか無性に気になるな……）」

『ネットの海は深いですよね』

「（……気にしないようにしよう……）」

（あれ？　私は無視ですか……？）

～弓対剣～

ガキン！！

試合の始まりは唐突だった。
試合開始のアラームが鳴った瞬間、シャッハがソニックムーブで加速。
両手に持ったアームドデバイス『ヴィンデルシャフト』のうち右手に持っている方を、広暁に向かって思い切り叩きつける。
普段の広暁ならこれを避けるが、ここはあえて『受ける』を選択。
シャッハの実力を計るためであり、今からの闘いの参考にするため。
サジタリウスの上部でシャッハのヴィンデルシャフトの一撃を受ける。

（重い……！！）

ザン……！！

シュイン！　シュイン！

ドガアァァン！！

ザン！　ザン！

「速い……シグナム以上、フェイト以下ってところか？
単純な速さなら同じぐらい、魔法をプラスした速さでは向こうのが

上かな。
今のが最速ならまだ対処できるんだけど……。
Ａランクでこの速さなら、ＡＡＡランクだとどんだけ速いんだろ……？」

「私のソニックムーブに焦ることなく反応した……！？
中・遠距離型の中でも異質というわけですか…なるほど、思ったより楽しめそうですね」

このままでは力押しされると感じた広暁は、シャッハの勢いを利用してそのまま後方へと飛翔。
瞬時に矢を2本生成し、シャッハに向けて放った。
広暁が後方に飛んだことによって体勢が崩れたシャッハなら、当たらないまでも爆発の範囲から逃げられないはず。
そう考えた広暁だったが、シャッハは再びソニックムーブを使うことによりそのまま前方へと加速、広暁の後ろ下へと移動することにより矢の爆発の圏外へと逃げた。

（武器はトンファーっぽい剣、スピードを活かした近接戦闘型。
矢を放っても簡単には当たらんし、大技を使うにしても時間を作るのは難しそうだし……。
誘導矢主体でいくか……この間の人間昆虫と同じ戦い方になるけど、あれよりは確実に強いな）

（私のスピードについてくる反応速度、瞬時に矢を生成して寸分違わず私を狙う狙撃能力。
それだけでなく、ＡＡＡランクの大技『天創塵』を持っている。
矢を避けるのは容易いですが、固いバインドをかけられて天創塵をくらったら終わりですね……）

2人は思考する、どのようにして相手を倒すか。
広暁がシャッハを倒すに一番堅実な方法は、バインドをかけて天創塵を放つこと。
しかしシャッハのスピードでは普通の矢は避けられる可能性が高いので、魔力消費が若干多い誘導矢主体で攻めることになる。
最初から天創塵を放つという手もあるが、シャッハがその隙を逃すとは考えにくい。
また、例えシールド等の防御魔法を展開して耐えたとしても、近くにいられては天創塵を放てない。
あの技をシャッハが近くにいる時に放てば、広暁まで爆発に巻き込まれてしまう。

一方、シャッハが広暁を倒す方法は至極単純。
中・遠距離技を持たないシャッハにとって、広暁を倒す手段は『近づいて叩く』、これしかない。
しかし、それには広暁の戦闘スタイルがネックになる。
広暁は動物狙撃型、高速で移動しながらも的確な中・遠距離攻撃が出来るため、近づくのは容易ではない。
仮に近づけたとしても、即座に距離をとるだけの瞬発力が広暁にあることは分かっているため、近づけたとしても油断はできない。

(勝てる可能性は低いだろうし、どうやってこの人に喰らいつくか、だな。
あんまり手札を晒すと行動を読まれるだろうし、戦闘の経験値は圧倒的に向こうのが上。
様子見ってわけにもいかないし、アドを活かして闘うか……時間は稼いだほうがいいしな)

(空間シミュレーターの外に出られないとはいえ、飛行能力をもつ彼の方が圧倒的に行動範囲は広い。

負ける気はしませんが、正直今まで闘ってきた中でもかなり厄介な部類の相手ですね……。
面白い……思わず当初の目的を忘れそうですよ……！！）

瞬間、広暁の足元に魔方陣が展開、矢を番える動作をする。
シャッハは魔法矢が飛んでくると考え移動を開始しようとするが…
…矢が飛んで来ることはなかった。

『朧月（おぼろづき）』

ヴィ――――――――――――――ン……！！

「っ！？」

グラッ…！

『朧月（おぼろづき）』……弓状のデバイスならではの魔法であり、広暁がユーノから無限書庫の閲覧許可をもらうことで見つけた本に載っていた魔法。
弦を弾く音を起点とし、音が届く範囲にいる全ての生物に対して不

快な音を発する音撃を放つ魔法。
加えて高周波の音を出すことで生物の三半規管を揺らし、平衡感覚すら失わせる魔法だ。
広暁とシャッハの距離は約１０m、十分に音が届く距離。
たまらず吐き気を覚えるシャッハだが、うかうかしてはいられない。
焦点がハッキリしない眼を開けたまま魔力で両足を強化、一気に広暁との距離を取る。

（この状態で闘うのはまずい、せめて今は距離を……！！）

シュイン……！！

広暁が追いつけないであろう速度で逃げるシャッハ、広暁はそれを追うことはしない。
もう既にシャッハは広暁の視界内にはおらず、攻撃のしようがないのだ。

しかし……シャッハはこの時考えるべきだった。
どうして広暁が矢を一本も放たなかったのかを。

既に視界内にいないとはいえ、それは『頭脳がそれを認識したら』の話。
広暁の反射神経なら、シャッハが逃げようとした瞬間にも矢を射ることが出来たのかもしれない。
仮に反応出来なかったとしても、朧月を使った後すぐに矢を射るという攻撃パターンもあったはず。

それでも広暁が矢を放たなかった……その理由を考えるべきだった。
朧月を発動し終えてなお、未だに広暁の足元に魔方陣が広がっている意味を。

『準備完了まで、残り９９％』

第３８話「いいね！　いい試験だよ！」（後書き）

第３８話、いかがだったでしょうか？
少しネタ的な要素を入れましたが…分かる人はいるのでしょうかね？

そしてもう一つ、またまたオリジナル魔法です。
近々広暁が使用した魔法のリストをあげる予定ですので、よろしくお願いします。

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第３９話「民間協力者だろ…！？　空戦魔導師だろ！」（前書き）

第３９話です。

まだまだ戦闘シーンが続きます。
そして相変わらずの広暁クオリティ。
こんな戦闘シーン、他の作者様の戦闘シーンでも無いような気がします。

前置きが長くなってしまいましたね、ここらへんにしておきましょう。
では。第３９話、始まります。

第３９話「民間協力者だろ…！？　空戦魔導師だろ！」

～加速と停滞～

（勝ってる手札は射程と行動可能範囲。だけど……）

シュイィィィン……！！

ザン……！

ドガァァァン！！

ガラガラガラガラ……！！

（全然意味ねぇ――――――――――！！）

闘いは膠着していた。
広暁が遠距離から誘導矢を放ち、シャッハがそれを避ける。
隙を見てシャッハが広暁に近づき、迎撃しながら距離をとる。
このような攻防が、もう１５分以上続いていた。

もっとも、『攻撃を当てる』という意味では広暁のほうが分が悪い。
誘導矢は確かにシャッハを追うが、それは遮蔽物が何もない空間でこそ真価を発揮する。
荒廃した都心を想定したこのフィールドでは、誘導矢の通り道に幾らでも遮蔽物があるので、それを利用して防がれてしまう。
また、朧月を使おうにも、使おうとすればシャッハは音が届く範囲から退避してしまうのだ。

（よっぽどかシグナムの方が闘いやすいぞ、これじゃあ。あの人基本飛んでるし。
対陸戦魔導師がこんなにやり辛いなんてなぁ……単純なアド差はあんまり意味ないのか？
……いや、このフィールドだからこそか。思い込みは駄目だ、臨機応変に対応しないと）

（攻撃を防ぐのは容易いですが…やはり近づけないのがネックですね。
私のスピードに簡単に反応しますし、何より近づこうものなら矢の弾幕が飛んでくる。
威力は大したことないですが、あの数と追尾機能は厄介です。
このままじゃ私の方が先にスタミナが切れますね……）

シャッハも、『攻撃が届かない』という意味では分が悪い。
誘導矢を避けているうちに段々と広暁との距離は離れていくし、仮に近づこうものなら矢の弾幕が飛んでくる。
幸いにして直接被弾してはいないが、数本は爆発に巻き込まれてダメージをくらっている。
元がＡＡＡランクとはいえ、やはり空戦魔導師相手では分が悪いのだろう。

（『あの技』をまだ使うわけにはいかない。
彼の能力と性格から考えて、一度見たら対抗策を考えるはず。
何より、彼の反応速度から考えて確実に仕留め切れるとは考えにくい。
確実に仕留められる状況で使わないと意味がない。
本当に…頭脳派と闘うのは骨が折れますね……！！）

頭の中では愚痴りながらも、その顔は非常にいい笑顔のシャッハ。

感情の赴くまま、本能の従うままに闘うシグナムとの模擬戦とは違う。
頭脳をフル回転し、策を張り巡らせ、相手の一挙手一投足から情報を得る頭脳戦。
久方振りとも言える頭脳戦に、シャッハは興奮を隠せずにいた。

（なんか……凄い良い笑顔だ……）

その笑顔を向けられた広暁はたまったものではないが。

～難しいよね～

「全然進まないね？」

「戦闘スタイルが真逆だから仕方ないわよ。
魔導師ランクは圧倒的にシスター・シャッハが上だけど、彼女は陸戦魔導師。
空を飛べる兄さんとは行動可能範囲に差がありすぎるわ」

「動物狙撃型対近接戦闘型。
行動可能範囲はお兄さんが上ですが、シスター・シャッハは巧みなフットワークでお兄さんの誘導矢を避けていますね」

「お兄ちゃんは攻撃を当てられず、シスター・シャッハはお兄ちゃんに近づけない。
どちらかが相手の意表を突くような策を講じない限り、膠着状態は続きますね」

（（（（（（（（（（……長男の試合の応援にきた下の子みたい……））））））））））

広暁　↓　長男
ティアナ　↓　長女
スバル　↓　次女
エリオ　↓　次男
キャロ　↓　三女

こんな図式がここにいる8人の頭に浮かんだのは、5人には内緒である。
人数が合ってない？　リィンとザフィーラも人数として数えたからです。

「しかし、結果として広暁は勝てないでしょうな」

「なんやシグナム、広暁を応援せえへんのか？」

「客観的に考えた結果です。
どんなに急激に力を付けたとしても、広暁はまだまだひよっ子の域を抜け出せていない。
体に刻まれた戦闘の経験値は、圧倒的にシスター・シャッハの方が上なのですから。
どんなに反射神経がよくても、瞬発力に優れていても、洞察力に優れていても、魔力運用能力に天賦の才能があっても。
あいつには圧倒的に経験というものが足りないので」

「ボロクソ言うなぁ～……でもまぁ、シグナムの言う通りかもな。
空を飛べるっていう圧倒的なアドバンテージを含めたとしても、ただそれだけや。
長い年月をかけて磨いたわけでもない、必要に迫られて身に付けた能力。
生まれ持った洞察力と身体能力を入れたとしても難しいかもな」

必要に迫られて身に付けた力。確かにその通りだが……果たしてそれだけが広暁の力だろうか？
いや、違う。広暁の力の本質は、そのような目に見えるものではない。
その本質は……目に見えない才能。
生まれつきの才能であり、学業・スポーツ・趣味のカードゲームの各分野において、平等に好成績を残した広暁が持つ才能。

「もっとも……広暁の力の本質はそこにはあらへんけどな」

「そうです。それに何より……」

「「勝てないだけで負けるわけではない」」

～才気煥発～

（準備は上々……後は貯まるのを待つだけか。
発動できれば８割方俺の勝ちは決まるけど……そう上手くいくはずないよなぁ。

スピードとパワーは俺なんかよりはずっと上だけど、それじゃあ精々ＡＡランク止まり。
シャッハをＡＡＡランクに押し上げた、何か切り札…いや、十八番敵な技が必ずあるはず。
現段階で不利な状況のシャッハがそれを使わないってことは……その技が連発出来ないかそれとも…一度使ったら対抗策を簡単に立てれるか。
まだ断言は出来んけど、シャッハはほぼ確実に戦闘特化型。
シグナムやヴィータ、フェイトやなのはと同じタイプだ。
……あれ？　隊長・副隊長陣は全員戦闘特化型？　それでいいのか？
……って危ない危ない、また思考が別方向に行くところだった）

マルチタスクを使って思考を終えた広暁は、シャッハを探すために探索魔法を発動する。
現在広暁はビルの屋上に足をつけており、空は飛んでいない。
空を飛べるのは確かに便利だが、当然飛ぶのにも魔力を使う。
ただでさえ持久戦であるのに、余計な魔力は使いたくない。
例えシャッハがどこかビルから飛んで来ても、屋上を突き破って出て来ても。
広暁はそれを躱せる自身があったので、今は空を飛んでいない。

（探索範囲、１０ｍ…２０ｍ…４０ｍ…８０ｍ…）

段々と探索範囲を広げながら、広暁はマルチタスクを使って先程の思考を再開する。
シスター・シャッハが持つ十八番の技、それは一体何であろうか？

（単純に考えるなら、スピードやパワーをもっと上げる魔法。
後は……何だろ？　いかん、全然アイデアが浮かばん。
ゲームなら一つだけ遠距離砲撃用の技を持ってたりするんだけど…

…それじゃあシグナムじゃん）

さすがにトンファーから砲撃は無いだろうと考え、広暁は思考を再開する。

しかし……何かが引っかかる。

（確かにシャッハは近接戦闘型だけど……何であんなにたくさん攻撃をしかけてきたんだ？

俺がシャッハのスピードに反応出来るのは分かってるはずだし、もっと隙をついたり搦手を使ってもいいはず。

正面から正々堂々ってタイプ……でもないよな、あれは戦闘を楽しむ人の顔だ。

攻撃がそうなりがちなだけで、戦闘に卑怯なんて言葉は存在しないって言いそうだし。

俺に何か…意識を植え付けたい？　近接戦闘しか出来ないイメージとか？）

仮に近接戦闘しか出来ないイメージを植えつけたとしても、裏なんて簡単に読める。

広暁が予想した通り、想定外のスピードで攻撃を仕掛けるか、遠距離攻撃を使うか。

ならば、彼女が考えているのは……自分の考えの上を行く何か。

「いいねぇ……予想通りになるほどつまらんことはないからな。

俺の考えの上を行く策略……一体どんな手でくるのか……」

自分にはない圧倒的な戦闘経験を持つ、シャッハが考える策略。

それにどう対応するか……広暁の心は知らず知らずのうちに高揚していた。

（全然網にかからん…俺の探索魔法に穴が？
それか…対探索魔法用の魔法でも使って網にかからんようにしてるのか？
とりあえず探索魔法は終了して、空に飛んでみるか……）

ズオォォン……。

「っ！？」

クルッ！！

「ハアアアアア！！」

ズゴオオォォォォン……！！

＜シャッハｓｉｄｅ＞

さ～て……どうしましょうか？

近づけたのはいいですけど、確実に彼を仕留めるには頭を……しかも一撃で昏睡出来るような一撃を叩き込まないといけない。

あまり近くに出てはそれだけの威力を出せるだけの勢いがつきませんし……かといってあまり離れすぎても彼の反射神経からして確実に反応するでしょう。

賭けに出るのは嫌いじゃないですが、彼相手ではそれも分が悪い。

仕方ありません……多少不安は残りますが、近づいてやる他ないで

すね。
遠くから仕掛けて反応されるよりはマシです。

「いいねぇ……予想通りになるほどつまらんことはないからな。
俺の考えの上を行く策略……一体どんな手でくるのか……」

なるほど……彼は本当に頭脳戦を楽しむタイプですね。
元の世界にいた頃はスポーツで全国クラスの腕を持ち、それなりの難関大学にも通っていた。
趣味のカードゲームとはいえ、全国クラスの腕前を持っている。
これだけ多彩な分野で好成績を収められたのも、その好戦的な性格故というわけですか（どれか一つに絞ればもっと上も目指せたでしょうに……）。
……好戦的というと誤りがありますね、彼は単純に、闘って勝つのが好きなのでしょう。
それも肉弾戦闘ではなく、頭を使って闘い、勝つのが。
ですが、今はその性格が命取りですよ。
この隙…私が逃すとお思いですか？

ズオォォン……。

「っ！？」

クルッ！！

「ハアアアアア！！」

ズゴオオォォォォン……！！

～油断大敵～

それは、正に一瞬だった。

背後に何かを感じた広暁が振り向いたら、もう既にヴィンデルシャフトの打撃をくらって吹き飛ばされていた。

隣のビルまで吹き飛ばされてビルの壁を数枚貫いてようやく止まった広暁は、何とか壁にもたれかかりながら立ち上がる。

「――――――――っ！？　これがバリアジャケットの上からの一撃かよ……！？」

バリアジャケットは、なにも服の部分だけバリアが張られているわけではない。

魔導師の体全体を覆うように防御膜が張られており、それは首から上も例外ではない。

広暁の場合、更に額を守るようにバンダナが巻かれているのだが、シャッハの打撃は見事にそれを避けて広暁に当たった。

意識が飛ぶとまではいかないが、それは余りに強すぎる一撃。

シグナムとの近接戦闘訓練で慣れはしたもののやはり痛い、そして気持ち悪い。

頭の中を思いっきりシェイクされたような気分だ。

『申し訳ありません、マスター。咄嗟にバリアを張りましたが、強度が足りませんでした』

「意識があるだけ十分だ……準備はどうなってる？」

『残り約１０％です』

「ＯＫ、後は俺がシャッハの攻撃から逃げ続けるだけだ」

軋む体と揺れる脳にフィジカルヒールをかけて回復させながら、広暁は結論を出す。

マルチタスクのおかげで、シャッハの力の大体の目星は付いている。

後は、その力をくらわないようにするだけ。

「多分だけど、シャッハは空間跳躍系……もしくは物質透過系の魔法に精通してる。

テレポートとか通り抜けとか、出来る可能性が高い。

だから今も、俺がほとんど反応出来ない位置にいきなり出てこれたんだと思う」

『探索魔法にかからなかったのも、ビルの中…コンクリートと同化していたか、空間転移魔法を使ったからだと？』

「あの攻撃の角度からして、屋上のコンクリートをすり抜けた可能性のほうが高いけど。

これからはもっと上位の探索魔法を使えるようにならんとなぁ…またシャマルに教わるか」

そこまで行って広暁は、シャッハがいるであろうビルの方を見る。

しかし案の定と言うべきか、そこにシャッハはいなかった。

既に退去し、こちらの隙をうかがっているか。
もしくは、またテレポートなり通り抜けなりをして広暁に不意打ちをするか。

「頭いてぇし、気持ち悪いし……今飛んだら吐きそうだな……」

『しかし、早くここから逃げないとまた不意打ちの可能性が……マスター、まさか!?』

「その方が確実だろ」

『しかしそれではマスターの体が……!!』

広暁の言葉を聞いたサジタリウスは、必死になって広暁を止めようとする。
広暁が今からするであろう行動、それを止めるために。

「だけど、このままじゃほぼ確実に俺の方が先にばてる。
シャッハはフラフラしながら逃げる俺をあと一回殴るだけでいいんだし。
だったらこのままここにいて、向こうが攻撃してくるのを待ってるほうが効率がいい。
いや…念には念をだ、屋上に行くぞ」

『……私は急いで準備を終わらせます。それまでばてないで下さいよ?』

「善処する……これが本当に戦場なら一目散に逃げるのになぁ……。
いや、そもそも戦闘すらしないか…会った瞬間逃げるな」

『あいにくとこれは試験です。最後まできっちり闘って下さい』

「きつい言葉、ありがとさん」

『礼には及びません』

仮に人間だったならとてつもなく気持ちの悪い笑顔を浮かばせながら言ったであろうサジタリウス。

広暁もサジタリウスを持つ左手に何故か力が思いっ切りこもるが今は気にしない。

（さて……あと一撃頭にくらわせれば終わりですが、どうしましょう？）

一方シャッハは、既に広暁がいるビルに侵入していた。

それも普通にではない、ビルを構成するコンクリート壁の中を泳ぐように移動して、だ。

（仮に私の能力がばれたとしても、もう問題ではありません。

こうしてコンクリートの中に潜っていれば、彼が使える探索魔法では私は発見できない。
もし私の能力が分かって逃げるにしても、あれだけ強力な一撃をくらわせたのだから立っているので精一杯のはず。
仮に反撃の方法があるとするなら……私に狙われるのを覚悟でビルの外に逃げるか、私が攻撃した瞬間にカウンターを合わせるか。もしくは……天創塵でビルごと破壊するか。
いずれの手段にせよ私の方に圧倒的に分があるわけですから、ここは確実にいきましょう）

ビルの壁の中を泳ぎながら、丁寧に各階を探していく。
一通り探しても見つけられないので、恐らく広暁は屋上にいるのだろう。
そう考えたシャッハは屋上の床から顔だけを出し、広暁を探す。

「……」

（あれは……朧月の構え？）

シャッハが屋上で見たのは、朧月の構え……弦を引いた状態で屋上に佇む広暁の姿だった。
先程の一撃が効いているのか、体が時たま不規則に揺れている。
立っているだけで精一杯という感じだ。

（私が先程と同様の手段で攻撃してくると踏んで、の構えでしょう

か。
しかし、それにしてはおかしいですね……）
そう、この方法は広暁が満身創痍の現状では意味がない。
確かに朧月は有効だが、ただバリアを張ったり攻撃を避けるよりは僅かに時間がかかる。
ましてや今の広暁は、立っているのがやっとの状態。
一撃昏睡を狙う必要がないので、先程より近づいて攻撃しても何の問題もない。
（一体何を考えて…いえ、これ以上考えても意味がありませんね。
やはり私には、頭脳戦は不向きのようです。
近づいて叩く、ただそれだけ……）
そこまで考えて、シャッハは考えるのを止めた。
あとは、たった一撃、至近距離から広暁の頭に一撃仕込めばいいだけの話なのだから。
そしてシャッハは進んでいく、広暁の近くへと。
段々と距離が近づき、広暁までの距離は残すところ約５ｍ。
（いきます……！！）
ズオォォン……。

「ハアアアアア！！」

ズゴオオォォォォン……！！

第３９話「民間協力者だろ…！？　空戦魔導師だろ！」（後書き）

第３９話、いかがだったでしょうか？

広暁君…油断してしまいましたね。

自分が決めた目的の為には最良の方法をとる広暁ですが、同時に上手くいきすぎることに対して多少の不満を感じることがあります。

まだまだ甘いですね、彼も。

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第４０話「篠雹霰・参式」（前書き）

第４０話です。
タイトルの通り、広暁の新技のお披露目です。

では。第４０話、始まります。

第４０話「篠雹霰・参式」

～篠つく雹霰～

ズオォォン……。

「ハアアアアア！！」

ズゴオオォォォォン……！！

「っ！？　これは……！！」

ジャキイイィィィィン……！！

確かにシャッハは広暁を攻撃した……しかし。
攻撃をくらったはずの広暁はまるで実体がなかったかのように消えてしまったのだ。
そして今、彼女の体を縛っているのは……

『ディレイドバインド』

指定した空間に侵入した者に対して発動する設置型捕縛魔法『ディレイドバインド』。
それが彼女の体を縛っていた。

「ふぅ……引っかかったか」

「くっ！？」

シャッハが振り返る。
その視線の先にいたのは、屋上へと続く階段がある小さな建物、その上に建てられている給水塔の上に座っている広暁だった。
その眼は正に、罠にかかった獲物を見る狩人の眼。

「……屋上は何もまっ平らじゃない。
屋上へと続く階段はほぼ確実にこうゆう建物があって、雨風を凌げるようになってる。
その上に給水塔があるのも常識かな」

「しかしこの程度のバインド、簡単に解いて……！！」

そう言ってシャッハは力任せにバインドを解こうとする。
満身創痍の状態の広暁がかけたバインドなら簡単に破壊できる、そう考えて。
しかし……その考えは甘かった。

「……封（ふう）」

シュイイィィィィン……！！

ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！

シュイイィィィィン……！！

たった一言。

たった一言広暁が言葉を放った瞬間、シャッハの体は拘束されていた。

それはバインドとは違う。

シャッハを囲うように出現した、それは三角錐の結界魔法。

突然のことにシャッハは戸惑うが、そこは歴戦の魔導師。

冷静にバインドと結界魔法の術式を解析しようとしながら、破壊する手段を探る。

（そんな…魔法が使えない……！？）

だが、シャッハは破壊出来ない。

力任せに破壊できるバインドはともかく、この結界魔法は破壊できない。何故なら……

『封印結界：ＥＴＰ（エクスクルージョン・トライアングラー・ピラミッド）』

「ＥＴＰ…完全に魔力素を排除した封印結界。
魔力結合を阻害するＡＭＦとは違う、魔力素が内に存在しない空間に相手を閉じ込める封印結界だ」

いつもの広暁ならこんな説明はしない。
シャッハがＥＴＰにかかった瞬間、即座に次の動作に転じていただろう。
ならば、何故態々こんな負けフラグのようなことをするのか？
それを説明するには、この試験の合否方法を思い出してほしい。

『シャッハが合格と認めずとも、観客の一定数が認めれば合格となる』

つまり…広暁は見せつけているのだ、『自分はこんな結界を使える』ということを。
ＥＴＰを説明することで、自分がこんなに難しい結界を使えるということを見せつけているのだ。
もっとも、これはあくまで『合格』という2文字を勝ち取るために行なっている手段であり、一切の感情は無視して行なっている。
『戦闘に下らんパフォーマンスは不要』と言っても全く違和感が無い広暁にとって、このパフォーマンスは気持ち悪い行為以外のなに

ものでもない。

「ＥＴＰ……噂に聞いたことはありますが、まさか私がこれにかかるとは……。
しかしこの魔法は、下手したらＳＳランクの魔法。どうしてあなたが使えるのですか？」

当然、普段の広暁なら、これにも返答することはないだろう。
しかし、『合格』という2文字を勝ち取る可能性を上げるため。
そのために広暁はシャッハに懇切丁寧に説明する。

「それは『結界が大きくて発動に時間がかからなくて遠距離からでも発動できる場合』だ。
今使ってるやつはシャッハ一人分の大きさしかないし、発動にも２０分ぐらいかかってるし、発動するには俺がシャッハと直接接触する必要があった。
だから俺みたいな新人で魔力量が少ない魔導師にも発動できた、それだけだ」

「発動に２０分……私と直接接触……まさか！？」

覚えているだろうか？
広暁は一度…いや、正確には二度だが、ここでは一度ということにして。
広暁はシャッハと一度だけ接触している。
それは…戦闘開始直後、シャッハの攻撃を受けた瞬間。
ヴィンデルシャフトの攻撃をサジタリウスで受け止めた時、この時に一度だけ度接触しているのだ。

「……つまり私は、ずっとあなたの掌の上で踊らされていた、とい

うわけですか。
私が戦闘開始直後すぐに攻撃するような性格と知った上でわざと攻撃を受け、ＥＴＰの設置場所を決め。
この結界の準備が終わるまで適度に反撃をしながら逃げ続けて。
私の攻撃を態(わざ)と受けることで私の油断を誘い。
あなたが作った幻影を倒したと思った瞬間、バインドをかけられ。
そして私はＥＴＰをかけられたと」

「御明察…と言いたいところだけど、当たってるのは６割ぐらいかな。
最初からこうする目的ではあったけど、攻撃をくらったのは俺の不注意だし、幻術魔法を使ったのはその場の思いつきだ。
何も目的達成の手段まで俺は細かく決めないよ？　ある程度考えはするけど。
戦闘に細かい手順を決めてたら視野が狭くなって簡単に不意を突かれそうだし。
おかげでもう魔力が底をつきそう…魔力量ＡＡ＋の人間がここまでやるもんじゃないな」

話しながらも、広暁はシャッハへと近づいていく。
その歩みはどこかぎこちなく、見ていて危なっかしい。
シャッハの強烈な一撃と、もうすぐ魔力が底をつくという兆しなのだろう。

「最後に説明しとく」

「……何をですか」

「俺が朧月を使った後、俺の足元にはまだ魔法陣が残ってた…シャッハは見てないだろうけど。

それがどういう意味か……分かる？」

「どういう意味って……まさか、２つの魔法を同時に！？」

「正解。正確に言うと、あれは朧月の魔法陣じゃない」

つまり広暁は、脳内で術式を構築した朧月、そして魔法陣を展開して発動した別の魔法を使ったということになる。

となると気になるのは、広暁が魔法陣を使用して発動した別の魔法。

そこでシャッハは思い出した。

逃げる間際に感じた、頬をかすめた風の感触を。

サワッ……。

「あの時、私の頬を風が掠めたのですが……それが？」

「あれがシャッハを今から倒す魔法…『篠雹霰・参式』の準備だ。

本当は見えないようにする必要はなかったんだけど、保険として迷彩魔法を使っといた。

まぁ、おかげでばれずに力を貯めれたけどな。

シャッハの傍を通った後、あれを上に軌道修正して準備開始……ってわけ。

シャッハの方に飛んでいったのは俺のミスだけど。

朧月との兼ね合いのせいで仕方ないとはいえ、な」

スッ……。

そう言って広暁は人差し指を天へと向ける。

その先を追うように上を向くシャッハだが、そこにあるのは澄み切

った青空と白い雲。
「何もないじゃないですか」と正に言おうとしたその瞬間……

バチン！！

広暁が右手で指を鳴らした、その瞬間……

「な……あれは一体……！？」

ズオオォォォ

後はここから飛んでいったらほぼ確実に魔力切れだ。
ホント…魔力量が多い人が羨ましい」

そこまで言って広暁は、息を整えるかのように大きく深呼吸をする。
数回の深呼吸を終えた広暁は、再び話を始めた。

「俺が使ったＥＴＰはまだ不完全でさ。
中からの衝撃には強いけど、外からの衝撃には結構弱い。
矢を数本くらったら破壊されるから、ＥＴＰを解除した瞬間に逃げようなんて考えない方がいいよ。
同時に発射される矢はショットガン以上、連射速度はマシンガン以上だからな」

「本当にあなたは…最後の希望まで持っていってくれますね……」

「一応、な。そんじゃ……っと、そういえば。どうして俺の探索魔法にかからなかったんだ？
コンクリートの中に潜ってる時はともかく、俺の位置を確認する時は顔を出す必要があっただろ？」

「……そこまでばれているなら、もう隠す必要はありませんね。
私はただ、対探索魔法用の結界を、私を包むように使っていただけです」

「そういう魔法もあるのか……試験が終わったら調べてみようかな」

フワリ……。

そう言って広暁は飛んでいく、篠雹霰・参式の有効射程外…いや、爆煙すらも届かない場所へと。

途中何度か吐きそうに口を抑えたりフラフラするのは一種のご愛嬌、
という奴だろう。

そしてこれこそ……本当のラスト勝負。
シャッハが篠雹霰・参式を耐えきるか否か。
仮に耐えきったとしても、広暁に攻撃をするだけの力が残っている
のか？
全てを知るのは……2人だけ。

『篠雹霰・参式』

ズドドド

第４０話「篠雹霰・参式」（後書き）

第４０話、いかがだったでしょうか？

今回は４つ、広暁が新しく魔法を使いました。
使用魔法のほうも更新しますんで、そちらも是非読んでください。

それと…広暁が喋りすぎなことに違和感を感じられる人もいるかもしれませんが、これにもちゃんと理由がありますよ？

では。感想・意見・間違い訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第４１話「始めは広く、終りは狭く」（前書き）

第４２話です。
ちょっとばかり間が空いてしまい、申し訳ありません。
今資格試験の勉強をしてまして、これからも投稿に間が開く可能性が高いです。
私の小説を読んでくださっている読者の方には申し訳ありませんがご容赦ください。

では……第４１話、始まります。

第４１話「始めは広く、終りは狭く」

～目覚めたらそこは～

パチッ。

「……知らない天井だ」

ムクッ。　キョロキョロ。

「……知らない部屋だ」

『目覚めて第一声がそれですか』

テンプレ乙と言うべきか、広暁は知らない場所での目覚めにぴったりな言葉を言った。

サジタリウスがとてつもなく呆れてる気がするが、それを華麗に無視して広暁は、簡潔に言葉を紡ぐ。

「おっはよ～。どんぐらい寝てた？　ここはどこだ？」

『寝ていたのは４時間程、今は午後９時です。

ここは聖王教会の一室……以前訪れた、騎士カリムが勤める教会の一室です。

ちなみにホルスは、シャッハと模擬戦をしています』

「……倒れた後聖王教会系列の病院に連行されて治療、治療が済んだら教会に戻ってぐっすりってか？」

『それを説明するのは』

ニョキッ。

「私の仕事ですね」

「……通り抜けフープ？」

『（突っ込んだら負けだ突っ込んだら負けだ突っ込んだら負けだ……！！）』

そんなこんなで広暁が寝ている部屋に聖王教会の人間が集まった。

と言ってもシャッハにカリム、ついでにヴェロッサの3人だけであるが。

ホルスも戻ってきており、今は広暁の腕の中で気持ちよさそうに撫でられている。

よっぽど広暁が心配だったのだろう（何だかんだで2度目だし）。

「それでは、まず私が現状を説明します。

広暁さんはBランク試験に合格となりました。

後は教会の者と軽い面接をするだけですので、それだけ伝えておきます」

「よかった～……受かってたか」

「私と引き分けておいて何を言っているのですかあなたは……。
陸戦と空戦の差があるとはいえ、私はこれでも陸戦ＡＡＡランクなんですよ？
それがＡランクまで下げたとはいえ、Ｂランク昇進試験の相手に引き分け…引き分け……。
ひ…き……わ……け……」

ズゥ――――――――――――――ン……。

「……その……」

「ごめんなさいね、広暁君。放っておけば治るから」

「下手に慰めると逆効果だからね。しばらくは放っておいてもらえると助かる」

部屋の隅で体操座り＆amp;片手で膝をかかえて片手で床に「の」の字を書くという強烈なコンボを発生中のシャッハは軽く無視されました、はい。

「マルチタスクの複数並列高速使用による弊害が確認されたわ。
今夜一杯は頭が重く感じるでしょうけど、しっかり養生すれば明日には治るわよ」

「いくら元が器用でも、マルチタスクの使い過ぎは褒めた行為じゃないね。

まだまだ経験が浅いんだから、これから着実に伸ばしていったほうがいいよ」

「身に染みて理解しました」

適度に会話を進めながら3人。

そうしているうちに、広暁は何故か素直に受け入れていることに疑問を感じて質問をした。

「引き分けらしいけど……最後のほうの記憶がないんだよね」

「記憶が？　どうして？」

「ちょっと失礼……」

ブワアァァン……。

ヴェロッサがそう言って広暁の頭に右手をかざし、脳内を探索。

一通り探して答えを見つけたのか、納得顔をしながら右手を離す。

「最後の一撃が効いたみたいだね。

今から僕があの時のことを説明するから、それで思い出すと思うよ」

～あの時のこと～

『篠雹霰・参式』

ズドドド

一秒間に数十発どころの話ではなく、その連射数は既存の質量兵器で及ぶものはないほど。
圧倒的なまでの連射をほこる、天創塵以上の制圧力をほこる魔法。
それがたった一人、シャッハ・ヌエラという魔導師に向かって放たれる。

その威力は、シャッハがいたビルだけでなく、その周囲のビルも瞬く間に破壊。
上空からの無慈悲な矢の雨は、ただ無情に降り注ぐ。

「……気持ち悪……」

それを離れたビルから見るのは、この魔法を発動した魔導師、墨谷広暁。
既にボロボロでフラフラの体を気合いで支えつつ、事の顛末を見守る。

「どうなるかなぁ……？」

『高確率でマスターの勝ちです。ですが、油断は禁物ですよ』

「だよなぁ……っと！？」

ズオォォン……！！

スカッ……！！

『フラグでしたね』

「うっぷ……やっぱりきたか……来ないでほしかったけど……おぇ」

「ハァ……ハァ……ハァ。この事態を想定していたのですか……！？」

ヨロヨロの広暁の目の前に現れたのは、案の定シャッハだった。
髪はボサボサでバリアジャケットはボロボロ、ヴィンデルシャフトは一つしか持っていない。
ぶっちゃけ髪型がアフロっぽいが、それに突っ込むと色々と面倒そうなので無視して話を続ける。

「物質透過……攻撃をくらってビルが崩れたとしても、崩れるビルの破片と融合しながら落下して、最終的に地面に潜れば受けるダメージは減らせる。
問題はそれをやるだけの魔力と技量が有って、俺の矢に耐え切るだけの耐久力が残ってるかどうか。
賭けは俺の負けだな……」

話しながらも2人は移動を続ける。
自分と相手の距離を計り、攻撃しやすい位置を見定めるために。

「そこまで計算に入れて……ですが、まだ構えるということは」

「降参する気はないよ」

魔力はほぼゼロ、頭は気持ち悪い、体はフラフラと三拍子揃っても、広暁は降参しない。
シャッハもバリアジャケットはボロボロ、ヴィンデルシャフトが二つなくても、まだ闘いを続ける。

「「……」」

2人…いや、広暁が足を止め、それに合わせてシャッハも足を止めた。
季節と時間帯の影響か、広暁から伸びる影は非常に長く、輪郭が光って見える。

ピュン！！

ブワアァァン……！！

スッ！！

「なっ……！？」

シュン……！！

ドガアァァン！！

それは、今シャッハと対峙している広暁の声ではない。
その声を発したのは、シャッハがいるビルから通りを一つ挟んだビ

ルの上にいる広暁。
驚きも束の間、気がついたら広暁はシャッハに後ろを取られていた。
先程までシャッハと対峙していた広暁はもういない。

「……どうして分かった」

「完璧すぎるのですよ、あなたは」

「完璧……過ぎる？」

褒め言葉のような、貶し言葉のような。
聞かされた答えのような、自分で出した答えのような。
相反する2つの解答、それらが広暁の頭の中でぶつかり合う。

「ここまで完璧に策を張っておいて飛んだら魔力が切れる？　冗談じゃありません。
あの言葉を信じるほど、私は素直ではありませんよ」

「……余力が残ってるだけじゃなくて、あれがシルエットだって見抜いたのは？」

「あなたは完璧過ぎるのです。
自分の性格や私の性格だけでなく、能力・魔法・特性。
戦闘に関する全てのことを網羅、頭に入れて、勝つためのプロセスを踏んでいく。
もしも仮にあなたが戦闘員ではなく、司令官として私を倒す任務についていたとしたら、私は簡単に倒されていたでしょう」

「……」

広暁の首筋にヴィンデルシャフトを突きつけながらシャッハは言葉を紡ぐ。
それはまるで、死刑囚に言葉を投げかける古の執行官のように。
死刑囚に生きる絶望と死ぬ絶望、その両方を味わわせるように。

「ですがそれも、『シャッハ・ヌエラ』という一人の人間であればの話。
一歩引いて考えたら簡単に気がつきました、これはフェイクだと。
私をＥＴＰで閉じ込めて長々と演説をしたのは、観客に「自分はこんなに凄い魔法が使える」ということを自慢して合格する確率を少しでも上げるため。
篠雹霰・参式をばらしたのも、ばらしたとしても私は防ぎようがないし、ＥＴＰと同じで合格の確率を上げることに繋がる。
ほぼ魔力切れと言ったのは、もし仮に私が攻撃を耐え切ってあなたに攻撃を仕掛けても、あなたを倒せるという慢心を抱かせるため。
そういう考えにいたれば、あなたの姿がシルエットとは思いもしないでしょうから。
もしそう考えていなかったら、先程の矢をくらって私の負けでしょうね。
シルエットと逆光のせいで、矢を構えるあなたを見つけるのは不可能に近いでしょうから」

「……シャッハはもっと突撃思考だと思ってたけど」

「失礼ですね。思考がそうなりがちなだけで、私は騎士。
頭で熱くなっても心は冷静です」

「……これが経験の差かねぇ……」

ふざけたセリフを真面目な顔で言う広暁、その顔に曇は無けれど晴

れてはおらず。
一体どこまでが計算でどこからが計算でないのか。
一体どこまでふざけていてどこからふざけていないのか。
まるでコロコロと天気を変える山のように、広暁の顔は色々な考えを彷彿とさせる。

「……ドカン」

ピュン……！！

「！？」

ドガァァァン……！！

～褒められた行為じゃない～

「……ってところだね。最後の最後で矢が一本飛んできて２人は吹き飛ばされ、気絶。
シャッハは１０分ぐらいで目覚めたけど、広暁君は４時間夢の中」

「そういえば……そんな作戦だったな」

「作戦？　あの最後の矢が？」

「奥の手って言ったほうが正しいかな。
最悪でも負けはしないように、篠雹霰・参式をほんのちょっとだけ残して待機させといた。
引き分けに持ち込めるだけの魔法矢を放てるようにな」

「……とてもじゃないけど、褒められた行為じゃないわね」

「どういう意味で？」

「そこまでして勝ち負けにこだわる必要があるの？
これは昇進試験、シャッハに認められることが重要なのよ？」

それはカリムの本心。
目的のために尽力するのは広暁らしいと言えば広暁らしいが、どこか抜けてる感が否めない。
それを明らかにするため、カリムは言葉を紡ぐ。

「性（さが）……かな。
負けたくないと思ったら負けたくない。
別に負けてもいいと思ったら負けてもいい。
シャッハ一人が判断するならともかく、観客のボーナス点があったからな。
そっち方向にいったほうがいいと思ったからいったただけ」

「……全ては計算の上での行動、ってこと？」

「負けるぐらいなら引き分けのほうがいいし。
つーか、最初からそっちのほうが目的だったかな。
勝てたらいいなぐらいしか勝てる確率はなかったし、引き分けに持ち込めただけで上々だ。
勝率が7割ぐらいの賭けを何回も繰り返して、あそこまでいったようなもんだし。
まぁ途中から視野が狭くなったせいで、後半の賭けは勝率5割を切ってたけど。
演技のつもりだったのに、後半になるほど演技じゃなくなってきちゃったし。
数ヶ月で完璧な戦闘思考になれるもんじゃないな～」

「「……はぁ」」

広暁の言葉を聞いたカリムとヴェロッサは、盛大にため息をついた。
広暁の腕の中にいるホルスと首からかけられているサジタリウスもため息をついたような気がするが気のせいだろう。

「……そうよね、それが広暁君よね」

「君との付き合いはまだ短いけど……君という人間がよく分かったような気がするよ」

「???」

（真面目な人って考えてたけど…違ったわね。
世間一般に対して真面目というわけではない。
自分自身に対して真面目なのね）

（守ると決めたら守る。やると決めたらやる。
ルールだから守るんじゃない、それがたまたまルールであっただけ。
まったく……今時こんな子がいるもんだねぇ……）

それが広暁という人間であり、広暁という人間の生き方。
どちらかと言えば古臭い人間の生き方かもしれないが、それが広暁という人間なのだ。

「そういえばさ」

「どうしたの？」

「結局、ホルスは何のために俺と一緒に来させたの？
管理局のお偉いさんに改めて説明するため？」

「広暁君……分かってて言ってるね？」

「８割方」

「それは私から説明するわ」

ピュン！

カリムの前に現れたのは空間ディスプレイ、それに呼応するように大きなディスプレイが出現。
それはホルスに関する詳細なデータのようで、広暁が分かる単語も多い。
さすがにミッドチルダ語を完璧に読めるわけではないのだ。

「平行世界の地球、そこで流行っていたカードゲーム。
それがこのミッドチルダという異世界に来て実体化。
圧倒的な戦闘力と知力を持ち、マスターである広暁君には服従…いえ、従順の意を示している。
間違いは無いわね？」

（従順…間違いじゃないか。ホルスが言葉を話せたら楽なんだけどなぁ）

「広暁君？」

「間違いない。このデータがどうしたの？」

「さすがにこれをそのまま報告するわけにはいかないわ。だから……」

そう言ってカリムがディスプレイを操作すると、そこに現れたのは報告書のようなもの。
映像から考えると、広暁が初めてミッドチルダに来た時にいた海浜公園であろう。

「幸いにも広暁君が発見された場所は、六課の管轄の範囲。
他の部署は手を出してないから、報告だけで済ませることが出来る」

「次元震に俺とホルスが巻き込まれて、そこに同時に現れたってことにするってこと？」

「データじゃなくて、報告するのは報告書よ？　多少のデータ改竄はばれないわ」

「俺がホルスのマスターだってことはどう説明したの？
見ず知らずの人間に、ホルス程強い竜が簡単に懐くとは思えないけど」

確かにそうだ。
ホルスの強さはなのはが認めるほどであり、加えてその知能は人間である広暁の言葉を理解するほど。
制限時間があるとはいえ、大きくなるも小さくなるも自分の意思で決められる。
それほどに竜としてハイスペックなホルスが、元民間人の広暁に何故従順の意を示すのか？

「それは…こういうことよ」

ピッ。

データの一部分が拡大され、広暁はそれを読む。

「え～と……『マスターとしての高い資質を墨谷広暁に見出したため』？」

「ホルスはアルザス出身の竜ということにしてあるわ。
自分を託すに足るマスターを求めてアルザスを放浪する竜、っていう設定ね」

「……ちょっと調べたらばれないか？」

「希少種ってことにしておけば大丈夫。
管理世界といっても、別に全てを把握してるわけじゃないのよ？」

「う～ん……了解（これ以上聞いても分からなそうだし）」

「それじゃあ、この話はこれで終わりね」

ピュイン。

ディスプレイが消され、部屋に静寂が訪れる……。

（え？　何故に静寂？　あれ？　何だこの空気は？）

広暁が俗に言う鈍感な人間だったとしたら、精々「静かだな」とか「何で黙ってるんだ？」とか言っているか、そもそもこの状況の不気味さに耐えられなかっただろう。

先程まで部屋の隅でウジウジしていたシャッハはいつの間にかいなくなっていて、カリムは落ち着きがないのかソワソワしており、ヴェロッサはそれをどこか見守るような眼で見ている。

それら全てを引っ括めて敢えて言おう、「この空気は不気味である」と。

嵐の前の静けさ、御用改め前の火付け盗賊改めの心情を広暁は感じ取った。

「それじゃあ…姉さん。成功を祈ってるよ」

「……ありがとう」

「（……デジャブ？）」

デジャブとは違う。

デジャブは一度も体験したことがないことを、さも体験したことがあるかのように感じることだ。

しかしこれから起きるのは、広暁は過去に体験したことがあること。

ただ単純に思い出していないだけで、一度だけ体験したことがあること。

「広暁君」

「な、なんでしょう？」

自他共に認める冷静な性格ではあるが、病み上がりでいつもより回らない頭。

そして、カリムから滲み出る何とも言えない覚悟のオーラ。

その他の要因も合わさり、広暁は間抜けな口調で返答をするが、カリムはそれを気にすることなく言葉を紡ぐ。

「私と……交際をしていただけませんか？」

第４１話「始めは広く、終りは狭く」（後書き）

第４１話、いかがだったでしょうか？
広暁の敗因は幾つかありますが、最も大きかったのはこれです。

『自分の考えに疑問を感じなかったこと』

初めての上級魔導師との本格戦闘・増えてきた使用魔法。
戦闘開始時は問題なかったのですが、時間が経つにつれて『戦闘を楽しむ』『予想外の出来事が嬉しい』のような感情が広暁の心の中に芽生えてしまいました。

それらの感情を疑問を感じることなく受け入れ、自ら考えた策にも疑問を感じなかった。
これが私の考える広暁の敗因です。
目的と手段がごっちゃになってしまったのですね。

……２０歳の元大学生に、そこまで冷静になれと言うのは無理があるかもしれませんが。
人間、理性が感情に打ち勝つのは不可能なのでしょうか？

では。感想・意見・間違い訂正等、宜しくお願いします。

第４２話「需要が高いのはこのタイプ」（前書き）

第４２話です。
ちょっと間が空いてしまい、申し訳ありません。
今回の話は前回の続きということで……これ以上は本文で♪

では。第４２話、始まるよ～？

第４２話「需要が高いのはこのタイプ」

～感情と理性～

「……俺の出身は知ってるよね？」

「可能性として最も高いのは、平行世界の地球。
異世界を横の次元とするなら、平行世界は縦の次元。
交わることはなく、行き来する技術も確立されていない……」

「戻れるにしろ戻れないにしろ、ミッドチルダに骨を埋める覚悟はある。
だけど、まだ俺のいた地球に戻る手段が絶対に存在しないって決まったわけじゃない。
もし戻れるなら戻りたい……その後どうするかはまだ決めてないけど。
そんな俺と付き合うことになっても、良いことはない……よ？」

「重々承知の上です。私のこの恋心……それをもう、止めるのは不可能なのです。
私はあなたに一目惚れをして……それ以来、ずっとあなたという男性に心を惹かれています。
あなたと初めて会って以来、あなたのことを考えなかった日はありません。
身勝手は承知の上です……どうか、私との交際を受けてはいただけませんか？」

（凄いストレートに告白された……俺の何がいいのかな？

外見にはそれなりに自信あるけど、中身に少し癖が……）

２０歳の青年らしく、広暁も過去…中学生の頃に女性と付き合ったことはある。
その時も女性のほうから告白されたのだが、気がついたら関係はなぁなぁになって破局してしまった。
今思うと周りに無理矢理くっつけさせられたような気がしないでもないが……今はこのことについて深く追求しないでおこう。

「あ～、その……俺の何がいいの？」

「そうですね……一言で言うなら『安心感』でしょうか。
最初会った時は全身に電気が流れたような衝撃でしたが、その後ずっと感じていたのは安心感でした。
一緒にして安心できる、広暁君になら私の全てを曝け出せる。
あなたのことを考えると、興奮する以上に安心感がこの体を包むのです」

（俺がカリムに感じてたのとほとんど一緒じゃん……カリムの方がオーバーだけど）

カリムの感想を聞いた広暁は安堵した。
何故なら、広暁がカリムに対して持っていた印象、それとほとんど一緒だったからだ。

良くも悪くも、カリムという女性は広暁より年上である。
それでいて教会勤めが長いため、優雅な仕草や言葉遣い、醸し出す雰囲気は堂に入ったものがある。
そんな、女性として理想的なカリム・グラシアという人間に惹かれないほど、広暁は唐変木ではない。

（……両想いから始まる恋愛なんてそうそうない、ほとんどの恋愛は片想いから始まる。
それから段々とお互いのことを知っていって……合うか合わないかを決める。
遊びで付き合う人が多いのも事実だけど……俺、頭堅いからなぁ）

幼馴染から発展する恋愛などそうそうない。
不良にからまれていた学園のアイドルを助けてそこから始まる恋愛は存在しない。
妹との禁断の恋愛？　寝言は永遠の眠りについてから言え。

世の中トントン拍子にいくものではないが、可能性という名のきっかけはそこら中に転がっている。
それに気づかないか、気づいていながら無視するか……どちらがより悪いとは言えない。
しかし両方に言えるのは、可能性を放棄していること。
些細な日常に潜むきっかけ、そこから始まるまるで樹形図の様に広がっていく未来。
その道を進む為に必要なのは……気づき、判断すること。

（平行世界・魔法・ホルス……俺の人生、劇的に変わりすぎだろ……）

それもまた人生。
何が起こるかわからないから面白い、簡単に予測できる未来などつまらない。
計画通りにいくのは気分がいいが、同時に障害がないことにつまらなさを感じる。
それは広暁が度々考えていたことであり、今回シャッハに一本取ら

れた原因でもある。

『気づく』才能を持ち、『計画実行力（オーガナイズ）』に長けた広暁だからこそ持つ悩みであり、聞く人が聞いたら妬むかもしれない悩み。

そんな広暁に訪れたこの転機、彼はどんな判断を下すのだろうか？

（返答を先延ばしはできなそうだし……今結論出さなきゃ駄目だよなぁ……）

考えろ。考えるんだ広暁。

自分はカリムの申し出を受けるべきなのか。

仮に受けたとして、自分はちゃんと付き合うことができるか。

そもそも断ったら、自分は五体満足でこの教会から出ることができるのか。

（いやいや、そういう問題じゃないだろ……有り得ない話じゃないけど。

う～ん……カリムは魅力的だけど、やっぱり格差がなぁ。

教会騎士で管理局少将のカリムと、魔導師ランクＢで民間協力者の俺とじゃ差がありすぎるし……）

「……（ウルッ）」

「（今にも泣き出しそうなんだけど!?）少し……考えさせてくれない？」

「はい……もとより急かすつもりはありませんから」

＜広暁ｓｉｄｅ＞

よし、気持ちをまとめよう。

？カリムの気持ちは嬉しい

？カリムは美人で性格よし

？俺は次元漂流者、ついでに機動六課民間協力者

?と?は全く問題がない、寧ろ嬉しい。
美人で性格もいいカリムに告白されるんだから、文句の言いようがない。

問題は?だ。
さっきもカリムに言ったけど、俺は次元漂流者。
ミッドチルダに骨を埋める覚悟があるとはいえ、もし元いた地球に戻れる方法が見つかったら気持ちが揺らがないとは言い切れない。

カリムもそこを分かった上で俺に告白したんだろうけど……あれ?
だったらそれを理由に断ることを考えても意味なくね?
それを言ったらカリムの覚悟を無駄にすることになるし。
大切なのは……俺がカリムを好きかどうかってこと?

何だ、だったら答えは決まってる。
俺の気持ちをそのまま言えばいいだけだ、馬鹿正直に。
……単純だな、俺。

〜結論〜

「カリム」

「は、はい！？」

「（何故そこまで驚く）俺は子供だ」

「子供……？」

「２０歳になるまで実家で暮らして、外で働いた経験なんてアルバイトとボランティアぐらい。
一人暮らしをしたこともないし、精々大学受験で都心に行った時に一人で泊まったぐらいだ」

「……」

「小さい頃から弓道とかソフトテニスとかやってたけど、ただ親に言われてやったり、打つのが楽しいからって理由だった。勉強をしてたのも、知識が増えるのが嬉しいからだとか、将来損はしないからだとか。
遊戯王にいたっては、完全に趣味だしな」

それは言う必要があったのか？　いや、ないだろう。
カリムの申し出に返答をするという意味では、全く言う必要のない言葉。

それを言う理由？　そんなものは簡単だ。
ただ言いたいから言う、それだけの理由。
そこには理性も感情もない。
自分が言いたいから言う、言葉を発したいから発する。
本能には、如何なる生物も逆らえない。

「大学3年生になっても将来やりたいことが決まらなくて、ただ毎日を過ごしてた。
そんな時に、このミッドチルダへの次元漂流。
最初のうちは戸惑った、異世界が存在するなんて信じられんかったし」

紡がれる言葉、それは正に立て板に水。
淀みなくスラスラと語られる言葉は、山から海へと流れる清流の水のよう。
詩吟とは違う、落語とも違う。
聞くのではなく聴く、それが今の広暁の言葉を比喩するのに最適の言葉。

「だけど俺も、何だかんだでこの世界に適応しちゃったんだよな。
地球出身にしては珍しいらしい、それなりに高い魔法適正。
自分で言うのもなんだけど俺は努力家だから、ある程度のところまでは早く到達できた。
あとは……」

そこまで言って、広暁は一息吐いた。
再度思案顔で言葉を考えているようだが、その顔に陰りはない。
恐らくは……『男のプライド』的な問題であろう。
広暁にプライドがあるかだと？　当然ありますよ。
それを上回る理性と目的意識が普段は邪魔をしているだけです。

「……俺がこの世界で魔導師として生きていけるだどうか。
幸いにも俺は、最初の一年を機動六課で過ごすことができる。
教導官として優秀なのはと、執務官として活躍してるフェイト。
性格はともかく、はやても部隊長・捜査官として優秀ってのは分かった。
吸収できるものは吸収して、将来の糧にしたい」

「……」

「これから先の未来をどうしたいか、今はまだ決まってない。
だけど……機動六課にいるうちに決めたいと思ってる。
だから……」

スッ……。

今まで掛け布団の中にしまっていた両腕を外に出して握り拳をつくる。

背筋を伸ばしてカリムを見据える目は濁りがなく、止水の瞳と言う言葉がふさわしい。

「こんな……まだ子供が背伸びしたぐらいの俺でいいなら……宜しくお願いします」

「……（クスッ）」

「（……あれ？　笑われてる？）」

「広暁君、分からない？　今の言葉、プロポーズの返事みたいよ？」

「へ……？　……――――っ！？」

威風堂々？　何それ美味しいの？
冷静沈着？　誰かの財布のことですか？
明鏡止水？　そんなカードがありましたっけ？

「いや、これは、あの、その、つい考えすぎたといいますか、本能に任せた結果といいますか？
あまり深く考えないでいただけると嬉しいのですが。
いやそれよりもさすがにそれは段階を飛ばしすぎではないかとおｍ」

「広暁君」

フワリ……。

「おぅ！？」

広暁の左手を、カリムが両手で優しく包み込む。

（見方によっては倒錯した精神病患者を宥める看護婦に見えないもないがそんなことを言ったらあとが怖いので）その様は迷える人間を正しき道へと誘う天使のよう（と言っておこう）。

とても絵になる光景である（広暁とカリムの表情が１８０度真逆でなければ）。

「広暁君のことだからもう分かってると思うけど……私は卑怯な女よ？

自分の性格と容姿ぐらいはちゃんと把握してるし、広暁君がどんな人間かも大体分かってるつもり。

このタイミングで言えば広暁君が断らないってことも分かってたわ」

「何で態々……このタイミングで言ったんだ？」

「前にも言ったかもしれないけど……広暁君といると安心するの。

自分が自分でいられる、そんな感じがね。

だからかな……あなたとこうしていると、隠してたことも言ってしまうの。

私の全てを受け入れてくれる、そんな包容力のせいかしらね。

本当に……罪な人よ、広暁君は」

「買いかぶりすぎだと思うけどな。俺はそこまで広い心を持ってな

いぞ」

「人の心は自分ですら分からないもの。勿論、他人からも。大切なのは自分がどうありたいか、そして周りからどう認識されているか。
広暁君は後者を大切にするべきよ？
第一、広暁君の心が狭かったら、フォワードの新人メンバーが広暁君に懐くわけないじゃない」

「……よくご存知で。周りからどう認識されてるか、かぁ……」

「これから考えていけばいいと思うわ。私が傍にいるんだもの」

ギュッ！

「……そうだな。それじゃあ……」

スッ。

「これから宜しくお願いします」

ペコリ。

「えぇ、こちらこそ♪」

ダキッ！

「ちょっ！？　何故にいきなり抱きつく！？」

「いいじゃない、恋人同士なんだし♪」

「まだ早いわ！！」

こうして、新たな一組のカップルが成立した。
この後色々とあったのだが、Ｒ－１８的な描写が無かったことだけはここに記しておく。
また、終始広暁がカリムに押されっぱなしであったことも記しておく。

ギュ――ッ！

「俺は怪我人だ――――――――――――――――――――！！」

スゥ――――――ッ。

「あぁ～……これが広暁君の匂いなのね♪」

無論、物理的な意味で。

第４２話「需要が高いのはこのタイプ」（後書き）

第４２話、いかがだったでしょうか？
今回の話で分かった通り、広暁のカップリングの相手はカリムに決まりました。
いいですよね、大人の女性！！

ここで１つ裏話を。
カリムを広暁のカップリングの相手にしたのは、他の作者様がやっていなかったというのが単純な理由でした。

ところが。
とあるサイトで、占う人の名前を入力すればそのアニメ・マンガに出てくるキャラの中で嫁度が高いキャラが順位付けされるサイトを発見いたしまして。
それを墨谷広暁でやってみたのですが……なんと、１位がカリムだったのです。
ついでに私こと夢月の本名でやってみましたが、これもまたカリムが１位でした。

偶然なのでしょうか、これは？
世の中には面白い偶然があるものですねー、ハハッ！！

では。感想・意見・訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

第４３話「ザ・ワールド！！」（前書き）

第４３話です。
この話から数話、舞台は聖王教会へと移ります。

では……第４３話、始まります。

第４３話「ザ・ワールド！！」

＜カリムｓｉｄｅ＞

スゥ――――……ハァ。

今私がいるのは、聖王教会に数ある客室の中でも一際大きな部屋。
ここにいるのは機動六課民間協力者、墨谷広暁君。
この間行われたＢランク昇進試験で彼はシャッハ相手に引き分け、見事Ｂランクになった。
魔力制限をかけてＡランクになったとはいえ、元々ＡＡＡランクのシャッハに。
最大のパートナーにして圧倒的火力を持つホルスがいないにも関わらず。
広暁君は自身の力、何より頭脳を駆使してシャッハと引き分けることに成功した。

だけどその引き分けの方法というのが、シャッハ諸共自分を魔力矢の爆発に巻き込むというものであり、試験の後すぐに病院に搬送。
マルチタスクの複数過剰使用と肉体のダメージ過多により、すぐに病院で治療が行われた。
体の方はすぐによくなったけど頭の方はまだよくなってなくて、マルチタスクはまだ使えない。
退院してもまだ六課に復帰出来ないということで、聖王教会で療養ということになった。
そしてこの扉を開けたら……

「広暁君が眠っている……！！」

ど、どどど、どうしましょう！？　この間は勢いで告白してしまったけど……

「私……広暁君の恋人なのよね？」

私の告白を広暁君は受け入れてくれた。
その後はあまり動けない広暁君に色々とやっちゃったけど……広暁君、可愛かったわね。
……っといけない、当初の目的を忘れるところだったわ。

「こ、恋人なら、朝起こすくらいか、構わないわよね？」

そう、私は広暁君を起こしに来た。
本当なら昨日のうちにもっとやりたいことはあったのだけど、仕方ないものは仕方ないわね。
広暁君の寝顔を見ることが出来るならそれもちゃらよ！！

「さっきシャワーも浴びたし、髪の毛もちゃんと梳いてきた。服も……大丈夫ね、汚れも皺も無い。香水は……どうしようかしら？」

仕事柄香水はつけないのだけれど、広暁君のためなら私はつけるわ！
だけど寝起きの広暁君に香水はきついのかもしれない。
軽めの香りの物を持って来たけど、やっぱり付けない方がいいわね。
よし……今こそ行くのよ、カリム！

コンコンコン。

「広暁君、起きてる？」

意を決して私は扉をノック。まだ寝てるはずだから返事は……

「……」

ないわね。いざ……突入！

ガチャッ。

扉を開けて広暁君がいるであろうベットを見た。けれど、

「広暁君…？」

ベッドに広暁君はいない。

念のため部屋の中を見回してみたが、どこにも広暁君はいない。

「一体どこに行ったの？」

パジャマは脱いであるから服を着替えて外に出た？

過去に来たことがあるとはいえ、広暁君はこの教会の地理に詳しくないはず。

……パジャマ？　広暁君がさっきまで着ていた？

私の足は無意識のうちにベットの上に畳まれて置かれたパジャマの傍に。

それを取ろうとして……

「っていけないわ！　そんなことをしたら私のイメージが…！！」

まったく……広暁君は罪な男ね。
聖王教会教会騎士団騎士、そして時空管理局理事官の私をここまで狂わせるなんて。
もしこのまま狂ったらどうなるのかしら？
でも広暁君がいれば私は別に……

「騎士カリム？」

「きゃっ！？」

後ろを振り返るとそこにいたのはシャッハだった。
扉の所で呆然とした様子で立っている。
もしかして…今までの全部見られてた？

「み、見てた？」

「何をですか？」

「ううん、何でもないの」

「はぁ…」

良かった、見られてなかったみたいね。
告白のお膳立てをあいてくれたのはシャッハだし、例え知られてもいいのだけど。
出来ることなら今の行動は見られてないほうがいいわね……主に私の名誉のために。

「シャッハ、どうしてここに？」

「扉が空けっぱなしでしたので、念のため確認を」

「そう……そういえば広暁君がどこに行ったか知っているかしら？」

「彼ならホルスと一緒に聖堂の裏に行かれましたよ」

「聖堂の裏に？」

「体を動かしたいそうで。
簡単なトレーニングなら問題はないと判断し、許可を出しました」

「そう……ありがとう」

聖堂の裏ね。
あそこは普段から人は通らないし、体を動かすなら絶好の場所だけど…。
今の広暁君がいきなり体を動かして大丈夫かしら？
広暁君なら無茶なことはしないでしょうし、シャッハもそれを分かっていたから薦めたのでしょうけど……私が行って確かめればいいだけの話ね。

「騎士カリム、どちらに？」

「聖堂裏に。広暁君の様子を見てきます」

「……朝食には間に合うようにお願いします」

「分かってるわ」

シャッハの許可も出たことだし……いざ！

ここの角を曲がれば聖堂の裏に出る。
広暁君はどんなトレーニングをしてるのかしら？
的を撃つのが一番妥当だけれど……

「見れば分かるわね」

色々と気になるけど考えても分からないし、見た方が早いわね。
私は角を曲がり、そこにいるであろう広暁君に声をかけようとした。

「広暁く……ん？」

けれど、私の声は広暁君に届かなかった。
いや、私の声が存在しなかった。
私は見惚れてしまったのだ、その光景に。

～聖堂裏～

「ホルス」

「キュイ」

広暁の合図に応じ、ホルスが直径約３０ｃｍの炎の的を生成。
それを遠くに飛ばし、１００ｍ程離れた所で停止。

スッ…キュイィィン。

弓を構え、右手に矢を生成。

そのまま矢を弦にかけ、スコープを展開することなく狙いを引き絞る。

「……」

そのまま手元で微調整……放す。

パッ。

シュイィィン……。

シュン！

「……ふぅ」

広暁は構えを崩し、ホルスに指示を出す。
指示を出されたホルスは矢が貫通した炎の的を手元に戻し、広暁に見せる。
それを見た広暁は落胆の息を吐いた。

「ハァ……やっぱりずれるなあ」

矢が通ったのは中心から約１０ｃｍ外側。つまり中心より円周に近いのだ。

「本来なら１００ｍは当たってラッキー。
だけど弓道と違って真っ直ぐ飛ぶから狙いを定めるだけでいい。
その条件下でここまで外すってのはなぁ。
矢の速度は問題ないんだけど……ハァ」

六課で鍛えた広暁の腕なら、構えてから矢を放すまでここまでの時間はかからない。
そして、中心を外すこともない。
それが出来ないということは、やはり先日のBランク昇進試験の影響が頭と体に残っているのだろう。

「……仕方ない、今日はここまでにするか。ホルス、ありがとな」

「キュイ♪」

そう言って広暁がホルスの頭を撫でると、ホルスは嬉しそうに鳴いた。
ホルスもひとしきり撫でられるのを楽しんだ後、的を消す。

「さて、部屋に戻りますか」

広暁が部屋に戻ろうとして体の向きを変える。するとそこにいたのは……

「カリム？」

「えっ！？ひ、広暁君……」

カリムだった。丁度聖堂の角のところに立っており、呆然としている様に見える。

「おはよう、何してたの？」

「お、おはよう。えーっと、その……」

「ん？」

広暁の問いにカリムは口をつぐんでしまう。その理由が、

（弓を構える広暁君がかっこよくて見惚れてたなんて言えない…！！）

これである。

昨日は体があまり動かない広暁に抱きついて匂いを嗅いだ人間とは思えない。

一時（いっとき）の感情の乱れとは恐ろしいものだ。

シャッハから広暁君がここでトレーニングしてるって聞いたから様子を見に来たの。

無茶をしてないかどうか確認するためにね」

「そうなの。まぁ、御覧の通り無茶はしてないから安心して」

「えぇ……部屋に戻るの？」

「うん。その後誰かに朝ご飯のことを聞こうと思ってた」

「だったら私が案内するわ。付いて来て」

「サンキュー。だったら部屋に戻らなくていいな」

（誤魔化し成功！！）

カリムは心の中で小さくガッツポーズをした。

そのまま広暁を先導するかたちで聖堂裏を出る。

ホルスはパタパタと飛びながら広暁の隣を飛んでいるが……その顔がカリムを見ているのは気のせいではないだろう。

「療養とは言われたけど……俺はここで何をすればいいんだ？」

「特に決められているわけじゃないわよ。激しい運動をしなければ」

「そこは弁えてますって」

他愛もない雑談をしながら2人は歩く。

話す内容は教会での過ごし方について。

また、聖王教会が集めた遊戯王関連のデータについて話し合う予定が午後に入っているとも。

「あとは孤児院の子供達の相手をお願いしたい……かな」

「孤児院の？　俺に？」

「教会の職員には広暁君みたいな若い男性はいないから」

「あ～……なるほど」

つまりは『お兄さん』みたいな存在が欲しいということだろう。

男性の職員は年がいった人が多く『お父さん』。

女性はある程度年がばらけているものの、それでも『お姉さん』や『お母さん』のような存在だ。

「子供の相手か……俺に出来るかな？」

「苦手なの？」

「得意でもなく苦手でもない。経験が少ないって言った方が正しいな」

「経験豊富だったら驚くわよ……でも、キャロには『お兄ちゃん』って呼ばれてるらしいじゃない？」

「……キャロがそう呼びたいって言ったからな」

広暁も「誰から聞いた？」とは突っ込まない。
誰が言ったか想像がつく……というより確証があるから。

「お兄ちゃん♪」

「止めて下さい」

「む～」

カリムの可愛らしい「お兄ちゃん♪」にも、広暁は努めて言葉を冷静に返す。
広暁には『まだ』そういう趣味はないのだ、『まだ』。
……大学でできた彼の友人なら話は別かもしれないが。

（目覚めるわけにはいかないんだよ……！！）

その自制心がいつまでもつか、見ものだ。

（話せたのは嬉しいけど…やっぱり恋人っぽいこともしたいな……）

カリムもカリムで考えていた。

もっともこちらは、当たり前といえば当たり前の悩みだが。

（恋人っぽいこと……恋人っぽいこと……）

カリムは悩む、恋人っぽいことをするために。

広暁に抱きついて匂いを嗅ぐという、ある種変態行為をしたにも関わらず。

感情の暴走というのは、まったくもって恐ろしいものだ。

「カリム～？」

「な、何！？」

「その……恋人っぽいことしたい？」

「え？あ、うん……ってどうして知ってるの！？」

「声に出てた」

「……嘘」

「ホント」

「うー……」

可愛らしい顔で拗ねるカリム。

その表情を見ることが出来るのは次元世界広しといえども広暁だけだろう。

カリムは聖王教会の騎士として、そして管理局理事官として働き続けて来た。

そんな彼女に圧し掛かる重圧は、決して少ないとは言えない。
はやてやシャッハのように『心を許せる友人』はいても、『頼れる異性』というものはいなかった。

今のカリムは、その『頼れる異性』という存在を得たのだ。
向かうところ敵無しの状態と言っても過言ではないのかもしれない。

「恋人っぽいことね……そりゃーやっぱり」

「やっぱり？」

「腕を組むとか？」

「腕を組む……こう？」

「な！？」

モニュン♪

今まで異性と腕など組んだことのない広暁にとって、それはあまりにも衝撃的だった。
カリムが両腕を広暁の右腕に絡めてきたのだ。
何がとは言わないが、右腕に柔らかいものが2つ当たっている。
何気なく言った言葉をカリムが実行するとは思わなかったのか、その動揺ぶりは傍目にも明らかだ。

（当たってる！　当たってるって！！）

「あ、当ててるのよ？」

「心を読まないで!?　っていうか、誰から聞いたのそんな言葉!?」

「昔はやてが貸してくれた小説に書いてあったわ」

聖堂横の通路で何というか……一種の喜劇が行われているが、そこに誰も通らないのは幸か不幸か。
実際は幸なのだが、そのうち不幸になるかもしれない……主に2人が。
何故かですって？　それは人間の心のダークサイドを知っている人なら誰でも分かります。

「でも……これなら広暁君を近くに感じられます」

そう言ってカリムは広暁の腕に頭を預ける。
身長差のせいで肩に頭を乗せられないが、カリムは幸せそうだ。

（心臓の鼓動が早くなりましたね……フフ、女としては嬉しい限りです）

先程の慌てっぷりはどこへいったのか、広暁をからかう余裕が生まれている。
広暁も広暁で、そんなカリムを見て生来の冷静さを取り戻した。

「……座る？」

「……ええ」

広暁が指差したのは、聖王教会の中に数多く設置されている長椅子。
広暁の提案をカリムは受け入れ、2人は長椅子へと向かう。

「「……」」

そこに訪れるのは至福の時。

広暁はカリムの肩を抱き、カリムは広暁に身を寄せる。

腕を組んでいた時とは違う、広暁に包みこまれるような感覚にカリムは身を委ねる。

（幸せって……こういうことをいうのでしょうね……）

（幸せって……こういうことをいうんだろうなぁ……）

2人共考えることは同じ。

「キュー……」

約1匹、不満そうな竜を除いてだが。

大丈夫だ、ホルス。きっと2人は君のことを忘れていないはず……だから。

それまで君は、マスターと将来第2のマスターになる女性を観察しておくといいかもしれないぞ？

そうすれば君は、聖王様の加護を得られるかもしれない。

「なるほどね～……」

「信じられないか、やっぱり？」

「信じる信じないの問題じゃないわ。
情報が少ない以上、それを仮定として考えを纏めていかないと」

あれから何時間か時間は経ち、現在は夕方前の実に中途半端な時間。
ベンチでのんびりしていて朝食に遅れたことでシャッハに怒られたことは秘密だ。
その後行った孤児院で、純真無垢な子供に「2人はお父さんとお母さんになるの？」と言われ、カリムが真っ赤になって広暁に抱きついたのも秘密だ。

「これが、私達が彼ら……遊戯王のモンスター？　についてまとめたデータよ。
私達が調べても荒れ果てた惑星といった感じだけど、広暁君が見たら違うと思って」

「サンクス」

「え？」

「『ありがとう』って意味の英語」

「日本語以外も話せるのね」

「Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ｓｔｕｄｉｅｄ　ｗｒｉｔｉｎｇ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　ａｔ　ａ　ｈｉｇｈｓｃｈｏｏｌ，ｓｔｕｄｉｅｄ　ｓｐｅａｋｉｎｇ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　ａｔ　ａｎ　ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ.」

「え？」

「『高校で書く英語を、大学で話す英語を勉強したからな』って意味。

高校の英語の授業はほとんど受験英語だったからな～……あ、文法は中学英語レベルでも海外の人と話すぶんには問題無いよ」

「へ、へぇ～……（ごめんなさい、広暁君。学校のことは私、全然分からないの……）」

「ちょっと集中したいからさ、最初寝てた部屋でやっていいかな？」

「そうね……1時間ぐらいで戻ってくれる？　広暁君分を補充しないといけないから」

「……OK」

ギャップを感じるにはまだ早いぞ、カリム。

学生としてそれ相応の立場にいた広暁は、君が幼き頃より聖王教会で働いて培ってきた経験とは全く異なるベクトルの経験を持っている。

それを理解して許し合うことで男と女の仲は段々と深まっていくのだから。

せっかくの年下の恋人だ、年上の女性として引っ張っていったほうが広暁は喜ぶかも……ね。

第４３話「ザ・ワールド！！」（後書き）

第４３話、いかがだったでしょうか？
幕間っぽい話ということで、会話分を増やして全体的に軽めに仕上げてみましたが……いかがだったでしょうか？
説明の文章が多くて違和感を感じられるかもしれませんが、新しい試みということで許していただければ幸いです。

では。感想・意見・間違い訂正ｅｔｃ、お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9458o/

リリカルなのはStrikerS　～黒炎竜を従える者～

2011年11月30日20時09分発行